

---

# 眞匏祇'

涅織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眞匏祇

### 【Zコード】

Z5247Y

### 【作者名】

涅織

### 【あらすじ】

今まで投稿していた眞匏祇の続編。

今回の舞台は地球！小さな星で大きな力の衝突！

護りたいものがあるからその両足で立つ。護りたいものがあるから強くなれる。

地球での仕事を終えて眞匏祇の世界へ戻るまでの話。

# 第一章 痛脇搜索編 第一話 地球に逃れた逃亡者達

地球についてからのこの数日、良い事と言えばホテルのカウンターの女性と仲良くなつたことくらいではないだろうか。そんな事を考えながらいつものように帰つてくるのを待つていた。そしてドアのノック音が聞こえて勢によく開ける、筈だが。今日は少しいつもと違うことが起こる。

いつものようにドアのノック音がして嬉しさで飛び上がった穂琥はドアを勢いよく開け放ち田の前に立つものを確認して一度ドアを閉める。

「・・・知らんぞ、こんなヤツ」

怪訝な表情をして穂琥は再びドアを開ける。今度はゆっくりと。やはりどう見ても知らない顔の男だつた。首をかしげている穂琥にその男は少し困つた笑みで尋ねたいことがあると申し出でてきたので穂琥がそれを聞くことにする。

「眞砲祇、ですよね？」

男がそう言つた瞬間、穂琥ははつとしてドアをバタンと閉めて部屋の奥へと走つた。男は何食わぬ顔で部屋の中に入つてくる。

「逃げても構わないよ。だつてここは最上階だ。逃げられない

「あら？ 最上階だもの」

男の言葉に穂琥は返す。すると男は理解しかねた表情をしたが気にせずには近寄つてくる。

男のことなどまるで無視するように慌てる様子もなく穂琥は窓を開けた。そしてその上の淵に手をかけて外へ身を放り出した。その行為に男は舌打ちをして走り出した。穂琥を捕まえるために。

放り出した身体は勢いと腕力で上に向かい屋上に着地する。それから辺りを見回してから追ってきた男のほうへと目を送る。

「そんなひ弱な力で俺に勝てると思っているのか？」

「え？ 私？ 無理よ！ 戦う力なんてもの！ 相手をするのは私じゃない。」

「いつ」

穂琥はさつと身体を翻した。するとそこには少年が着地していた。男としては辺りには一切気配がなかつたためにその登場には至極驚いていたようだった。

「はい、お願ひします！ 新」

「はいよ」

穂琥の言葉に薪が反応する。男は驚いた表情で薪を観察していた。一体何者かと尋ねてきたが薪はそれをかわした。己の正体を見ず知らずのものに簡単に明かすことなど出来ない。それだけではない。薪の身分をそう簡単には言つことが出来るわけがない。

薪は素早く移動する。一瞬にして男の足元に身を置き男のあごを捕らえて蹴り上げる。男はその痛みで声を漏らす。相手がただの人間であればこんな横暴な真似を薪はしない。でも相手は人間ではない。眞砲祇なのだから。屈んでいるその男に薪はさつと近寄ると男の額に手を当てる。

「じゃ、向こうで頑張れ」

薪の掌から眞稀が発せられる。その大きさときたら相変わらず田を釘付けにさせられる。しかし周囲には一切漏れていないのだから本当に大したものだ。

薪の眞稀によつて男はその場からぱつと消えた。転送、といえば簡単だろう。地球から眞匏祇の世界へと返す行為。こうして地球上こちらに敵意を向けて襲つてくるものは皆、眞匏祇の世界を追われた者たち。とはいつても決して薪が行つた行為ではない。

薪は慤夸だ。眞匏祇の全土を支配する力を有した絶大なる存在。でもそれを薪はあまりいいようには思つていない。しかしこういう時にはそういう力を大いに使わせてもらつていいわけだ。

というのも、この地球上に存在する眞匏祇たちは先にも述べたが眞匏祇の地を追われた者、つまりは慤夸によつて迫害を受けたことになる。慤夸によつて追い出されたものは慤夸によつて受け入れを受理される。薪が慤夸でなければ眞匏祇の世界へこのものたちを返すことが出来ないので。前代の慤夸、つまりは薪の父親が行つたことを今、返そうとしているということ。

男を転送してから薪は一息つくと穂琥に向き直つて移動のことを伝えた。

「癪臨の情報が入った」

手短に薪は言つと部屋のほうこそつと戻つていつた。穂琥もその後に続いた。移動先を聞いて穂琥は嬉しくてはしゃいだ。

「また皆と会えるんだね！？」

薪はため息混じりに笑った。

今度移動する先は前に穂琥や薪が通っていた学校の付近。また中間達と会えるんだとはしゃいでいる穂琥を鎮圧して薪はホテルを出る準備を整えるのだった。

ホテルを出て移動先に到着してから薪は泊まれそうなところを探していたが、穂琥の目はまつたく別のものを映し出してキラキラと輝いていた。

「薪！こっち！アレが見たい！」

「はー？ ちょ、待つ・・・」

「こっち！」

「うわっ」

穂琥に強制的に腕を引かれ声が漏れる薪だつた。別にここに遊びに来たわけではないと訴える薪ではあつたが穂琥の上がつたテンションを抑えるには少し弱すぎたらしく、そのまま流される薪であつた。

穂琥のゴリ押しで店に入つた薪はため息をついて穂琥に付き合つていた。大抵女子という生き物が好むような場所に薪が飽きずにいられるわけもなく、半ば魂が抜けたように諦めてふらふらと穂琥の後を着いて行つていた。

「これ、どうー!？」

突然穂琥が振り向いて自分の首にかかっているものを見せてきた。

「あーにあつてます」

「なに、その棒読み!」

薪の反応に穂琥は少しむくれながら首にかけていたものを元の位置に戻す。そもそもでも良いと言いたげな薪に文句を言つべく振り返りその薪の肩越しに見覚えのある顔を見つけて固まつた。

「・・・ん?ビーフした?」

その様子を悟った薪が穂琥に尋ねたので穂琥は後ろを示す。薪はそれに習つて振り返る。

後ろにいたそれは驚いた声を上げて駆け寄ってきた。

「あれ? 篠下?」

久しぶりだと嬉しそうな表情を浮かべながら篠下が薪の前に歩み寄る。後ろに穂琥がいることに気がつくとこりつと笑う篠下だった。

「何だ? 薪、穂琥ちゃんとデートですかい?」

「あるわけねえだろ」

嫌そうな軽蔑したような、そんな顔をしながら篠下に言い放つたその言葉に篠下は苦笑いを浮かべた。

「おーい、篠下! 先に行くなんてひど・・・あれ! ?」

籠下を追いかけてきたもう一人が籠下と同じ様に薪と穂琥を見て驚く。

「獅場！薪と穂琥ちゃんだよ！久しぶりにこっちに帰ってきたみたいだ！」

「うおっほお！？ そうだったのか！久しぶりだなあ～！」

薪と穂琥が学校に通っていた時、同じクラスだった籠下と獅場。薪と籠下、獅場は久しぶりの再会を噛み締めていると、ふと気づいたように薪が穂琥の所在を確認した。

「あれ？」

すぐそこにいたはずの穂琥がいないので辺りを見回して籠下が出口付近に既に移動済みだということを伝えると薪の表情が凍った。それに籠下も獅場もぞつとして笑みのまま固まってしまった。

「勝手に出歩くなって言つてあるはずだけどお？」

「す、すみません！…」

薪の叱責をみて籠下はふっと眉を寄せた。

旧友と出会つて穂琥のテンションも最高潮に近づき楽しそうに歩いているのを薪は呆れてみていた、が。突然表情を険しくして足を止めたので籠下も獅場も足を止めて薪の様子を窺つた。

「どうした？」

「大丈夫か？なんかあつたのか？」

一人の質問に薪は答えなかつた。その代わりその険しい表情のまま穂琥の腕を鷲掴みして駆け出してしまつた。置いていかれた二人は呆然としながら顔を見合わせた。

腕を引っ張る薪に文句を言う穂琥を無視し続ける薪に流石の穂琥も抵抗を見せる。引く薪の手を振りほどいて額に力を籠める。

「なにするの！一人がいやダメだつていうの！？」

「お前は一回、頭を改良しなさい！」

警戒の色を載せたまま薪が言つ。穂琥はそれを言われて初めて薪が走り出した意味を考えた。そしてふつと自分に対する殺気に似た眞稀を感じ取つてぞつとした。人がいてはそれらに危害を及ぼす可能性があるから薪は走り出したのだ。

「人気がないところまで移動するぞ」

「う、うん！」

薪に言われて穂琥も全力を以つて走り出した。

誰もいない寂れた公園で薪は足を止めた。穂琥は軽く息を上げて辺りを警戒した。

「出て来いよ」

挑発するような薪の言い方にどこからともなく笑い声が聞こえた。周囲に反響して響くその声はどこからしているのかわからなかつた。

「姿を晒す気は無いですね」

丁寧な言葉とは裏腹にそれに籠められた感情はまるで嘲り。新の表情が警戒の色をなくした。

「やつか。余分に眞稀を使ってオレに勝てると思つなよ」

薪の言葉に未だ姿を見せない眞砲祇は嘲笑う。しかし穂琥は内心で思つのだ。どんなに全力を出しても勝てる気がしないと。

そういう想えている間に薪が穂琥の視界から消えた。別に驚くことじゃない。薪なら普通のことだ。しかし相手のほうはそうでもないらしく驚いた雰囲気を醸し出していた。姿が見えないと高を括っていたのが間違いだ。薪なら眞稀を感知してどこに隠れているかなどすぐにわかる。そんなわけで簡単に引きずり出して薪は男を蹴り上げる。

「オレをやるつもりで来るのなら別にそこまでするつもりは無いけれど、穂琥を狙っているって言つなら話は別だ。少し、本気を出させてもらひよ」

地面上に呑きつけられた男はうめき声を上げる。しかし別に薪に蹴り上げられたことあげたわけではない。むしろ蹴られたというのに痛みなどどこにも無かつたための疑問の呻き声だ。

「まあ、傷付けやしないよ」

薪のその言葉にどうやら甘く見られると怒りを覚えたらしいやの男は薪を鋭くこじつけた。

「わかった、いいでしょ。貴様の言つたとおり本気でくとしまじゅう

「来い」

男の言葉に対しても薪は身体を半身にして右手を前に出して構えを取つた。その態度に男は怪訝そうな表情をした。

「先程までは違うのがわからないのですか?」

姿を隠すために使つていた眞稀を解除して攻撃のほうに注ぐ事でその力を増大させる、のだろう。そういうことだとは思うが、穂琥には全くそれがわからなかつた。きっとそれを露見したら殺されるかもしれない、薪に。そんな事を思つていると薪は男の言葉に答えて姿を変えると言い、話を進めていた。姿を変える、といつても別に鬼のように形相が変わるというわけではない。服装の転換といったほうがきつとわかりやすい。普段は地球上に住んでいる人間と同じ、つまりは洋服を身につけているがこういう戦闘においては眞匏祇としての服装でなければ戦うにも戦いづらい。

そもそも服装の転換はただ単に動きやすいとか慣れているとかそんな小もないことではない。普段、地球にいるときは地球の服装に合わせるのはまあ、当然のことだらう。しかし、その地球での衣服の場合は制御が大幅に成されている状態になる。つまり、服装の転換することでその制限している力を解放するということだ。ちなみにこの服装の転換、つまりは力の解放を替装<sup>ていしょう</sup>と呼んでいる。そうやって替装によって眞匏祇の世界にいるときと同じ格好をすることで相手を熨す力を有するのだ。

そして薪が替装を終えてふつと落ち着いたのを見て穂琥は自分の目を疑う。普段、眞匏祇の世界にいるときに着ている服装ではない。そのことを疑問に声を漏らすと薪が凄まじい勢いで睨んできて穂琥は苦笑いをして身を引くのだった。

男が勢いよく薪に刀を振り下ろした。薪はそれを後ろに飛び跳ねて避けると舌打ちをした。

「いきなり突っ込んでくるなよな」

「そんなに甘くは無い世界でしょう？それに貴様、替装したにも関わらず力に変化が無いではないか？もとより弱つたのですか？それなのにあんなに豪語するとは愚かですね」

男の言葉に薪は僅かに嘲るように笑った。その笑みに男は酷く怒りを覚えたようだつたが薪の次の行動にその怒りも一気に冷めるのだった。

## 第一話 信頼を得た人間

替装して変わった格好には手首にリングが着いていた。それを薪は引き千切る様に取る。それをしてからの薪が放つた眞稀に男は圧倒された。しかし穂琥にはその眞稀の強さがよくわからない。きっと普段から薪の眞稀に慣れているということと薪が男にしかその眞稀を放つてないことが原因しているのだろうけれど。きっとこれも薪にばれたらただではすまないので黙つてすることにする穂琥だつた。

男が軽く震えているのを見ながら薪がため息混じりに理解できていない男に説明をくれてやる。

「オレはね、諸事情によつて替装しても直ぐに力が増大しないようにセットされているんだよ。このリングによつてね。だからコイツを外さないとほとんど意味が無いのさ」

引き千切つたリングを掌に載せて男に見せる。男は口惜しそうな顔をして黙つていた。そして薪が体制を変えて男へ突進する。その速さときたら穂琥には田で追うのがやつとだつた。

「主の下へ帰らねば！」

男はそう叫ぶと地面を抉つて薪の視界の邪魔をした。ブレーーキをかけて薪は止まる。土埃が収まつたとき、男の姿はなかつた。

「あ～あ、逃がしちやつた。珍しいね？そんなミスするの」

穂琥が薪の元によつて嫌味を籠めて言つてみたが思いの他自体は軽

くない」とを穂琥は薪の表情から悟った。

「」ひやって姿を消すときつていつのは眞稀を使う。だからそれなりの感知能力があれば追う事が不可能なわけではないんだよ

「だったら追えば良いじゃない?」

「出来たら既にしている」

薪の放つた言葉。眞稀を完全に消されてしまっているせいでその後を追う事が出来ない事実。

「主、か・・・。気になるな」

薪がぼそりと言つた。そんな薪に穂琥はふと疑問を覚える。薪は慾夸だ。今更ながら慾夸だ。現実世界に慾夸より強い眞匏祇は存在しないはず。なのにその慾夸である薪を凌いで眞稀を操るものがいるのだろうか。

「薪は・・・どのくらい力をセーブしたの?」

「あの男に対してか? 追跡に対してか? ま、どちらにしろどちらも全力に近い感じでやつたんだけどな」

穂琥はその薪の返答に少し不貞腐れた。そういうことが聞きたいんじゃない。

眞匏祇は人間とは比べ物にならないくらい強い。そんな事言われなくたつてわかる。つまりそんな眞匏祇がこの世界で大暴れするわけにもいかず薪たちは力を強制的に抑えてここにある。その地球での根本的なセーブがどのくらいかと聞きたかったのだ。とはいっても、襲つてくる側がセーブしているかは知らないことだが。

「眞匏祇のところにいる時と今との違いを聞いたのか。なるほど。  
そうだなあ。考えたこと無いから知らないな。適当だからな、いつも。感覚でこのくらいってね。ま、あえて言つなら10分の1も無いんじゃないかな?」

ケロッと言つた薪のその言葉に穂琥は頬を吊り上げた。そんな嬉しそうな顔をした穂琥に薪は首を傾げた。

兎に角、一度落ち着いたのでもしかしたらまだいるかもしれない籐下と獅場の元へ帰ることにした。

戻ればそこにちゃんと待つていてる籐下がいた。どうやら獅場のほうは学校での宿題が山積みらしく仕方なく萎れて帰つて行つたらしい。そんな事をまるで聞かずに穂琥は自分の世界でやりと笑つていた。

確かに今回、敵を逃がしてしまつたがそれは相手が薪に対しても恐怖しがえ、逃げ去つたのだ。普段の欠片も力を出すことの出来ない薪に。よかつた、薪はやっぱり強いんだ。そんな事を思つて笑つていた穂琥の耳に思いがけない言葉が飛び込んできて思わず現実世界に帰つてくるのだった。

「さて。話もしないとな。籐下、来い」

「ああ」

穂琥は耳を疑う。いや、待て待て。今後の話とかもあるのだから人間である籐下を連れていては話に支障をきたすだろう。積もる話とかもあるだろうけれど今はそれ所では無いことを薪が一番よく知つている筈なのに。

疑問の表情を浮かべて薪にその疑問を言葉を使わずになんとか投げかけると薪はそれをキャッチしてあっさりとその回答を述べる。

「だつて籠下は知つてゐるから」

「・・・・・へ？」

思いも寄らない薪の言葉に穂琥は硬直なものではなかつた。

「あれ？薪、そのこと穂琥ちゃんに言つていなかつたの？可哀想でしょ。オレね、穂琥ちゃんたちが『向こう』に行く前に薪から聞いたんだ」

少し困つたような表情を浮かべながら籠下が語つた。薪が、あの薪が！ここまで人に対する信頼をしていることが意外に思えた。

薪の掛け声でともかく移動をすることにする。宿を探していく穂琥に阻害されていたことを思い出して薪はため息をついていた。しかし、ここは以前、薪と穂琥が住んでいた場所であつて住まう場所が無いわけではなかつた。無論、穂琥の家は残つてない。アパートのような所を借りていたわけだから既にそこは開いているはずもない。しかし、薪のほうは一軒家を持っていたし、何かあつた時用にと売却はしないでそのまま取つておいてあるはずだつた。よつてその薪の家まで向つことになつた。

当然のように薪の家はそこにあつた。これでひとまず落ち着くことが出来るということで中に入つてひとまず休息、寬いで。一息つく籠下が少し怪訝な表情で薪に尋ねる。

「何をしに戻つてきたんだ？よほどの事がない限り戻らないって言

つていた気がしたんだけど？再会は嬉しいけどそれが気がかりでさ  
「眞匏祇の世界の・・・宝、かな。宝探しをしに来た」

薪の誤魔化すような言い方に籬下はむつとしたような顔になつたが  
どこか納得したようだつた。それにも籬下相手に、普通に『眞  
匏祇』という単語を使つたので穂琥は目が遠くなつた。

籬下の質問で何故眞匏祇たちが襲い掛かつてくるかということを  
今更ながらに知つた穂琥だつた。

地球という小さな鳥籠の中で育つた白鳥。その飛び方も駆け方も  
何も知らない。そんな白鳥が突然籠を飛び出して大空へと舞い上がる。  
手を引いてくれるものと一緒に。精一杯その翼を羽ばたかせて  
飛び続ける哀れな白鳥。美しく飛ぶ方法を知らない危うい白鳥は外  
敵に狙われてその命を危険に晒す羽目になる。一生懸命羽ばたくそ  
の翼の音は自らの位置を外敵へと知らせる。飛び方が危ういものに  
強いものはいない。しとめるのは簡単なこと。その美しき白い翼を  
紅く染めることは容易いことなのだ。

眞稀の「コントロールがうまく出来ない穂琥はそうやつて他の眞匏  
祇たちに血らの位置を知らせてしまう。この地球にもとより住まう  
者たちにとつて新たな眞匏祇の来訪はただ単に己らの命を脅かす存  
在にしかなりえない。故に、やられる前にやる。

「ま、そういうわけで穂琥はほつとけば簡単にくたばるから護つて  
やらねーといけないわけだ」「なるほど・・・」

「でも私、白鳥か〜・・・きれいだあ〜」

「いや、あくまで大きさの例えだからな。お前は頑張つて飛べても  
アヒル止まりだ」

「酷い！それ！」

文句を言いながら薪の頭をぽかぽか叩く穂琥を他所に薪は何事も無いかのように話を進める。

「そんなわけで」籬下に来てから随分と忙しい思いをさせられてきたんだよね」

「そつか。穂琥ちゃんってそんなに大変な状態だつたんだ。人間を危険に晒すわけにはいかないからせつて走つてどつか行つちゃつたわけか？」

「おう、そうだよ。よくわかつてんじやん」

穂琥も薪も人間ある籬下が眞砲祇である穂琥よりも物事の理解能力に長けてこるような気がしてならないと思つのであつた。

そんな事を互いに思考していればそれを読みあつて穂琥が薪を殴りにかかる。そんな状態を見て籬下は過去の薪と穂琥を思い出す。過去、といつても半年も経つていよいよそんな位だが、薪の雰囲気の変化に少々驚いた。薪は実際もつと棘のある性格だつたような気がするが今はその棘があまり感じられないような気がしていた籬下だつた。

「何？」

籬下の視線に気づいて薪が尋ねる。籬下は少し悩んでから発言する。

「いや、まあ。その、なんとなく丸くなつた気がして」

「そうか？ん~。いや、元からこんなだけなあ。表に出さなかつただけだと思つけど」

薪は神妙な表情で笑つて答えた。薪の内心ではこうして感情を表に出すようになつて来たのは眞抱祇の方でいろいろあつたことを含め、儒楠の影響があるような気がしていた。

穂琥が突然空腹を訴えて冷蔵庫を漁る為に部屋を出て行った。その団太さに籐下は苦笑いをした。離れる前はもつと慎ましやかな女性であつたような気がするのだけれど。籐下はそんな穂琥の背を見て薪との関係性に疑問を覚えた。

「穂琥ちゃんとき、薪つて。学校にいたときはなんか突然妙に仲良さげにしていたし、薪も他の女の子に対する態度とはまったく別の態度を取つていたからてつきり付き合い始めたのかとか思つていたけど、違うな」

「なんだよ、突然。まあ、そうだなつ。付き合つちゃいないしもとより誰とも付き合つつもりもねえし。ちやんと考えてみればわかるつて」

薪はさもどうでもよさそうに答えた。確かに薪はそういうことに疎いから当分そういう言つた感情を有することは無いんだろうなと呑気なことを思う籐下だったが、では何だ。この二人の関係は。

「一体何？同じ眞抱祇だからそんなに仲いいのか？」

「たかが同じ種族だからってここまで必死になつて護つとはしねえよ。そんなにオレは暇じやない」

薪の言つた言葉の意味を籐下はまだわからない。薪の性格上、護ることができるものなら全てを全力を以つて護るはず。それでも暇がないからそんな事をしている場合ではないと言つ薪の言葉の真意は簡単なこと。薪は懸考だ。懸考が誰構わず手を差し伸べるという行為は簡単な話ではない。数が多くてそれこそどの手に差し伸べれ

ばいいのかわからなくなつてしまつ。しかし、薪とてそれを無視しているわけではない。懸念になつてもまだ未熟さが多くあるからなんともいえないが、薪の懸念としての最終目標は恨むことのない世界。そんな世界が本当にあるとしたらそこは神の世界か何か。そんな風に思つけれど極力それに近い世界を作ること。それが薪の目標、せめてもの償い。

話が反れたが、ともかく簾下は薪が懸念であることまでは知らない。故に疑問を覚える場面は多々出てくることだらう。

「で？ どういう関係なんだ？」

「双子の妹だよ、あのバカは」

それを聞いて驚愕した簾下。

驚くのも無理は無い。そもそも学校に転入してきた穂琥は最初薪のことなど欠片も知らなかつた。もし、兄妹であるというのならそのときに感動の再会をしておかしくない。

「オレらは眞砲祇だ。記憶の改ざんくらいできる。それにそつやつて記憶を失つたどこにいるかもわからない妹を探すのが前回、地球に行つたオレの本当の目的」

そう語る薪の言葉を聞いて確かに納得できる節が多くある。妙に仲良くなりだしたのもきっとその記憶とやらが戻つたことが理由だと考えれば納得できるし、他の女の子に対する態度と異なつた態度を取り薪にも合点がいく。なるほどなるほどと納得している簾下の頭を薪が突然驚撃みにして地面に叩きつけたので簾下は酷く驚いたが視界の隅に鋭く光る槍のようなものが見えたのでぞつとした。

薪が籠下の頭から手を離したので頭を上げて振り返ると槍のようなものが壁に当たつたらしく人一人包めるくらいの大穴を明けているのを田にした。

「悪いな、口で言つより早いと思つた」

「い、いや・・・護つてくれてありがとつ・・・」

よくわからないけれどそれだけは理解できたので謝礼の言葉を述べる。

薪は籠下の周りにドームのようなものを作るとその中に居れば多少はもつからと言つて穂琥のほうへ走つていった。残された籠下はあまりの状況に驚きすぎて呼吸すら忘れてしまいそうだった。そしてそれと同時に真砲祇という危険性を認識した。聞いただけでは全くわからなかつたことだが、薪が全力をかけて穂琥を護ろうとする意味がなんとなくわかつた気がした。一瞬でも気づくのが遅れれば籠下の頭はあの槍のようなものに粉碎されていた。そんな命のやり取り。少しも気を抜けない恐怖の世界。それを同じ年の少年と少女が身を置いている。目の前にいる。それがなんとも言えず・・・。

台所であたふたしている穂琥に駆け寄つてひとまず穂琥が無事であることを確認する。

「よかつた。来い、退治しに行くぞ。籠下も居るから早いことに付けないとな

「うん!」

穂琥は薪の背を追つて駆け出した。

田の前に立つ男女。その風貌からしてどう考へても人間ではない。

「じゃな愚図を潰すのにあいつは戸惑つたわけ？」

女が甲高い声を上げる。男は黙つて田の前のものを見据える。

「こんなしょぼい結界しか作れないようなヤツにアイツはすこやか  
負けて帰つてきたって言つの？」

「触らないほうがいい」

目の前の男女が何であるせよ、余話していることを聞く限り、薪たちにとつて敵であることを意識させられた籬下。そして男の忠告を他所に女は籬下の周りに張られているシールドに触れる。すると女は数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「だから言つただろう。雲杜（くもとう）がそこまで弱い奴ではない事位知つて  
いるだろ？」「

「つさいわね！私より弱ければ皆同じよ！それに比べて・・・。今  
回の彼は敵ながら惚れちゃいそうね～」

女は頬に手を当ててうつとりとした表情を浮かべた。先程、吹っ飛んだときに出来た傷ももう癒えている。眞砲祇ならばこれが普通なのだろうか。その辺のことは全くわからない籬下はただ、今あるこの状況下で生きていられるかの方が重大であった。

男女は籬下から田を離すとあらぬ方向に目を向けた。そうしていふ一人の会話で眞稀を隠していないとか、その方が抹殺しやすいとか言つてこるとなるとおそれなく新と穂琥のことを見ついているのだと理解できた。

女はやたらと嬉しそうな顔をしながら男に行つてもいいのか訪ね

ていた。男のほうはそれを肯定していた。すると女はさらに嬉しそうになり、にたつと気味の悪い笑みを浮かべるとその場からぱつと消えた。男は籠下のほうを見下ろして言った。

「運が良かったのだがよ、君は。いや、悪かったのかな」

そういうと男はその場から消えた。籠下はただ黙して新たちが帰つてくるのを待つことしか出来なかつた。

## 第三話 影に隠れた存在

「追つて来るな・・・」

走り続けてやつと止まつたところで薪が言った。先程、家を襲撃してきた眞砲祇から人間を放すべく走り戦える場所まで移動して自分たちの存在はここにあると眞稀を放つ。それで向こうが此方に来てくれるなら文句は無い。文句が無いはずなのに。

「ダメなの?」

穂琥の疑問の声が上がる。薪は小さく唸る。わかってはいる。来てくれることに關してそれが狙いで誘っているのだから。ただ、相手が素直にその誘いの乗りすぎているような不安もない事もない。穂琥はいいほうに考え方よつ?と囁く。それに薪は頷く。

女がすっと舞い降りる。その後に男が降りる。感覚からしてこの二祇であつてゐる。

「急ぎすきだ、眞稀を無駄に使うな」

「だつてえ。早く会いたいんだもの」

女はきやこきやいとはしゃいでいる。男のほうはため息をつく。

「霊杜が世話になつたな」

「だと?・・・ああ、この間の男か?」

「名乗らなかつたの、あのバカ!」

女が急に話に参加する。

「私は誓茄、ようしくねー天才の眞匏祇さん」

「我が名は鼓斗」

「へえ」

薪は警戒したように相槌を打つ。特に誓茄の言つた言葉のときの薪の表情には萎縮した穂琥だった。なんだか一瞬、怒ったような気がした。

「相手に名乗らせ口は名乗らぬか」

「・・・そつちが勝手に名乗つたんだろう? 認めてもいないビーバーの眞匏祇に名を言つ筋合は無いな」

「さやつーいいわね！ますます気にいちやつた！」

薪が名前を伏せたのはきつとしつことではない。いや、もちろんそう言つたことも含まれるのだろうけれど。眞匏祇の慾夸である以上、その名を明かしてはいけないのだろう。だからそれは同時に穂琥も同じことだった。

「さて。戦わないとならないのか？」

腰に手を当てて薪が呆れたように言つた。鼓斗はそれを当然だと肯定する。理由を薪が問うと鼓斗の言葉を阻害して誓茄が割り込んだ。

「さよっと一氣に入つた子とは話がしたいのー私に喋らせてー」

薪が力を抜くように肩を落として誓茄の話に耳を傾ける。しかし、誓茄は薪が求めた回答をくれるような話をしてはくれなかつた。話すのはただ、眞稀をコントロールできるといつ薪の性能について語るだけ。

「理由が聞きたいんだ」

薪が誓茄の話を区切つて言つと誓茄はそれをむつとする様子も見せずむしろ嬉しそうにせつかちね、と笑う。そんな誓茄は視界の中から消える。

何が起きたかは一瞬ではわからなかつた。目の前で怒りを見せる薪の表情とさらに嬉しそうになつた誓茄の表情が見えるだけ。

誓茄は穂琥に牙をむいた。穂琥を斬り殺そうとした。しかし、それを薪が許すわけも無く、見事に誓茄の刀を振り払う。

「凄い！ 装はないで刀を出せるのねー私たちの中でも数少ないわー！」

突然穂琥に攻撃を仕掛けた理由はおそらく、薪に刀を抜かせるためと、叩かなければならぬ理由を穂琥が知る必要も無く、そもそも存在 자체が必要ないと判断したからだろつ。

誓茄はただひたすら薪のその強さに惚れ込んだらしく浮かれた声を出す。その声が穂琥の耳には耳障りで仕方なかつた。

「さあて。その娘を私たちに預けてくれないかな？ 安心して、傷付けやしないわ。あなたに来てもらいたいだけなの、我らの主の下に」

「誓茄。それは早すぎだ。もっと情報を・・」

「構わないわ！ それくらいの方の『シナリオ』は崩れたりしないわ」

誓茄と鼓斗が軽い言い争いを始めた。段階がまだ早いと訴える鼓斗に対しても支障はないと言語する誓茄。誓茄の場合は感情論で筋がない。よつて鼓斗の言葉で誓茄は唇を噛むことになる。

「主の『シナリオ』を崩すなど我らには出来はしないが、奴には出来るぞ。その位の力を有している。お前がそれは一番わかっているのではないか？故に惚れたのだろう？」

押し黙る誓茄。鼓斗は警戒したような顔をいている。その様子をただ見ているだけの新と穂琥。しかし、いい加減に薪の痺れも切れてきた。

「さて」

突然発せられた薪の言葉と眞稀。それに驚いた誓茄と鼓斗は息を呑むようにして薪のほうに目を動かした。

「話はその辺でいいか？そろそろ終いにしたいんだけど」

薪の言葉にかなりの警戒を抱いたらしく鼓斗は不服そうな表情をしつつも引くことを決めたようだった。しかし、それに喰らい付いたのは誓茄だった。

「面倒だな。お前の言う主とやらがどんな奴かは知らんが。お前らが着くほどの眞貌祇だ、相当できるんだろ？そしてそんな主を作った『シナリオ』とやらがそう簡単に崩れるとはオレには思えない。お前ら一祇を今ここで倒したところできつと何の支障も出ないだろ？とオレは思うわけだ」

薪の言葉に鼓斗も誓茄も硬直した。一度も会っていない主と呼ぶ者

の強さと力量を直感で理解し、それを口にする。

「今、引くというのなら追うつもりは無いから行け。ただし、一戦交える、はたまたこの女を連れて行こうといつのならオレは申し訳ないが本気を出す」

薪の言い切った言葉に誓茄が、喰らい付こうとしたがそれを鼓斗が遮り引くことを要求する。しかし、鼓斗としてはすんなり引かせることが腑に落ちないようだった。

「家に友を閉じ込めているしな。それにお前たちみたいな奴との戦鬪は極力避けたい。この地球が壊れてしまつ」

鼓斗は納得いったように頷くと小さく笑つてから誓茄を宥めてその場から消えた。誓茄は薪を恨めしい目で見てから姿を消した。

やつとまともに会話が出来る。穂琥は薪に傍に駆け寄つてそつと薪の背に手を置く。

「昔、まだの方の支配下にあつたとき、罪を犯したものは絶対殺された。それから逃れようとして地球に足を運んだ」

穂琥が尋ねる前に薪は語りだした。それが嬉しいような複雑なような穂琥だった。

さすがの慇々といえど、さすがの巧技といえど地球まで逃れた眞匏祇を追つてまで殺すつもりは無かつたらしい。何より面倒だつた。地球に逃れなければ逃れればいいと巧技は割り振つていた。

そもそも眞匏祇にとつて人間に対しする負の感情は深い。人間を

毛嫌いし抹殺したいと願う程に。しかし流石の眞匏祇といえどこの地球に住まう人間全てを消し去る力を有しているわけではない。もつとも、慾夸なら別の話しだが。

よつて地球に逃れた眞匏祇は結局嫌う人間の元生活しなければ習いために苦痛であることに変わりは無かつた。さらに眞匏祇の世界から人間の世界に行くことは容易くできても戻つてくることは容易ではない。故に、わざわざその反乱分子を殺しに地球に赴く理由などなかつた。

そして厄介なのがここから。殺されることを恐怖に思つて逃げてきた眞匏祇たちは大抵心弱く、この地球に足を踏み入れた眞匏祇を片つ端から消していこうとする。慾夸の追撃ではないかという不安から。だから不安定に発している穂琥の眞稀を感じると襲つてくれるのだ。さりに面倒なのは先程の連中だ。

決してそんな弱い存在には思えないのにも理由がある。ただ逃げることを選んだ先程の眞匏祇の話とは異なり、こちらの眞匏祇は慾夸に対する憎しみが強い。必ず噛み付くに戻るという意気込み。それがあるからこそ、普通の眞匏祇よりもはるかに強い力を有することになる。慾夸に復習するために存在している集団。それの一員が先程の誓茄と鼓斗、さらには雫杜ということだ。

そして問題なのは薪が慾夸であるかどうかを知つているか否か。鼓斗と誓茄は気づいていないことは事実。もし、慾夸と知つているならあんな口調、態度ではないはず。しかし、彼らが『主』と呼んでいたものがどうかは流石の薪とて理解は出来ない。

そんな話を家に帰りがてら穂琥にしていた薪だつた。そんな家には途方にくれた簾下が待つっていた。そんな簾下を包んでいたシールドを開放する。やつと身体を動かせるようになつた簾下はうんと身

体を伸ばした。

「悪いな、籐下。無理させた」

「いや、そんな事ないよ。助かったよ」

「さて、籐下。とりあえず今日はもう帰れ」

「・・・わかつた。無理するなよ、色々さ

「おひ」

籐下は少し薪の顔をのぞき見てから諦めたようにそのままの瞳を伏せて帰つて行つた。

籐下を送つた後に薪は気合を入れるよじよじと声を掛けた。それに驚いた穂琥は薪を凝視する。

「少し移動するべ。遠いから覚悟しや」

薪にそういうわれできよつとしたが移動術を使つといつたので特に穂琥にすることは無いと語る。なんたつて穂琥にはその技は使えないのだから。それでもどこに行くのかは見当も付かない。穂琥はそれでも薪の後を着いてく。不安なんて全く無いから。

## 第四話 懸念と人間の繋がり

ふわっと浮いた気持ちの悪い感覚。これが移動術の特徴。全く別の場所へ移動できる技。気持ちの悪い浮遊感が終わってやつと地面に足が着く。そうして目の前に広がる広大な土地と屋敷。一体ここはどこだ？

「ここって・・・何！？」

「入ればわかるんじゃないか？」

薪はしれっとした顔をしてさつさと歩き始める。穂琥はそれに習うしか出来なくて薪の後を走っていく。

薪はその広大な土地にすかずかと入り込んでいく。中に入ると警察のような格好をしたもののが鋭く睨んできた。しかし薪はそれすら気にする様子も無くどんどん進んでいくが、その警察のようなものが近寄ってきて問い詰める。

「君達ーここには君たちが入つて良い様な場所ではないぞ！帰りなさい！」

荒れの滲むその声には怒りといつより警戒だった。確かにこの場は他の場所に無いどこか神聖な気配を匂わせてはいるが、穂琥には一体ここがどこなのかは知らない。その警察のような男性は薪の腕を掴む。

「君ー」

その声に流石に薪は反応を示してため息をついた。男性の目の前に

手帳のようなものを押し付ける。それを一瞬だけ如何わしい表情をした後、はつとした顔をしてから薪の顔とその手帳とを見比べた。それからいまだに不信感の残る顔のまま通ることを受諾した。

穂琥はその手帳に疑問はあまり持たなかつた。薪は眞匏祇で、こ<sup>ト</sup>は地球。人間の住まう場所。人間の世界に『まほつ』なんて存在しない。故にそんな『何処にでも入ることが出来る券』などというものを簡単に入手できなくて当然ではあるが、眞匏祇である以上それらの『偽装』は簡単に出来る。が、薪の行動には疑問を覚えた。薪はあまりこういった無理強いするような行為はしない。よつて、偽装するなんて如何わしい行為をすることはとても思えないからだ。

「ねえ、薪。さつきの手帳つて何……？なんだか怪しい……」

「大したものじゃねえよ、オレら眞匏祇にしてみれば」

そう言つて薪は手帳を穂琥に渡してくれた。手帳といつても中身は紙があるわけではなく、何かの紋章のようなものが描かれているだけだった。どちらかといふと警察手帳のようにも思えた。紋章が違うけれど。

進んでいくとそれはまあ、大きな屋敷が見える。薪は何のためらいも無くその中に入つていいく。流石に穂琥も焦つて身を萎縮させた。中に入ると脇に小さな扉がある。その扉に入るとそこは人が2、3人入ることが出来るか出来ないか位の小さな空間だった。

「……何? 何をする場所なの?」

「空間移動をする場所だ」

「……へ?」

人間の造つた施設にそんなものが存在するわけも無い。しかし薪は

そこで移動術を行使して全く同じ場所へ移動する。

そこの扉を開けるとそこには美しい女性がいた。穂琥はその女性に一瞬見とれてその後に目を大きく見開いた。その女性を穂琥は知っている。そしてどんな女性かを知っている。故に驚いたのだ。そして彼女のほうもとても驚いているようだった。驚き具合では両者とも引け劣る」とは無かった。そんな中に響いた張りのある声。

「急な訪問をお許しください」

薪の声を聞いて女性は驚いた表情から通常の表情へと戻した。それから一体何をしに来たのかを尋ねる。その声は少しだけ震えていた。

「まずはこれ、証明書を」

薪は先程の警察のようなものに見せた手帳をその女性に見せる。女性は顔の奥で震えを見せた。しかし表には決してその様子を出さない。気丈な女性だと穂琥は感じた。それでも彼女の顔は蒼白になっていた。

「そ、それで今回は何用で……？」

彼女は礼儀正しく起立して薪に向う。薪も同じ様に起立して向う。硬くなっている女性に薪はそっと笑いかける。

「そんなに硬くならなくとも。父上は少し異常でしただけです。今回危害を加えるよつたことはいたしません」

そつと話した薪の言葉に彼女は少しだけ安堵の表情を見せた。

安堵した彼女とは裏腹に穂琥は衝撃を受けて仕方なかつた。

彼女は間違うことなく人間だ。その彼女に薪は『父は』と語つた。つまりは薪の父を知つてことになる。そして今の薪とは異なり、父、つまり巧伎が眞匏祇であることを隠して彼女と接したとはとても思えない。

「巧伎様は・・・？」

「・・・他界した。随分と前に。その報告を兼ねてここへ来させてもらいました。遅くなってしまったことをお詫びします」

「い、いいえ・・・」

彼女の瞳は揺れていった。

まさか人間とこんな関わりを持つていたというのか。驚きでしょ  
うがない。巧伎がこの女性を殺さなかつたことが少し意外にも思え  
るほど、彼女の権力は相当強い、はずだ。慾夸を前にすればかすん  
でしまうけれど、この地球上にとつては相当な権力。

「あの、陛下。失礼致し・・・客人ですか・・・?」

部屋に入ってきた一人の男性。

名前を確か、貴船きふね小夜さよと言つた。この女性は何を隠そつ、この地  
球のトップ所有者、天皇陛下といふわけになる。

入ってきた男性を小夜は何とか宥めて部屋から追い出した。薪は  
申し訳ないと謝罪の言葉を述べるが小夜は必死でそれを否定する。

「いえ、貴方様が悪いわけではありませんので」

小夜の敬語に一瞬だけ薪は不機嫌そうな顔をしたが直ぐに戻した。もとより彼女は敬語を使用する立場の人間なのだから当然だ。相手が懶惰であろうが何であろうが関係ないということを思い出す。

「それで、何用でしょう？」

最初よりは大分落ち着いたその声に薪は安心したような顔をしていた。

「癪臨という危険な宝玉が此方に来てしまって。それを回収するのが今回この地球にお邪魔させていただ理由です」

小夜は癪臨と言つ言葉を聞いて目を丸くした。別にその言葉を知らないわけでは無さそうだった。とすると、おそらく巧技からの情報を与えてられているのだろう。

「それの回収作業をするので多少なりともこの地球の軸が揺らぐかもしれませんが、揺らいだぶんはしっかりと元に戻しますので」

小夜は納得したように美しく頷く。

それに反して穂琥はそろそろ我慢の限界に達していた。

「薪！一体何？！天皇陛下だよ！？この世界のトップだよ！？って  
いうか人間だよ！？何考えているの！？」

「何も考えていないお前には言われたくない台詞だな  
「酷い！」

突然話に乱入してきた穂琥に小夜は酷く驚いていた。まるで今までその存在に気づかなかつたみたいに。震える声で穂琥が何であるの

かを尋ねてきた。

「私は穂琥です！ホク＝スインス＝トゥウェルブ！薪の妹です！」

陽気に答える穂琥に少し面食らったように頷いていた。

「さて、お忙しいところ時間を預いてしまって申し訳なかつた。ではまた来ます。その時は良い報告を持つて」

小夜はその言葉にはつとしたように深々と頭を下げた。そして薪と穂琥はきたところから帰るのだつた。

「薪様・・・ですか。懸考もお変わりになられるのですね・・・。巧伎様と異なり素晴らしい方です・・・」

小夜は一人になった部屋でそう呟いた。

穂琥はひたすら薪に投げかける。人間ともそんなかかわりがあるなんて知らなかつた。しかも相手は天皇陛下ときたら驚きだ。しかし、薪はさらりと凄いことを言つてのける。

「ま、所詮天皇だしなあ。懸考なんかを前にしたらまだまだ小さい存在だよ」

本当に我が兄ながら一体何処までコイツは・・・。穂琥は小さくため息をつく。ここに来てより薪を遠く感じた穂琥だつた。

そんな薪はこの皇居に危害が及ばないよう普通には見えない特殊なシールドを張つた。これでおそらく、相当の手誰が登場しない限り手に出すことは出来ないだろ？

皇居を出ると穂琥は鋭く肌を刺す殺氣に似た真稀を感じた。それを薪に伝えると少しやわらかい笑みを向けてきた。

「そういうの、分かるよくなつたんだなあ～」

「なんか腹立つ！それ所じやないでしょ？！」

「はいはい」

妹のちよつとした成長を噛み締めながら薪は足に真稀をためる。穂琥がその行為に疑問を感じている間に、薪はさつと穂琥を抱えて空へと飛び上がるのだつた。無論、穂琥の大絶叫をおまけして。

## 第五話 新たな幕開け

今感知した眞稀は全部で4つ。つまり4祇いるところになるとになる。

穂琥を連れて薪は敵の待つ場所へたどり着く。誓茄と他にも女が一祇と男が一祇いる。見覚えの無い顔ぶれだった。

「何用だ？」

薪の言葉に誓茄は嬉しそうに微笑んだ。

「何、こいつら。強いの？」

誓茄の隣に立つた女が嫌そうな声を上げた。誓茄はそれを聞くと自慢層にお気に入りだと鼻を鳴らした。そのやり取りを見て薪は肩を落とす。

「へえ！鼓斗と戦うのを拒否したっていひつか？！」

その後ろにいた男が感嘆の声を上げる。さらにその後ろにいる男は此方を睨むようにして押し黙っている。

女の名前は圭、男の方は流貴。ずっと黙つて言葉を発していない男が瞑。誓茄は相変わらず腕を組んでやりと笑っているが、圭は戦闘態勢に移つたので薪は目をすっと細める。

「やるのか？」

「おいー？」の数をしてやる気なのか？大したものだな！？」

薪の言葉に流貴が反応を示した。薪のその強気は圭に買われたが結局、やられたのは薪であると圭は豪語した。

「ハツでも戦闘するつもつは無い。『シナリオ』とは異なるからな圭が額に力を入れて書いた。相変わらず誓茄は信徒の一戦を交えたくてうずうずしているようではすがの圭もその様子を不思議に思ったらしいく、そんなに氣に入ったのかと尋ねた。

「ええ！ 強いわよー！」

「…………一戦、やりたいな

圭の言葉。それに流貴は驚いたようにやるのかと聞いた。そういやつて騒いでいる中に穂琥が少し怯えているのを薪は感じた。

穂琥の瞳に映る4祇の眞苞祇たち。そのうち、一つだけ特殊な存在を感じる。本来、眞苞祇は眞稀を完全に消して気配を消すことは出来ない。薪とて眞稀を最小限に抑えていて普通の眞苞祇にとってはまるで消えているように感じるだけのこと。桃眼で視れば眞稀を観る事は案外容易くできる。

しかし。たつた一祇。根本的に眞稀を見る事ができないものがいる。そのものに対しても酷く怯える穂琥。そして様子から察するに薪もそれに気づいているようにも思えた。

「あんた、名は？」

「あんた、名は？」  
低く、重たい声。まるでそれは鉛のように。その声が響いたとき、それ今まで騒いでいた誓茄や圭、流貴は押し黙った。

声を発したのは瞑。眞稀を見る」との出来ないもの。その瞑に名乗ることは出来ないと答える薪。すると瞑は薪を一度鋭く見てから視線を外した。

「名は？」

再び問う。薪はその瞑の言葉に何故か焦りを感じた。一体何故自分が焦つたのか理解することすら出来ないほど、妙に焦つてしまっていた。

「断ると、言つたはずだが？」

「何故語らぬ？」

「・・・語れぬ理由があるからだ」

薪の言葉全てで瞑はあるで何もかもを見据えていそつた気がしてならなかつた。

一方の、誓茄たちは正直驚きで言葉を失つていた。滅多に声を發しない瞑だが、今、目の前にいる少年に興味を持つて話しかけていることが意外で仕方なかつたのだ。普段から全く喋らず実際、声を聞いたのだってこの長いときの中でも、3度といつても過言ではない。そうだとこいつのここまで語つて居るとは驚く以外に無かつた。

瞑は軽蔑するよつに薪を睨んだ。しかしその後に目を伏せて呟くよつて言ひ。

「『ハンド』と回じ『氣』を感じたが。氣のせいか

薪はその言葉に全身に鳥肌が立つた。自分の奥からこみ上げくるものは何だ。驚きか。いや、きっと違う。これは悲しみと憎しみ。そ

してそう感じた自分に怒りが沸く。

瞑はそのまま喋らなくなつた。薪はそんな瞑を凝視する。しかし、瞑はもう言葉を発する気は無いようだつた。

「あの、瞑、さん？」

穂琥が急に会話に参加した。薪は驚いて穂琥に振り返る。穂琥の瞳に残る眞稀を感じして僅かにでも開眼したことを知る。

「貴方、一体なんですか？『何』ですか？」

穂琥の質問に瞑は不機嫌そうに顔を歪めた。しかしあはり何も言わない。瞑の中で既にもう何も言つ必要がないと判断したのだらう。

その異様な空氣に気圧されていたのは何も薪だけではない。当然、瞑と共にここにいた他の3祇もダメージを受けているようで若干の狼狽した様子を見せていた。

「引いてもらえないか？」

薪の声に賛同するように流責が声を張る。

「おし、ojiroは引いつて一度戻つて体制を立て直そうじゃないか？」

！」

それに同意する誓茄と圭。無論、瞑も引くつもりのようだつた。少しだけ安堵する薪。しかし、瞑がふつと薪を睨む。薪はその目に一瞬だけ心臓を貫かれる感覚を覚えた。前にどこかでそれに似た何かを感じたことがあるような。

「あなたと遭り合つ時を待つていいるよ」

先程までの話の中で一番重たいその声にぞつとする薪。本能が告げる。この男は交えてはいけない、何があつても、と。

そして彼らは姿を消した。全身から力を抜いた薪は腰を下ろす。そしてどつと疲れた息を吐ききつてから穂琥に投げかける。

「なんあんなこと聞いた？」

「「」、「メン……でも気になつて……だつて……だつて  
眞砲祇じやないよー」アイツ、何！？だつて！—」

「落ち着けつて」

薪の宥めるような声に穂琥は黙る。穂琥のいつていることなかれ事実だ。眞砲祇であるのに桃眼ですら眞稀を見る事ができない。それにある異様な空氣。普通の眞砲祇とはとても思えない。

「ねえ」

神妙な面持ちで穂琥が薪に呼びかける。薪は目だけを穂琥に向けて反応を示した。穂琥は少しだけ黙つてからそつと口を開いた。

「綺麗……さんつて、眞砲祇とは全く違う生き物だよね？」

「？ 当たり前だろ？」

穂琥の質問に疑問の表情を浮かべる薪。薪の返答を聞いてさりげに押し黙る穂琥の様子を見て、薪ははつとした。

「お、おこ・・・？ まさ、か・・・」

「い、いや、わからないけどー。」

僅かな可能性。しかしその可能性を否定することも出来ないことも事実。綺麗にそのことを尋ねてみても構わないかもしないが、取り合ってくれるとほどても思えないのが現状。

瞑は死神かもしれない・・・

## 第六話 属する世界の違い

帰宅途中の出来事。薪がはたと足を止めた。そしてあらぬ方を見て怪訝な表情を浮かべている。それから穂琥の腕を掴んで着いて来いと走り出す。何が何だかわからないけれど諦めて着いていくことを選ぶ穂琥だった。

とある家の前で薪の足は一度止まつた。そしてその家を凝視している。その様子を見ていることしか出来ない穂琥は怪訝な表情を浮かべる。そして薪はその家のインターフォンを押す。しかし、返答は無い。留守なのかと思った穂琥だったが、薪は何も気にしてないように勝手に家の敷居をまたぎ、玄関の戸を開けてずかずかとその中に入つていったので驚いたなんものではなかつた。

中には頬を濡らした女性がいた。その膝元には白い顔をした男性が横たわっている。見るからに既にその顔に生氣は無い。息を引き取つた後だろう。

そんな女性にも気にしないように薪はきょろきょろと辺りを見回している。勝手に入つてきた男女にその女性は酷く驚いている様子だった。穂琥はそんな女性に平謝りして何とか薪から意図を聞きだそうとする。

「旦那、か。いつ逝つたんだ？」

薪の言葉に流石の穂琥も怒りが沸いた。大切な人を失つた人間にそんな言葉をかけるなんて酷すぎる。しかし、よく見ると薪の目は女性を見ていらない。むしろまったく別のところを見ている。それから怪訝な表情になる薪。

「居るんだろう? そこそこ。出でても良いだろ? この男に何があるのか?」

薪が突然喋りだす。穂琥もその女性もチンパンカンパンで硬直する。一体薪は何を言い始めたのだろう。穂琥でもわからないのだ、この女性にそれがわかるわけも無い。穂琥は半ば、薪の頭が壊れてしまつたのではないかという不安に駆られた。

「出ないか? ここでの女性の記憶はオレが持つ。いいだろ?」「ふん」

薪の言葉に呼応するように響いたその声に、女性は酷く驚いて反応する。誰も居ないはずなのに、声が何処からとも無くしたのだから。その声を聞いた穂琥のほうは久しぶりに腹の底からぞっとしたものを感じた。怒りというか、なんというか。前回会った時と同じ様な感覚。儒楠が『嫉妬』と呼んだ感情だ。つまり。今声を発したのはあの『ヒト』だ。

「よひ。久しぶり、でもねえか」

笑いながら薪は言った。

真っ黒いローブのような服。フードを深くかぶり容姿がはつきりと輪郭取ることが難しいそれは横たわる男性の脇に現れた。

「貴様の助力をする為に居るのでは無いぞ」

男か女か、わかりづらいその声音と口調だが列記とした女性。死神、綺邑。

「わかっているよ。さて、あなた、名前はなんでこいつの？ちなみに  
オレは薪。これは穂琥。ちょっと用事があつて」「今まで来させても  
らった」

薪の唐突の質問に、むしろ此方のほうが聞きたいことがたくさんあると言いたげにその女性は言つてみ込んだ。

「幸奈、です。」「のヒトは翔蒔ですか」

幸奈と名乗った女性は震えた声でそう。田の前の少年たちは一  
体ここに何をしに来たのだろつか、わかるわけも無く、また教えて  
くれる様子もなく。

薪は幸奈の名を聞いた後に綺邑に向直る。

「で？ 綺邑よ。何故お前がここに？」「  
「これは私が扱う」

ぶつから棒に冷たく言い放つた綺邑だが薪は折れることなくそんな  
綺邑に尋ねる。だから、何故？と。綺邑は面倒くさいような表情をし  
たが諦めたように語る。

「罪。しかし別に悪くは無からず。救つてやる」とは思つ

綺邑の言葉に幸奈は震えた。言つていることはきっと理解し切れて  
いないだろけれど、何故、この翔蒔が死んでしまったのか経緯を  
考えると、最初に言つた『罪』という言葉に引っかかりを覚えたの  
だろ。幸奈は綺邑の言葉に聞き入るよつとして耳を傾けた。

「が」

綺邑は言葉に否定的な接続詞をつける。薪もその接続詞を気にして首を傾げる。綺邑が助けると判断したのであれば、難なく救つことが出来るはず。否定する要素など無いはずだが。

「IJの男自体に生きる意志が無い」

薪はその言葉に差し当たつて疑問に思うことは無かつたらしく黙る。しかし、穂琥と幸奈はその言葉に驚く。幸奈にいたっては薪や穂琥が何で、綺邑が何かを知らないから、余計に混乱しているのだらう。

「オレらは『眞匏祇』という種族だ。そしてその黒いのが『死神』といったところだろうかね」

幸奈はひたすら口をパクパクさせていた。現状を理解することが出来ていない。

「死神自体はなんとなく耳に覚えはあるだろ？。ま、その覚えのもののイメージとは随分と異なったものだけね。ともかくだ。オレも詳しいことまではよくわからないし、知るつもりもない。けど、この死神はあなたの旦那を生き返しても構わないと言っているんだよ」

薪の羅列する言葉に幸奈はさらに混乱する。しかし、生き返らせることが出来るということを知つて幸奈ははつとした表情を見せた。

綺邑が誘うのは死者の魂。事と場合によつてはその魂をもとある場所へ返すことが出来る。現に、薪もそれで命を救われているのだ

から。しかし、今度そうとしている男、翔鶴の魂は元の器に戻ることを拒否した。過ちを犯したことによる罪悪感で元に戻るのもおこがましいと。

「オレも過去に過ちを犯した。そして死ぬはずだつたところをこの死神に救われた。気持ちはわかる。でも、死ぬことが罪をかぶることではない。罪を償つことではない」

薪の声に諭されるように幸奈は瞳を揺らした。

「生きて、やらねばならぬこともある」「あなたは・・・・一体、何?」「此処には有らぬ存在、というかね」

薪はそつと言ひ募る。今までの薪とはどこか雰囲気が違つ氣がする。その言葉回しがどこにかかつてよく思つ穂琥だった。

「あなた達は・・・・一体・・・・。私にとつて何ですか?幸ですか?不幸ですか?」

震える幸奈の声。それが求めるものは光か闇か。幸奈に期待に沿う事を言つつもりは無い。いや、いうことはできない。だから薪はありのままを伝える。

「オレ達がそれを決めることは出来ない。あんたが決めればいい。ただ、オレはあんたに幸福をもたらしたいとは思つてゐるところははえておく」

信じる信じないは別の話。薪たちは幸奈に味方するつもりでいる。しかしその『想い』が幸奈にとつて幸福になるかは分からない。感

じ方など様々だから。

薪の言葉に幸奈はふっと肩の力を抜いた。そして潤んだ瞳で小さく呼応する。

「貴方たちを信じます」

## 第七話 明らかになつた存在

綺邑が嫌そうな目で薪を睨む。幸奈の返答を聞いて話しが一時、完結したためにその場から消えようとした綺邑を薪が呼び止めたのが原因だ。

「貴様、この期に及んでまだ何か？」

冷たく重いその言葉に慣れていない幸奈はぞつとする。無論、穂琥もしたけれど。それでもめげない薪の神経はどれほど図太いのだろう。

「まあ、いいじゃないか！ 一つ、聞きたいんだ。それ答えてくれたら行つていいから！」

薪の回答に綺邑は冷たく睨む。しかし、この沈黙は綺邑の肯定の仕方だ。薪は軽く謝礼を述べてから質問をぶつける。

「お前つて一人か？」  
「は？ 貴様、何を言つている？」  
「いやな、死神はこの世に一つしかないだろ？ 一つも在る事が出来るのはかな、つても」

薪の質問に綺邑は怪訝そうに眉を寄せた。

「瞑、つて言つんだけどさ。知つているか？」  
「いや。知らんな」

瞑の質問であるなら穂琥も参戦したい。

あの違和感はまるで違う。眞匏祇のような雰囲気を漂わせているところの眞稀が全く見える」ことが出来ないあのへんな『生物』を。

そんな疑問と不安を綺邑にぶつける。ぶつけられている綺邑はひたすら黙っていた。此処まで黙する綺邑も相当珍しい。肯定というわけではなく、思考しているのだ。そんな思考する時間に綺邑はあまり時間をかけない。その思考している時間すら惜しい。故に思考することを止めて知らんと答えるのがいつもだ。

「知らんな」

長い沈黙の後に綺邑は答えた。

「聞いた限りでは記憶に無い。会つて観ないとわからんが、会つてもりは無い」

言い切った綺邑の言葉に穂琥は怒鳴るように言い返したが薪がそれを制止する。

「なら会わなくともいい。オレの記憶を少し見てくれないか?」

綺邑は一度面倒くさそうな顔をしたが仕方ないとといった風で薪の傍により薪の額に綺邑の額を当てる。そして目を閉じる。そして薪が綺邑へ眞稀を流し込めば、その眞稀の流れに乗つて過去の記憶映像が相手へ届く。

映像を見終わった綺邑は薪から離れてそろそろ黙した。見覚えがあるのかないのか。知っているのか否か。綺邑は答えない。

「あの・・・」

弱々しい声が沈黙の中に響いた。それで気づいたがすっかり幸奈が居ることを忘れていた。

「瞑、とこいつですか？私も・・・その方を知っています」

幸奈のその言詞に全員が驚く。

翔時が息を引き取ったのは昨日の事。その日に起きた出来事。幸奈は今にも消え朽ちてしまいそうな翔時の面倒をしきりに見ていた。

「迷惑かけてすまないな・・・」「いいえ、いいのよ。ずっと一人でって、決めたじゃない」

うつろな眼の翔時に必死に言葉を掛ける幸奈。翔時はただ過去を悔っていた。悪いことをしたものは地獄に落ちるのが定めなのだと。

「そんな事言わないで・・・。貴方は悪くないわ。いつかきっと救われる。いつか・・・」「ああ・・・そうだといいなあ」

翔時のその声には諦めが混ざっている。きっと自分は救われない。幸せになつてはいけないのだと。自分はどんなに不幸でもいい。だから目の前のこの女性にだけは幸せでいてほしいと願うしか出来なかつた。

「失礼」

玄関のほうで声がする。幸奈は客だといって立ち上がった。

突然現れた男は瞑と名乗り、翔蒔の病を治せるかもしれないといつてきた。それに歓喜した幸奈は瞑を中に入れた。

しかしどうにも胡散臭い。瞑はふふ、と笑って翔蒔の額に手を置いた。やつたことといつたらそれだけだ。立つたそれだけの行為で瞑はこれで帰ると呟つ。

何が何だかわからないまま幸奈はその瞑を見送ってしまった。そして戻ってきた時、翔蒔は息を引き取っていた。

穂琥はその話しを聞いて震えた。普通の人間ならわからないかもしないけれど、眞砲祇である穂琥にならわかる。額に手を当てたとき、確實に瞑は翔蒔の生氣を吸い取った。ヒトの命を一体、何だと思つてゐるのか！腹立たしくてたまらない！

「落ち着け、穂琥」

薪に言われてむつと黙る。そして薪はそのままひたすら黙つている  
綺邑へ目を送る。

「おそらく・・・奴の名は<sup>ゆうえい</sup>邑穎だらうな  
「知つてゐるのか？」

綺邑はなんとも口惜しそうな顔をしていた。こんな風に表情を歪ませたところを始めてみた。

「死神だ。元な。今は違う。既にこの世には存在していないはずの

ものだ」

綺邑の語り方と雰囲気。そして元死神であるという綺邑の言つた事実を踏まえて導き出るたつた一つの答え。

「お前の・・・父親か?」

綺邑は小さく頷いた。肯定の仕方にそれを用いたことが無かつたので薪も穂琥も少し面を食らつた。まさか、一度朽ちたはずの死神が再びこの世に舞い戻るなどありえない。あつていいはずが無い。しかし、邑顯は綺邑の父。もとより凄まじい力を有していたことは事実。もしかしたらそうして今この世に存在することは造作も無いことだったのかかもしれない。

「さて。記憶はオレが持つ約束だつたな」

薪がパンと手を叩いて空氣を割つた。話に段落が着いたからだ。必要なことは全て聞いて今の薪にとつて欲しい情報は大抵入つた。よつて此処に長居する必要は無い。

「此処であったこと、全てをオレがもうつ。つまりはあなたの記憶を消すつて事だよ、幸奈」

幸奈は息を呑む。せつかく知り合えた彼らのことをすっかり忘れてしまうのは悲しくてたまらない。切なくて仕方ない。

「すまないね、約束があるんだよ。綺邑に出てきてもうひとつ『記憶はオレが持つ』といつてしまつたからね」

「私は見世物じゃない。たかが人間風情が私を記憶しておぐなど痴がましいと知れ」

綺邑の発言に幸奈が震えた。その殺意にも似た感覚に幸奈は恐怖したのだ。そして、俯いて苦しそうに顔を歪めて、記憶を消し去ることを承諾した。消えてしまえば何も残らない。今ある不安も記憶さえなくなれば消えてしまつのだから。

「おー」

薪が記憶を消す作業に入ろうとしたとき綺邑が幸奈に声を掛けた。幸奈はきょとんとした表情をした。

「最後に聞きたい事がある。答え次第では其の便にしても構わん」「ほつ?」

綺邑の言葉に反応したのは薪だつた。そのことに綺邑はこたさか不機嫌そうな顔をしたが気にせず話を進めた。

「まだ、話が残つてゐる。瞑と名乗つた男、何を手渡した?」

幸奈はその言葉で酷く驚いた顔をしていた。そしてそれの回答を幸奈は渋つた。そのことに綺邑はふんと鼻を鳴らして面倒臭そうに薪を睨む。薪はそれを受けて肩を落としてから幸奈の肩に触れる。

「このことは言つてしまつた方がいいよ。別に悪いようにはないし。特にオレ達にはね。それに事と場合によつては記憶が飛ばずにするのもかもしれないし」

幸奈は悲痛な表情でしばらく考えてからわかつたと承諾すると部屋の奥へ入つていつた。それを見詰めて薪は少し警戒の色を強めた。

## 第八話 魂石と共に鳴る意味

眞稀は語る。誰にも言つてはならないと。そつして渡してきた小さな箱。ここに有らぬ者たちが来たときにそれを渡すようと言つた。そつして眞稀は立ち去る。その立ち去る間際に振り向いてふいに笑つて言つた。

「礼だ、と伝えておいて欲しい」

幸奈はその箱を薪に手渡す。薪はそれを手にした直後、その中身を悟つた。そつとあけるとやはり思つたとおりのものが入つている。しかし、形は想像とは全く異なるものだつた。

「魂石、だな」

「そのようだな」

薪の言葉に綺麗が反応する。しかし、穂琥にしてみれば薪の持つている箱の中身が魂石であることがわからない。魂石とは本来、掌に乗るくらいの硝子玉のようなものだ。その美しさときたらそれに匹敵するものなど有りはしないほどに、命の輝きだ。

箱の中に入つていたものは色は完全にくすみ、不透明であつたし形も球体ではなく歪な、星型のように凹凸のあるものではつきり言えば見るも無残な形であった。

「仲間の？」

穂琥がそつと尋ねる。しかし薪はそれを否定する。眞稀は今までに

会つたことのないものだと。そして魂石だと知つてからの綺邑の举动の变化に薪は疑問を覚える。そして一体綺邑が何を考えているのかを出来つる限り考える。そうして見つけた一つの可能性。

「幸奈が眞匏祇だとも言いたいのか？」

「可能性が無い訳では無いな。共鳴している」

「なんだよ、共鳴つて。確定じゃねえか」

綺邑の言葉に薪は鼻で笑うように返した。しかし綺邑はそれでも回答をはぐらかす様な言葉しか言わない。

「何だよ、それ。何なら試すか？」

「好きにしろ」

薪は幸奈に向き直る。そして幸奈が眞匏祇か否かを調べると皿つ。幸奈は混乱する。

「大人しく黙つていればそれで良いんだよ」

綺邑の言葉に幸奈は身を縮める。しかし、理解も出来ないこの状況でそんな事を言われる幸奈が可哀想過ぎて穂琥は綺邑に噛み付く。

「何それ！そんな言い方しなくてもいいじゃない！」

「煩い。少しばかり黙つていられないのか」

「んな！？」

綺邑の返しにイラッとする穂琥。今すぐにでも殴りにかかりたい衝動に駆られたが、そこはなんとか抑えた。

「それに眞匏祇な訳あるの！？」

「それに関してはお前が一番わかるだろ？」

返答した薪の言葉に穂琥は返すことが出来ない。確かに事実だ。自分はこの年近くなるまで自分が眞砲祇であることを知らなかつた。正確には覚えていなかつた。故に幸奈も、同じ事。さらに幸奈の場合、体内に魂石を宿しては居ない。だからこそ、体外に眞稀がもれ出る」ことが無かつた。薪でも気づくことが出来ないほどだ。

綺邑に急かされて薪は調査にかかる。

幸奈の前に立つた薪はその幸奈の足元に陣を描き始めた。その光景はきっと幸奈にとっては信じられないことかもしれないけれど、今更それに驚くことも無いと幸奈は意外に冷静にそれを見ていた。

薪が描く陣。ペンなどの書き記すものを一切持つていない薪の指から発光色の橙が生み出されている。眞稀より発せられたもので描いているので、それなりに眞稀を有している者でなければ陣を書き上げる前に眞稀が呑きて失神してしまう。

「さて。これで準備はオッケイ」

書き上げた薪は陣から出て陣の手前に諸手をつく。そしてその陣へ眞稀を流し込む。

陣は橙の色をより深めて輝いた。それを見て薪はにやりと笑って立ち上がつた。その際に陣も消え去つた。

「決まりだな」

薪は腰に手を当てて綺邑のほうへ手をやる。綺邑は不機嫌そうに鼻

を鳴らすだけだった。

「えと……？」

「あの……」

穂琥と幸奈の声が重なる。薪はそれを聞いてそちらに目をやる。一瞬、穂琥を軽く睨んでから幸奈のほうに目を移す。

「陣が無色に変化すればそれは眞稀を有していないということで人間。橙がより強まればオレとその陣の中央に立っているものの眞稀が共鳴したということであり一層橙に輝く、つまり眞匏祇だということ。つまり、あんたもオレらと同じ、眞匏祇ということ」

幸奈は呼吸を少し荒げて不安そうな顔をしている。それも当然だろう。

薪に睨まれて萎縮したが、知らないものは知らないのだから仕方がないだろうと内心で文句を言つた穂琥だったが、それを悟つた薪がまた睨んできたので今度は本当に萎縮することにした。眞匏祇の事を知らなさ過ぎると自覚する穂琥だった。

「帰る」

綺邑が無造作にそう言つて姿を消した。幸奈はそれに一瞬びくつとしたけれど、薪が姿を現すことが出来るのだから消す事だってできるさと、乾いた笑いを立てたので幸奈はひとまず納得することにした。

「さて、幸奈さんぞ」

「……は、はい……？」

薪は幸奈に向かう。

## 第九話 自覚の無い眞幌祇との出会い

先程であった二人の子ども。摩訶不思議でいまだに信じられないその存在にどこか頼りうと思つてしまふのは何の心理か。兎に角。そんな一人についていけきっと何か道が開けるかもしないと思つてここまでついてきたが、一体この二人の口論はいつまで続くのだろう。幸奈はただ、そこにたつて二人を見ているだけだった。

「だあかあらあ！」

「仕方ないだろうー仮にも女だろうー！」

「仮つて何よ！仮つて！立派な女です！」

「仮だろうーお前の何処が女だ！」

「立派な女性じゃない！！」

最初の論議から大分外れた話になつてゐる。感情論で言い争いをしているのが原因だらうと、幸奈はそれを見てゐる。

そもそもこんな口論になつたのも今から30分前のこと。口論の優勢に立つてゐる男の子とそれに必死に喰らいつく女の子。男の子が薪、女の子が穂琥。そして幸奈の三人は寝床について話を始めたはずだつたが気づいたら口論になつていた。穂琥と幸奈はホテルを借りてそこに行けと薪が言つ。しかし、穂琥の言い分は薪の家に行くといつ。

「寝るとこりだつてねえだろうー！」

「あるもん！二個！」

「一個じや足りないだろうー！？」

「足りるもん！私達は布団ー薪は屋根ー！」

「オレは外かー！」

この一人は口論をしているのか漫才をしているのかわからなくなってきた幸奈だった。そしてそんな一人を見て少しおかしくなつてしまつた。

「ふふ・・・」

うつかり声に出てしまつてそれが理由で一人の口論といつ名の漫才はを終焉を迎えた。

「あ・・・」「ホン・・・。済ません。『イツと一緒にホテルに泊まつてください。ホテル代などは気になさらないで結構ですので』

薪はそう言つて穂琥を差し出す。そんな彼の態度に幸奈は疑問を覚えていた。幸奈が年上ならば敬語を使うことになんら疑問を感じることは無いのだが、この少年は先ほどまではそう言つた態度は一切無く、突然こんな態度を示した。そんな不思議な少年に混乱を抱いたまだ。

「では、オレは情報を集めに行きますので、失礼します」

薪はそう言つて姿を消す。幸奈は呆然と彼の背中を田で追つてから足元で不貞腐れている少女に手を差し伸べる。

「あ、どうせ。ありがとうございます、幸奈さん!」

かわいらしい笑顔で幸奈の手を取る。この少女は会つたときから態度が変わつていない。なら、特別なのはあの少年か。

「仲、いいですね」

「え？ そう見えます？ あんなので？」

「ええ。 とても。 素敵なご兄妹だと思つわ」

穂琥は一瞬、驚いた。 薪と穂琥の関係で兄妹だと言つてきたのは幸奈が初めてだ。 そのことを幸奈に伝えるとやわらかい笑みを見せた。

「大人が見れば恋人には見えないわ。 とても仲良しには見えるけどね。 貴女がとても彼の事を慕つてゐるということも」

「え・・・そ、 そんな事までわかつちゃうんですかあ～？ 照れちゃうなあ・・・」

穂琥は頭をかく。 大切な兄。 大好きな兄。 だからずつと一緒に居られる。 不安なんて何も無くて。

穂琥と幸奈は薪に言われたとおりホテルに入る。 部屋に入つてゆっくりとくつろぐ。 そうしてゆつたりとしていまだに信じられない中に身を投じてゐるのだと考えると実感がわからない幸奈だった。 そもそも、一緒に来るようになると薪に言われたからここにいるが、一体何故一緒に行くべきだったのか、説明を受けていない幸奈は少し不安ではあつたけれど、この穂琥という少女然り、何故か幸奈も薪という少年を信じてしまう、信じさせる力を持つてゐるよう思えた。とにかく。 今は何もわからない。 きっと彼はそれを説明してくれるはず。 それを信じて幸奈は休むことに決めるのだった。

翌朝、 いつ帰ってきたかわからない薪に起こされて不機嫌に答える穂琥。

「なあにい？」

「幸奈さんは？」

「奥」

「そりが」

穂琥の指差した扉を見て薪は肩を落とした。

支度が出来たらしい幸奈が部屋から出てきた。そしてそんな幸奈に薪は少し考えてから尋ねる。

「ねえ、幸奈さんさあ。お、あの時は記憶を消すつもりだったし、そのまんまでいつたけど。敬語つてオレ、嫌いなんですねえ。でもやっぱ人間だし、田上には敬語かな?って思つたけど。やっぱり嫌いなもんは嫌いだ。だから、いいですかね?普通に」

本当に年上といつものをかなぐり捨てたその発言に幸奈もだが穂琥も驚く。ここまでぶっちゃけて言い切ることの出来る薪が凄いとすら思ひ。

「構いませんよ・・・」

幸奈としてはさうと理解できたこと。薪の態度の変調に。

「それで、幸奈さんや」  
「幸奈、結構です」  
「やう。じゃあ幸奈や」

幸奈に言われたとはいえ、簡単に敬称を剥奪させたよ、コイツ・・・と思つ穂琥だった。

「はつきつてあなたは危険な状態にあるんだよ」

瞑、邑穎が一体何を思つて幸奈に魂石を与えたのかわからない。主と称してそれに付き従つているあのもの達がそのことで動き出せない

ければいいのだが。ともかく色々と危険が生じるとこついと。

「だから日常生活ではオレが絶対に護る。それは約束する」

強く放たれたその言葉にどれだけの深い意味が籠められているのかは、会つたばかりの幸奈にはきっとわからないだろう。それでもいいのだ。ただ、今この薪の言葉をえ、信じてくれるのなら。

幸奈にはとりあえず宝探し、という題材でここへきたということにした。まあ、あながち間違いではない。癡臨は眞砲祇たちにとって宝玉に等しいのだから。

そうして薪と穂琥は移動をすると幸奈に会つ。幸奈は不安そうな顔をしながらも連れて行つて欲しいと願い出る。薪はそれをまるで言つてくると予想していたかのように即断で許可を出す。薪が術を行使する。妙な浮遊感に襲われるのだった。

## 第十話 出会こと別れとその向ひにあるもの

気がついたらそこは地面。全く見知らぬ土地へ一瞬で移動してきた。眞匏祇とは本当に摩訶不思議なものだと幸奈は実感する。

薪は警戒心を強めた表情をする。それが一体何を示すのか。簡単なことだ。奴らがこの場に現れる。それだけの事。

「あらあ？ もうきたの～？」

誓茄が声を発する。

「やつらから呼んでおいてそちらが遅れるとはいい度胸だな

薪の言葉に誓茄はもだえる。これじゃ話にならないと薪は肩を落とす。すると後から圭と、新顔の男が現れた。

「始めてみるな」  
「名乗るほどのものでは」  
「伏せるか？」  
「滅相も無い。必要が無い」と「」  
「名を与える価値が無い」と「」  
「考えすぎであります」

礼儀正しく見えるその男に薪は不吉な予感を感じた。

彼らは主からの伝達があるといつてきた。薪は仕方なくそれを大いしく聞く。その伝達はこうだった。

貴方を我が元まで案内申し立てる。気が向いたのなら足を運んで頂きたい。宜しく申し上げます、スウェーラ様

薪はそれを聞いて険しい表情になつた。誓茄は嬉しそうに『スウェーラ』といふ名前なのかと尋ねてきたので薪はそれを否定した。すると少し残念そうな顔をしていた。

「以上で御座います。よろしければ我が主の下まで」

男はそう言つて姿を消した。それに習つて誓茄と圭も姿を消した。

一体何がしたいのか理解できなけれど、穂琥としては何故幸奈に突っ込んでこなかつたのかが疑問に思えた。それを薪に尋ねようと思つたが穂琥はその寸前で思いとどまつた。薪の様子が明らかにおかしい。

「どうしたの?」

「奴は知つてゐる……」

薪の言葉に首を傾げる穂琥。

スウェーラ、というのは昔、まだ巧伎が存命だつた頃、巧伎がとする集落を訪れたときに仮名として使つた名前だ。わざわざ偽名まで使つてその集落に入つた目的など、最早言つまでもない。あえて言うなら、巧伎がその集落を出た時その集落は壊滅していた、とだけ言つておこづ。

ともかく。そしてスウェーラといふ名前を知つてゐるということは、あの集落の生き残りで此方が懶惰、乃至はそれの息子だということが既にわかっているということになる。その上で、我が元まで

来いと言つたと言つ事は、あの、『主』といつ眞鎧祇は此方を叩き潰す算段が出来たといつことになるだろつ。長きに渡つた復習の炎を叩きつけるために。

そうして考へてゐる間に奇妙な氣配を感じて薪は剣を構える。

現れたのは瞑。ただひたすら此方を睨む。その目はおそらく幸奈を見ている。

「何しに来た？」

薪の質問に瞑は答えない。本当に無口で何を考えているのかさっぱりわからない。その後に圭がついてきた。瞑の目は一度圭を遅いといわんばかりに鋭く睨むと圭は軽く萎縮した。

「ゴメン……。そここの女は始末しろって」

圭がそういう。幸奈はひとつ小さな声を漏らす。

「護りながら戦えるか、スウェラよ」

瞑のその言葉を聞いて薪は一瞬ぞつとした。前にも似たような感覚を得たことがある。死の淵に立つたあの感覚。確實に瞑は死の気配を纏っている。直感的にそう思った薪だつた。そしてその危険性から薪は一瞬で替装する。

「始末など、させむか！！」

いきなり薪が巨大な刀を取り出して振り回したので穂琥は驚いたが、よく見たら振つたその先に瞑がいた。一瞬で瞑は薪の前まで來てい

た。それに反応したから薪は刀を振るつたのぢやつ。その勢いで瞑が吹つ飛んだ。

「大した餓鬼だ」

言葉を発する。それだけでどこかダメージを受けてしまいそうな程だった。これが歴代の中でも特有といわれ最強と謳われていた死神の重みなのだろうか。これがあの綺麗の親なのかと考えると正直ぞつとする。

圭が幸奈めがけて刀を振るつ。それに穂琥は氣づき、何とかして圭の刀を弾き返す。薪と瞑が視界の隅で戦つている。ならば、穂琥だつて幸奈を護る何かをしたい。あまりなれない刀を手に持ち圭に向う。

「お前、慣れていないな。実戦したことあるのか？」

「い、一度だけ・・・」

「ふうん」

圭は興味もなさそうに声を出して再び襲い掛かる。

あちこちで激しい攻防が続く。一体何を考えているのだろうか。わからない。つい昨日、出会つただけの自分のために命を張つて戦う少年と少女の行動の意味がわからない。どうして？

「どうして私なんかのために・・・」

震えた手を握つて幸奈は小さな声を漏らす。こんな風に自分のために誰かが傷つくのは見たくない。見てられない。でもどうしたらいいのかさっぱりわからない。

声。懐かしい声が聞こえる。

生き抜けばいい・・・

はつとした。ずっと傍に居た大切な人の声。一体どうしてその声が聞こえたのかわからないけれど、幸奈はその声に耳を傾けた。かすれて消えてしまいそうな声だから周囲の音で簡単に聞き逃してしまった。

生きて生きて・・・幸せになればいい

愛しい人。この世で最も愛した人。

「翔時・・・？」

聞こえた声の主。紛れもなく翔時のものだ。幸奈は震える。

いつかきっと救われる、そう言つたのはキミだよ・・・?大丈夫。俺はずっと一緒に居るから・・・

幸奈は地面に膝を着いて涙した。暖かい声。それが何故するのかなんて幸奈にはわからない。それでも、その声の暖かさに嬉しくて涙が止まらない。そして今、必死で戦つてくれている彼らのためにも、しっかりと意思を持たなければいけないのだと感じる。もう聞こえなくなつた翔時の声を耳に残しながら幸奈はそつと立ち上がつた。

薪は先程から違和感があつて仕方なかつた。滅多に喋らないと聞いているが、目の前のこの男、瞑は先程からずっと口元がにやけている。まるで何かを楽しんでいるかのように。嘲笑っているかのよ

う。

「何がおかしい？」

薪の問いにやはり瞑は答えない。しかし、瞑は薪の質問とは全く関係のないことを口にした。その口元は酷く歪んだ笑みだった。

「礼、とだけ言っておこうかね」

「は・・・? 何を・・・」

瞑の攻撃を受けつつ攻撃しながらの会話のため、まともな会話はしていない。一方的な投げかけになつていてその言葉のやり取りの中で薪はその瞑の言葉の意味を理解できなかつた。そうして、この時の言葉の意味を知るのは今からずつと先の事。

膨大な眞稀が膨れ上がり破裂したのはそれから間もなくだつた。それはあまりに突然で流石に薪もその眞稀の破裂に対応できなかつた。軽くその場から飛ばされて数メートル先に着地した。しかし、瞑や圭を見るともつと吹つ飛んでいるところからこの眞稀の原点が何であるか悟つた。

「幸奈・・・! ?」

薪は眞稀の風圧を抑えながら急いで幸奈の元に駆け寄る。幸奈の近くには穂琥が居るはずだ。近くで眞稀の圧力を感じてしまつてはいくら敵意がなくても危ないかもしれない。それに幸奈はコントロールが出来るとはとても思えない。

風圧の中心には震える幸奈が居た。その傍に穂琥が居る。まるで台風のように中心部だけ何もない、静寂とした空間だつた。そ

「」に穂琥は呆然と立っていた。

「し、薪・・・幸奈さんが・・・！」

「ああ、正直驚いた。幸奈！もう大丈夫だからー落ち着いて・・・」

「し、しん・・・くん・・・」

幸奈は震えた声で呼応する。

「もう、平氣だから。落ち着いて。ゆっくりと・・・そう、力を緩めて」

薪の呼吸に合わせて幸奈はゆっくりと眞稀を下げいく。今まで一度たりとも眞稀を使用した事がない者のがいきなりこんなに大きな眞稀を爆発させてしまつては死に至る事だつてありつる。薪は自分の眞稀と同調させながらゆっくりと幸奈の眞稀を下げていく。

やっとの事で収まつた眞稀は先ほどの大きさなどまるで無かつた様に静寂と化し消え去つた。そして当の幸奈は氣を失つてしまつていた。

「やつてくれるねー！」

圭が叫び声を上げる。薪が鋭くそちらを睨む。後ろでゆっくりと立ち上がつた瞑を見て薪は眉を寄せる。全くだ。戦つてゐるときからわかつっていた。あの瞑は全く本氣で戦つていいない。それで居て薪と拮抗して剣を交えた。元が死神であるのならそれは理解できるが、何が理解できないかつて、『主』と呼ばれるものに付き従つているといつこと。

「こつまで時間をかけているんだ？」

突然空気を割るようにして声を張ったのは鼓斗だった。圭が口惜しそうに状況を説明して少し不機嫌そうに顔をしかめた。

「瞑。お前が居ながら何でこんな事態になつた？」

「・・・・・」

「応える氣など無いか」

呆れたように鼓斗は瞑から薪へと目を移す。それから強烈な眞稀が進る。穂琥はそれに軽く気圧されたが薪は微動だにしなかつた。あの程度の眞稀では気圧されるわけがないのだ。なんたつてあの巧技の眞稀を幼少期に何度も受け続けているのだから。それよりも慣れない死神の力のほうが今の薪にとつては堪える。

「ひとまず、そこの女を始末させてもいい？」

鼓斗は素早く刀を用意すると薪に飛び掛る。

「へえ。幸奈をやるつて言つているのにオレに突っ込んでくるのか？」

鼓斗の刀を簡単に受け流しながら薪が飄々と言つ。鼓斗は面倒くさそうな表情を浮かべながらもふんと鼻を鳴らして言つ。

「よく言つた。結局、お前を鎮圧しなければあの女に手など届かないだろ？」

「へえ。わかつてゐるねえ」

薪のその余裕の態度が気に入らないのか、鼓斗はさらに刀を振り回す。しかし、それを意図も簡単に受け流すので鼓斗はさらに手に力

を籠めていた。

ドン。鼓斗が勢いよく前のめりに倒れたのは薪が切りかからうとしたところだつた。薪は驚いて刀を止めた。鼓斗が素早く起き上がりて怒号を上げた。

「瞑ー何をしやがるーー事と場合によつてはお前でもただでは済まんぞ！」

「黙れ、餓鬼風情が」

放つたその言葉に鼓斗だけでなく薪も竦む。

「そんな荒れた力で『スウェーラ』が斬れるか」

低く重たいその声は耳を解して心臓を貫く。無駄に意氣が上がつてしまつほどどの重圧に薪は歯噛みする。

「さて。一対一か。キツイなあ・・・・」

「居るだろ？そこの、眞砲祇が」

薪の言葉に鼓斗が笑いながら言つ。穂琥を指差して。

「残念だがあいつは戦闘要員じゃないんでね。相当なことが無い限り先頭にはださねえよ」

薪の言葉に鼓斗はにやりと笑う。それから躊躇無く穂琥へ斬りかかる。薪は穂琥と鼓斗の合間に入つて刀を受け止める。その後、薪の右脇腹に激痛が走つた。鼓斗を勢いで投げ飛ばしその激痛の原因を弾き飛ばす。

田の前で一体何が起きたのか、一瞬過ぎてわからない。鼓斗が來たかと思ったら薪が来て、薪が來たかと思ったら瞑が来て。それから田の前には誰も居なくなつた。

「薪！？ 平氣！？」

「大丈夫だ、とりあえずここは引くぞ！」

「あ、う、うん！」

「させるわけ無いだろ？！」

鼓斗が鋭く刀を振り上げる。薪はそれを上手いこと避けて穂琥のほうへ走る。穂琥と自分との間に瞑が滑り込む。あまりに突然の乱入に勢いが止まらず瞑の懷に突っ込んでしまつた。

本当に短い時間だつたはずが酷く長い時間に感じられた。そつと頭の後ろに手が回されて瞑が薪の耳元に口を近づけて小さく囁く。その言葉を聞いて薪は仰天する。そして瞑は薪を地面に叩きつける。

その時間は現実にしてみればきっと一秒も無かつたかもしない。それでも薪にとつては何十秒にも、何分にも感じていた。そして瞑の言つたその言葉の意味を理解できずに地面に叩きつけられても混乱が解けず、直ぐに動くことを忘れた。

「幸奈さん！？」

穂琥の叫び声で薪ははつとして飛び上がって幸奈の倒れていたほうを見る。そこで田に映つたものに薪は全身の力が抜けた。

幸奈の身体を見事に貫通する瞑の刀。幸奈は全く以つて微動だしない。瞑はそのまま幸奈を投げるよう地面に叩きつけると踵を

返して数歩歩いて姿を消した。幸奈を仕留めたことでも圭も鼓斗も満足したらしく、同じ様に姿を消した。

すぐさま傍に駆け寄った穂琥は幸奈を抱きしめて何度も名前を呼んだ。何度も。それでも幸奈はぐつたりとして動く気配を見せない。

「幸奈さん！幸奈さん！お願いです！目を開けてください！…幸奈さんってば！」

叫ぶ穂琥の手から薪は幸奈を奪い取る。そして様子を確認していた。穂琥はただ、幸奈が真っ青な顔をしてぐつたりしているのでそれが怖くて涙が止まらなかつた。確実に匂う死の気配。それだけで穂琥は目の前が真っ暗になってしまつっていた。それに反して薪は意外に冷静に幸奈の状態を見ている。

「何してこむのよ…何とか早く治療しないと！死んじゃうよ！薪！」

「…いや、するだけ無駄だ」

「何言つているのー？諦めないでよー？まだ息はあるんでしょう？」

「…」

穂琥の言葉に薪は答えない。ただ、刺された部分に手を当てているだけ。眞稀も何も練らずに。

「薪！あんたがそんな簡単に命を諦めるような奴だつて思わなかつたよ！私がやるから！」

「いや、いいんだ。本当に」

「何が！」

「幸奈は死なない」

「だから……え？」

薪の言葉に穂琥は思考が急停止した。横たえてある幸奈の腹部、つまり瞑に刺されたところに左手を添えてただ黙つてみている。穂琥はそんな薪に不安な目を送った。そうして薪の状態を少し確認してはたと氣づく。左手で幸奈の腹部を抑えているのはわかる。では、右手は？膝を立てているために右手がどうなっているのか見えない。それでも穂琥は何故かそれに嫌な予感しなくて薪に尋ねる。

「薪……？右手、どうしたの？」

「え？別に。怪我はしていないぞ」

「そう……なの？」

薪の言葉にきつと偽りは無い。それでも穂琥の不安は消えない。何か嫌な予感がする。それがどんどん膨らんでいくのはきつと直感と呼べるものなのだろう。

「薪、右手……見せて」

「何だよ。別に怪我なんてしていないうちに言つていいじゃないか」

「見せて」

穂琥は無理やり薪の腕を引つ張った。思いの他、薪の腕は簡単に前に出てきた。そして出てきた薪の手を見て驚いて思わずその手を離してしまった。

「ま、真っ赤ジヤン……！掌が……血まみれだよ？！」

「別に怪我じゃないって……」

掌を見せて薪が言つ。確かにその掌に怪我の類は見えない。しかし、穂琥は一瞬でそれが何であるか理解した。

「薪！わき腹！！」

幸奈を跨いで薪の右に腰を下ろす。明らかに薪は嫌そうな顔をしていたが抵抗することは無かつた。

「ああっ・・・!? 何これ?！」

薪の右脇腹は酷いまでに抉られていた。先ほど。穂琥の刃のままで一瞬にて行われた刀の交差の中で腰によつて引き裂かれた部分だつた。

「酷いよ、これ！？ 何とかして治さないと！」

「いや、今はいい。それより幸奈を運ぼう」

「え？！ そんな事言つている場合じや・・・」

「それこそ、そんな事言つている場合じやない。オレはまだ平氣だが、このままだと確実に幸奈は死ぬ。いいのか、それでも」

薪の脅すような強い目に穂琥は無言で首を振つた。それしか出来なかつた。よしと言つて薪は幸奈をおぶつて立ち上がつた。

## 第十一話 認められた者

幸奈を抱えたまま薪は家の中に入る。そんな薪を見て穂琥は不安を隠せずにいた。あの薪が、酷い汗を掻いている。それはでも、当然のことだ。わき腹が酷く抉られ、その状況で自分と大差ない女性を抱えてここまで運んできたのだから。途中、穂琥が代わると言つたが、編に刺激を与えてしまえば死んでしまうからと交代を許さなかつた。

幸奈を下ろしてから薪はため息をついて穂琥に向う。

「さて。ここにくればひとまず眞稀が保護をしてくれるから直ぐに死ぬようなことは無い。そこで、穂琥。悪いけど脇腹の治療を頼めるかな」

「あ、当たり前じゃない！」

穂琥は急いで袖をまくつて薪の服を捲り上げる。その現状に絶句する。今までに見たことのない刀傷。まるで何かに食いちぎられたような酷い荒れ方。それだけじゃない。酷いところでは軽い壊死が始まっている。本来だったら死んでいてもおかしくない。

「大丈夫か？」

傷の状態を見て絶句した穂琥に心配そうに声を掛けた薪に穂琥は逆に怒号を上げる。

「それはこっちの台詞！何考へているの！？」「んなので・・・！」

「普通、死ぬって！？」

「ま。オレ普通じゃないし。向こうもね

「え？」

薪の言つた言葉が理解できなつたけれど、それがどうこうとか聞いている暇があつたらさつさと治療をするべきだ。

穂琥はすつと深呼吸する。まず、薪の状態の確認。

血は薪自身が自分の眞稀で止めているから支障は無い。しかし、そのぶん体力を消耗していくことになるので早く何とかしなくてはいけない。そんな眞稀で無理に止血をしていることもあります、眞稀の流れの状態もあまりよくない。こういつた怪我に効く治療は確か、城の書庫で見た記憶がある。それが今、有効かはわからない。未だかつて例を見ないものだから。それでもそれを試さなければ薪の腹部はどんどん壊死してしまつ。眞匏祇にとつて壊死とはイロー ル、消失ではない。上手いこと治癒することが出来れば再生だって容易なことだ。

「薪・・・。その、結構辛いかもしれないけど・・・その・・・」  
「いいよ。全てお前に任せる。穂琥が最善だと思ひふとすればいい」

言い淀んだ穂琥に薪はそつと言つ。その言葉の優しさが嬉しくて。そして何より、任せるといつた薪からの信頼がたまらなく嬉しかつた。それに何より、心配などする必要すらなかつた。だつて・・・。

相手は薪だもの

穂琥は意識を集中させてから眞稀を手に籠める。そしてそつとそれを薪の患部に当てる。本来ならばここで耐え難い激痛が走り、呻き声の一つでも上げるものが部屋の中はいたつて静かだつた。

今回、穂琥が行つた治療には傷の具合によって変わるが、比較的時間のかかるものだつた。まして、今のは普通よりも時間がかかつた。故に数分間の治療となる。本来ならば、数十秒で終わるものだが。

「は、はい・・・お、終わった・・・」

過度な集中と大きな眞稀を一気に消費するところで穂琥はどうと疲れて後ろに倒れた。

「大丈夫か？ それにしてもまあ、任せるとは言つたが的確な治療だつたなあ。やっぱ見る由はあるな」

「えへへ・・・。一応ね・・・少しば強したんだよ」

薪の役に少しでも立てるなら・・・

穂琥はへらへらと照れ笑いしながら起き上がつた。

「平氣？ 辛くなかった？」

「何で？」

「だつて・・・この術、相当辛いって・・・。でも薪は呻き声一つ上げないでむしろ涼しい顔していたから」

「ああ、本来だったら苦渋の表情をしたかつたけど頑張っている穂琥の意識の妨げになるからな、抑えた」

薪はそれを簡単に言つて退けるので穂琥は驚く。そしてやっぱりこういつこりでも薪には適わないと実感する。

「でも、次からはいいよ。痛いときは痛いって言つて」

「おひ、わかつた

れへと、やう言つて薪は立ち上がりて幸奈の元に腰を下ろす。

「ゆ、幸奈さん……平氣なの……？こんな重症をそのまま長いこと放置するなんて……」

「支障は無いぜ。」これは時間の問題、じやないから

「え？」

「まま、氣にするな。とにかく幸奈は平氣だ。そんなわけでお前はとりあえずその返り血やら泥やらシャワーで落として來い。その間にオレが何とかしておくから」

「え・・・あ・・・はい・・・」

薪に言われるままシャワーに入る。一体、幸奈はどうなつてしまつのか、穂琥にはさっぱりわからない。それでも薪が大丈夫だといったのだからきっと大丈夫なのだろう。

しつこい土埃や泥に悪戦苦闘してやつと落としきり、風呂場から出て着替えを済ませる。髪を乾かしている間にふと気配を感じて振り向いて驚いた。

「き、綺邑さん！？」

「聞きたい事がある」

短く端的に綺邑は言い放つ。何かと穂琥が聞くと綺邑は瞑についで尋ねてきた。何故、瞑を眞砲祇ではないと判断したのか。

「まだ、完全なわけじゃないけど……桃眼で視た時眞稀が全く無かつたから……」

それを言つてからふと思つた。薪の眞稀もきっと視る事ができないと。

「ほひ。 それだけか?」

綺邑の続いての質問。穂琥はそれに少し戸惑つた。応えるべきか否か。

「それだけなら良い」

綺邑はそう言つて立ち去りうつした。穂琥は違うと否定の言葉を述べて綺邑の足を止めた。

「もう一つ・・・霧園気が・・・似ていたの・・・貴女に・・・」

穂琥の言つた言葉は脱衣所の部屋に木靈した。綺邑は冷たく見下ろしてくる。その目が薪より冷たいつたらありやしない。

綺邑はその鋭い目をふつと伏せてからそとかとだけ言つて姿を消した。穂琥は呆然としながらその様子を見ていた。それから思い立つたように髪を乾かし始めた。

部屋のほうで何かの破壊音が聞こえたのは髪が乾いた頃だつた。まだ全快していな薪に敵襲なんて来たら溜まつたものではない。穂琥は慌てて脱衣所を飛び出してその足を止めた。

「「」めんつて！悪かつたつて！本当に！…うわつ！？」

薪の叫び声が聞こえる。穂琥はただ固まつていた。

見れば。敵でもなんでもない。でも味方とも言いにくい。それが薪にありとあらゆる足技を繰り出している。

「うわいほつじー？！ちょっと？！マジ止めて？！」めんつて…何度も謝つて…いるじやん？！「わああ…！」

薪が押されているその映像を見て穂琥は長い目でその様子を見ていた。綺邑が回し蹴りやら踵落しやらひねり蹴りやらとにかく攻撃しまくっている。それを避ける薪の表情は最早必死。見ていて哀れと思うほどに。その薪の見事な圧され具合を見て綺邑が強いということを改めて実感したような穂琥だった。

呑気に入っていたのはそれまでで家のあちこちが破壊されていくのを見て、さりに薪の必死さ具合を見て気づく。いや、敵じゃないにしても感知していない薪にあれほどどの動きをさせては傷口が開いてまた大変なことになってしまつ。

「止めて！」

綺邑と薪の間に入つて諸手を広げる。寸でのところで綺邑の蹴りは止まる。あと数ミリ遅かつたら穂琥に当たつていただろう。そしてその圧力を感じて穂琥は一瞬だけめまいを覚えたほどだった。

「薪は今、完全じゃないの…！」

そう言って綺邑を睨んだ、睨んだ穂琥の目は一瞬にして迷いに変わる。綺邑のあまりに鋭い目が穂琥の心を折りにかかる。しかし穂琥はここでは折れていけないと必死になつて綺邑に抗議する。

「ふん」

興味がうせたように綺邑は踵を返したので穂琥はほつとして座り込んだ。

「悪いな、穂琥。でもまあ、大丈夫だよ。避けなきやそりや当たるけど、綺邑だつて本気じやないんだし。それに傷の方だつてそこまで無理にはさせてないよ」

笑いながら言う薪に軽くイラつき覚えながらも仕方なくため息をつく。

「じゃあ、幸奈を頼んだよ」

「・・・」

綺邑の返事は無い。いつの間にか綺邑は幸奈を抱えていた。抱える、といつても別に抱ぐとか抱きかかるとかそう言つたわけではなく、宙に幸奈がひとりでに浮いているように見えるだけだが。そうして綺邑はすっと姿を消してしまつのだつた。

幸奈が大丈夫なのか尋ねると薪は小さく笑いながら何とかなると応えたので今度は薪の傷のほうを確かめることにした。

「大丈夫だつて。そもそも綺邑をあんなふうに怒らせたのはオレ自身だしな」

薪はどうか可笑しそうに笑つて立ち上がつた。

「いやね。あいつにしては随分と珍しい事をしたからそれについて言い過ぎたら怒られた」

まるで子供もみたに薪がいつので穂琥はビンが拍子抜けした。

「つていうか、薪がそんな風に突っ込むくらい綺邑さんが珍しいことしたの？」

穂琥の質問に薪は少し悩んだ表情を浮かべた。なんだ、それは。私には言いたくないことか、と穂琥は内心で腹が立っていた。

「ま、いいだろ？一言つたら言つたで言つてしまつたんだからいいだろ？！」

薪は何か納得したように頷いてから穂琥の様子を窺つた。

「え？私の怪我……？そういうえば圭と戦つたときに随分と怪我したのに……今治つているや……？」

「治してくれたんだよね、綺邑が」

薪はどこか楽しそうに言つた。綺邑が自分の怪我を治してくれたことに驚きを感じていた。いや、それよりも死者を誘つことを生業としている死神が人を、眞貌祇を癒すことが出来るのだろうか？

「ま、アイツも『特殊』だからな」

薪自身もそう言つた事までは流石にわからぬようだった。

「まあ、そんなわけだ。じゃ、少し休養を取つたらやりますか

「何を？」

「桃眼の完全な扱い方、といつておこいつかな。オレだってそれに関しては詳しいわけじゃないけど、やらないよりはましだろ？」「わかった

薪は穂琥の全快しだい、直ぐにやるといつてきただので穂琥は首をかしげた。傷なら綺邑が治してくれた。だつたら平氣ではないかと。しかし薪はそれを否定した。綺邑が治したのは表面的な傷だけ。まだ、内側、つまり眞稀のほうの回復は出来ていない。眞匏祇は体内、体外全て眞稀にて修復する。そしてその眞稀が枯渴したときは傷の直りが遅くなる。さらには疲労度も溜まる一方だ。そこで綺邑が傷を治してくれたおかげで傷のほうに眞稀を回さなくてすむので眞稀の回復だけを待てば通常の状態に戻ることが出来るということ。

では薪は？薪は綺邑に治してもらつたのだろうか。

「いや、オレは治してもらつてないよ。オレは嫌われているからな」。穂琥は綺邑に気に入られてんだよ。だからそれについて突っ込んでらさつきみたいに蹴り殺されそうになつたんだけど

薪の言葉に意外性を感じながらも穂琥は納得せざるを得なかつた。

薪は軽く手を上げて部屋で休むといって穂琥に背を向けた。あちこちが破損した家を治しながら薪は二階へと上がつていった。

## 第十一話 開眼を覚めさせて

薪の笑う声が聞こえる。

「何言つてんだよ。穂琥は穂琥だらう。もう強いんだし、自分で何とかできるだらう。オレは忙しいし、もう自分の命は自分で護ればいいさ」

目の前の薪はそうやって笑う。にこやかにとつても晴れた笑顔で。それとは反対に穂琥は悲痛の表情を浮かべる。どんどん歩き去つていく薪に手を伸ばして。

待つて。お願いだから待つて。見捨てないで、薪。お願い、薪・  
薪。

「薪！」「薪！」

「はー? ちょっとー? 穂琥? !」

大声を出して飛び起きた穂琥はしばらく呆然としていた。目の前に酷く驚いた薪の顔があつた。穂琥は思わず薪に抱きついた。

驚いた薪は何とかして穂琥を引き剥がす。

「もう朝だし、隣させていたみたいだから起こしてみようとしたんだけど起きる気配なかつたから諦めようとしたら飛び起きてきたら驚いたよ」

「あ、『メン……夢だ……』」

「オレの名前を絶叫に近い形で呼ぶ夢ってどんなんだよ……」

いつものように呆れたような口調で言つたがどうやら今回はそんな呑気な話ではないらしく、穂琥が尋常ではないほど落ち込んだので薪は少し焦つた。

「薪は……さ」

穂琥が低いトーンで言つ。

「私のこと……見捨てぬ?」

突拍子も無い穂琥の質問。いつもの薪だつたら「は?」と応えたかもしれないけれど今の穂琥を相手にそんな反応、するわけも無かつた。穂琥の傍まで歩み寄つて穂琥の前に膝を落として穂琥と目線の高さを同じにした。

「あるわけないだろ?、そんな事」

「お前を見捨てるなんてオレの命を捨てるより有り得ない。何があつてもお前を見捨てるようなことはしない。大丈夫、安心しろ」

優しくそつと、頭を撫でながら薪が言つてくれた。それが嬉しくて穂琥はそつと頷いた。

薪はそんな穂琥を確認して立ち上ると俯いている穂琥には見えない、見せないようにして微笑む。穂琥を大切に思う家族として優しく暖かな笑みを浮かべるのだった。

「落ち着いたら降りて来い。朝飯食つて落ち着いたら特訓だから」「うん・・・。・・・・・特訓んんんん！？」

「当たり前だろー」

朝餉の支度をしながら薪が言つ。穂琥は必死でそれに食いつく。完全ではない以上、しなくてはいけないということはわかるけれど、桃眼というものは療蔚の技だ。これからの戦いに必要性は存在しない、と穂琥は思うのだった。

「なんだ、お前。桃眼が『治すだけ』とでも言いたいのか?」

「違つね。医療、療蔚の術である」と代わつはないにナビ。でも考  
えても見ひよ?

薪の例え話に穂琥は絶句した。

とある一つの病院で起きたと仮定する酷い事件。あくまで過程で  
あり事実ではない。

一人のドクターがいた。そのドクターが抱える患者は一日に30人を看るとする。その30人は健康診断で来ただけのいたつて健康な人であつたとする。そしてそのドクターがその患者全員に嘘の診断を渡す。

『癌になつています』

あなた患者ばかりですか？

『それを治す手立てはありますか?』

ドクターが応える。

『有りますよ。この薬を毎日飲んでください』

手渡した薬を嬉しそうにもらつていく患者たち。それはドクターが今までに勝ち取つてきた信頼の証。そして薬を持ち帰つた患者たちはその田のうちに全員死んでしまつた。原因は癌の特効薬としてもらつた薬。その薬は特効薬でもなんでもなくてただの毒薬。それを飲めば瞬時に死に至る。

「な? 医者の力って結構怖いんだぜ?」

「いや! あなたのその思考のほうが怖い! ! !」

苦情を言つ穂琥に涼しい顔をして受け流す薪。要するに、『医療』といふのは『ミス』というだけで人を死に追いや殺してしまひ。それほど恐ひしいものがある。

血が詰まつてしまつた病にかかつたらそれを治すために血が流れやすいように眞稀を送つてやるとする。しかしだ。血が詰まつていで健常なその血管にその流れやすい処置を行えばその血流は急激なものとなつてきつと死に至るかもしれない。

眞匏祇の領域になつてくれれば神経経路を自在に操る事だつて桃眼であれば容易くなつてくるだろう。そんな神経経路を切断してしまえばどんなに強情なものでもたつことすらできなくなつてしまひ。そうして立てなくなつてしまつた相手は最早翼を &nbsp; # 25 445 ; がれて地を這う虫けら同然。後は眞稀を流し込んで血液の

流れ逆流させたり、そもそも臓器器官の経路を断ち切つてしまえば  
直に魂石だつて割れて・・・

「だあああ！！！わかった！！わかった！！もういい！わかったか  
らー頑張つて習得しますからーーー！」

薪の言葉を遮つて穂琥は耳を塞いで叫ぶ。薪はわかればよろしくと  
いしてさつさと食器を片付ける。

「とはいっても今のは例えだぞ？」

「わかつてゐるわい！それを本氣でやれつて言つなら私は薪と家族の  
縁を切るわー！」

「まあ、そうわめくな。さて、移動するぞ」

薪は穂琥を椅子から強制的に立ち上がらせるとそそくさと歩き始める。仕方なく穂琥はその後に続くのだった。

眞匏祇の世界と違つて地球といふ世界は酷く狭い。そして柔らかく脆い。そんなところで本氣の修行が出来るわけも無く。そこで薪はこゝ空間を作り出したのでした。

「薪つて本当に何でもできるのね・・・」

「そんなわけ無いだろ？。儒楠だつて出来るさ。上級クラスになればこれくらい出来る」

薪は簡単そうに言つて扉を開く。その先は驚愕するほどの広さ。地面は土。岩場のようにゴソゴソとした場所がたくさんある。もし人がいれば簡単に隠れる場所を作ることができそうだった。

「ここで修行を・・・え、でもどうやってするの？薪にぶつける

わけには行かないでしょ？」

「当たり前だろ？。いくらオレでも死ぬよ」

薪は呆れたように笑つた。薪が幼少期に造つたオリジナルの修行法。それを今の自分なりに改良したものを穂琥にやつてみると云う。

「つまりお前は実験台だ。頑張れ」「え・・・・」

薪のあつさつとした言葉に返すことも出来ずに穂琥は固まる。誰にも試したことの無い薪だけの習得方。故に、他のものでもそれが使えるかは疑問なところだった。

見えない敵を討つ為にはどうしたらいいか。一つは薪のような感知能力の高いものが周囲を警戒しながら相手を見つける。ただ、これでは常に気配を感じし続けなければならないために集中力を相当要する。それに相手が極度に眞稀を抑えてしまえば見つけることはまず出来ない。そこで、桃眼。桃眼は『目』の力。故に『見る』力。隠れ潜んだ相手を視覚的に捉えることが出来る。

「簡単に言えばサーモグラフィか？」  
「ほつ・・・・」

薪の例えに納得する穂琥。

「ま、ひとまずは眞稀の感覚になれていー」。「はい、開眼」「は、はい・・・・」

薪に言われるままに開眼する。ぱわっとした煙のよつた靄のよつた、そんな世界が目の前に広がる。

「少し曇っているなあ・・・。さて、どうするか」

「どうやら今の薪の発言からこの霧がかかっている状態は通常の状態ではないらしいことが把握できた。

「もう少し眞稀を上げて・・・。そうそう、その辺でストップ。維持して・・・」

薪のアドバイスを受けながら桃眼の修行に入った穂琥だった。

何とか目が大分桃眼の眞稀に慣れ始めた頃、薪が次の段階へ移行することを伝えた。

「今からダミー人形を2体作るからそれを時間内に潰せ。制限時間は20分」

「え？ 20分？！ そんなに？！ たつた2体なのに？」

「言つたな、『たつた』と。よし、頑張れ」

薪が手を上げて穂琥を応援する。その態度に妙な焦りを覚えた穂琥はちなみに時間内にもし潰すことができなかつたらと尋ねると薪はこれまたさわやかな笑顔で答えた。

### 「罰ゲーム」

薪の語尾に「が付いただけではなく、ウインクまでしている以上、時間内に潰せなかつたらきつと穂琥が潰される。穂琥は普通じやないほど力を入れてダミー検索の用意をした。

条件は二つ。一つ。時間内に2体のダミーを見つけて潰すこと。

一つ、その場から一步も動かないこと。これだけ守れば後は何をしても好きにしていいと言つこと。薪のスタートの合図でいつの間に隠したか知れないダミーを捜すこととなつた。

「うわっ。見つけにくそう……」

ダミー自体に宿る眞稀は薪の組み込んだ眞稀で薪、そのもの。だから見つけることは結構簡単かと思っていたがそうもいかない。隠れるのがうまいわけだし、そもそも陰に隠れて見えないわけだから桃眼の力を引き出さなければきっと見つけることは出来ない。

そんな折に、視界の隅に妙な気配を感じた。

「アレは……？」  
「お、見つけたか」  
「いや、わからないけど……」

薪に言われて眞稀を放つ。するとダミーが小さく爆発した。あと一体ということで必死になつて探す穂琥。しかし何処をどう見てもそれらしいかけない。本当に隠しているのだろうか。

目が激しく痛み始める。少しだが涙も出てきそうだった。それでも穂琥は目を凝らす。ぐつと力を入れて揺らぐ気配を察知する。きっとそれは薪の隠したものう一体のダミー。穂琥は目がつぶれそうなほど痛いのを我慢して眞稀を放つてダミーを破壊する。その途端、穂琥は膝の力が抜けて前に倒れた。

「おつと」

薪がそれを受け止めて静かに座らせる。

「限界だな。慣れない開眼を続ければ身体に支障をきたしてしまつ。  
少し休憩だな」

穂琥は小さくはいとだけ答えて近くにある机に背を預けてはつとする。

薪つてこんなに優しいか？！

そんな疑問が浮かんでから薪を凝視したために薪から冷たい視線が帰つてきた。それを軽く避けながら穂琥は必死で考えた。薪は一体何を考えているのだろうか。こんなにやさしいのは何か裏でもあるのだろうか？そう考えたところで所詮は穂琥の頭。薪とは違う。わかるわけも無く。体は休んだが、結局のところ頭が休まない状態で休憩時間は終わってしまうのだった。

## 第十二話 修行に関する千思万考

眞稀を練ることに集中できず、薪にどやされる。休憩をやっていんだからしつかりしむと薪に叱責を食いつ。

薪の次の指令は先ほど同じダミー潰し。ただし今回は2体ではなく5体。穂琥は一瞬だけ文句を言つたが完全にスルーされたため諦める。

「一体田は案外すんなり壊すことに成功した。ただ、あちこちに漂うのは薪の眞稀。何処にあるダミーがいるのかはよくわかりにくい。よって、これだと思つても一般的の眞砲祇の可能性も秘めている。しかし、ここにいるのはダミーとそれ以外の眞稀。

「おつ…」

とりあえずだから勘で眞稀を放つ。見事に「一体田のダミーを破壊する。しかし、それをカウントした薪からキツイ一言が。

「次勘で打つたらオレがお前を打つぞ」

「は、はい・・・申し訳御座いません・・・」

謝罪を全力で意識を集中させる穂琥だった。

残り時間あと半分を宣告されて穂琥はかなり焦った。まだ、二体しか破壊できていない。あと二体もいるところだ。

ダメだ!このままじゃ大変だ!殺される!薪に!確実にやられる  
!!

穂琥は自分に妙な暗示をかけるように頭の中でそう呟く。これも申し薪が聞くことが出来たらきっと呆れるだろう。

オレは鬼か

急激に穂琥の集中力と眞稀が上がったので薪は首をかしげた。ここまで穂琥が眞稀を上げることが出来るのだろうか。

何とか集中して三体目のダミーを破壊する。それからさらにダミーらしきものを発見して穂琥は眞稀を放つた。すると見事にダミーが破壊されるのを確認した。よしそ、ドガツツポーズを決めようとした瞬間、後頭部に激痛が走った。

「ぬふあ！？」

「勘で打つなど言つただろづが」

薪の見事などび蹴りを喰らつた穂琥だった。

「す、すいません・・・」

言葉に出したり表情に出したりしていらないのに薪は何故勘で打つたとわかるんでしょうかね、そんな疑問を抱きながらも穂琥は最後の一體を探すことに専念した。

「はーい、残り一分〜」

やる気があまり感じられない薪の言葉にむつしながらも穂琥は必死で集中力を高める。

ある程度のめぼしをつけてそのダニーがいそうな場所を凝視しているといつのに全く見つけることができないのは一体何故だろうか。穂琥は必死に考える。相手は知らない眞稀じやない。薪の眞稀だ。感知しやすいはずなのに。そんな事を考えているとちらりと視界の隅で空間の動きを観た。

穂琥は合点がいった。どうりで日星をつけて見つけることが出来ないわけだ。相手は移動をしていたのだ。それがわかれれば簡単な話だ。その移動して出来た空間のゆがみを感じてそれを追えれば絶対に捉えることが出来るのだから。今まで気づかなかつたことが不思議なくらいに。

「はい、残り2秒。ギリギリだつたな」

ダニーを破壊してから薪が言つたので穂琥はがっくりと腰を落とした。

「ま、よく出来たよ。『苦勞さん。次はもっとレベル高いから頑張れよ。つてなわけで休憩な」

「え・・・あ・・・・はい」

薪のその甘い言葉の裏には一体何が隠されているのだろうか。一瞬、儒楠が化けているのかと思ったが桃眼が療蔚の技である以上、儒楠が教えることなどできるわけが無い。裏の読めない薪の優しい行動がどこか怖いような・・・。

「で? 何?」  
「え?」

突然薪が尋ねてきたので穂琥は呆然とした表情を浮かべた。岩に腰

を下ろして頬杖を付いている薪の表情はどこか面倒くさを感じさせた。

「さつきから睨むような、食い入るような。よくわからんけど」「あ・・・いや・・・ちょっと気になつて」

穂琥は少し俯きながら応える。薪に今まで思つていたことを言うのもどこか申し訳ないような気もした。せつかく優しく接してくれているのにそんな事を言つては酷いではないか。

「馬鹿の癖に頭が休まない状況を作るな。集中力が大事なんだかられ」

その薪の一言にぶつーんと来た穂琥は何処が優しいだ、絶対に嘘だ！と頭の中で怒号を上げながら薪に抗議をスタートする。

「うぬさいな！馬鹿つて！ビーセ私は薪みたいにちょおつと違うことして相手を陥れるようなマネできませんものねえ～」

「・・・？何を言つてんだ？」

「修行つて言つたら薪、全然優しくないじやん！それなのに今回優しいからさーなんか調子狂つちゃつて頑張んなきゃ～みたいに思つてさあ？」

罵倒の如く言い切つた穂琥の言葉に薪は案外ぽかんとした表情をしていた。あまりのその表情に穂琥は何、と尋ねると薪は突然何かが破裂したように笑い出した。

「つふ、アハハハハ！くく・・・ふふ・・・アハハハハ！」

途中で笑いをこらえようとしているのは見て取れたがどうにも耐え

ることが出来ないようで噴出してしまっていた。突然そんな風に薪が笑い出したので驚いて穂琥は目を丸くした。薪がこんなに笑つているのを見た事がない。

「何、お前……ずっとそれを考えていたの？」

薪の笑いを堪えたその質問に無言のまま頷くと薪はさりげに噴出して笑い始める。

「ブフツ・・・・・・ぐくく・・・・・ぐふつ・・・・・フフフ・・・アハハハ！」

あまりに薪が笑うので穂琥はだんだん赤面してきた。薪がこんなにも取り乱して笑うところなんて見た事ない！何だよ、これ！レアだな、これ！ムービーにでも撮つておくか！そんな風に思いながらも穂琥は目の前の薪の状態にただ恥じらいを感じながら不貞腐れた表情をするので精一杯だった。

「いや、ゴメン・・・・・くくふ・・・・ふふ・・・・は〜・・・・。ククク・・・・・」

落ち着こうとしているのか笑おうとしているのかわからない。ぐどいよつだけどもう一度。こんな薪見た事無い。

「さて、次行こうか」

「ちょおおー？質問！…私の質問は？！」

あまりにさうと薪が次に行くことを言い始めたので穂琥は薪に勢いよく突っ込む。

「ビ——でも、いいし。そんな事」

薪の表情にはまだ笑いが残つてゐる状態でそんな事を言ひ。いつも薪ではないと穂琥は猛抗議をする。薪は仕方無さそうになんとなくだ、そんな風にやつてゐるだけだ、と応えた。

「いや、答えじゃないからね……それ……」

穂琥の言葉に薪はまだまだ笑みの残つた顔で馬鹿だから、と付け足す。ふつんつと切れる穂琥の頭の中の何かの糸。

「なんじゃいそらあああ！？偽もんだ！偽もんだ！？薪はこなんじやないしい！偽！本物どこだー！」

「いや、ここにいるし」

「嘘だ～！偽だ！そんな笑わないもん！？」

穂琥のその言葉に薪はまた噴出して笑い始める。本当に一体薪に何があつたのか知りたい穂琥だった。

「くわくわく……本当に馬鹿な

薪はまだ笑い続ける。一体何のツボにはまつてしまつたのだらう。

「休憩だつて簡単にくれるじゃん！」

「当たり前だらう？今までのとは全く違うんだから。くく……。桃眼だぜ？休憩もなしにやつたらお前、死ぬぞ。それでもいいならこつも通りやるけど」

「いや、すいません……」

「はー、次やるよ」

なんとなく薪には誤魔化された様な氣もしたけれど仕方なく穂琥は集中することに決めた。

次のステップは今まで薪の眞稀だけだったのを一般的の眞稀を含めた中から薪の眞稀のみを探して打つこと。制限時間は10分。

「ま、もし間違えた場合は・・・」

「言われなくてもわかります・・・」

「よろしい」

そんな会話をしながらスタートの合図。穂琥は一気に開眼する。するとその目に映ったのは信じられない数の眞稀たち。これほどの眞稀を薪は一体どうやって集めたのか疑問だが、それはさておき、所謂この状況は街中と同じことだ。この中から的確に相手を探し出さなければならぬといふこと。今までと違つてあちこちで眞稀が動いているせいで空間のゆがみだけを探せばいいなんてものではない。歪み放題だから。

苦戦しているな・・・。穂琥ならできると思つたんだけどなあ

薪は穂琥をみてそんな事を思つていた。全然わからないと途方にくられ始めてしまったので薪は仕方なくヒントを尋ねる。

「一つ!」「くら桃眼といえど、觀ようとするな。感じ取れ」

「え? あ、はい」

穂琥としては思わず薪からのヒントに困惑。しかし、それを何か素直に受け止めたところで見ようとしなくて感じ取るにしても全くわからない。

「ふたつ。桃眼に頼り切るな」

「え？あ、自分の感覚も・・・？」

「やつこつ」と

腕を組んで立つ薪の姿を軽く見てから穂琥は首を傾げる。一体何故こんなに優しくしてくれるのだろうか。それほど桃眼という技が凄いのだろうか。

とにかく、今はそんな薪の不可解な親切を真に受けでしつかりと集中することにした。ふと思つたが、自分の間隔も頼りにしろと言ふことは決して『観る』だけが桃眼の力ではないということかと思ふ。当たる。感じ取れといった薪の言葉を理解して穂琥はその瞳を閉じる。そしてふと視界の隅にうごめく光の束を垣間見る。そこでようやく気づく。観ようとするからダメなんだ。相手は隠れ潜んでしまっているのだから『観よう』としても観られるわけもなかつたのだ。

「こJの感覚は薪の眞稀だ！」

穂琥は急いで眞稀を放つて見事にダミーを破壊した。それと同時に大きなため息をついて膝を突いて息を切らせる。そして発つている薪に残りの時間を尋ねる。

「いや、気にしなくていいよ」

薪はそう言つてこJと笑う。きつと時間内に収まつたのだから。穂琥はほつとして地面に大の字に倒れる。

安心したような穂琥の表情を横目で見ながら薪は時間を確認する。

ま、初めてだし多少の時間オーバーは許してやるか

そんな事を思いながら小さく笑つ。

「上出来、かな」

「え？ 私上出来！？」

思わず出た声に穂琥が鋭く反応したのでとりあえずそれを肯定した。それを聞いた穂琥がひたすら嬉しそうに騒いでいるので薪はだんだんバカラしく思えてきた。

「図に乗るな」

「いでの・・・」

軽く穂琥の頭を叩いて穂琥を鎮圧した薪だつた。

## 第十四話 目の前の大きな壁

次の目標は身体のどこに魂石があるのかを探し出すこと。その魂石を、破壊するにしろ治すにしろ何処に在るかわからなくては施しが無いからだ。

「え？ 魂石の位置？ みんな同じじゃないの？」

穂琥の言葉に薪は頭を抱える。そしてさも可哀想な子を見る目で見つめた薪だった。魂石は個々の自由に場所を決めて個々で守っている。薪の場合は右の脇腹辺りらしい。穂琥は自分で何処にあるか知らないが、それを薪に言つとまた叱責を喰らいそعدだったので黙つていることにした。

「とりあえずは魂石の破壊をしよう。とはいっても魂石を破壊するなんてとんでもないことはできないからオレが擬似的に魂石を眞稀で作るからそれを壊すように」

「はい」

持っていた眞稀を薪はほいつと上に放り投げた。そしてぱっと消えたその眞稀を見ながら軽く薪は言つた。

「隠したから探して壊せ。制限時間10分」

「え？！10分！？それ短・・・」

「はい、スタート」

「ふえええん！」

文句を言つ時間も無く穂琥はそれを探すことに宣する。

多少の時間はかかつたが、そこそこ簡単に見つけることが出来た。よつて次は体内にある魂石を探すこと。この広い空間から見つけることが出来たのだからきっと簡単だらうと高をくくっていた穂琥は正直心が折れた。この小さな『身体』という媒体にはその魂石と同調した眞稀が流れている。よつて見つけることが全く出来ない。あちこちに似たような塊が滞留している。全く困ったものだ。

薪は穂琥の様子を見ながらどうするべきか悩んでいた。ここまで長い時間桃眼を使っていていいものかわからない。薪は無論戦鎖であつたからこんな長い間使っていたらべばるどころか下手したら失明、あるいは死ぬかもしれない。けれど相手はある紫火の血を濃く継いだ穂琥で療蔚だ。悩む。

「痛い！」

急に穂琥が目を押さえて座り込んでしまった。薪は慌てて穂琥に駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「う、うん・・・なんとか・・・『じめんなさい』・・・」

「・・・いい、謝るな。閉眼できるか？」

「う・・・」

穂琥は辛そうに目を瞑っている。薪はそんな穂琥の目にそっと手を当てる。そして強制的に穂琥の目を開じさせる。そしてふらつといつる穂琥を抱えて平らな座れる場所へ移動する。

「『じめんなさい』・・・」

「謝るなって。無理をさせたのはオレだ。謝るのはオレの方だ、悪かった」

「そんなの……」

薪のその言葉に穂琥は続ける言葉が出なかつた。休憩しようといつた薪の言葉に頷くだけだつた。

「オレは用があるから何かあつたら声を掛けろな」

「え、あ、うん。用つて？」

「オレだつて修行くらいしないとな」

薪はそう言って穂琥から少し離れたところに腰を下ろした。それからピクリとも動かなくなつてしまつた。果たしてそれの何処が修行なのかわからないが穂琥はただその様子を見ていた。

穂琥はそつと開眼する。そして魂石の入つている『身体』へ目をやる。やはりどう見ても何もない。痕跡らしきものを発見することは全く出来ない。ため息をつく穂琥はそつと閉眼しようとして辺りが暗くなつたことに気づいた。暗いとかそういう問題ではない。視界が無くなつた。桃眼の無理のし過ぎで視界の線を切つてしまつたのかと焦つたが、突如、目の前に巨大な見たこともない大きな白い扉が表れた。

「な、な・・・・何これ！？」

仰天する穂琥だが辺りを見回してもそれしかない。この暗闇の中での扉は白く光つて浮き上がつて見えた。穂琥にとつてそれは扉といつより何処までも続く壁に見えた。

ふと、その扉の麓に人影を見つけた。

「あの・・・？」

蹲つてまるで眠っているようだった。全身を布で包み顔すらその布で見えない。しかしその姿は印象的だった。その布の上から鎖で巻かれ拘束されていた。とても小さな小柄な身体に。

「あの・・・よろしいでしょうか?」

穂琥の言葉にその身体がもぞりと動く。そして顔も上げずにそれは声を発した。

「随分と可愛らしいお嬢さんだねえ」

声からして老婆のようだった。しゃがれた声で喋るのも辛いのではないかと思えるくらいの声だった。

「ふうん。以前来た者より頭の出来が違うそうだなあ」

「んな!?私の頭が悪いとも言いたいのかー!」のかー!「のかー!」

広いこの空間で穂琥の声は木靈した。その老婆は顔が見えないからなんとも言いかたが明らかに驚いた様子を見せ、その後、とも面白そうに笑つた。

「くくく・・・我が言った『出来が違う』とはそういう意味ではないさ」

小さく微笑するその声は聞いた感じではそうでもないが何処と無く穂琥はこの老婆の心が本当に笑っているように感じた。

「我は門番。この門の番をしていく」

老婆はさつ言つた。扉だと思っていたコレは何かを繋ぐための門だつたらしい。

## 第十五話 大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかつた。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふつふつ。以前来た者もそのようなことを言つておつたなあ」「以前、さつきもそう仰つていましたけどここには他にも人がいらっしゃつているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくつくつと笑つた。「ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはつとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

こんなに大きな門は他に存在しないだらう

門番が急にそんな事を言つた。穂琥が首を傾げると門番は前回「ここに来たものがそう言つたと伝えた。

「ここは何なのですか？」  
「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の皆となつてているのかといつこと。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜つていった者の数ならしかと記憶している。

「わざかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかつた。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をして静かに笑う。

「弱いからか？護つて貰つておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」「

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持つておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を呟らせる。

「ぬしにはあるか？」

「ある・・・もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持つていると言つて潜つて行ったそうだ。

自分が持っているあるもの、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通りうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願ひです。ここから出してください。今の状況ではいくら考へても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかつたとき、再びここにお招きください」

「くつくつくつ。面白いなあ。良いだろ？、招いてやる？。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きつと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして田を開じることを促す。穂琥はそつと田を閉じた。その時脳裏にふつと何かが過ぎつて行つたような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて田を開けた。

「穂琥！」

田の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があつたのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほつとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ～・・・。誰のせいだと思つてんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなつたから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだつたから・・・焦つたよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなつてしまつたことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻つたので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだつたけれど大丈夫だということに負けて修行に移つた。

事もあるうか、あれほど出来なかつた魂石探しを意図も簡単にやつてしまつた。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあつた『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がついているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものが悩んでいるようだつた。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまつては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さつきまでとは打つて変わつてまるつきりできなくなつてしまつた穂琥。力を入れすぎると壊してしまつのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダメーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・？」

「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしあつて  
いる技が技だし、先ほど穂瀬が目を激痛で傷めているので薪もあま  
り酷使させられないのだろう。

## 第十五話 大きな門の向いに立つもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかつた。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふつふつ。以前来た者もそのようなことを言つておつたなあ」「以前、さつきもそう仰つていましだけどこには他にも人がいらっしゃつしゃつているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしていくつくつと笑つた。「こに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはつとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

こんなに大きな門は他に存在しないだらう

門番が急にそんな事を言つた。穂琥が首を傾げると門番は前回「こに来たものがそう言つたと伝えた。

「こには何なのですか？」

「門、や」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の門となつてているのかといふこと。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよつ」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜つていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかつた。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をして静かに笑う。

「弱いからか？護つて貰つておるだけだからか？そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持つておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が

門番は低く声を呟らせた。

「ぬしにはあるか？」

「ある・・・もの？」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持つていると言つて潜つて行つたそうだ。

自分が持つてあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の

自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願いです。ここから出してください。今の状況ではいくら考へても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかつたとき、再びここにお招きください」

「くつくつくつ。面白いなあ。良いだろう、招いてやう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「せつと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして田を開じることを促す。穂琥はそつと田を閉じた。その時脳裏にふつと何かが過ぎつて行つたような気がしたが急に周囲の感覚が変わつて体が急に揺さぶられたので驚いて田を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があつたのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？ あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほつとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？ 大丈夫？」

「はあ・・・。誰のせいだと思つてんだよ・・・。急に稀すら感じなくなつたから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだつたから・・・。焦つたよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなつてしまつたことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻つたので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言つことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移つた。

事もあらうか、あれほど出来なかつた魂石探しを意図も簡単にやつてのけてしまつた。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だらうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がついているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものが悩んでいるようだつた。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまつては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さつきまでとは打つて変わつてまるつきりできなくなつてしまつた穂琥。力を入れすぎると壊してしまつのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダメーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・?」

「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしあって  
いる技が技だし、先ほど穂瀬が目を激痛で傷めているので薪もあま  
り酷使させられないのだろう。

## 第十六話 桃眼の持ち主

「桃眼つて凄い技・・・?」

ずっと聞きたいことがあるのを堪えていてついに堪えきれずに休憩している薪に尋ねる。薪はそんな穂琥の唐突の質問に首をかしげた。しかし薪は軽くそれを流す。

「まあね」

押し黙る薪と穂琥。どちらかといふと黙っているのは穂琥のほう。薪はただ休息をしているだけだから。

「桃眼つて何祇持つているの・・・?」「は?」

突然の質問に薪は無愛想に答える。

「一祇は薪。もう一祇はお母様。他には・・・?」

「何を訳わからんこと言つているのやら。桃眼を持つているものが何祇いるかなんて分かるわけ無いだろ?」

「え?」

「そこまで慧奇は暇じゃねえよ。桃眼を開眼した奴の数なんて一々数えてられねえって。過去に亡くなつていった歴代の慧奇妃たちだつて桃眼は使っていたんだから」

「え・・・? そうなの?」

「あ? 当たり前だろう? 慧奇の嫁だぞ? その位の力使えなくてどうする」

薪の呆れたような回答に穂琥は俯いた。てっきり穂琥は先ほどの門番の護つていた門がその桃眼への道かと思っていた。あの門を潜れば桃眼使えるようになるのかと思っていたけれど。でも、そういうわけではないといふことが今わかった。ではあの門は何だろう。わからない。

「私なんかが桃眼を仕えるよつになるかな・・・」

自信の欠片も無いその台詞に薪はふつと穂琥を見据える。穂琥はその薪の瞳に飲み込まれてしまいそうでさつと目を外した。

「できるわ」

沈黙の後に薪がそう言った。

「どうしてそんな風にいえるの?・まともに技だつて使えないのに・・・  
・、鈍いし」

「鈍いのは性質だ、関係ない」

否定はしないのね。

「オレの妹だしな。それに・・・」

薪は言葉を切る。穂琥はその続きを待つたけれど薪はその続きを言わずになんでもないと区切ってしまった。

「とにかく出来る

薪はやはりそりやつて言い切った。そこまで言い切ることの出来る薪の力がどこか羨ましい。

「最初から出来る奴なんて居ないぞ。できたらつまらないだら」「

「薪はつまらないの?」

「オレが最初から何でも出来るみたいな言い回しは止めろ」

薪とて苦労してここまで来ている。戦鎌でありながら療蔚の技が使えるのは確かに才能かもしない。それでもその技を使うためにどれほどの苦労をしてきた事か、穂琥にはわからないのだから。

「出来ないから苦労して頑張ってそれを手に入れるんだろう?お前は何のために今、頑張ってんだ?」

「え?」

「オレはこう見えても結構お前の意見を尊重しているつもりだぜ? 桃眼の力を使いこなせるようになりたいと切に願ったのは穂琥だろう?」

薪に言った記憶はあまり無い。それでも確かに桃眼の力がちゃんと使えるようになりたいとは願つた。それを薪は汲み取ってくれたのだろうとしか思えない。

「何のために今、桃眼の修行をしているんだよ。そこまではオレもわからぬけど、付き合つてやつてんだ。しゃきっとしろ」

「・・・うん。ありがとう。なんかすつきりした」

そうだ。自分のやりたいことのために力を得たいんだ。『果て無き力』が本当に凄いものだというのなら得たい。あの門を潜りたい。

『あるもの』が自分の中にある。いや、そもそも穂琥はもしかしたらその『あるもの』が主体となつて力を得ようとしているのではないか。

わからないなりに穂琥は考える。それでも今はそれを放つて置いて修行に専念する。

疲れ果てて修行部屋から出てきたら外はもう闇に覆われていた。流石にこんな長い時間やつていたら大変だろうと薪は肩を落とす。ともかく、今日はもう終わりでまた明日にしようといつ事になった。

どうかりとベッドに飛び込んだのは随分後だった。疲れて何も考えることが出来ない。このまま眠ってしまいそうだ。

あるもの・・・

ふっと頭を掠めた何か。穂琥ははつと田を見開いた。そうだ。持っているのではないか？自分が求めるものこそ、その『あるもの』かもしれない。弱い。自分はなんて弱い存在。それでも思うことくらい、してもいいと思つてここまで来ているのだから。穂琥は見開いた田をゆっくりと閉じて心の底から叫ぶ。

再びあの門の前へお連れください

## 第十七話 内に秘めた心（前編）

身体がぐつと回転して強制的に立たされたような感覚になる。そ  
うして目を開けると巨大なあの門がある。

「よく来られたね、お嬢さん」

門番の低い声が鳴り渡る。

「連れて来て下さったのは貴女でしょ？」  
「くつくつくつ。力なくては来る事は出来んよ。して？」  
「はい。ここには大いなる力の持ち主が通ることの出来る門」  
「大いなる・・・なるほど、確かに。その力とは？」

門番が低く唸る。穂琥はその門番をしつかりと目に移してから巨大な門へと目を移す。そしてまるでその門に語りかけるように話し始めた。

「全力を掛けて護りたいものがある。それはいつも強くて私の前に居て。飄々としていてまるで霞のようにつかめなくて。それでもそれは霞。吹けば飛んでしまう事だってある。そんなときは私だってそれを護りたい。護る力が欲しい。敵を倒す力なんて要らない。仲間を、大切なヤツを、護りたい。私は誰かを護れるそんな力が欲しい！」

穂琥の声に門が呼応する。

「桃眼の力、ワタクシにお与えください」

声が木靈する。この暗闇の中で。その木靈に反応するようほりほりと輝いていた白い門が急に強い光を放つた。穂琥はそっと手を前にかざす。そして門に触れるでもなくそっとその手を前に押し出す。すると門がゆっくりと開いていった。

「そんな事・・・」

門番が震える。触れることなく門を開ける。そんな事があるのだろうか。いや、現に目の前でそれが起きているのだから。この娘の『想い』がそれほどまでに強かつたといつことだらう。

穂琥はそっと門のまづく歩いていく。そして門番の前まで来て足を止める。

「門番様。一つ、聞きたい」とがあるのであるのです

「何を・・・?」

「貴女様のお名前を伺いたいのです」

門番は肩をぶるつと震わせた。

「お前らは不思議な生き物よ。いや、しかし。ぬじがそれを聞いたところで何になる」

「貴女様はただの門番では在りませんでしょう?なんとなくわかるのです。だからどうか、名をお教えください」

そんなに長い時間を過ぎしたといつわけでも無いにも関わらず、一体何故そこまで深く心に触れることが出来る。いや、きっと時間ではないからだらう。心が触れ合えれば時間なんてきっと関係ないのかもしれない。

「いかんよ。いけないのだよ。我はここに在りねばなりぬのだから」

門番は酷く低い声で唸つていた。そのしゃがれた声を出すのももしかしたら一苦労なのかもしない。その身体に巻きついた鎖がその身を縛め付けいためているのかもしない。

「ぬしは結局何もわかつていない。我が何であつてどうじでどうじで在るのか」

「・・・いいえ、少しならわかる気がします。貴女様は・・・」

「ゆけ。門が閉まるその前に」

門番は穂琥の言葉をがむしゃらに切つてそう言い放つた。穂琥はその哀れな門番の姿を目に映してからふつと俯いた。

「また来ます」

「来られぬよ。門を潜つたものは一度といひては来られま」

穂琥はそんな門番の言葉をまるで無視するよつてひやかに笑つて足を踏み出した。

「勝手にするがよい」

門番の声が耳の奥で聞こえた。そして穂琥は光り輝く門の向こうへと消えていくのだった。

閉門されまた静かな闇が広がったとき、門番はやっと身体に入っていた力に気づきその力を抜いた。

「来られぬよ。戻つてなど来られぬところのよ。あの兄妹はどうしていつもそう、期待させるのだろう」「

嘲笑するように門番は声を立てた。そしてまた深い孤独と闇に沈んでいくのだった。

## 第十八話 内に秘めた心（後編）

暗闇の中を歩く音が聞こえる。珍しいともあるものだ。いつも続けてここへたどり着くものがあのうとは。

そんな事を思つてこると、聞きたくなる声が聞こえた。

「また来ますって言いましたでしょ」<sup>ヒ</sup>門番様

「こやかに笑う少女の顔。酷く驚いた。

「以前ここに来た者も同じ事を言つておったよ。また来ると。しかし、来る事は無かった。来られなんだ。それが普通なのだよ」「その話、私にしてみれば少し意外に思えます。それでもきっと何か事情があったのですよ。私に来られて彼に来られないわけ無い」

穂琥の言い切つた言葉を聞いて門番は苦笑した。

「以前、誰がここに着たのか知つておるのか？」

「勘、ですが。私の兄です」

「やうか。まあ、合つておるよ」

門番は苦しげに笑う。そんな姿を見て穂琥は門番の今おかれている状況を心苦しく思つていた。

「こんな所に貴女は在つていい存在ではないと思つのです。間違つていませんでしょ？」

「あひね。小娘に何がわかるとこいつのだ？」

門番はまるで穂琥を脅すように呻く。しかし穂琥はそんな言葉すらもしつかりと受け止める。

「先ほどは失礼致しました。門番様に名乗らせようとしてしまって。それは『禁忌』でしたね」

穂琥のその言葉に門番は酷く反応した。最早、この少女に自分の存在を隠す必要が無いということを悟らせた。

「貴女様のお名前、簾堵乃槽耀、ですね？」  
「知つておつたのか……」

彼女の唸るような低い声が穂琥の耳に届く。それに応えようとしたら、それよりも早く穂琥の言葉に反応するように門番の身体に巻きついていた鎖が光を帯びて砕け散る。それと同時覆いかぶさつていた布も緑色の美しい炎に焼かれ消え去る。

そうして現れたのは目も疑う妖麗な美しい姿。紅蓮の様に燃ゆる紅き衣に、海の様な深い藍の髪が地面に付きそうなほど長く煌いていた。すっと開けたその瞳は衣と似たしかしそれはまた異なった強く輝く緋。あかそれに反して真っ白いその肌は今にも透けてしまいそうなほどだった。そんな白い肌を隠すことのない素足がこの真っ暗な空間に降り立つ。

「正直言つと知りませんでした。それでも門を潜るとき、誰かが教えてくれたような気がしたのです。簾堵乃槽耀様、簾乃神様。貴女様は禁忌を犯した古き神、ですね」

「ああ・・・いかにも」

姿だけでなく声も美しい。透き通つた曇りの無い美しい声を轟かせ

る。

「礼を、しなければならなくなつたなあ」

「いいえ。構いません。私などがこの様な出過ぎた真似をしてしま  
い、申し訳ありません」

彼女は美しく微笑む。緋い目が煌き穂琥に向つ。穂琥はそのままにう  
つかり飲み込まれてしまいそうだった。

「いや、良いわ。時期も丁度よい。さあ、ぬしも帰るがよい」

「はい」

帰り間際に兄に渡して欲しいと簾乃神から封を渡されそれをしつか  
りと懐にしまつて穂琥は田を開じるのだった。

気がついたらベッドから落ちていた。それは身体が痛いわけだ。  
何とか身体を起こすと窓辺の椅子に腰を下ろした薪がいた。しかし、  
さつきとは打つて変わつて落ち着いた表情をして此方を見据えてい  
た。

「お帰り」

静かにそう言った薪にただいまと返す穂琥。とても穏やかで落ちつ  
いた目をしているので穂琥は少し安心した。先程みたいに青ざめさ  
せてしまつては穂琥としても申し訳ない気持ちになる。

薪は立ち上がって穂琥の前で座つた。目線が丁度同じ位置になつ  
た。そして穂琥の頬をそつと包むようにして触れると穏やかなその  
目を穂琥にしっかりと合わせた。

「氣を失っていたのはこれが原因だつたんだな。正式な開眼、おめでとう」

「氣づいたの・・・？」

「そりね。あの門を潜ればそのものからはそれなりに眞稀が放出されることになるからね」

穂琥からあふれ出す眞稀を外に漏れないように必死に抑えてくれていたことに感謝する穂琥だった。

ベッドに戻り立上がりたとき、懐に違和感を覚えて手元に触れる。

「あ」

穂琥の漏らした声に部屋を出ようとしていた薪が足を止めた。

「どうした？」

「封を、もうひたの」

「封？」

穂琥は懐からその封を取り出して薪に渡した。そしてその内容を確認した瞬間、薪の顔から血の氣が一気に引いた。明らかに動搖して目が泳いでいる薪のその姿があまりにも珍しいことなので穂琥まで動搖してきた。

「なんて事を・・・」

やつともうした一言がそれだったので穂琥は肩を竦めた。もしかしたら先ほどの門番の件、やつてはいけない事だつたのかもしれない。

「何をして・・・帰ってきたんだ?」

薪の震える言葉に驚きながら穂琥はとりあえず自分のした事を説明する。

「ええっと・・・。門番様を解放・・・?してきて・・・」

「そういうことを聞いているんじゃないよ。簾乃神を開放したのはわかる。だけどそれだけでこんな言葉をもらえるなんて思えない・・・!」

薪の口から当然のように簾乃神の名前が出たので少し疑問に思ったが自分にわかつたくらいだから薪だって知っていてもおかしくはないのだろうと思つことにした穂琥だった。

動搖する薪の声がいつもより荒れているので怒っているのかと不安に駆られるがそういうわけではないらしいと解釈する穂琥。そして薪に門前で起きたことを事細かに説明するように求められ、出来うる限り正確にあつた出来事を伝える。

話しを聞いた薪は顔を緊張でこわばらせていた。自分がそんなにもいけないことをしてしまったのかと不安に駆られた。

「いや、触れずに・・・か。オレも母上もさすがに門には触れたり踏ん張りもしたんだが・・・」

薪に言葉を聞いて穂琥は絶句した。そんな事は・・・それではまるで・・・。

「やっぱり穂琥は・・・凄いな」

「え・・・?」

あまりに自然に出過ぎた薪のその言葉に嘘も偽りも嘲りも嫌味も無い。ただ純粹にそう思つた薪の言葉に、穂琥は言葉を詰まらせた。薪が自分のことをそんな風に言つてくれたことなど、一度も無かつたから。

## 第十九話 神の犯した路

初めてだ。薪がここまで「凄い」と言い切ったのは、それがあまりにありえ無すぎていつものようにほしゃいで喜ぶことすら出来なかつた。

薪はふっと息を吐く。それからあの簾乃神が何故、『禁忌を犯した古き神』といわれるのかを話してくれた。

その昔、人や眞匏祇なんていう小さなものの寿命では考えられないくらい昔の話。友の裏切りで神界を追われた哀れな神がいた。その神が簾乃神、簾堵乃槽耀けいとうようかいようであった。そしてその裏切つた友の名が京董夜繪鏡、京鏡神けいきょうしんだった。

神々の都合など、一眞匏祇の薪には全くわからない。それに神界でもそれは非常に露見したくない汚れた歴史。故にあまり知られていないことではあるので詳しいことまで知っているわけではない。

その京鏡神が何らかの理由にて神々を裏切る行為を働いた。しかし、京鏡神は簾乃神にその濡れ衣を着せた。

「そんな！？ そんなこと！ 神のする事じゃない！」  
「神といえど万能なわけではない。そういうことなんだよ」

薪はどこか寂しそうにそう応えた。その表情が何処と無く悲しくて穂琥はそれ以上の言葉を続けることが出来なかつた。

しかし、簾乃神は京鏡神の濡れ衣を自ら着た。友と思っていた者の裏切りに酷く心を痛めたが、それでも大切に思つたがあまり、簾

乃神はその濡れ衣を着ることを選んでしまった。そのせいで簾乃神は有りもしない罪を科せられ担う羽目となつた。

「通称、『認可の門』と呼ばれる桃眼の最終段階にて使用される門。それの番人をやらされたのぞ」

元は神と崇められた崇高たる存在があんな暗く孤独に苛まれる屈辱の空間でこの長いこと押し込められていた。あんな惨めな悲惨な姿で。孤独と闇が支配するその空間で一体どれだけの時間を過ごしてきたことか。生まれたばかりの薪や穂琥には想像も付かない。

「でも・・・。そういう情報を薪が知っているという事は神々だつてそれを知らない訳ないでしょ？何故簾乃神様を開放しなかつたの？」

「いい質問だな。オレはこの情報を特別なルートから入手した。だからおそらく眞匏祇の世界でこの話を知っているのはオレと穂琥だけだ」

薪の言つた特別ルートが気になつた穂琥だった。

「今更、罪を犯した神は京鏡神でした。簾乃神と間違えました、ごめんなさい。なんてそんな軽いことがいえるほどこの世界は甘くない。神の世界も、オレら眞匏祇の世界も」

そして何より、本当に罪を犯した京鏡神はいまだに姿を消しました。つまり、眞匏祇の世界に伝つにも証拠が無い。本当に京鏡神がやつたのかどうか、定かでない以上、神々の勝手な判断と思われても仕方の無いこと。

「それじゃあ、簾乃神様はどうなるの？罪を投げ出して逃げたとか

にはならないの？！」

「それなんだよ。オレと母上が認可の門を潜つたときに簾乃神様を解放しなかつたのはそれに繋がっている」

確かに、穂琥に出来たのだから薪に、ましてや母、紫火が出来ないわけがない。

穂琥が認可の門を潜つたあの時は丁度、集しう神と呼ばれる期間だつた。字の如く、神々が集う特殊な日。何百年に一度行われるその日。ありとあらゆる事情があるにせよ、全神がその場に集結する日。よつて、京鏡神もこの集いに抗う事は出来ない。故に自白するべき存在もあるために簾乃神を開放するためには丁度いい日だったということ。

偶然が重なつて出来たこの時。神々の心が最も穏やかに最も静寂なこの時期なら簾乃神も京鏡神もその身を洗い落とせるということ。

「そしてこの集神で京鏡神様と簾乃神様がご対面となるわけだ」

「ど、どうなるのかな・・・」

「さあね。神々の心などオレなんかにはわからんよ」

薪はどこか冷たくそう言つた。

「特別なルートって何？」

「気になるのか？」

「当たり前じやない。そんな、神々のことをそんなに簡単に知ることなんて普通出来ないでしょ？」

「・・・そうだなあ」

薪は少しだけ考えたそぶりを見せてから小さく笑つて簾乃神自ら教

えてくれたと白状した。当時の薪はそんな細かな神々の事情などわからぬ年頃だった。だから、名を言えば開放できるのならそうすると簾乃神に言い寄つた。しかし、簾乃神はそうして、自分の身の上と状況を新に話すこととそれを避けた。

集神でもない日に神々の前に京鏡神を出せばきっとただではすまなかつたはず。

「たった一人、愛した神を傷つけたくなかったのだろうな」  
「うん・・・。・・・。・・・。・・・。・・・。・・・。」

「えつじ。」めん。もう一回言ひて。薪とは思えない失言、じゃな  
い・・・言葉を聞いた気がしたの・・・！」

穂琥は一度新の言葉に同意してから新の顔を凝視した。それに不機嫌そうになんだと応えた薪。

真剣な穂琥の表情に負けて薪は「わごわもう一度同じ事を言う。」

「え、いや、だから……。たつた一人……。愛した神を傷つけたく……。」

「なんだよ！」

穂琥の反応に流石に怒る薪。穂琥の耳に飛び込んできた薪とはとても思えない単語。薪が何を間違つても『愛した』なんて事を言つとはとても思えない！

「簾乃神様が言つていたことだけど・・・」

「え？！ そりなの！？ ああ～、なるほど～！」

妙に納得した穂琥を薪は軽蔑のまなざしを送る。一人で勝手に納得している穂琥を放つて置いて薪は持っている紙に視線を落とす。そこに羅列した文字とはいえない形のもの。これが神の世界での文字。伝たい相手にのみその文字の解読を許す特殊な文字。それを読もうと目で追うと勝手に頭の中にそれが言葉となつて浮かんでくる。

其の力見事なり。以後悪しき様に使わぬ様に願う。ぬしらを今後、出来うる限りで補佐しよう

紙の最後に書かれていた文。崇高たる神にここまで言わせることなど普通ではありえない。神とは敬いときに畏れ称える存在。願うならば此方から護つて欲しいと願い出るしかない。それでもそれを聞きとめてくれるかは神々のお心のみが知れること。にもかかわらず神自ら護ることを約束してきている。薪はそれがどこか畏ろしく思えた。

拍子抜けする穂琥の顔を見てため息をつく。そしてそんな穂琥に軽く制裁を加えて明日また修行をするから早く寝るように促した。

## 第一十話 密かな不安

絶えず頭の中で回る神の言葉。薪はそれを頭から無理やり振り払つて軽くした打ちした。別に神に舌打ちしたわけではなく自分の弱さにだ。

「運命を導く神と崇められていた・・・つけな」

簾乃神のことを思いながら薪はそんな風に考えた。そんな風にぼうつとしていたから薪は見事に田の前の岩に気づかず激突する。

「いっ……え……くそ……」

神の予言とは大いに当たるものだ。それを直感と本能で感じ取つて薪はため息をつく。

災いが近づいている。あの娘に嫌な感覚を覚えた。ぬしらに幸運を

薪は再び舌打ちをする。

翌日、薪はいつまでも寝ている穂琥をたたき起こして（おそらく部屋からは穂琥の絶叫が聞こえたことだらう）薪はさつわと部屋を出て行く。

寝ぼけながら降りてきた穂琥に早く顔を洗つて来いと命じる。それに呑氣の呼応する穂琥の背を見て薪は小さく息をつく。決して呆れているわけではなく。不安で不安で押しつぶされそうで。決してあつてはならないこと。

まさか穂琥を失つことになつたり・・・

薪はそんなよからぬ考えを頭から無理やり遠ざける。無い。ありえない。穂琥は絶対に護る。おのずと身体が震える。

洗面所から戻ってきて席について飯」と要求したが薪の返答が無いために薪を見ると薪が小さく震えているように見えて穂琥は目を疑つた。薪が?不安を覚えた穂琥が薪に安否を尋ねようとしたがそんな不安、薪の一言で簡単に吹つ飛んだ。

「飯がまづくなるからもう少しもともな顔していろよ  
「んだとこりあああーー!」

## 第一十一話 感じる疲労と戦うる疲労

修行を再開させたわけだが、やはり認可の門を潜つてきただけあつて今までの苦労はなんだつたのかと疑問にすら思えるくらい樂々と進んでいった。そんな折に、薪と『眼』の話をすることになった。

「開眼つて他にも色々な種類があるんでしょう?」

「そうだな」

「薪は何が使えるの?」

「ん~?まあ、色々?」

「なにそれ」

まるで何かを誤魔化すよつたその言い方に穂琥は口を尖らせる。薪が得意としてよく使つのは紅眼だつたと記憶している。穂琥はそれを薪に言つとまあ、そうだと返答をもらつた。しかしどこか薪の応えに渋りを感じたので追求すると薪は諦めたようにため息をついた。

「いや、まあ。もう一個、得意なものはあるんだけどあまり使いたくないんだよ」

「え?得意なのに使いたくないって?」

「かなり危険なものでね。冷静でないと使いとまざいんだ」

薪が出来る開眼の数はいくつかあるのを知つてゐる。その中で最も使いやすくて強いものがあると薪は話す。

「まあ、教えてやつてもいいけど。絶対に口外するなよ?いくらお前でも口外したら本気でお前を消しにかかるからな」

滅多にない薪のこの手の脅しに穂琥は驚いて小刻みに何度も首を縦

に振った。

「オレの最高峰の力だと、自分では思つてゐる」

薪のその口調はまるでこれから先、それを使うみたいに聞こえて穂琥は何だか嫌な気がした。

薪がその『眼』の説明を終えると穂琥は驚いて最初声も出なかつた。

「な、何それ？！反則でしょ、そんな力……！チートだ！」

「ま、そういうなつて。この力も結構レアだけどそれ以上にレアなのがあつてオレが知る限りこの開眼に匹敵できる開眼をできたのは過去には母上しかいないと記憶している」

紫火の開眼は一つ。桃眼とそのもう一つ。しかし薪はそんな事はありえないから話はしないといつてさつさと修行に戻つてしまつた。どこか消化不良な氣のする穂琥だつたがそうなつた薪に何を言つても回答は帰つてこないことを重々承知しているので仕方なく穂琥は修行に移る。

次のステップで穂琥は衝撃を受けた。魂石を体内から強制的に奪取するもの。しかし、これは下手すると簡単に相手を傷つけてしまうために力加減と操作が非常に難しいものだつた。いくら認可の門を通つたからといってそう容易に出来るものではなかつた。

薪が用意したダミーは全部で20体。傷つけないように相手を痛めないように魂石のみを奪取する方法。桃眼で見極めた道しるべを通してその魂石を眞稀によつて引き抜く。しかし・・・。

穂琥は5体を完全な戦闘不能にした。これでは再起までにどれほどの時間がかかるかわからないくらい。

「そ、そんな・・・！5体以外、全滅だなんて！！」

残った5体以外を全て完全に破壊してしまった。ちゃんと加減をしたのに。落ち込む穂琥に薪が優しく声を掛ける。

「お前にさちやんと優しさがある。だから5体『も』残せたんだ」「え？」

薪は少しだけ影を落として過去を振り返る。薪が最初にこのダーマーで修行したとき、このダーマーの全てを薪は破壊してしまった。

「穂琥の持つ『優しさ』はオレの持つものとは格が違う。大丈夫だつて。お前なら出来る。だって母上の子だろ？」「薪・・・・・うん・・・・・わかった。頑張る」「おう」

頭を薪に軽く撫でられて穂琥は少し照れくさみに笑つ。

そうして何とか修行を積み重ねていってどうあえず使用できる段階まで来たと薪は言ってくれた。

「じゃあ、これで・・・」

「後は最終ステップだけだな」

終わりではないのですね。穂琥は少しだけがっかりしながらも最後に何をやるのか薪に尋ねる。

「なあ、戦つて何が必要だと思つ?」

「え?」

唐突な薪の質問に動搖する穂琥。

「えつと・・・力? 気持ち・・・ん? 何だろ?」

「まあ、今のお前には一番欠けているものだよ」

「え? 何だらう・・・?」

どんなに修行を積んだものでも。どんなに才能があるものでも。身体を動かさぬものに勝利は無い。知識が勝ち抜くことが出来るのは子どもの遊びまでだ。実際に刀を交えることとなればそんな知識よりも何よりも大事なものが必要となるものがある。

「直感」

薪が言つ。

「そんな! 私つてそれが一番縁遠いんですけど? ...」

「だから一番欠けているって言つたじやないか」

「う・・・」

直感こそが戦闘で最も大事なスキル。相手がどう動いて次にどうするのか。それを見極めることができが勝利への架け橋となる。そしてそのまま感こそ、つけるには。

「ま、実戦しかないわけだ。と、言つ」とで...」

急激に薪の声が明るくなつたので穂琥は背中の辺りがぞくつとした。よく言う、嫌な予感だ。こういう直感ならきっと実戦を積んで知つ

ているのかもしねない。

「來い」

穂琥に向つて剣を向ける薪に穂琥は己の『嫌な予感』が当たつてしまつたことにショックを受けた。

「実戦でのみ、直感は得られるんだよ。そんなわけで今日からはオレが相手してやるから。かかるつて来い」

修行場にしばらく穂琥の絶叫が木霊するのでした。

今までの修行って何だつたのだろう。子どもの手遊び程度だつたのかなあ。だつて薪つたら容赦ないんだもん。

そろそろ日が落ちるという時間。穂琥がへばつて修行は終了。穂琥はすっかりぐつたりとしてしまつて部屋に戻るとソファにダイブしてそのまま寝息を立て始める。そんな穂琥を見て薪はため息をついてシャワーを浴びに行くのだった。

穂琥はわかつていなかもしれないけれど、この修行で誰が消耗するつて薪に決まっている。穂琥が何度も破壊してしまったダミーを真稀のみで生成しているのは薪であるし、コツを教えるために桃眼を開眼する訳だし、修行に付き合いつつも自分の修行もしなくてはならに薪が疲れないわけも無かった。

シャワーから上がって来た薪にたき起しされて穂琥もシャワーを浴びる。まるで何日もこの水に触れていなかつたのではないかと思えるくらい気持ちがよかつた。よほど疲れていたんだと実感する

穂琥はのんびりとシャワーを終えた。

出てきて薪を探しても薪がないので不思議に思つて探す。そしてふと、ソファに眼が言った。

「あれ・・・? し、ん?」

薪がソファで枕に顔をうずめて肩を上下に揺らしていた。

・・・。

少し考える穂琥。そしてこの状況が何であるか、把握したとき一瞬驚いた。

わっ! ? 薪、寝てる! ?

そんな薪にそつと声を掛けるが薪は起きなかつた。声を掛けても、いや、近づいても起きないのは薪とは思えない。もしかしたら失神でもしたのかと不安に思った穂琥はそつと薪の肩を持つて仰向にする。

今までに見たことの無い薪の寝顔。始めてみる寝顔なのでいつもどんな顔をして寝ているかわからないけれど、今回のこの薪は本当に薪とは思えなかつた。

な、なんか・・・可愛いんですけど・・・

そんな事を思いながら穂琥はソファの前に腰を下ろした。そしてやつとその事実に気づく。

あ、そうか……疲れているのは薪のほうだつたんだ……

穂琥を気遣つて薪はそんなそぶり一切見せなかつた。確かに薪は体力だつて氣力だつてある。それでもこの一日、眞稀を多量に使つていたにもかかわらず疲れたの類の言葉は聞いていない。むしろ、大丈夫か、といつた穂琥を労わる言葉だけ。

そのことに今まで一切気づかなかつた自分に恥じた。自分だけ辛いと思い込んでいた自分が悔しかつた。そんな思いも相重なつて。

穂琥はそつと開眼する。そして薪をそつと包む。

「ん・・・? どわあ! ?」

眼を覚ました薪が急に飛び起きたので穂琥は勢いで閉眼した。

「な、何よー? セツカク癒してあげよつと思つたのに! !

口を尖らせた穂琥だつたが、どうにも薪の様子がおかしかつた。

「え・・・あ・・・いや。ゴメン。ありがとう・・・でも大丈夫だから・・・」

「・・・? 大丈夫?」

「ああ」

短く応えた薪のその言葉に疑問を覚えながらも穂琥は薪の膝に手を置く。

「?」

不思議そうな顔をする薪から田線を外して穂琥は薪の膝に置いた自

分の手を見る。

「『』めんね。気づかなかつたの。いつも薪つてば飄々としているから  
「別に良いつて」  
「よくないもん！」

急に穂琥の荒れた声に薪は驚く。

護られるだけじゃダメなんだ。自分だつて護りたい。薪を護ることが出来る力が欲しい。それでもまだまだ全然駄目で薪の足元にも及んでいない。

「だから・・・え？」

言おうとした穂琥が言葉を切つたのは薪が頭に手を置いてきたからだ。穂琥を見るその瞳はなんと温かいのだろう。

「気にするなつて。穂琥。オレを護りたいって気持ちは素直に嬉しい。同情とかそういうのではなく、本当に。でもな。穂琥が護ることのできるものはそんなものじゃないんだよ」

「え？」

「よく自分で考えてみる。何が護れるか、何を護るべきなのか」「うん・・・」

今の穂琥にこの時言つた薪の言葉を理解する事は出来なかつた。自分の目の前で精一杯の穂琥には、薪の言つたその言葉の意味を知つたとき、きっと穂琥は自分の力を完全に使えるときだらう。そしてこの時から既に穂琥の中に眠るその力に気づいていた薪に素直な驚きを覚えることだらう。

## 第一十一話 心の悲痛と叫び

実戦訓練を始めて数日。薪から告げられた言葉に穂琥は震えていた。夢であつて欲しいとどれだけ願つたことか。夢だと願うほどそれは果てしなく現実。薪、もう少し待つてよ。いくらなんでも早くさげるよ。

突然告げられたこと。昨晩、疲労していた薪を治した。完全に回復させる事は出来なかつた。薪の持つている疲労は予想以上に酷い。そして今朝、そんな薪の顔を見て余計にそう思つた。それなのに。

「明日、奴らの本拠地に行く」

あまりに突然言われたその報告に穂琥は愕然とした。つまりは争いが起つること。まだ完全に回復できていない薪と、覚悟も何も出来ていらない穂琥が。一体何が出来るというのだろう。生半可な気持ちで望めばそれは死を意味することとなる。しかしそれでも薪はもう明日にはといつ。一体どうして。

震える穂琥の心は痛いほどよくわかる。それでももう動かなければならぬ理由が出来てしまつた。まず、大本の理由として主と呼ばれていたやつの下に癪臨が存在すること。癪臨は使い方を誤れば悲惨な事態しか生まない危険な宝玉。地球はなんと脆いことか。癪臨の力がもし暴発でもすればきっと簡単に壊れてしまう。

だから穂琥の心がどれだけ揺れていようが、もう、手を出さないわけにはいかない。薪は心底思う。連れてくるべきではなかつたと。そしてその思いを強くさせているのがあの簾乃神の言った言葉。

薪の家には眞匏祇の世界とつながるゲートが存在する。そのゲートで穂琥を返そうと思った。しかし、事もあろうか、ゲートが閉じて開かない。穂琥を返すことも出来ない状況になってしまった。そのことに薪は絶望した。

穂琥が震える心なら薪はおそらく不安の心。果てしない、今までにかんじたことの無い不安が薪を襲っている。万が一にも、穂琥が手元から離れるようなことがあつたら。

いいや、そんな事考えていたら駄目だ。話にならない

薪はその悪い考えを何度も無理やり頭から遠ざける。穂琥を失うことなど・・・。

## 第一二三話 命の意味するもの

支度をしている薪の背に声を掛けた。薪は振り向かずにそのまま  
てきとうに返事をする。

「どうして命つてあるの？」

穂琥のした突然の質問に流石に薪は振り向いた。

「え？」

薪の返して来た言葉を穂琥はそつと胸に抱く。

命とは掛け替えの無いものだと、大切な命だと知っている。そのつもりだ。それなら何故我々の命とは簡単に費えてしまうのだろう。どうしてこうもあっさりと消え去ってしまうのだろう。生きていて命を持っている。持っているときはそれは思った以上に重くていつまでもそこにありそうな錯覚を得る。しかし、亡くしてしまう時は一瞬にも満たない。この世に生を受け燃ゆる炎を灯して。それでもその炎は消えるときはふっと一瞬にして姿を消してしまう。残るのはその煙だけ。そこに炎があつたという形だけ。

「どうして生きている意味があるの？どうして命つて大切なの？」  
「そんな事、オレが知るわけないだろ！」

薪は顔を前に戻して以外にもあっさりとそう応えた。穂琥はその回答にどこかがっかりしながら薪の背を見た。

「ただ……」

薪はそのまま言葉を続けた。

「だから命は大切なんじゃないのか？簡単に壊れるものほど大事にするじゃないか。消えてしまうから楽しいんじゃない」

薪の言ったことの意味はなんとなくわかる。それでも命とは脆すぎる。どうしてこんなにも大切にしなければならないのだ？！。それがわからない。

「オレが思うに、命そのものに意味は無い、ってことかな」

予想外の薪の発言に穂琥は目を見開いた。あれ程までに命を大切にしていた薪が言つよつた言葉には思えなかつた。

「命に意味があるのでなくてその命が生む夢や愛に意味があるんじゃないかな」

穂琥はその言葉を聞いてはつとす。

「私はあなたを愛します、つて台詞とかみたいにさ。別に恋愛どうこうだけじゃなくて家族や友、それらに向ける愛情とか。それが大切なんじゃないかな。だからその夢や愛を受け継いでこつして生物は繁栄していくんだるつ？」

命は呆気ない。それは確かに変わらない事実。でもその命が強固で永遠であつたなら一体生物がこの世にいる意味は何になる。その者が朽ちてしまふからそれが育んだ愛や夢、希望が朽ちる」となくこの世界を包み込んでくれるのではないだろうか。

薪は昔、その手で夢も希望も愛も自分のその手で消してしまった。だから失いたくない。もう一度と。

「でも・・・それでも・・・死んでしまつのは辛いよ?」

薪はそつと振り返つて穂琥の目を凝視する。今までに見たこと無いくらい深い瞳の色に穂琥の心は震える。

この世に生まれ出た以上、必ず皆平等に命が尽きる。しかし生まされたからには愛を育み、希望を与えて貰えられ。夢を抱いてそれを語る。それには命が必要で器が必要。それらを壊しまうことがあってはならない禁忌であるのだろ?」

「意味が無いといつたら悪い言い方だけ?、つまりは大切なのは『心』って言いたいだけ」

薪の目の奥が震えているように穂琥には感じた。薪もどこかで怖いのかもしない。いや、そもそも薪がこの戦いを怖くないとは一言も言つていない。もしかしたら『失う怖さ』を知つている薪のほうがこれから行われる争いを恐れているのかもしない。

「怖いから・・・。失われる命なんてあつていいのかな・・・って」「・・・そうだな。悪いな。『めん』

薪が小さく謝る。それに驚いて穂琥は聞き返す。すると薪は視線を落として申し訳無さそうな顔をする。そうした薪から聞いたのは穂琥を眞砲祇の世界へ返したいということ。それでもそれが出来ないという事実。

「悪い。本当に。そもそも連れてくるべきじゃ無かつたよな・・・。

本当に「じめ・・え?...」

謝りかけた薪が驚いて言葉を切ったのは後ろから穂琥が抱きついたからだ。そして耳元で震える穂琥の声が聞こえる。小さく何度も謝る、か弱い声が。

「「じめん。私のほう」」そ。争いが嫌いなんて薪が一番わかっていることだったよね。「じめんね・・・。こんなに急にやるって言ったのにも理由があるんでしよう?」

「・・・痺臨を、奴らが所有してくるらしい、って言ひ蹲をね」

「・・・うん。そうだね。早く取り戻さないとね」

穂琥の言葉に少しだけ温かみが戻る。不安が少しだけ消えていく。そんな穂琥の声を聞いて薪はより一層の不安を高める。

「オレは・・・」

どうしたらいいのだろう?、そんな事、穂琥に言つわけにもいかない。それでも誰かにこの懸念という重圧な責任を擦り付けたいと思つたことが過去にどれほどあつただろうか。それでも今、こうして穂琥を前にして自分が懸念でよかつたと時折思う。懸念ならこの世界を変える力を有している。いつかこんな苦しい思いをしないですむ世界を作りたい。生きることに苦しまぬ世界を。

「ねえ。薪にどつての夢や希望つて何?」

「オレの・・・?」

「そう」

少し明るく穂琥の声が薪の声に被さる。薪はいまだに背中にくつ正在する我が妹の顔を見る。そして小さくため息をついた。

「眞っまでもあるか？」

「え？」

「オレの夢と希望？そんなの、お前に決まっているじゃないか」

薪のその声は自身に満ちている。迷いなんもあるものがあるわけもない。それが嬉しくてたまらない。穂琥はさらにぐつと薪に抱きつく。そして嬉しさを一心に籠めて薪へ言葉を送る。

「私と同じだ！私も薪が夢と希望、生きる糧だもん」

その言葉に薪がどんな顔をしたのか穂琥には見えなかつた。それでも心から感じる眞稀の感じに柔らかいものを感じていた。

「なあ、穂琥」

「何？」

薪が少し声を低くして名前を呼んできたので少し驚いた。

「お前、明日、ここに残れ」

「え？」

薪はただひたすら穂琥を失うこと恐れている。だから、この家に残つて戦闘が終わるのをここで待つていろと。そんな薪の言葉を聞いて穂琥は胸の奥がひどく熱く感じた。

「今、決心付いた

「え？」

穂琥が薪からやつと離れて嬉しそうに言った。薪は首をそちらに向

けて穂琥を見る。

「戦闘で私に薪を護ることなんて絶対に出来ない」

「だから・・・」

「出来ないけど私は薪の心を護る！だから明日は連れて行って」

穂琥はふふっと嬉しそうに笑った。それがどこか薪の心を痛めた。それと同時に薪の心に何か暖かいものを落とした。

「馬鹿だよな・・・」

「何それ！せつかく私が・・・」

「いや、お前じゃない」

「え？」

薪は自らを卑下して笑う。要らない心配をしたと笑っている。薪は小さくいつもより少し弱い声で一言ぽつりと言った。それが穂琥には聞き間違えではないかと思うくらい意外な言葉だった。

## 第一十四話 脆いから」その明かせぬ心

### 怖かつた

薪が漏らした一言に穂琥はただぼうつとたつて「ことしか出来なかつた。

失う怖さは痛いほど味わつた。だからもう一度と何も失いたくはない。だからがむしゃらになつて必死になつて何もかもを護りうつとする。それが例え敵であつたとしても。

穂琥にとつての全て。穂琥にとつての勇者。穂琥にとつての主人公。絶対的な存在。誰にも負けることもなくていつでも平然といふられる、そんな存在だと思っていた。でも違うのだ。彼もまた、一つの生物。全てのものに喜びを覚え万物に恐怖する。それは誰もが平等に等しく存在する。

一度でも死という恐怖に駆られてしまつた薪にその恐怖の闇から逃れることは出来ないのだと。それが痛感した。

ずっと何も語ってくれなかつた薪がそつやつて穂琥に語ってくれたことは素直に嬉しかつた。しかし、『穂琥』という存在がここまで薪の心をつぶしてしまつっていたことを知らなかつた。穂琥は薪に依存している。自分でもそれは自覚しているつもりだつた。でも、それはまた薪も同じだつたのかもしれないと思つた。互いにたつた一つしか無い血の繋がり。大切にしたいと思うのは当然の心なのかな。

薪を取り巻く死の恐怖。薪自身、己の命が費えることになんら恐怖は抱いていない。ただ、それを田の畠たりにする羽田になる他者において薪は死の重みを実感する。

### 命を懸けてお前を護る

よくある名台詞のシーン。己の言葉を薪はひどく羨んでいた。命一つかけだけで護ることが出来るというのなら好きなだけかけてやる。でも、そんな単純なものではない。今、己で命をかけて敵と刺し違えたとしても、次の敵の襲撃に護ることが出来ないではないか。この世の中に完全な平和など存在しないことを薪は知っている。そして何より。薪の命はすなわち穂琥の命。薪が命を懸ければ穂琥も同様に掛ける羽目になる。それではだめなのだ。ならないのだ。

薪に寝るようにと告げられてベッドの上でさまやまなことを考えていた。薪に見捨てられてしまつ日が来るのでないかと内心恐怖に駆られていた。でもそれは己が薪も同じだったよう安心と苦しみが同時の穂琥を襲つた。

薪が語つた衝撃的な言葉に今でも穂琥は信じられない気持ちが胸にあふれていた。

薪も同じ。穂琥と同じ。最近、桃眼を開眼して穂琥にはぐんと力がついた。そしてそれは同時に自立を意味する。力を必要としなくなつた穂琥が薪の元から離れるのではないか、そんなことを時折思つたことが薪にもあつたらしい。まさか、薪にそんな弱く思う心があつたなんて驚きだつた。いや、違う。弱いなんて言葉は間違えているのかもしれない。そういう気持ちをきっと弱いとは言わないのかもしない。

穂琥は薪をずっと見ていく。今までずっとそうして薪の背中を見てきた。だから今までもこれからも、ずっと。

薪は部屋に戻つて後悔に苛まれていた。こんな決戦前に穂琥にあんなことを言ってどうする。同情でも買いたかったのか。薪はただ頭を抱えていた。こんなくだらないことを言って穂琥を傷つけたかもしれない。不安にさせたかもしない。どれだけ自分が脆く愚かで未熟であるのか、思い知らされた気分だった。あんなことを今の穂琥に言つてよかつたのだろうか。

そんなこと、誰にも答えがわかるはずも無い。言ったほうも、言われたほうも。どちらも。そして天を祭める神々も、きっとわかるような答えではなかつたのだろう。

## 第一一十五話 決戦

ふつと田が覚める。それでもまだ頭はぼんやりとしていて完全に覚醒はしていない。そんな状態で、ふと隣に気配を感じた。誰の気配だらう・・・。そんなことを考えている間にだんだんと覚醒してきた意識の中でその隣の気配が先ほどから身動きしていないことに気がついた。

穂琥はゆっくりと体を起し、そこには薪がいた。ベッドに向いて床に座つて諸手を組み、その諸手で出来た穴に顔をうずめている。

「薪・・・」

穂琥はそつと小さな声で呼びかける。薪はわずかに声に反応して身動きする。すつぽりと入つていた顔が少し腕の中から出てきて薪の表情が見えたとき、穂琥は一瞬ドキッとした。そして心がどこか痛いと泣いているような気がしながらそつと薪の顔に手を伸ばす。

「ああ・・・薪も怖いんだよね」

そつと薪のほほに伝つていた水滴を指で拭う。

「ん・・・」

「あー・・・おまけ」

触れた」と覚醒した薪が頭を起こした。

珍しく寝ぼけているような雰囲気で薪は穂琥に挨拶する。それに穂琥も答えた。

完全に準備を整えた薪と穂琥。外に出ると外はまだ朝靄がかかっており、本来なら人々がまだ夢の中でうつらうつらとしている時間だろう。朝の空気が漂い、どこか肌を刺激する寒気に穂琥はぶるりと身震いをした。

「ねえ」

朝の空気を切りながらすっと抱いていた疑問を薪へぶつける。

「薪は・・・戦うの、怖い？」

「当たり前だわ。でもやらなきゃいけないから。そうでなくては滅んでしまう」

薪の声が静かな道に木霊して吸い込まれていくようだった。その木霊が完全に朝靄の向こうに飲み込まれてから薪は穂琥にたずねる。

「聞きたいことは何だ？」

薪に言われてドキッとする。薪はわかっている。穂琥が本当に聞きたかったことはそれではないということを。穂琥は少しだけためらつてそつと薪にたずねる。

はて、薪は自分の力をどう思っているのだろう?自分の力に恐怖したことは無いだろうか?

穂琥の質問に薪は少しだけ視線を落としてから穂琥に視線を戻して言い放つ。

「怖い？そんな風に思つたことは無いな。オレは別にこの今有している力を才能で持つていたものではない。そらまあ、多少の才はあつたかも知れぬけどな、慧奨だし」

薪は最後を少し早口で言つた。

薪の持つてゐるこの力は確かに巧技や紫火の血を受け継いで強大なものかもしないけれど結局のところほとんどの力を薪は努力のみで手に入れている。普通では考えられないくらい血のにじむ努力の元。その努力の中には巧技による強制も入つてゐるのだが。

そして今ある力に自惚れることは無い。そうやって努力で手に入れたのなら自惚れてもおかしくないかもしぬないけれど薪にそれは無い。それはなぜか。簡単な話だ。

「限界を超える」

「え？」

「オレはまだまだ強くなる。まだ護りたいものだつてひくに護れてなどいない。だからもつと強く」

薪の声に張りを感じた。己に打ち勝つこと。それが薪の目標であつて力の上限。

「ただね」

薪が妙に言葉のトーンを落としたので気になつてその薪の言葉に耳を傾ける。

「唯一つ。怖い力がある」

今までの話とは裏腹のその言葉に穂琥は妙に嫌な予感がした。

薪が怖いといった力は以前、話してくれた開眼のことだった。これだけはコントロールを失ったときの恐怖を覚えるといつ。

「さすがになあ。あれはオレでもきつこからな。己の力に恐怖するつて言うのはつまり制限が出来なくなるからだらう? オレはその開眼だけ、コントロールを失う可能性があるから怖いんだよ」

薪は少し悔しそうに言った。

「何で急にこんなこと聞いたんだよ?」

薪がたずねてきた。話に区切りがついたからだらう。いつか聞かれるかと思っていた穂琥としては回答に少し困った。答えるつもりはあまり無かった。そんな穂琥の様子を悟ってか薪はそれ以上の追求はせずにその質問を打ち切った。

移動をするために薪につかる。

これから起る悲劇。穂琥の心が悲鳴を上げる。そして何より薪の心が限界を超える。押さえ込んでいた我慢の鎖が音を立てて砕け散る。鎖で縛られていたものが巨大な音を立てて外に湧き上がってくる。そんな薪を穂琥は目の当たりにする。経験したことの無い驚きと恐怖。そして悲しみが穂琥を襲うのだった。

## 第一十六話 爭いを避ける理由

移動した先は荒野だった。人に見つかってしまってはひとたまりも無い。ゆえに眞稀でその全貌を隠しているのだ。開け方を疑問に思つた穂琥だつたが、薪は向こうが招いている以上、勝手に開いてくれると言つ。

薪の言つたとおり、何も無い空間が勝手に歪んで誓茄が中から出でくるのが見えた。

「会いたかったわ！中々外に出してくれなくてね」

誓茄は薪を見て嬉しそうに笑つた。薪は主とやらで会わせてほしいといつと誓茄は少し悔しそうに笑つた。

「あら、もう主の話？せつかちね  
早く用を済ませひ」

中からせりて圭が出てきて誓茄を不機嫌にさせた。わかっていると誓茄は機嫌悪そうに答えると戦闘態勢に入る。

「用？」

「以前言つただろ？その娘を預けてほしいと」

圭が冷たく言い放つ。薪が額に力を入れて渡すわけが無いと答える。

「ええ、大切なのはわかるわ。でも奪ひのー。」

誓茄が刀を取り出して薪に飛び掛る。薪は一気に刀を一本出して一

本で誓茄をはじき、気配なく近づいていた圭をもう一本で弾き飛ばす。

「鼓斗、斬れ！」

吹っ飛びながら圭がそう叫んだ。ふと後ろに眞苞祇の気配。鼓斗が刀を振り上げているのだった。後ろを取られたのもかわらず薪は軽々と鼓斗をはじき返した。空中に飛ばされた鼓斗はふと回転して地面に着地した。

「へえ。いい刀だな」

「ああ、舞姫と散姫だ。どちらも美しい『姫』だらう？」

薪の言葉に鼓斗はのどを鳴らすように笑った。

「確かにいい『姫君』だなあ」

「でもさすがに空。いきなり序盤で己の所有する刀を全て見せてしまうなんて」

薪の持つ刀を見て圭が言い放った。それに無言で返す薪だが、誓茄が高く笑った。

「あら？ セウカシラ？ 彼は強いわよお？ 一本だけなんてあり得ないわ」

眞苞祇は己で有する刀の数には限りがある。別に一祇が有している刀に限りがあるわけではない。ただ、手荷物としてもてる刀に限りがあるというだけのこと。簡単に言えば人間が筆箱に入れて持ち歩ける文具の数に限りがあるように眞苞祇にも一度に持てる刀に限りがあると言つこと。

本来なら大体1本から2本。多ければ3本持つことも可能だが。懲夸ともなれば話は別だ。懲夸くらいになればたやすく6本は所有できる。しかし、それがばれてしまつては懲夸とばらすことになる。それは出来ない。

ゆえに、露見できる刀は3本まで。その場に合わせて刀を選ぶ必要がある。そして今一気に一本出したのは相手の数が多いからだ。そして何より今出した『姫』の刀は薪の意思とは関係なく相手を迎撃できる特殊な刀。無論、薪の真意にそぐわない行為はしない。それがために突っ込んできた誓茄、圭、鼓斗に怪我の類が無いのだ。

穂琥を奪うまで主は顔を出さないらしい。全く腹の立つ相手だ。穂琥に恐れを感じているのだろうか。だとすれば大したものだ。穂琥の底知れぬ力を感じたことになる。だとしたらなおのこと、穂琥を奪わせるわけには行かない。

目の前に刀を構える薪。そしてそれ見ている穂琥の心に闇が陰る。争いを嫌つた薪。その理由。無論、傷つけて失いたくないということは知つている。しかし、そういうことではない、そういう問題でもないということを穂琥は思い知つた。

以前、台所で指を切つたことがあつた。眞兜祇のクセに包丁<sup>トコ</sup>ときで指をざつくりと切るなど何事だと怒られたが、そう言いつつも治療をしてくれた（本来なら自分で治せるがわがままを言って薪に治させたというのが妥当）薪を見て穂琥は首をかしげたことがあつた。このとき初めて薪の療蔚の技を正面から見たのだが、薪の目が明らかに泳いでいるような気がしたのだ。

治してくれた後は傷口も何もなく、怪我をした痕跡が全くなくな

つっていたので気分が上々だつた。しかし、やはり氣になるのは薪の反応。慣れるはずの無い療蔚の技はやはり堪えるのだろうか。

「ねえ・・・まさかとは思ひナビ・・・」

穂琥が途切れながらに薪にたずねる。

「血、怖い?」

穂琥の放つた言葉に薪は不機嫌そうに田をそらした。あ、図星だ、と思つた穂琥だったが小さく不機嫌そうに怖いと薪が言つたので穂琥はぎょっとした。

「当たり前だわ。トライアマだ、馬鹿。餓鬼のときにどれだけ血を浴びたと思ってんだよ」

穂琥はそれを聞いてぞつとした。そうだった。わずか三歳という幼い薪の苦痛の出来事。懸念を潰そうと企んだ眞砲祇の眼に捕まりやりたくも無い殺害を何千何万と犯してしまった薪にそういう類の恐怖心があつてもおかしくは無かつた。

それでも過去に幾度も薪は先決を浴びる羽目になつてゐる。その全て、何事も無いかのように振舞つてゐる。以前、穂琥の初めての実戦に出たときもそうだった。

「ばーか。怖いからに決まつてゐるだろ?」

「え?」

「はつきり言ひナビ。この世の中で起きること全てを含んで何が怖いってそりやあ穂琥よ。お前を失うことだ。それに勝るものは無い。だから血を見る羽目になつてもお前だけは護るんだよ。わかる

か？」

「は、はい……」

「つっても、血が怖いのは事実です。認めます」

そんな会話をしたのを思い出す。そり、薪は血液恐怖症だ。おそらく穂琥が田の前にいたからあの程度の震えで済んだのだろうが、もし、気を抜いてもいよいよなら昏倒していてもおかしくないくらいの恐怖を『血』から感じるようだった。

血が怖い。それはすなわち命を削ること。だから怖いのだ。そしてあのときの惨劇を脳裏に思い浮かべる羽田になるのがさらに一層恐怖なのだろう。

だから怪我をしたら治す。そう決めていた。でもやつぱり薪はすごい。これだけ刀を振るっているのに未だに誰も傷ついていない。

「ねえ。馬鹿にしてこりの？」

圭が薪に尋ねる。鼓斗のほうも斬らないとはどうじつだと尋ねてくる。如何に敵といえど殺したくは無いと薪が答えると誓茄が笑い声を立てた。

「その心がけ、立派だわあ！ 尊敬する

「偽善事だらう」

鼓斗が誓茄の言葉にかぶせるように言ひ。誓茄は少しだけ不機嫌そうに鼻を鳴らした。

圭が刀を振るつてくる。薪はそれをはじきながら再び襲つてきた鼓斗と誓茄の刀も受け流す。その華麗さに見惚れるものがある。誓

茄が固執して薪と戦いといった意味がようやく理解でき始めた圭と鼓斗だった。

穂琥はただ見ていてことしか出来なくてなんとももどかしい気分になつた。結局、自分には何も出来ないのかも知れないと思つた時、途方も無い悲しみが込み上げて来るようだつた。そんな折、ふつと風が吹いてそれが急に突風と化した。その勢いに押されてよろめいた。よろめいた足の先に地面は無かつた。大きく裂かれた地面に溝が出来ている。穂琥は流れるように底に落ちて行つてしまつた。

「穂琥！！」

「あのまま我が主の下へ。邪魔はさせない」「邪魔しているのはどっちだ！」

薪は勢いよく刀を振つて鼓斗を飛ばす。しかしもう遅く、裂けた地面はどこにも無かつた。

「手合わせ、願う」

鼓斗が低くうなるようにうつり言つた。薪は仕方なく刀を構える。

穂琥・・・無事でいてくれ・・・すぐ・・・すぐに行くから・・・！

薪の刀を握る手に自ずと力が入る。誓茄と圭はすでに主の下へ戻つたらしくこの場にはいなかつた。薪は鼓斗を強く睨む。そして小さくため息を吐いた。

「わかった。ならオレも少しは本気を出そつ」

「替装、するのか？」

「ああ」

薪はふつと瞼を閉じて眞稀を入れる。すっと小さな風が起り薪の服装が変わる。

もとより戦うつもりは無い。今はただ、穂琥を探すことだけしか考えていない。ならばここにはこいつと刀を交える必要は無い。散姫をしまうと舞姫に集中する。そしてその集中して溜めた眞稀を勢いよく爆発するように放送出する。放たれた眞稀は地面をえぐり大きな爆発を引き起こした。

「くつ・・・・!」

鼓斗のうめき声。鼓斗は眞稀を高く上げ、辺りを覆っている土ぼこりを振り払った。そこに薪の姿は無かった。

「逃がしたか・・・・」

口惜しそうに鼓斗は表情をゆがめた。

穂琥。無事でいてくれ。ただひたすらに切にそう思つて走る薪。

## 第一一十七話 暗黒の世界の紛い物

どの位走ったか自覚が無い。穂琥の眞稀を探してこうして駆けているというのに穂琥の眞稀を見つけることが出来なかつた。桃眼を使えば見つけることが出来るかも知れなけれど、今、それを使って力を消耗するわけには行かない。なんたつて薪は戦鎧。普通の開眼よりも桃眼を開眼するほど疲れるものは無い。

「穂琥・・・」

ひたすら薪は走る。己の感覚を信じて。

薪が走っている時、穂琥は闇に埋もれていた。

「ハリは・・・ビリだろ?」

真つ暗で何も無い。光の一筋も無い闇が全てを包む場所。そこをひたすら歩きながらなぜ自分がこんなところにいるのかわからなくて記憶を思い起こす。地面が割れて落ちて。気がついたらここにいた。記憶をたどつても意味は無かつた。

暗闇に溶けた身体が冷えて浸食されていく感覚を覚える。その恐怖が穂琥を震えさせる。

薪・・・助けて・・・

穂琥は蹲つて眼を強く閉じるのだった。

ふつと暖かさを感じて眼を開ける。そこには見慣れた明るい風景。

「え・・・? 城?」

そこは穂琥が生まれた場所。眞匏祇の世界。呆気にとらわれていると薪の呼ぶ声がして振り向く。

「なにぼけつとしているんだよ」

「あれ? 私、地球に・・・」

「はは。もう終わって帰ってきたんだ。お前がやったんだぜ? オレも驚いたよ

「え?」

薪は明るく話す。その笑顔がまぶしいくらい。

「何だ、覚えていないのか?」

「・・・う、うん・・・」

薪は困ったように笑った。

暗闇にとらわれた穂琥を何とか助けようとした薪ではあったが力及ばず救出することが出来なかつた。そんな時、膨大な力を発して穂琥は闇から生還した。そしてそのまま敵を叩き、鎮圧に成功した。無論、麻臨の奪還にも成功した。

「私が・・・?」

「そうだよ。すぐかつたよ

全く記憶に無いけれど、無意識下でそれらを成し遂げたのならあるいは。

「そこ」でな、穂琥。お前はもう自分だけの力で生きていける

「え？」

「だからもうオレの力なんて必要ないんだよ。自信持て？」

薪は相変わらずの笑顔でそういう。穂琥の心がざわついた。

「だからここから出て行け。お前だけで十分生きていけるから」

薪の言った言葉に穂琥は愕然とした。いつまでも一緒にいてくれると言つてくれたのに。離ることなんてあり得ないって……。薪はさつと踵を返して歩き去つてしまつ。

ふつと気がつく。辺りは急に暗くなり闇に飲まれた。一体どういうことだ？ 考えて穂琥は辺りを見回す。そしてまた急に光が現れて城にいる。

「これ……誰かの術？！」

穂琥はこれでやつと気づいた。自分は誰かの術に落ちてしまつているのだと。

穂琥は地面に膝をついて耳を塞いで必死で頭を振つていた。何度も同じように薪に拒否される映像。見捨てられておいていかれる。いくらそれが紛い物であつてもそれが穂琥に堪えないわけがない。震えてもうやめてほしくて。涙がこぼれる。そんな時。明るくなくて暗闇の中。薪がこちちらに走つてくる。

「穂琥！」

「薪！－助けて！－」

必死で手を伸ばす穂琥の手前で薪は足を止める。それから鋭く突き刺すような冷たい眼を穂琥に向ける。

「弱いなあ。こんな簡単な術にも引っかかるなんて。やつぱりお前、才能ないよ」

穂琥は田の前が暗ぐのを感じた。

ああ、この薪も偽者だ。敵の作り出した幻術だ。穂琥はひたすら耳を塞いで否定をし続けた。

「邪魔なんだよ」

「消えてしまえばいいんだ」

「所詮はその程度だろう?」

次々と木霊する薪の声に穂琥は涙が止まらなくボロボロとこぼれた。悲しみと恐怖。心が崩壊に向かう。くつと力を込めて刀を取り出す。そして目の前の幻術に刀で切りかかる。それは影となつてすっと消えた。あちこちにいる薪の偽者を切る。

「何するんだよ!」

「待てよ! オレは本物だ!」

「邪魔なんだよ!」

「気づけよ! 幻覚じやないんだ!」

「弱いくせに!」

偽者だつてわかつているんだ。だからもうやめて。それ以上薪の言葉を汚さないで。

穂琥はただむやみに刀を振るつた。

## 第一十八話 心の重さ

穂琥・・・お前はどうしているんだ・・・!?

ひたすら走り続ける薪。途中途中で眞砲祇に出会つたがその全てを突き飛ばして今走つている。ただひたすらに。ただ下に階段を駆け下りていく。さすがの薪でも息が上がつてきた頃、薪はあまりの衝撃に足を止めた。

「ほ、穂琥・・・?！」

今感じた馬鹿に大きい眞稀。確実に今のは穂琥のもの。やつと感じることの出来た穂琥の存在だが今の眞稀からして薪に安心感と安堵感を与えてはくれなかつた。

階段を下りると広いロビーのようなところに出る。そこには穂琥の眞稀を感じたから。暗がりで周囲は見づらいが確実にこちうに歩いてくる影がある。

「ほ・・・く・・・?」

確実に穂琥の姿をその目に捉えたとき、薪は絶句した。

哀れな我が妹の姿。田に生氣はなく、刀を地面に引きずつてこちらに歩いてくる。そのまとう空氣は紛れもなく殺氣。薪はピリッとしたその感覺に冷や汗をかく。穂琥がこんなに大きな殺氣を放つなど今までにないし、これからもないと思っていた。一体何が。

「くそ・・・術中、つてことか」

穂琥に向けて刀が振るえる訳のない薪は握っていた舞姫を少し下げる。

「よつひんや、我が城へ」

聞きなれない声がしたのでそちらを睨む。おれらへの声の主こそ『主』と呼ばれていた男だろ。うつすりと浮かび上がる影。それに薪は殺氣を込めて睨む。

「我の名をお伝えしなかつた事を深くお詫びいたします。我は李湖南と申します」

「お前・・・以前に会ったよな?..」

「さすが、スウホラ様! いえ、シン=フォア=エンド様、とお呼びしますか」

影の口元がにやっと釣りあがつたのが見えた。のどを鳴らすように笑う。

「穂琥に何をした」

「何、少しいじつただけですよ。簡単ですね? 心に迷いや不安があるとそれを少しつづくだけ簡単に壊れてしまう。いや、実に脆い」

「穂琥を返せ・・・!」

薪の言葉に李湖南はただ笑うだけ。

「ただの手こまに過ぎませんよ。でも貴方は違う。配下、いえ、仲間になつてはいただけませんでしょうか? そつして頂ければ穂琥様も無事にお返ししましょう」

「承諾すると思つてこられるのか?」

「でしううね。穂琥様を無事に返すという保証もないですね。良いでしょ。ではまあ、死合いしてもらいましょうかね」

李湖南はただ笑う。薪はふつと殺氣の感覚を得る。そして下げていた舞姫が勝手に振りあがる。

高い金属音。どこまでも洗練とされた美しいその木靈する響き。しかしその響きは死の誘い。刀と刀が激突する命の駆け引きの音。穂琥がすさまじい勢いで刀を振るつてくる。こんなに殺意を抱かせているものは一体何なのか。

「穂琥・・・！目を覚ませ！穂琥！」

「いやだ・・・全部嘘だ、何もかも・・・！」これは薪ではないんだ・

・・・！」

ただひたすらに否定を繰り返す穂琥の目にもはや正確にものを推し量る力など残つていそうには見えなかつた。

ひたすら防御に徹する薪と攻撃を繰り返す穂琥では分が悪すぎる。圧倒的に不利なその状況に薪はついに右腕を切り裂かれる。飛び散る鮮血がいやに美しく見えたのはなぜだろうか。

全てが幻。だからその全てを壊すんだ。何もかもなくなつてそしてやつと会えた薪がきっと本物だ。だから今は目の前に現れるモノは全て斬る。何を言われても。

一体どうしたら正気に戻すことが出来るのかがわからない。李湖南を叩けば何とかなるだろうか。いや、穂琥の目からそういう気配は感じない。最早これは暗示の類。穂琥自信に何とか正気に戻つて

もらわない限りきっと無意味。故に薪は今ひたすら穂琥の刀をよけることしか出来ない。穂琥の刀に迷いはない。いつもこのくらいなら自信だつて持てるだろうにと皮肉な笑いを浮かべる薪。

どれだけ斬られた事か。ひとまず慾夸紋だけは斬られないようだと必死によける。あそこにかすればそれだけで致命傷になる。それが巧伎の残した薪への呪い。そうやって庇っているものが多くすぎる薪に迷いのない穂琥の刀は簡単に切り裂いてくる。

薪の身体はすでに傷だらけだった。もう早く動くことはきっと出来ない。今、無理に治療してもきっと意味はない。とにかく穂琥を正気に戻すことが最優先。

穂琥にかかっている暗示のようなものが何であるのか、それはわからぬけれどおそらく目の前の薪を薪ではないものだと認識させられていることが原因だろう。ならば自分が本物の『薪』であるということさえ穂琥にわからせることが出来ればきっとどうにかなるかもしれない。そう思つて薪は思考を始める。いかにして穂琥の意識を覚醒させるか。

「何・・・!？」

突然李湖南が薪と穂琥の間に割つて入り薪に刀を振るつた。そのあまりの速さに薪は驚いたが別に李湖南が早いわけではない。穂琥によるダメージで薪が遅くなつていいだけだった。

「甘いですね。前慾夸とは大違い、ですね。これも大切な妹君を護るために、ですか？」

李湖南の腹の立つ笑いに薪は苛立ちを覚える。李湖南は急に屈むと

す！」い勢いで突つ込んできた。

氣味の悪い感触が右の脇腹に走る。命を掠めるよつた気持ちの悪い感覚。李湖南の刀が薪の脇腹を突き刺す。そして勢によく引き抜く。少しだけふらついた薪は何とか体制を整える。あと少し。あと少し上であつたなら魂石に当たつていた。薪は貫かれた場所に手を当てて肩で息をする。

李湖南が穂琥に笑いかける。しかし穂琥の目にきつと李湖南は移つていない。ただ恐怖した穂琥の目に映るのは『紛い物の薪』だけ。

「くそ・・・。お前、穂琥に何をしたんだ・・・！」

薪の声を聞いて李湖南は面倒くさそうに笑つてため息を吐いた。

「先ほども言いましたでしょう。心の隙間を少しつついただけ・・・  
「それ以上！」まかすな！何をした！」

薪の怒号に李湖南から笑みが消えた。

「ふう。如何に慈夸といえどやはり子供は子供、かな？良いでしょう。お教えしましよう。この娘にとつての恐怖。それは貴方を失うこと。見捨てられること。だからその苦痛に浸つていただいたまで。何度も貴方に見捨てられる幻覚をお見せしたまでですよ」

李湖南の言葉に薪は手が震えてくるのを感じた。穂琥に、なんてまねをしてくれたのだと、怒りで震える。

今まで挑発していた慈夸の子供から感じられるオーラが今までと異質になつたのを李湖南は感じた。俯いている薪。静かにとても静

かに。それでも苛烈な凄まじい怒りの気配を纏つている。眞稀が膨張して薪を取り巻く風となる。

「何でしょ、うね・・・?」

李湖南は首をかしげる。そして刀を構えている穂琥にそっと耳打ちする。

さあ、田の前の『薪』を倒しなや。そうしたらその悪夢から開放されるのですよ

ふつと聞こえてきたその声を信じていいのか悪いのか。わからなって穂琥は泣く。それでも幻覚が消えてくれる可能性があるのなら、刀を振るおうではないか。

穂琥の振り上げた刀が視界に入る。そしてこちらに走ってくる穂琥の姿も目に映る。そして薪は俯いていた顔を上げて一瞬だけその後ろにいる李湖南を睨む。それからすぐに穂琥へ視線を移す。こちらに突っ込んでくる哀れな妹の姿。薪は持っていた舞姫を地面に落とす。そしてその諸手を広げる。

氣色の悪い感覚。身体を貫く刀の感覚。それでもそんなことはどうでもいい。薪は広げた腕の中に穂琥が飛び込んでくるのを待つてそつと後から包み込む。

「そんなに臆するな。オレはどこにも行かない。大丈夫。お前が何をしようとも、どんなことになろうとも。オレはずっとお前のそばにいるから」

薪の声が部屋に響いた。まるでその時だけ時間が止まったようなま

つたりと流れが遅い時間だった。

「し・・・ん・・?」

「ああ、そうだよ。もう大丈夫。助けに来たから」

生氣のなかつた穂琥の目に生氣が宿る。そして強張つている手から力が抜ける。それと同時に薪に刺さっていた刀が光の束になつて消える。薪が強く抱いている感覚がする穂琥。やつと本物の薪に会えたのだろうか。

「はつ！？し、薪！？」

やつと感覚が覚醒してわかつた。自分が薪に一体何をしたのか。それに気づいて穂琥は抱きつく薪から離れて傷を見ようとしたが薪が離してくれなかつた。

「し、薪・・・？私・・・あの・・・傷を・・・・・・」

「悪かつた」

「え？」

「オレがお前を不安にさせた。もつとちゃんと。こんなことなんとも思わないくらいちゃんとしていればよかつたよな。もう一度どんな不安はさせないから。一度と」

薪の声がひどく弱い。耳元でしゃべっているから聞こえるものの普通にしていたらその声はきっと聞こえなかつたものだらう。そして薪はそつと穂琥から離れるとそのまま李湖南の方へ歩いていく。そんな薪の目を見たとき、穂琥はぞつとした。表現の出来ない恐怖。薪の目はいつもと違う『漆黒』の瞳をしていた。

「い、黒眼・・・！」

## 第一十九話 黒き目の強大なる力

薪が以前、紅眼よりも使いやすいといった力。薪の有している最高峰の力。ただ、その使い方を誤つてはならない危険な力である。

黒眼、と穂琥がもらしたことで李湖南も少しあせりを見せた。その焦る意味もよくわかる。恐ろしいまでのその纏う気配に完全に呑まれてしまつてはいる。呼吸さえも忘れさせる圧倒的な力。その力を前に穂琥は心底恐怖した。今まで出会つてきたものの中でもここまで凄まじい殺氣と眞稀を感じたことがない。それを放つているのが薪であるといふことが恐ろしくてたまらない。

伏せがちの薪の目が完全に上を向いて李湖南を捕らえたとき、恐らく李湖南は終わる。生死は関係なく。とにかくこの李湖南という核は完全に壊れる。それだけにどぎまればいいのだが。穂琥は薪にそんなことをさせたくなかつた。恐らく自分が原因。あんな小もない術に掛かつて薪を怒らせたことが原因だらう。だから今の薪を止められるのは穂琥だけかもしれない。穂琥は必死に考える。どうすれば薪を止められるだらうか。

考えるまでもなかつた。もうすでに遅かつたのだ。何とかしなくてはと思った直後に、李湖南の耳に耐えない絶叫が迸つた。その声に穂琥は身体の奥から震えが来た。そして耳を塞ぎたくなつた。

黒眼の能力。穂琥がチートだ、反則だと意味がここにてわかると思つ。この『眼』は他の眼とは異なりただ『合わせるだけ』で相手を押しつぶせる最強の、そして最厄の力。視線がぶつかつた瞬間に相手へ苦痛を与える。己の眞稀を相手へ強制的に流し込み、相手の眞稀の流れをめちゃくちゃにする。それは生きたまま身を切られる

「…よりも苦痛のこと。人間で言う全身の血液が一気に逆流を始めることのこと。あるいは血管のかに大量の水が浸入することに等しいかも知れない。

一層死んでしまったほつが樂かと思えるくらい苦痛が全身を駆け巡る。とめどなく荒れ狂う薪の眞稀が全身を確実に崩壊していく。

「薪！やめてえ！！」

穂琥の悲痛の声が薪の耳に届く。はっとして薪は閉眼する。しかし薪の眼からは無茶な開眼による涙がとめどなく溢れていた。意識が狂う。薪は閉眼したは良いがどこを見て良いのかわからずぼけた視界が広がるだけだった。そして意識が少しだけ遠くなる。これが黒眼のデメリットかもしれない。己の眞稀を相手へ強制的に流し込むということは己の眞稀がどんどん減っていくこと。力を失うということ。無論、時間が経てば眞稀など回復するが冷静さを失つて完全に怒りに任せて押し込めばその量を回復するのにはずいぶんな時間が掛かつてしまふことだらう。

穂琥は倒れた薪を抱えて崩れ落ちる。

「馬鹿！薪の馬鹿！馬鹿馬鹿馬鹿！…」

薪の頭の上で涙をボロボロ…ぼしながら穂琥が叫んだ。桃眼を開いて薪を治さなければ。開いている眼からは疲労による涙が溢れ出ている。しかしその眼は焦点が合っておらず穂琥の不安をあおつた。

物音がしたのはいい、薪を治そうとしたときだつた。あわてて振り向くとふらふらとしながら立ち上がり立つてくる李湖南の姿だつた。

「そんな・・・・!？」

「ふふ・・・・さすが、としかいえませんね・・・・ぐふつ・・・・」

李湖南は吐血をしながら笑っていた。恐らく壊しきる前に穂琥が薪を止めたので李湖南のほつも重症になるまでもなかつたのだろう。それがよかつたようなよくないような。穂琥は複雑な心境に駆られていた。

「薪様の治療はさせませんよ・・・・」

弱い声で李湖南はそういった。穂琥はその言葉にもう攻撃をする。確か、李湖南は薪を仲間に入れたいと思つていたはず。それならば今は治すことを最優先にするべきだと。

「いや・・・・今の、状態のほつが・・・・洗脳しやすい。治すのはそれからだ・・・・もし、それで・・・・失せてしまつよう、なら。いいません」

李湖南は途切れ途切れにそういう。穂琥の眼にぐっと力がこもる。

一体自分は何のために薪に付き合つてもらつて修行をしたのだろう。これじゃ意味がないじゃないか。結局薪を護ることなんて出来ていらないじゃないか。護られるばかりで。傷つけるばかりで。

「こんなことをするためにここについてきたわけじゃない。何も出来ない自分が惨めでしょうがない。悔しくて仕方がない。」

眼にくつとちからを入れる。さあ、開眼だ。こんな情も徳もない馬鹿には付き合つてなどいられない。早く、薪を助けなければならないのだから。

李湖南が飛ばしてきた眞稀。穂琥はそれを触れずに微動だにせずに飛散させた。

「何！？」

突然の穂琥の眞稀の向ふに李湖南も言葉を詰まらせた。

「私はもう、嫌なの」

薪を傷つけて苦しい思いをさせて。辛い事は全て薪に押し付けることが。ゆっくりと立ち上がった穂琥の瞳は柔らかく閉じられたままだった。

「黒眼を受けた貴方を助けようと思つた。幾ら敵でもそんなことは薪の意思に反する。でも。それももうやめる」

「ほつ？ ではどうするかね？」

李湖南は笑う。少しだけ汗ばんでいることからまだ身体の中に薪の眞稀が残っているのかもしれない。それでも今はどうでもいい。

薪は傷つけることを極度に恐れた。敵でも味方でもどちらでも。でもそんなこと弱い穂琥には言えない。過去の過ちのない穂琥には理解できない。薪がどんなにそれを嫌だといつても薪をこんな風に傷つけて苦しめているような奴を野放しになんて絶対にしたくないし、簡単な刑罰で終わりになんてしたくない。だから、薪の代わりに自分が鬼になる。どんなことも咎める鬼になる。

「私は貴方を許さない」

穂琥の強い言葉。李湖南は一瞬だけすくんだが、指をぱちんと鳴らすとその周りに眞匏祇が集結した。

「許らないからなんですか？ 我の周りには信頼しゆる壁がありますよ？」

「信頼？ 果たして誰のことを言つてているのかしら。笑わせないでよ。己を護るためにだけの『手駒の盾』でしょう。そんな安い壁で私の怒りを防げると思わないでよ。言つたでしょ。私は貴方を絶対に許さない」

穂琥の苛烈な力が当たりに迸る。

薪がいなければ何も出来ない。それくらいわかっている。でも逆に。薪がそこにいてくれれば。薪が後ろで見守つてくれていれば。何だつて出来る気がする。

「何を世迷言を。そもそも傷つけたのはあなたでしょう？ 穂琥様」「ええ。そうよ。だから私は私を一番許さない。だから本当ならここで死んで詫びたいくらい。でもそれをしてはならない理由がある。それにそんなことをしたら薪が嘆くわ。私は生きてこの罪を償う。薪と同じように」「元気だ。

穂琥のその覚悟の眼を見て李湖南は怯んだ。

「こんな下らない争いをさせたこと。穂琥に刀を向けさせたこと。そして何より、黒眼を開眼させたこと。この三つ。これを咎として今から本気で李湖南を叩く。李湖南が今、ひどく元氣い。それでも今このやられた三つ分以上は決して叩けない。

遣られた分はやり返せ。その代わり遣られてない分は決してやる

な。

それが薪の意思。薪の想いなら。それを否定するような行為はしたくない。だからこの散發に全てを載せて全てを込めて終わりにする。

絶対に許さない

穂琥の眼がゆっくりと開く。この長い時で溜めた眞稀が『眼』へと力を変える。その開いた眼を見て李湖南は言葉を失っていた。見たこともないその『眼』に恐怖心を煽られていた。

このとき。ぐつたりとしていた手がわずかに動いたのを誰も知らない。

「さあ、お仕置きの時間だよ」

穂琥の手がゆっくりと上がる。眼からその穂琥の手へと眞稀が流れこむ。その力の大きさは計り知れないものだろう。

「大歳！」  
たいさい

穂琥が声を上げた瞬間、穂琥の突き出した手から眞稀が放出される。李湖南は中を舞った。周りを固めていた眞袍祇たちはひどく驚いた顔を青ざめさせて今出来た出来事を理解しようとしていた。

「太白！」  
たいはく

有無を言わさず一言田が穂琥から発せられる。それに伴って李湖南は落ちかけていた身体がさらに上へと吹っ飛ぶ。そしてむなしくも地面に叩きつけられる。

「ぐ・・・ーーー」、こんな」と・・・たつたの一発でこれほどまで・  
・・。いや、だが一発でこれ。後一発ができるかな?」

ふざけた笑いが李湖南の顔に浮かぶ。しかし今の穂琥にその笑みは  
見えない。笑つていればいい。好きなだけ余裕をかましていれば  
い。知らないのだ。次に撃つ穂琥の込める眞稀の量を。

「黒眼を開眼させた罪は重いわよ」

穂琥の重たい言葉に李湖南は笑みを消す。鮮烈だが鋭い碇を含めた  
穂琥の眞稀は周りにいる眞匏祇たちの膝を折らせた。李湖南だけは  
かろうじてその場に立っていた。しかし、それだけ。立っているこ  
とで精一杯だった。

「本当はあなたを殺してやりた。でも薪は生きているもの。命はみ  
な平等。だからあなたを殺すわけにはいかないの」

穂琥は感情のあまりこもっていない表情で李湖南に向かつて最後の  
眞稀を放つ。

「太陰ーーー」

放たれた眞稀に李湖南は宙を舞つた。どさりと地面に叩きつけられ  
た李湖南は起き上がりつてこなかつた。穂琥はそつと手を下ろして目  
を細める。本当だったらもう一発打ち込んでやりたい。でも、だめ  
だ。これ以上遣つてしまつたら本当に殺してしまうかもしれない。

「ひやはっ・・・ひやははははーーー」

穂琥は驚きで固まつた。そして勢いよく振り向く。すると寝そべつている状態で李湖南が狂つたように笑っていた。穂琥はその笑い方にだんだん怒りがわいてきた。

「何よ！」

「ひやははは！ 我は生きている！ 何度もお前らを追い込んでやる！ 何度も苦しめてやる！ ひやははははは…！」

まだなのか？ こいつはまだ懲りていのいか？

穂琥の中にはけたり狂う怒りの炎が穂琥の頭をおかしくさせた。もう、こんな奴、この世から消えてしまえばいい。そんな風に思った。そしてぐっと手に力を込めて眼から眞稀を送る。四発目の攻撃。

「歳け・・

言い切る前に言葉が切れる。驚いたからだ。後ろからせつと包むようにして穂琥の手に血が通つていないのではないかと思えるくらい冷たいでも、どこか温もりを感じる手がかぶさる。そしてあげていた手をそのまま下ろされる。

「もう止せ  
「し・・・ん・・・？」

後ろから抱きかかえるように穂琥の攻撃を止めた薪。

「これ以上はだめだ。そんな勢いのを当ててはだめだ。オレなんかのために穂琥がそこまでする必要はない」

聞き取れないくらい小さな声で薪は言つ。途切れ途切れ息が荒いこ

と見ると恐らく経っているのもやうとなのではないかと思えるほどだった。

穂琥の手を下ろすと変わりに薪が手を上げて未だに氣味悪く笑っている李湖南に向けて、一瞬眞稀を放つ。その瞬間、李湖南は静かになつた。

「この程度の眞稀で氣を失うんだ。もういい……」

眞稀を放った手をそのまま穂琥を抱く。穂琥は冷たい薪の体温が怖かつた。このまま消えてしまうのではないかと思えるくらい冷たかつた。いつも暖かい薪のぬくもりが。

「うん。わかった。もう帰るわ」

「ああ」

薪と穂琥は周りのものに背を向けて帰路の道を行く。それと同時に李湖南の力を失ったこの建物が今にも崩れ去ることを理解した李湖南の哀れな部下たちも急いでここから脱出することを選んだようだつた。

「どうしよう……」

穂琥は小さな声で呟つ。隣で担いでいる薪はすでに意識を手放してしまつている。先ほど意識を取り戻したことが奇跡なほどだつた。建物はすでに崩落を始め出口を見つけることが出来ない。穂琥に移動術は使えない。使えるようになつておけばと後悔したところで今はも出來ない。穂琥は急いで走つた。上を田指して。

## 第三十話 護り護られ交差する想い

何度も繰り返す地鳴りと崩落音。階段は崩れ落ち、薪を抱えて上に行くだけの力が穂琥には残っていなかつた。先ほどの開眼が桃眼であるはずがない。そして穂琥の提唱した言葉は三つ。残り五つ。つまり全部で八つ。この八つの提唱を一つ一つ言つていいくごとに眞稀が倍増していく。しかしそれは同時に使用者にも負担をかけることとなる。

出口を探して走っている穂琥の耳にものすごい爆発音が聞こえた。地震が起きたような足元のぐらつき。そして嫌な予感がする前に穂琥の足元は壊れて崩れ落ちた。極度の疲労のせいで落ちている間に意識が薄らいだ。

地面との接触感を得る。あまりの疲労のせいか、痛みを感じなかつた。

ああ、もうさすがにだめだな。このまま瓦礫に埋もれてしまうんだ……

うつすらとあいていた眼を完全に閉じて。身体の力を抜いた。瓦礫が落ちてきて全身にその痛みが走るのを待つ。

いつまで経つてもその痛みがこない。それどころかどこか暖かい眞稀を感じる。慣れ親しんだ落ち着きのある眞稀を。穂琥はそっと眼を開ける。

「薪……？」

「よつ」

胡坐をかけて座り地面に手をついている薪の姿が眼に入った。辺りを見回せば薪の作った結界でドームが出来ており瓦礫が落ちてくることはなかつた。

「薪ー良いよーもう・・・！私が遣るから・・・！」

「何言つてんの。お前じや無理だつて。纖細な技だし。特に今の穂穠の眞稀じや出来ないよ」

薪の優しげな声が穂穠に耳に届く。先ほどとは違つてはつきりと聞こえる声。

「あらがとう」

薪の声。はつとして薪を見ると薪は地面から手を離して眞稀を解除する。すると瓦礫は再び開いた空間に捻じ込もうと振つてくる。そしてそれらを粉碎して何とか形成を保つたところで薪は一息ついた。

「さて。何があつたかわからないんだ・・・。お前、わかるか？」

「えと・・・」

穂穠は出来うる限り正確に物事を伝えようと思つた。それがひどく難しいことだと知つて。李湖南が憎い。だからどうしても平等な言葉を言つことが出来ない。でも薪はそれすらも汲み取つて話を聞いてくれていた。

とにかく言えることは言つた。ただ、無意識だったので李湖南に放つた時に言つた言葉までは思い出せなかつた。薪はそれを眼を伏せて聞いていた。

「当てようか」

「え？」

「大歳、太白、太陰。 そうだろう？」

「え・・・あ・・・うん！ そうだ！」

「まあ、オレも少しだけ覚醒していたからなんとなく聞こえた気がしたし、お前の『眼』から感じる気配がそれだからきっと間違いない」

「え？」

薪はこんな状況だというのにどこか嬉しそうに微笑んだ。それに穂琥は首をかしげると薪は過去に黒眼に匹敵する力を紫火が有していましたと話をことを語つた。それが今回穂琥の使った力。

「名前を白眼」という

薪はそつと微笑んで自分の目を押さえてどこか切なくどこか嬉しそうに言う。

「母上の血だ。穂琥はそれを強く受け継いだ・・・。よかつた、母上の力を継いでくれて。父上ではなく」

薪の最後の言葉は皮肉に満ちている。それは逆に薪自身をあらわす。穂琥の正反対、つまり父の血を濃く引いているのが薪であるから。穂琥はそんな薪の心を感じ取つて小さく頷いた。

白眼の力。八つの提唱を経て相手へダメージを与える強き力。最初の三つは先ほどの三つとして残りの五つ。歳刑、歳破、歳殺、黄幡、豹尾。 もっとも、これらを紫火が使つたことなどほとんどなく、歳破までを提唱されたものなど存在しない。それほどまでに絶大なる力なのだ。

「オレが思うにこの数ある眼の中で最強の力だと思つよ」

薪が本当に嬉しそうに語るその姿を見て穂琥はどんか胸を撫で下ろすことが出来たような気がした。

「さて。ここを出ないとな」

「どうやつて出よう? こんな瓦礫まみれじゃ・・・」

「あと少しでオレも回復できるからそれまで待つてて。やつしたら上に移動術で上のかり」

眼を閉じて回復にいそしむ薪の姿を見てやつと考へる時間を得る。いや、本来ならこんな考へる時間などほしくはないのだが。

果たして自分は役に立てたのだろうか? 邪魔しかしていないのではないだろうか? 薪をここまで追い込んだのは他でもない自分だ。眞稀が互いに切れてしまっている今、治療するわけにも行かずましてや寝るわけでもなく薪はただ目の前に座つて眼を伏せてじつとしているだけ。そんな薪の身体には生々しい傷で覆われている。血は固まつてゐるようだが薪の気持ち的には・・・。

「何変な顔してんだよ」

突然声を掛けられて顔を上げる。薪が眼を開けて一直線に穂琥を見ていた。そんな真っ直ぐな眼を薪に向けられて穂琥は眼を反らして逃げる。

「気にする」とはねえよ」

まるで穂琥の心を見透かしたように薪が言つ。今度は穂琥が薪を見

て薪が眼をすらした。

「穂琥は十分遣つてくれたよ。そんなくらい顔する必要はないよ」

「でも・・・薪の身体・・・」

「まだ頭はくじくじあるけど少しついたら替装してなんとかするよ」

穂琥は薪の腹に眼をやる。血で染みて真っ赤になつていて。

「わら、痛かつたけどな。李湖南の奴、思いつきり刺していくかられ」

「そりじゃなくて・・・」

「は？ オレは李湖南にしか刺されてねえもん」

「え？！」

「オレの体内には李湖南の眞稀しか残つてねえし。ところが今は李湖南にしか刺されていないって事だろ？」

眞苞祇が眞稀を込めて相手を刺した場合その刀に乗せられて相手の体内に勝手に眞稀が流れ込む。それは本当に微弱なもので少しの時間が経てば消えてしまうもの。

「だからオレは李湖南にしか刺されていない。お前がそこまで気にする必要はない」ということ。わかるか？」

「う、うん・・・」

未だに落ち込み氣味の穂琥を見て薪はため息を吐く。仕方ない。こうなつたら昔の傷口を開くしかない。

「おー」

落ち込む穂琥にじりりに意識を集中させる。そして懸念紋があるところを穂琥に見せる。懸念紋といつことは無論、毅邏の呪印もそこにある。

「はて？ オレは三歳のときに誰を殺した？」

「違う！ あれは薪じゃなくて・・・」

「それ、今のお前に否定できる権利ねえぞ」

「う・・・」

確かにそうだ。きっと状況は少し違うけれど意味合いは同じなのだろ？

「な？ 気にするな」

「・・・うん。わかった。ありがと」

穂琥の顔に少しだけ浮いた笑み。少しは落ち着けたよかつたと肩を落とす薪。

「私ね・・・思ったの」

「ん？」

薪を護りたい。それは今でも変わることはないし、これからも変わることないと持っている。でもせっかくまでの穂琥の心はひどく醜く歪んでいた。護つてほしい。護られたい。ずっと薪の後ろにいたい。散々護ると言つていたくせにいざとなつたらそんな臆病で。心のどこか奥できつと薪が助けてくれるとか思つてゐる自分がいる。いざとなつたら護つて言つするい言葉が。護つてもらえるつていう甘えた考え方だけが浮かんでくる。

「サイテーだよね」

自嘲する笑いを浮かべる穂琥。薪は動きにいくであらう身体を無理に動かして穂琥の前に来ると穂琥の頭にて置いた。

「するくない。甘えてなどいないよ」

優しい薪の言葉。じつにこの言葉を期待してしまつ自分がすでに醜い。「オレだつて思つことはあるわ。やつこつ感情は当たり前なんだよ」「薪も・・・?」

予想外の言葉に穂琥は震えた。

「おうよ。穂琥が白眼開眼したのはすごい嬉しい。オレだつてさつき、黒眼で暴走して穂琥に護つてもらつたんだぜ?」

感情なんて生きていればさまざま存在する。憎んだつていい。殺してやりたいて思つたつていい。ただ、それを自分で認めて肯定して遣ればいい。そうして自分の中にもそういう感情はちゃんと存在するんだとこつことを認識した上でちゃんと前を向いて歩いていけばいい。そうすることで傷ついた誰かを庇い護ることが出来る。護つてもうつ安堵感を知つているから護ることが出来る。それを知らないものに本当に護ることなどは出来ないのだ。

「ただ、一つだけ。今回の件で氣に入らないことがある

薪にしては妙な言い回しだと思つて涙眼を薪に向ける。そこにあるのはじこまでも深くじこまでも優しい空色の瞳。

「オレの変わりに鬼になる。そんなこと、思ひひやあ、いかんよ」「あ・・・」

「気持ちはわかるんだ。でもやつぱりだめだよ。お前はお前。穂琥とこう存在なんだ。だからそれを壊すようなことはしないでくれよ」「・・・・うん」

「穂琥はオレを支えてくれているんだ。しつかりね。だからオレは真っ直ぐ立つていられる。だから悩むな。そういうことで悩まれるとオレも辛い。な?」

「うん」

もう涙でぢゃんとした答えすら出来なかつた。穂琥の泣いている背をそつと包むように薪が包む。ビームでも暖かいそのぬくもりで。

せつと贋装する。血まみれだった服装が一気に新品になる。

「セヒ。 セヒナヒヒヒヒヒヒ」

「平氣?」

「ああ」

薪に掴まって移動術で外に出る。外は何にも変化がなくて驚いた。もともと先までいた場所は眞稀で作られた特殊な空間。薪と穂琥が修行をしていった場所と同じようなもの。だからあそここの空間で如何に眞稀を放つたところで外に影響は出ないとこいつことだ。

「ふつ・・・」

薪はその場に座り込んでしまつた。如何に薪とはいえ、こんな短時間で回復できるわけもない。穂琥は焦つて駆け寄つたが薪は困ったよつの表情で大丈夫と答える。

薪はさらにもう一度替装する。今度は眞匏祇の格好ではなく人間の格好。故に特徴的な髪も目も。普通の茶色身がかつた黒に変わった。穂琥も同じように替装して人の格好になると薪に肩を貸しながら自宅へ目指して歩き始めるのだつた。

薪の家に着くまではよかつた。しかしその後が大変だつた。

「薪？…ちょっと？…！」

玄関に入つてすぐ、薪は何かが切れたように倒れこんで意識を失つたしまつた。穂琥はそんな薪を必死で駆けて布団まで運んだ。

「もう！氣を失うにしてももう少し余裕を持つて……余裕を……」

穂琥は苦情の言葉を途中で切る。薪が昏倒することなどあり得ないのだ。それが今こうして昏倒したということは本当に限界だったのだ。玄関に入るまでは意地でも意識を手放さないようにな。それこそ余裕なんてなくて。

「眼、覚ましてよ……」

不安げな声だけを残して穂琥は部屋を後にした。負担を掛けないようだ。

穂琥は薪を刺した。どんな理由であれそれは変わることのない事実。それを物語つているのが己の身体。替装して誤魔化していたが實際穂琥は血まみれだ。薪みたいに替装するだけで身体の汚れを払えるほど器用ではない。それを落とすべく風呂に湯をはりに行く。

鏡を見て絶句する穂琥。薪をどれだけ切り裂いてしまつたのかよ

くわかつた。今の髪は茶色がかつたさらつとした髪をしていがそれが血で黒っぽく固まり髪を何束にもまとめていた。

シャワーでとうあえず媚びれ付いた黒い塊を落とす。案外血液とは固まると落ちにくいものだつた。何とかしてそのへばり付いたものを落として綺麗にすると湯船につかる。以前と異なり今回はあまり怪我がなかつたけれどそれでもあちこち怪我をしていてお湯が沁みる。

しばらく悶絶して何とか沁みのを我慢できる程度まで来るとやつとゆつたりとお湯につかる。そしてふつと考える薪のこと。きっと眼を覚ます。今は疲労で倒れてしまつていいだけだ。きっとやうだ。

「私つて役に立つているのかなあ・・・」

【奴がそう言つたのならどうなのだろう】

ふつと聞こえた声に穂琥は驚いた。穂琥の身体の動きとは別に水面が微かに揺れを見せる。そして僅かな波紋を作つて降り立つた一つの影。水面に触れることなくその水面の上に立つ黒い影。穂琥はそれの登場に驚いて顔を不自然に上げる。

そこには威圧感を眼に灯した綺麗の姿があつた。

「あ、綺麗・・・せん・・・?一びつじでこー・・・?」  
「少し用が有つたからだ」  
「え?!薪を治しに・・・」  
「戯け。何故私があんな奴を治さねばならぬ」

威嚇に近いその言葉に穂琥は萎縮した。綺邑は本当に言葉の一つ一つが痛いくらいに強い。綺邑は確かに薪に対する扱いが随分とひどい。どれだけ嫌いなのかと突っ込みたくなる。

「聞きたい事がある」

綺邑が突然尋ねてきたので穂琥は少し身構えた。

「おひきえいのことだ。瞑めいと名乗っていたか。奴は貴様等の戦いに居たか?」

綺邑の鋭い声が風呂場で木靈する。その強さに負けそうになりながらはたと穂琥は思考がとまつた。そういうえば。

「居なかつた・・・」

綺邑はそれを聞いてふと目を伏せた。

「おひきえいが李湖南程度の餓鬼の元に居るのに飽きたのだろうな。いや、意味を達成したのかもしけんが。奴の事など詳しくも知らんし知りたくも無いがな」

綺邑はそっぽを向いて冷たくそう言った。

「まあ、その確認をしに来ただけだ。帰る」

そう言つて綺邑はふと水面を揺らした。

「あ、待つて……」

穂琥の声に綺邑は答えるように姿を消さなかつた。その代わりに何か用かという鋭い目つきを向けられてそれに耐える穂琥の心は折れそうだつた。薪の眼光より強いその眼に穂琥は必死になつて耐えた。

「あ・・・・・り・・・・。ありがとう・・・・」

「・・・・・は?」

綺邑にしては珍しい疑問系の返しだつたが穂琥はとにかくその綺邑の田つきが怖かつた。鋭くて。

飲まれるな・・・呑まれ・・・呑まれてはだめだ!! いけない!  
しつかり意思を持つのだ!

そんなことを自分に言い聞かせる穂琥だつた。あまりに綺邑が凝視してくるのでだんだん萎縮していく自分が少し惨めに思えた。

「開眼、一つ。増えたのか」

綺邑にそう言われて驚く。しかし薪も認める力の持ち主なのだからその位わかつてもおかしいことではないか。穂琥はそつと頷く。そして綺邑は白眼であるここまで言い当つた。穂琥はそれを肯定する。

「開眼しろ」

突然綺邑にそれを言われて穂琥は身を引いた。

「そんな・・・・」

「嫌だと言つならそれは構わん。強制するつもりは無いが。ただ今の儘使つのであればお前、命落とすぞ」

綺邑のその脅しに穂琥は肩をびくつと震わせた。力が増大する白眼。使い方を誤れば眞稀の消費のしすぎで死に至る。そういうことだ。

「眼を閉じろ」

綺邑にそう言われて穂琥は仕方なく眼を閉じた。すると眼に熱いものが乗った。

「其の儘開眼しき」

綺邑に言われた通り白眼を開眼する。そうして開眼して途中に穂琥は関係の無いことが頭をよぎった。

ああ、今眼に乗っているの、綺邑さんの手だ

ふつとそれが取れる。そして閉眼するように言われて穂琥は言われるままに閉眼する。そして綺邑は今から24時間、決して開眼するなど忠告した。無論、桃眼も。そうすれば普通よりかは自由に扱うことができると言ひ。それに穂琥は礼を述べる。この死神、綺邑に対しては以前、尋常ではない嫉妬を抱いていた。しかしそれが今は随分となくなつてきていることに薄々気づき始めていた。

しかし今はそんなことどうでもいい。ただなんとなく穂琥は無意識に綺邑へ言つてしまつた。

「綺邑さん、手、あつたんだ?」

これにはさすがの綺邑も返す言葉が無かつた。

「貴様、馬鹿か?」

薪よりも強烈な一言に穂琥はしり込みする。なんたって今まで全身をすっぱりと覆った服装で戦うときや薪への攻撃時も手は一切使っていない。全て足だけで攻撃をしている。だからてっきり手がないのかと穂琥としては思つたのだった。

綺邑は完全に貶すような目つきで穂琥を見下ろし、姿を消した。さすがに今の質問はまずかったと思い直す穂琥だった。

ふつと、消える寸前。綺邑は肩越しに穂琥を見た。どうやら若干自分の言動に落ち込んでいる様子だった。そんな穂琥を眼にして。そんな穂琥にへんな質問をされて。

私の見当は違えたか、見込みを違えたか？

そんな疑問を浮かべたのだった。

## 第三十一話 やの眼が開くまで

風呂を出たのはそれから随分経つてからだつた。完全に寝入つてしまつた穂琥。そんな風呂場で起きた不可解な出来事。

すっかり寝てしまつたのでかなり長い風呂となつてしまつたにもかかわらず身体が冷えることなくお湯は温かだつた。そんなことに疑問を持ちつつもう一つ。こつち疑問はすぐに解消されたのだが、全身の怪我が傷跡なしに治つてゐる。

「治してくれたんだ・・・。どうせなら薪を治してくれればよかつたのに」

口を尖らせながら穂琥はそう呟つ。それでも感謝の気持ちは忘れていないつもりだ。

翌日。やつと出来たゆとりの日。散々疲労した身体を休ませてやろひと穂琥はその日を堕落に使つた。

ただ何もしない日が今までにあつただろうか。薪と出会つ前にもこんな『何もしない日』などなかつた。そして思つのだ。

「ありえない！最悪だ！こんな堕落した日常を薪は認めない！」

そんな風に下らない考えをしていたとき、声が聞こえた。

【お前、毎度この様な生活を送つているのか？】

聞こえてきた綺麗の声に穂琥は肩を震わす。一つ聞き忘れたことが

有つたと綺邑の声がする。それに答えようとして声を出して、自分の発している声が綺邑に届いていないことがわかる。いつも薪が出していたあの独特の響きのあるしゃべり方。恐らく眞稀を使っているのだろうが、穂琥にその方法はわからない。そうやって試行錯誤していると呆れた表情で綺邑が顕現してくれた。

「あ、すみません・・・

「ふん。お前、認可の門を触れずに開けたとは本当か?」

穂琥は意外なその質問に軽い動搖を混せて肯定した。何故それを知つているのかたずねると綺邑は簾堵乃槽耀から聞いたと答えた。

「神を呼び捨て?!

穂琥の突拍子もない声に綺邑は眼を軽く細めた。

「違えぬわ

穂琥はその言葉を聞いて少し考える。そして彼女もまた、死神。神の末端に座するものであることを思い起します。

「あの・・・

「ん?」

「知つてどうする

穂琥は自分の身体の傷を治してくれたことをたずねる。薪の傷は治さないと豪語しているのに何故穂琥の傷は癒してくれるのだろうか。

穂琥自身に綺邑からそんな買われるような事はしていないと思える。

薪のほうが余程だ。嫌われていてもおかしくないのは穂琥のほうだ。

「別に」

綺邑は短く答える。用件を聞き終わった綺邑はその場を後にしようと/or>する。それを穂琥は再び止める。それに鋭く睨まれて押し負けそうになるが穂琥は必死でそれに耐える。

「お仕事の、ほつは・・・・・?」

少し身を引きながら綺邑にたずねる。少し不可解な表情をしながら今は空いていると答えた綺邑。

「何故?」

「いや・・・あれほど前に出ることを嫌がっていたのに私の前には随分出てきてくれるんだなあって思つて。あつ!いや!別に、嫌とか悪いとかそういうんじやないよ!?」

突然弁解を始めた穂琥に綺邑はただ冷たく視線を送る。

「何も言つていないが。用はそれだけか?」

「あ・・・・・」

まだ何があるのかと言いたげな眼で見られて穂琥は胸が痛む。そして死に物狂いで言葉に出す。

「あ、明日も・・・来てください・・・」

穂琥のその言葉に綺邑はしばらく沈黙した。

「ふん」

綺邑はそのまま姿を消してしまった。その態度に穂琥は申し訳ない気持ちになった。やはり悪いことを言つただろうか。迷惑だつただらうか。小さく深いため息をついて穂琥は布団にもぐつた。

## 第三十二話 敬意を払う存在

翌朝。眼が覚めたのは6時少し前だつた。それに感動した穂琥は自分を自分で褒めていた。歡喜に満ちた穂琥はすぐに硬直するのだった。

昨晩。綺邑にけしかけた事を思い出して沈む穂琥だつた。返事もしないで帰ってしまったし。

「あれ・・・？」

ふと思いつき、過去に薪がなんかそれに関することを言つていたような・・・。

あまりにがさつな綺邑の態度を薪はなんとも普通に反応している。それがあまりにもありえなくて尋ねた。綺邑は全く以つて返事をしないのにどうして勝手な判断が出来るのか。しかし薪はそれを否定した。返事をしていないということはそれが肯定。綺邑の是であるということ。もし綺邑の中で否定すべき事柄であるのなら問答無用で却下の言葉を振り下ろす。

ということはだ。昨晩綺邑は否定もせずにその場からいなくなつた。ならば来てくれるといつことなのだろうか。

ふつと気配を感じる。どこか刺激的で攻撃的。それでもどこか柔らかく神聖な。そんな気配。そちらに眼をやるとふわっと降り立つ綺邑の姿が眼に入る。毎度思うのだがこの彼女の登場、顕現するときの姿はどこか美しい。

「き、来てくれたんですか？！」

「来いと言つたのはお前の方だろう」

冷たくあじりわれるので萎縮する。

「あ、あの・・・も、もしよろしければ・・・その・・・お・・・

」

綺邑の視線に負けて言いたいことを口クにいえない穂琥。そんな穂琥に綺邑は呼びかける。それに過敏に反応する穂琥は背筋を伸ばして綺邑の言葉に耳を傾ける。

「何故、私に敬意を払う？」

「え・・・？」

綺邑の突如のその質問に穂琥は少し固まる。

幾らなんでも穂琥程度の眞砲祇が死神である綺邑を呼び捨てにしていいものか疑問もある。薪は別だが。懸夸だし・・・。なんとなく、とこつのが正直の本音だった。

「ふうん」

綺邑はそういうと田線をはずした。以外にも綺邑が『ふうん』などと間延びした声を出すとは思つてもいなかつことなので少し聞き入つてしまつた穂琥だった。

「私なんかに呼び捨てとかタメ語とかヤジじゃないですか？」  
「別に」

綺畠は否<sup>アフ</sup>定に關しては即断即決のよくな氣がした穂琥だった。

「敬意など<sup>アフ</sup>が本氣で払いたいと思つた者にのみ払えれば良い」

綺畠の回答。それもそりだけれど、その場の雰囲気や相手の感じでもそれらは変動するのではないだろうか。それよりも綺畠のような存在にもそんな敬意を払うようなものがあつたのだろうか。神である簾乃神を簾堵乃槽耀とのみ言つていたことだし。それにしても敬意を払うべき相手のことによく理解しているよくな氣がした。

「過去に一度、居たな」

綺畠はわもびうでもよみかひて答えた。しかし綺畠の言葉の言い回しが気になつた。居た、ということは少なくとも過去形。今は居ないといふことだらう。

「どうでもこいな、そんな事。何故私を呼んだ」

綺畠に鋭く言られて穂琥は言葉に詰まつて眉を寄せる。

## 第三十四話　願いを受け止める

痛い。これを痛いといわないでなんと呼ぶ。

自分のして欲しい事を言った穂琥に凄まじい眼光を放った綺邑。ただ穂琥はその眼に慣れていないだけだということをそろそろ理解したほうが良い頃合だ。

「い、いやー本当に！別にいいんです！駄目なら…」  
「お前さ。私は未だ何も言っていない」

綺邑のその言葉に穂琥は呆然とする。そして穂琥の願い出に対しても構わないと答えた。それが意外すぎて嘘ではないかと疑つた。しかし綺邑は嘘は言わないと答える。

「え？じゃあ…・・・いいの？」  
「一度も言わぬ」

綺邑のその返答に穂琥は嬉しくて堪らなくなつた。その姿を見て綺邑が未だ子供かとため息をついたことを穂琥が知る由もない。

一つ目の願いでは即断即決、却下。このお方は本当に否定は早い。なるほど、と思う穂琥。確かに否定されなければならない別に問題はないのだとやつと理解し始める穂琥だった。

「顕現してください〜〜！」  
「断る。何度も同じ事を言わせるな」  
「してく下さい〜〜！」  
「・・・」

さすがにこの沈黙が肯定だとは幾らなんでも思わない。ただひたすら綺邑に頼み込むがさすがに綺邑も否定することも面倒になつたらしくただ睨むだけになつてきた。

沈んだ気持ちを少しでも晴らしたい。不安を少しでも忘れない。綺邑に願い出たのは一緒に外を散歩してほしいということ。無論、それに関しては肯定をもらつた。しかし、その後の顕現した状態では断られた。当然といえば当然のことだ。眞胞祇ですら知らない死神の存在を人間如きにさらすなど。ありえる話ではないことくらいわかっているのだが。

薪の影響か、粘り強い穂琥は起きてから3時間という時間をただひたすら綺邑への願い出の言葉で埋めた。その意氣込みと折れぬ心にさすがの綺邑も呆れた。

「はあ、仕方ない」

「本当！？」

「その代わり条件だ。お前の眞稀を遣せ」

綺邑から言われた条件。それ自体は別に穂琥としては構わない。ただ、その意味は？

「私はこの世界で身を置く事には無理を生じさせる。人型を取ると言ひ「」とは随分と浪費する事なんだよ」

力をわざわざ行使しなければ人型を取ることは出来ない。しかし、たかが『散步』のためだけにその力を使はしようとは思わない、思うわけがない。そこでそれを願い出た穂琥自身が、その眞稀を以つて綺邑に力を渡し人型を形成する、ということ。

「全然構いませんー幾らでももひつてくださいー！」

死神相手に『幾らでも』とはよく言えたものだ。無知ゆえか、それとも個性か。どちらにしろ中々面白く興味をそそられる。綺邑は穂琥から眞稀を受け取る。

穂琥の渡した眞稀は綺邑の胸元で小さく玉になつていった。そして圧縮されていきそれは美しい宝玉のような形に収まつた。見るものが見れば尋常ではない力の塊。のどから手が出るほどほしくなるような巨大なエネルギーの塊。しかし、それがどれだけすごいものかは穂琥にはわからないし、恐らく綺邑がそれを持っている間はただのガラス玉にしか見えないだろう。

それを完全に珠にすると綺邑の姿が少し変化する。普段、地面よりも少し上を浮いている綺邑がすっと地面に足を付く。そして着地するとローブを脱ぎ去つた。服装はすでに人のもの。普段長く覆つている右の前髪も短くなつて両目とも見える。美しい色をしていたその橙の髪も僅かに橙色を帶びている程度の茶色になり、赤く光る瞳も黒く変化する。それを田の当たりにして穂琥は思うのだ。

綺麗過ぎる・・・てか、格好いい・・・

普段、田元しか見えない綺邑の顔がここまで露になつたのを見たのは初めてで以外にも整つた美しい顔立ちだつた。並の男なら惚れてしまつてもおかしくはないかもしない。女である穂琥ですら魅了されたくらいだから。

「準備はしだぞ」

その容姿にまた似合ひ低めの落ち着いた声。穂琥はなんだか妙な気分に陥つた。そしてその言葉をやつと脳へ伝達するとはつとしたようすに意識を取り戻す。

「あ、ありがとうございます。えと、まず」飯食べていいで  
すか?起きてから何も食べていないので・・・」

綺邑はそれを聞いてベッドに腰を下ろして足を組んだ。

「なら私は此処で待つていい。元来、私達は食物は摂取しない」  
「了解です」

## 第三十五話 街を歩く

食事を済ませてから綺邑を強制連行して外へ飛び出す。あまりにも嬉しくてはしゃいでいた。そして外に出てからやつと自分のしている行為に気づいて綺邑の手を離す。

「わ、ごめんなさい！ 私ったらー！」

そう言いつつもはしゃいでいる穂琥。果たして綺邑を相手にこの様に出来るものが他に居るのだろうか。

「行きたいところがあるんですー！」

穂琥は嬉しそうにたつたかと前を歩いていく。そんな穂琥を身ながらあまりなれない『歩く』という行為に面倒を感じながらも穂琥が何故敬意を払い続けるのか疑問に思っていた。

大きいデパートが最近出来て、そこには巨大な本屋があるらしい。穂琥はそこで本を見たいと綺邑を引っ張る。その本屋には確かにこれはすごいと思える量の本がずらりと並んでいる。穂琥が楽しげにその本に眼を通していると名前を呼ばれて顔を上げた。

「穂琥ちゃん！」

「獅場君！」

クラスメイトの獅場。軽い挨拶を済ませて綺邑の存在に気づいて首をかしげる。

「おひ？ その人は・・・？」

獅場に尋ねられ、答えないわけにも行かないかと悩む穂琥。とりあえず名前を伝える。その代わり警戒しながら。もし綺邑がそれを却下しにきたらすぐに止められるよつて。しかし綺邑は止めに入ることもなくただ黙つて穂琥と獅場のやり取りを見ていた。

「で？ 何？ ビジニア関係なん？」

「え・・・ つと・・・」

「・・・。えへ、薪とかと関係あんの？」

強いていうなれば薪から繋がつた関係ですが。それを言おうとして綺邑が口を開く。

「知るか、あんな腐れ外道」

「わッほ・・・」

随分な言動に獅場が驚いた顔をしていた。ただやはりその佇まいは美しく格好がいい。故に獅場も少し見とれているような風ではあった。

「そういうえば、獅場君はどうして此処に？」

「参考書を買いに、籬下と。穂琥ちゃん見かけたから買つている籬下放置してこっちに来た」

「えへ、ひどいねえ~」

笑いながらレジのほうを見ると籬下がビニール袋を提げてこちらに歩いてきた。そして穂琥に気づき挨拶をした後、薪が居ないことに気づき少し意外そうな顔をした。

「え・・・ 薪は？」

「あ～、今居ないの」

「そう・・・」

穂琥は薪が保護する。それを知っているからだらう。そして籬下も  
綺邑に氣づき田を丸くする。みんなそつなかもしれない。

「これから何するの？暇なら食事しない？奢るよ～、籬下が  
「オレかよ！」

獅場の冗談に籬下が突っ込む。穂琥はそれを笑つてみている。

「あ、でも、綺邑さん・・・」

「別に。お前が構わぬと言つのなら私は良いが

綺邑の発した言葉。獅場も籬下も聞き惚れる。普通ではありえない  
だらう、その言葉回しに格好良さを覚える。

昼食の場をどうするか考えて歩いている最中、穂琥は気が気がでは  
なつた。綺邑は食事をしないといった。一体どうしたものか。

そんな穂琥の心配をよそに綺邑は周囲に含わせて食物を口に運ん  
でくれた。ただ、最初の一言に穂琥はドキッとする。

「人界の食は不味いな」

いやいや、そんな事言わないでね。籬下と獅場には聞こえていない  
ようだつたので安心する穂琥だった。

食事も終わつてきて、これからどうしようかと話していると綺邑  
が急に鋭い目つきになつたので三人は驚いた。ひどく警戒した表情

に穂琥ははつとした。これは薪が眞苞祇の襲撃を受ける前の表情と似ている。ということは綺邑も感知したことだらうか。

「来る」

綺邑は短くそういう。やはりそつなのだ。穂琥は慌てて二人に用事が出来たと誤魔化して綺邑とともに全速力でこの場を離れる。きっと籠下ならこのことを理解してくれるはず。それを願つて。

走つてゐる最中にもつと早く走れないのかと叱責を受けて謝る穂琥。人間ベースの綺邑に遅いといわれるとは思つてもいなかつた。急停止したので穂琥は転びそうになつた。人氣のない場所で綺邑は平然とした顔をして立つてゐる。

田の前に降り立つた眞苞祇。当然だが綺邑からは眞稀を感じないために僅かに躊躇したようだつた。さすがに命を狙つてくる眞苞祇といえど、人間にまで手を出すつもりはないみたいだつた。

「お前・・・人間か？」  
「そう見えるか？」

眞苞祇からの質問に余裕で答える綺邑。その回答でどうやら人間ではないと判断したらしい相手は怪訝な表情を見せた。人間にそう尋ねてこの様な解答はまずありえない。すれば、眞苞祇のはずだが、人間並みに何も感じない。それを疑問に思つたようだつた。

「眞苞祇・・・か？最近噂になつてゐる眞苞祇が居るが」

その言葉で綺邑の表情が変わる。これは不機嫌、ということ部類だ。

「あんな餓鬼と同じにするな。胸糞悪い」

怒氣を孕んだその言葉に乗せられているのはただの怒りだけではなく言葉の力も加算する。言葉の力、といつても別に暴言とかそいつた部類ではなく綺邑の持つ眞砲祇とは異なった特殊な力にてその言葉で相手を威嚇し怯ませる力。

「私は奴ほど甘くないぞ。覚悟しろ」

綺邑は右手を軽く振った。それだけで相手は簡単に吹っ飛んだ。そして地面に叩きつけられる前にその姿を消した。跡形もなく。

「え？！何・・・？！殺してないよね・・・？」

「有る訳無いだろ。自ら仕事を増やす様な真似、するか」

面倒くさいのに綺邑がそういうたので安心て肩を落とす。そして先ほど置いてきてしまった二人の様子を見に行かねばと穂琥が言うと、綺邑はそれを止めた。どうやら籠下のほうが何らかの理解をしてくれたらしく、もう他の場所に移動しているらしい。さすが、これだけ離れてもそうやって人の存在を感じして位置まで特定できるとは、『神』に属する存在は違うなと穂琥は思った。

後もその『神』に属している綺邑をまるで友人ごとき振り回す穂琥にそつとため息をつく。穂琥としては薪と違つて文句の一つも無く付いてきてくれる綺邑に気をよくしていた。

## 第三十六話 思い出の場所

夕方。太陽が沈みそうなとき。とある公園に足を踏み入れた。思い出の場所。見せたいものがあつて綺邑を引っ張ってきた。果たして穂琥の思ったとおりのことを感じてくれるかは知らない。死神である綺邑が人間や眞匏祇と同じような感性を持つているかは理解など出来ないから。それでも自分たちはこういうもの心を動かされるんだということを知つてもらいたかった。

「いっちですよー早く、早く！」

まるで子供のよにはしゃぐ穂琥にほとんど表情など無く付いていく綺邑。はたから見たら一体どんな風に移るのやら。

公園の隅に人の背よりも高く植物が生えそろつているところがある。大抵はそこを素通りするのだが、穂琥はその草を搔き分けて中に入していく。その行動に肩を落とす綺邑。諦めて付いていくしかない。

「早く！間に合つたよー！」

「間に合つた？」

「うん、夕日ー！」

草の中から穂琥の嬉しそうな声が聞こえるので仕方なく草を搔き分け入る。本来、死神の姿であるのならばこんな草を搔き分けるまでも無く通ることが出来るのだが、あいにく今は人の型のため、通るのに苦労を強いられる。

草を抜けると空間が開けた。人が2、3人居座れそうな空間で崖

になつており、ふちには手すりがある。その手すりに手を付いて穂琥が嬉しそうに夕日を指す。

「ほら！沈みかけの夕日が、下の街を照らしてゐるー紅くて綺麗でしょ？？」

綺邑がそれにどう感じるかは知らない。それでもあえて同意を求めるように綺邑へ言葉を投げかけてみた。するとそれを見た綺邑は少しだけ眼を細めた。

「ほつ

綺邑はそれだけ言つとそれきり言葉を発しなかつた。でも表情は満更でもなさそうだったので穂琥はほつとする。

「ほつ、思い出の場所なんですよ」

穂琥は夕日に照らされながら嬉しくなつて綺邑に話す。

穂琥は過去の記憶を馳せる。まだ地球に居たとき。眞飽祇の地へ行く前。いや、その眞飽祇の地へ行こうとしていたとき。薪がここへ連れて來た。街が一望できるこの場所へ。次、いつ地球にこられるかわからぬからよく見ておけば、ということじくつれてきてもらつた場所だった。ここは人の立ち入りが全く無く気兼ねすることができなかつた。

「そこでね、刀をもらつたんです。薪が愛用していた舞姫とかは流石に無理ですけど、風雲つていう刀です」

穂琥はさつと前に手を前に出してそれを出す。煌く刀身に夕日が反

射してなんとも美しく光を放った。

「大した刀だな」

「わかります？へへ・・・。そうなんです。薪としては己を身を護るために渡してくれたんですけど、私にとって薪からの初めてのもらい物で嬉しくて・・・」

ただそれだけ。薪の中で身を護るため以外の深い意味は無い。それでもなんとなく嬉しくて堪らなかつた。自分で調達しろとかではなく、薪からもらえたことが。それは自分でも馬鹿らしいと思つ。でも。

「別に良いんじゃないか。信じる者から譲り受けた物とは大抵そういう物だろう」

予想外の綺邑の同意にさらに穂琥は嬉しくなる。へへっと笑う穂琥。そろそろ太陽が街の向こうに消えてしまいそうだった。

「そろそろ帰るぞ、穂琥」

「うん！」

元気に返事をする穂琥。それからはたと硬直する。綺邑に何かと聞かれてなんでもないと黙つて歩を進める。

どうやらここは穂琥にとって本当に特別な場所のようだつた。綺邑が初めて穂琥の名を呼んだ。小もないことだろうか。いいや、きっとそれはとても素敵なこと。

「何故こうしたかった？この程度、お前だけでも良いだろ？」

「それは・・・」

穂琥は少しだけ口を開く。そしてちらりと横田で綺邑を見る。美しくも格好良いその姿に見惚れる。そしてそつと自分の思いを口ににする。

穂琥には姉が居ない。当然のことだが。でも同性の姉妹とはほしいと思う穂琥だった。それを実感したのは綺邑との接触ではあるのだが。薪ですら頭の上がらない綺邑がどこか姉のような気分になって、それが嬉しくて。世話をしてくれるし頼み語とも聞いてくれるし。素敵な姉のような存在。

「あーそつだーお願い！」

穂琥が綺邑に尋ねたこと。綺邑はそれをしばらく考えた後、若干渋々といった風に承諾した。それが嬉しくて元気よくありがとうと叫ぶ。

## 第三十七話 その眼が開く

家に帰つて薪の眠る部屋にそつと入る。すでに家に着いていたために綺邑は人型を止めて本来の姿に戻つていた。

「眼・・・覚ますよね？」

そつと尋ねた穂琥の目は薪を見るでもなくぼんやりとしていた。

「だろうな」

「死なないよね？」

「だろうな」

綺邑からの無機質なその返答に少しだけむつとした。

「どうしてそんな風に言い切れるの？だってわからないじゃない？」  
「お前、私を誰だと思っている？」

「あ・・・」

「私は死神だ。死者の行方を左右する者だ。私が死なないと言つた。  
なら死はない」

綺邑の言葉の説得力に負けて穂琥は押し黙つた。そうだ。彼女は死神なのだ。ならば大丈夫なのかもしれない。それでも不安が完全に消えるわけも無かつた。

その夜、穂琥は綺邑に一つのお願いをした。その願いに綺邑は唸る様な声を発して何も答えずに消えてしまった。あれは決して肯定の沈黙ではない。悩んだ末の沈黙だ。否定するわけでも肯定するわけでもない。だから聞き入れてくれたかそうではないのか穂琥には

わからなかつた。

穂琥が就寝した後、綺邑は薪の眠つてゐる部屋にすつと顕現した。  
薄暗い部屋。

そんな薪を軽く睨んで綺邑はため息をつく。いつまでも寝てゐる薪に苛立つ綺邑。向かいの部屋で眠つてゐる少女の不安を考えているのかと。

致し方ない。これ以上世話をするのも面倒だ

綺邑はふつと薪に近づき悪いがけない行動に出た。

今まで動かなかつた薪の身体が僅かに動いたのはそのときだつた。

「ん・・・」

少し苦しそうに声を漏らして薪が眼を開ける。そしてぼやける視界に移つたその姿を見てそれの名を呼ぶ。

「き、ゆ・・・？」  
「ふん」

ぼけている頭が次第にはつきりする。そして田の前に居るのが本当に綺邑であることに気づいて驚いて飛び起きた、と同時に全身に痛みが走りぬけ薪は倒れるように枕に頭を戻した。

「貴様、死にたいのか」「いや、そんなわけないでしょ。何で・・・。魂石に感じるこれは・・・眞稀じゃねえな。お前か

綺邑はそれに返事をしない。薪は少し意外そうな表情を浮かべながらも綺邑に礼の言葉を述べる。不機嫌そうに鼻を鳴らして綺邑は穂琥の居るであろう方向を見てくいと顔を動かす。

「穂琥……」

「行つてやれば」

冷たいその言葉に苦笑いをしながら薪はゆっくりと立ち上がってふらふらした足取りで穂琥いる部屋をノックする。

「はーい」

間の抜けた声、否。安心できる暖かい声。扉を開けて視線がぶつかる。そして穂琥の眼は見る見るうちに大きく見開かれ叫びながら飛び込んできた。

「薪！馬鹿！！」

飛びつかれ、力が入らず後ろに倒れる。

「いつて」

「いてて……」「めん！でもよかつた！！」

心底安心したような顔でそういう。そんな穂琥の顔を見て薪もどこか落ち着き安心する。薪の部屋から呆れた顔で綺邑が出てくる。

「あ

「あ〜、なんかよくわからんけど助けてもらつた」

「そつか！じゃあ私のお願ひ聞いてくれたんだ！」

妙に嬉しそうな声を上げて綺邑に笑いかける穂琥。それを見て薪は首をかしげる。お願いが何だと聞いても穂琥は内緒だと黙つてにかにか笑う。

はあとため息をつく綺邑。それを聞き取った薪が驚いた表情を見せた。どうやら綺邑がため息など珍しいなんてものではないらしい。

「それと居るとしたくなる」

「だらう」

「わっ！ それどうこいつ意味よ！」

綺邑と薪の会話に穂琥が割り込む。そのままの意味だと返す薪に穂琥はまたもや馬鹿の連呼で薪を叩く。

「で？ 綺邑よ。」「こつの世話をしてくれたって？」

落ち着いてから薪がそういった。綺邑は黙した。それは恐らく是の沈黙。その意外な行動もさることながら綺邑を前にしても穂琥がむくれなくなつたことの進化にも驚く。果たして綺邑に丸め込まれたのか穂琥が認めたのか。知つことではないが女とは難しい生き物だと思うのだった。

オレ、男でよかつたなあ～

「何考えているの？」

穂琥に突つ込まれる。

「下らない事だらう」

綺邑に図星を突かれる。薪は苦笑いして綺邑の言葉を肯定する。

「でも、本当に面倒見てくれてすゞく優しかったよ？」

「綺邑が？」

「うん」

嬉しそうに笑う穂琥に薪はひとまずよかつたと肩を落とす。それでも綺邑が穂琥に甘いのは一体なぜ少し気になるところではあるが。そもそも果たして穂琥に甘いのか、薪に厳しいのか。知らないことだが。

「それにしても薪とは違つてお姉ちゃんは文句も言わずに散歩に付き合つてくれるんだから！」

「あ、そうですか。・・・・え？」

聞きなれない単語が穂琥の言葉の中に有つたような気がして薪は穂琥を一度見する。

「おね・・・・?！」

「うんー！」

「はあ・・・・」

薪の驚きの言葉に穂琥が答え、綺邑が再び野ため息を漏らす。一瞬の静寂した空氣に穂琥は疑問を覚え首を傾げたがどこか何かを理解したらしい薪がにやりと笑う。

「はつはあ～ん。なあむほどねえ～」

妙に間延びしたその言葉に綺邑の眼光が鋭く光る。それを見た穂琥

は今まで穂琥に向けていたものは睨むや威嚇するといつた類のものではないことを悟る。その強さと来たら穂琥なら心が折れてしまいそうなくらいだった。しかしそれをもうともしていない薪の根性も中々大したものかもしれない。

「お前にそんな感情があるとはなあ！」

楽しそうに笑っていた薪の顔が急に焦った表情になつたので穂琥は  
綺邑を見ると確實に戦闘態勢だつた。

「つと、逃げます」

「貴様、」

薪は綺邑の攻撃を必死になつてよける。ここで穂琥が思うのは薪とこんなキャラだつたかということ。比較的この光景は見慣れ始めている。つまり薪が綺邑を挑発、というのか。とにかくそういう類の発言をすることから勃発するのだが、つまりは薪の言動に問題があるわけだ。薪は学習といつものはしないのだろうか。不思議だ。

「止められてー本当にー」そんな激しい運動量じゃまた夢の中だつて

「知るか、落ちろ」

綺麗の言葉に若干本気を感じて焦る薪。必死で逃げいる最中、ふつと綺麗の動きが止まつた。

「ん？…ひつた？汗が出てるやんか？」

「ふん」

綺麗は暑さからかフードを取った。ふわっと肩までの橙の髪が揺れる。茶色も綺麗だったがやはりこの色のほうが綺麗には美しく似合う。

「相変わらず澄ましてんな」

「黙れ」

綺麗は薪を一警してから帰ると吐げて消えた。

## 第三十八話 見分けた開眼の差

薪もすっかりよくなつて通常通り、とまでは行かないまでも元気を取り戻した。朝になつて起きてくると部屋で軽いストレッチをしている薪が居たので穂琥はなんとも安堵した気持ちになつた。

「おう、おはよう」  
「おはよー」

軽い挨拶を済ませる。身体を伸ばしながら薪がこれから予定を行つ明ける。

「よし。だいぶ身体もよくなつたし。痺臨探しに行くぞ」  
「・・・・?」  
「ほくちやああん?」  
「ももも、申し訳ござわこません!」

穂琥を「ちゃん」付けて呼ぶときは少なからず穂琥が失態をしたときだ。なので無意識に謝る穂琥。

理解していない穂琥をそのままにして強制的に薪は移動術で移動を開始。その間、誘拐だの拉致だの叫んでいたので落とすぞと怒りの叱責を入れて黙らせる。そうして着いた先は薪が氣を失うほど争いをしたあの場所。

「やつぱり痺臨はここにはなさそうだな」

そもそも、こんな争いを始めるきっかけは痺臨だ。氣を失いそうなほど危険な状態ではあつたがその痺臨の気配があれば氣が吹つ飛ぼ

うが回収に向かつていた。それでもそれをしなかつたということは、麻臨の気配はここには無かつたということ。眞稀的にかなり限界に近かつたために、もしかしたら見落としたかと思つて確認のためにここに来たがやはり氣配は無かつた。

ならどうするかといえば考へるまでも無く李湖南を探し出すほか無い。寸前まで追い詰めてしまつたがそろそろ意識くらいはあるてもいい頃合だらう。

ふつと薪が穂琥を見て動かなくなつた。穂琥はそれに少し驚いてそれからなんとなく焦る。急に薪が鼻の先が当たりそうなくらいに近寄ってきたからだ。幾ら兄妹でもこの距離に顔があるのは気が引ける。

「ちよつと……？ 何……？」  
「なに？」

いや、それはこいつのせりふだ。穂琥はそんな事を口走る。瞬きもしない薪の眼が見ているのは穂琥の『眼』。

「開眼、しやすいだらう……？」  
「え？ あ、うん。帰つてきたその日にお姉ちゃんが使いやすこうにしてくれたんだ」

綺邑は一体どこまでこの穂琥を気に入つたのだらうか。薪はその意外なことに正直驚きを隠せないでいた。

「それで…どうやって李湖南を探すの？ 幾ら薪でも難しいでしょ？」

「お前がやるんだ」

「え？！」

驚く穂琥を無視して薪は穂琥に開眼するよりに命ずる。無論、桃眼ではなく白眼のほうを。言われるままに開眼すると薪はまたまじまじと穂琥の眼を見る。

「ん。母上のとはまた違つたな、雰囲気が。雑な感じがするな」「え・・・」

「雑で大胆でコントロールがいまいち出来ていない感があつて」

「何それ！それって・・・」

「でもすげえ強大で纖細などこりがあつてビンが美しい」

薪の言葉に偽りは無い。むしろ今の薪は穂琥の白眼に見入つていて自分が声を出していくことすらほとんど無意識の状態にも思える。なんだかそれが薪の褒め言葉とどつていいのか悩むところだった。ただ、今それを素直に薪からの褒め言葉だと受け止めるに赤面して頭がおかしくなりそうだったので頭を空にする。そこでふつと気づく。

「李湖南の眞稀だ・・・！」

「お、見つけたか」

穂琥から離れて腰に手を当てる薪。まるでそれを穂琥が言つのを待つていたかのような雰囲気だった。

白眼は『相手を離さない』もの。故に一度でも攻撃を加えれば遠距離にいようがその位置を把握し、その把握できた時点で攻撃可能の技。故に黒眼よりも反則に近い技だ。そして何より。この白眼と黒眼を両方持つたとしたらそれは最早反則の領域を超える。

「薪は持つていのいの？」

「おう。持つてねえ。でも過去にいたらしげひな」

「えー？」

「歴代の懸念の中で。詳しきはオレも知りん」

薪でもわからない事が眞袍祇の歴史の中であるのが少し意外だった  
穂琥は面を食らった気分になった。

「おし。行べ」

薪は穂琥の腕をつかんで即座に走り出した。その速さは田玉が飛び出すべりだつた。

「うふおーー？ 病み上がりがそんななか飛ばしてやつあるのーーー！」

「つるせえ。今逃がすよりはましだって」

薪はやうにスピードを上げる。薪は実際、自分自身のみで走つたら  
一体どの位早くなるのだろう。穂琥はこの速さでむじろ呆れを感じ  
ていた。

## 第三十九話 敵に対する想い

引っ張られること数分。尻が地面に叩きつけられるのを感じた。

「いった」

穂琥の文句の声とともに聞き覚えのある警戒心むき出しの声が聞こえた。

「貴様らー!？」

見れば圭の姿だった。傍らには李湖南がいる。ただ目も当てられない無残な姿。眼に生氣はあまり無く、発言もどこか幼稚化している。圭は真に威嚇体制を見せる。

「『』の状態の主にさらに制裁を加えるといつのか!」「その口が言うかよ。こいつだつて大事な妹、やられてんだ。そのくらいの報復、普通ならするぞ? とはいっても別にオレはそれが目的でここへ来たわけじゃないさ」

薪は一度辺りを見回してから警戒の色を見せた。

「・・・鼓斗はどうしている?」  
「は? 何故あいつが  
「いいから。どこ?」  
「・・・時期に来るわ」  
「そうか」

警戒が少しだけ薄らいだ薪の表情に穂琥はそっと近寄る。するとふ

つと降り立つた二つの影。

「あーあなた達ーまたあえて嬉しいわあー！」

誓茄が声を張る。その後ろに不機嫌そうな鼓斗がいた。

「鼓斗」

薪が鼓斗の名を呼ぶ。鼓斗は警戒した風で呼応する。右手は刀の柄に置かれている。薪が下手な動きをしたら恐らく抜くつもりだろう。

「舞姫を振るつた後、会つていなかつたから心配していたんだ」

この場に合わないその台詞に煙に巻かれたような顔をする薪以外の皆様。

「怪我とかしていいか？壊れたところがあつたらと、心配だつたんだよ」

「・・・してなどいないが・・・」

「やうかーそれはよかつた」

敵を前にしているとは思えない明るい笑みに相手方はひどく動搖していた。ただ穂琥のほうはそれを聞けば説明されなくともわかる。如何に敵といえど、怪我をして瀕死に追い込むような真似はしたくないのだ。

「よく言つわー！」

圭が怒鳴り声を上げた。李湖南がどんな存在であれ、彼女ら、彼らにしてみれば大切な『主』であることに変わりは無かつた。そんな

大切な主をこの様な無様な有様にした薪たちになにを言わねよつと  
心が動くはずも無い。

「詫びはするよ」

薪の率直な言葉に圭は歯噛みした。一体なにを考えているのかわからぬといつのが本音だろう。穂琥だつてわからないのだから。

「さて。単刀直入に言おう。まどろつこじいのは面倒なだけだからな。癡臨は何方がお持ちで?」

「直入!?」

あまりの遠慮の無い言葉に穂琥がうつかり突っ込む。それに薪は軽くひと睨みしてから田の前の三祇に眼を向ける。

「・・・主しか知らないよ」

誓茄が不貞腐れたように言つ。その後にかぶさるように鼓斗が言つ。

「瞑、も知つていたがな」

「ほう・・・」

瞑が絡んでくるとは面倒だった。一体あの男はなにをしたいのか。顔も髪も田も。何もかも確認することの出来ない格好をしていたために搜索のしようも無い。無論、眞稀も感じることが出来ないわけだし。いや、もとより眞稀といつものを持ち合わせてはいないのだが。

「よし。修復にかかる。穂琥」

「え?」

薪は圭の抱える李湖南を奪い取る。それに怒号を上げる圭と鼓斗。誓約はどこかおとなしかったのが妙だった。

「はい、これよろしく」

李湖南の身体を穂琥に明け渡す。穂琥はそれを受け取つて困惑していだ。要するに李湖南を正常に戻すようとの事だった。

「嫌だ……」

まるで子供みたいに。拳を握つて踏ん張るよつにして薪を睨む。こんな風に反発してきたのは初めてだつたので正直薪は驚いた。それでも穂琥がここまで拒否をする理由はなんとなくわかる。

「こつは薪を傷つけた！それをどうして私が治さなければいけないの？」

穂琥の言い分は確かにもつともなことだ。相手側もそれを重々承知の上か、あまり話しに割つて入つてこない。薪はそんな穂琥を見つめる。

「気持ちはわかる。でも・・・」

「嫌だ！聞かない！ だつて薪がそうやつて言つたら私、絶対に納得しちゃうもん！ そんなのヤダ！」

首を振つて拒絕をする穂琥。困つたと頭を抱える薪だつた。

穂琥が拒絶をしたい気持ちはわかる。それでもこの李湖南を元に戻さない限り麻臨の在り処がわからない。それだけじゃない。敵で

あれ、ここまで戦意をなくしていればそれは最早敵ではない。傷ついた同じ眞砲祇なのだ。

それを穂琥に諭したいが、穂琥はそれすらも拒絶する。薪はどうしたものか考へる。そしてふつと思つたこと。あまり効果があるとは思えないが、勘でやると決めて決行する。

「穂琥」

「ちよつーっ」

薪は穂琥を強く抱きしめる。苦しこと軽く文句がもれるくらい。短くそりこつ。穂琥はしばらく沈黙した。

「頼む」

「わ、わかったから……もう離して！」

「ありがとうな」

「ふんっ！」

そつと離れて穂琥の頭をなぐる。相変わらず不機嫌だったが穂琥はさつと李湖南の元により修復を行う。桃眼で見れば李湖南の体内をめぐる眞稀の荒れ具合に流石に驚く。桃眼の力でそつとその流れを変える。すると李湖南の眞稀は正常に循環を始める。

「へえ・・・」

誓茄が感心したような声を上げた。穂琥はさっさかと立ち上がりつて真の後ろに立てる。薪は再び礼を述べて李湖南に触れる。

「まひ、おやめ」

薪に言われてはっと眼を開ける李湖南。その眼はしばりへ田を漂い、薪に焦点を合わせて硬直した。

未だに体の怪我が癒えていない為ぐつたりとしている李湖南にあらかたの説明をして落ち着いたところで癡臨の所在を尋ねる。

「・・・秩江ちくえいに・・・」

李湖南はすっかりと萎れてそういった。薪はそれを聞きとめると李湖南の額に手を当てて李湖南の傷を癒す。その行為を見て誓茄、圭、鼓斗は激しく驚いた表情になった。

「なにをそんなに驚いているの？」

穂琥がぶつきりぱつに尋ねると圭がなにを馴鹿なことを言っているんだ、といわんばかりの眼で見てきた。

「なにってー?」こつは戦鎖だぞ!何で療蔚の技を使えるんだって話だろ?ー?」

ああ、そうか。穂琥は納得する。確かにすっかり忘れていた、そんな設定。戦鎖は療蔚を、療蔚は戦鎖を、互いに相反する力同士、故にそれら両方を身に着けることは不可能とされている。それは才能と努力の賜物。

穂琥は李湖南を睨む。憎いのだ、どうしても。こんなふざけた奴をどうして薪は。

「李湖南は今の治療で眠ってしまっているけど直に眼を覚ますよ」

薪はそこまで圭に李湖南を預ける。不本意ながらも圭は謝礼の言葉を述べる。

「どうして？ どうしてそいつを助けなきゃいけないの？ そんなの、ほつておけばいいじゃん！」

言い切った穂琥につかつか歩み寄って穂琥の両頬をぱしんと挟むよう口に呟く。

「だめだ、穂琥。そんな事を言っちゃだめだ。どんなに憎くても、どんなに恨んでいても。その対象を失ったときの悲しみは底知れない。オレはそれが怖いんだ。わかってくれるだろ？ へへ」

「・・・っ！」

穂琥は一瞬だけ記憶を過去へ馳せる。そして悲痛に叫ぶ幼き薪を思い浮かべて俯いた。

どんなに嫌っていたとしても、どんなにこの世から消えてほしいと願つたとしても。実際に己で斬つてしまつた父は薪の心に結局重たい枷を負わせている。穂琥は深いため息をついて小さく頷いた。

「わかった

「わかつてくれて何より」

優しく微笑んだ薪の笑顔を見て穂琥はその薪に免じ、李湖南の事はもうスルーすることにしてようと決めた。

「それじゃ、オレたちまゝこれから秩江に行くよ

薪と穂琥はその場から移動術で消えた。残った三祇は啞然としていた。一体彼になにが有ったのかは知れない。それでも敵にすらそんな思いを強く抱いているというのは生半可な出来事では出来ない安い『綺麗ごと』だ。しかし彼の放った言葉には重みがある。綺麗ごととぬかせるレベルのものではなかつた。

## 第四十話 人間に与えられた珠

秩江といつ場所にたどり着く。そこは随分な田舎の風景でどこか長閑だつた。しかしそれに反して薪は少し呆れたような顔だつたが文句を言つた。

「手に入れるには骨が折れそうだ」

「え？」

薪の呆れた視線が向かう先には村人と思える者たちがわらわら集まつてきていた。どこからどう見ても歓迎とは思えない。何故つて、歓迎する側を桑やら釜やら包丁やらを持って出迎える村がどこにある。

「勝手な進入を謝ります。李湖南殿から伺いここに参りました」

薪の言葉を聞いて村人たちはざわつきだす。村の者たちは李湖南様、と呼び崇拝している風を見せた。それに穂琥が不機嫌になつたのを宥めながら薪は言葉を発しようとしたが抑え切れなかつた穂琥の言葉が爆発する。

「あんたらねえ！李湖南って奴がどんなか知らないでしょ！…」「知らなくていいから！お前は黙つて！ややこしくなる…」

「やあだあ！離して！私の怒りは治まらない！」

「治まらなくていいから！とにかく黙つて…」

薪の肘鉄が穂琥のわき腹に命中し、穂琥はしばらく再起不能となつた。

咳払いをして薪は村人に向かう。村人は未だに警戒をしている。

「静かに」

空気を割つて鳴つた声に皆がざわつきを止める。現れたのは美しい女性だった。しかし、穂琥の眼は完全におかしな方向に走っているためにその女性を美しいとは思つが絶品とは思えなかつた。

ん~、簾乃神様や、お姉ちゃんのほつが断然綺麗だしなあ

比べる対象がおかしい穂琥だつた。

女性は薪に深々と頭を下げた。

「申し訳ない。李湖南殿とは関係があるわけではないのだが、少しこの村に置かれている『宝』を拝見いたしたく」

薪が丁寧な声でそういうと女性は少し悩んだ風に見せて断つたらどうするかを尋ねてきた。

「・・・ほう、オレを試すか?  
「・・・いえ、別に」

急に口調が変わったために村人は面を食らつたようだつたが女性は以前と毅然としていた。

「本当なら帰りたいが今回のそれはそもそも行かないでのね。無理にでも奪おうかな、悪役になつてでも」

女性は鋭い目つきで薪を睨みつけた。しかし薪がその程度で怯むは

すもない。（綺麗のほうが断然鋭くいたいのだから）肩を落として薪はため息をつく。

「まあ、そこまでいうなら見るだけにしますよ」

「え？ー。ここにおいて置いたら危な・・・」

「はい、黙る~」

復活しかけた穂琥がさらにまた再起不能となる。

「危ない・・・？」

女性が穂琥の言葉を聞き取つて怪訝そうつな顔で尋ねる。

「いや、なに。大したことじゃなこよ。今までだつてそういうただらつへ。」

「・・・」

薪の発言を怪しへ思つたのか女性は少しだけ警戒したそぶりを見せた。

「その『宝』はもともとオレの所有物だ。それを回収しに来たんだがそこまで大切に思つているならあまり手出しさしたくないから、この先安全でいらっしゃるように工夫をしておくよ。」

薪が軽い口調でそういつ。

「その話、信ずる話扱は？」

女性は尋ねる。

「ない」

薪は言い切る。無論だ。初めて会つたものにその警戒をおろして信じろなどといふことは並大抵のことでは出来ない。

「わかりました。ひとまず見せましょ。私はここで導師として役割を果たしています」

「そうか」

導師は新たちに『宝』のある場所を教えてくれた。そちらの方向を見て薪の眼が大きく見開かれたことに驚いた。どうやらとある洞窟の奥に祭られるようにしてそれはあるらしいが、最早手遅れに近かつたようで『宝』つまり痺臨は今、暴発しようとしていた。これが悪しき痺臨の使い方。李湖南が一体なにを求めてこの様なことをしたのか知らないが。痺臨は溜め込んだ眞稀の分だけ静かにすこしそれがなくなつた途端大きな爆発を起こす。それは一種の練成。周囲の命をかき消しそれらの魂を痺臨は溜め込む。そしてその溜め込んだ魂は恐ろしいほどの力を有している。

それが今、爆発しようとしている。それを感知した薪はしばらく考えてから眼を洞窟から放さずに導師に尋ねる。

「ねえ。今からオレのすることを見て、誰にも他言しないと約束してもらえないだらうか?」

「・・・?」

「ちょっと薪!?まさか替装するつもりじゃ?...」

「仕方ないだらう。痺臨を止めるには今のままじゃ無理だ」

導師は怪訝な顔をしている。聞きなれない言葉を聞いて戸惑つていうようだつた。ひとまず、今は時間がない。たとえこの女性が今か

うにすることを他言してしまつようなことがあつたとしても今はとにかくそれどころではない。薪は踏ん張つて替装する。

薪は替装して両手を前に出して洞窟のほうに向ける。そして一瞬だけ眼を閉じてその手に眞稀を込める。その時、洞窟の奥で小さな爆発音が聞こえた。

## 第四十一話 言葉は時に力を有する

茶色身がかつた黒い髪がふわっと揺れたかと思いつと見たこともない美しい空色の髪になる。服装も不思議なロングコートに変わる。そしてその瞳も髪と同じような煌く空色に変わった。一体なにが起つたのかが理解出来ない。動搖している自分を放つて二人の少年少女は話を進めていく。ただ、爆発音が聞こえてから少年のほうはどうも苦しそうだった。

苦しそうに息をしている薪を見て不安になつたが表情がそんなに大変でもなかつたのでそうでもないのかと少し落ち着く。しかし、薪の表情がどこか引っ掛かっているようで気になつた。

「痩臨が相手だからなあ・・・」

薪がぼやぐ。やはり相手が痩臨となるとどうやらその力を抑えるのも一苦労なのかもしない。しかしそのぼやき方もどこか腑に落ちないようで薪の言葉に張りがなかつた。しかしここはこうして回収したので導師に向く。

「さて、導師よ。申し訳ないが『宝』は回収させてもらひ。その代わりといつてはなんだが、これを祭るといい。あそこに祭られている『宝』よりは御利益あるから」

薪が渡したのはガラス球のような物が連なつていて首飾りのような物だった。

少年が差し出したモノ。これに果たして力があるのだろうか。受け取つてみるとそこからはなんとも温かな気配を感じた。なんとも

いえぬ安堵感。これは本当に効き田があるのかもしれない。彼女は少年に眼をやる。彼は洞窟の奥に祭つてあつた『宝』を中に入らずその手中に収めた。一体どうやってかは知らぬが、手で軽く手招くようにしただけで勝手に『宝』のほうから飛んできた。

「それじゃ、これはもうって行くよ。いいね？」

「はい」

「それでは、このことは他言しないように。お願ひできますか？」

「・・・はい、と口だけで言つて信用してもらえるのでしょうか？」

「ええ、します。ありがとうございます」

少年は嬉しそうに笑みを浮かべた。それから少年の腕を少女が慌てつかんでさよならとかわいらしく挨拶をすると『まほづ』のよつに消えた。

少年が置いていった首飾りを祭るために住民全員がそれに取り掛かつた。数名はまだ文句を言つていたものいたが導師の言葉で何とか納得させた。そしてこのときのこの判断が良かつたことなのだと、あの一人の少年少女に感謝するべきなんだと思うよつになるのはまだもう少し先の話。

## 第四十一話 罪を犯した者

先ほどから口ひるまい少女を無視しながらうんざりした顔で移動する少年がいる。

「ちょっと聞いてる？！ただの人に簡単にばらして…忘れさせる事だつてしていないじゃない！」

「はいー、きいてますー」

「なにそれ！」

文句を言いながら猛スピードで移動しているので、ここで薪が急停止した日にはもう、薪に激突して穂琥は内臓が口から出そうになつた。そして先ほどは替装して地球の服装に合わせた格好、つまり人間の格好をしていたのに止まつた瞬間に替装しなおしていたので首をかしげる。そしてふつとこれらに首をかしげる。

「そういうえばさー、いまさらなんだけど」

「ん？」

「どうして眞貌祇の世界にいるときと、地球にいるときの替装後の服装つて、違うの？」

「メリハリをつけるに決まつているだろ？？幾ら力の解放だからつて例<sup>じよはく</sup>狼と同じ格好でいたら地球が壊れてしまつ。だから服装を変えてその違いをはつきりさせてているだけさ。服装の意味はその程度の違<sup>たが</sup>いだよ」

薪が珍しく普通に説明してくれたのが意外だがそれよりも穂琥は突つ込まなければならぬ単語を見つけてしまつて薪に尋ねる。

「じん・・・はく？って、言つた？」

「…………。つー」

薪の表情は明らかに「遣つてしまつた!」顔だつた。そして頭を抱えて叫ぶ。

「あー!今まで言わないよつに『氣』をつけていたのに……」

「え!? ちょ、それどういう意味よ!?」

「穂琥ちゃんに説明するの、面倒だもん」

「……はい。すいません……。優しく教えてください」

萎縮した穂琥に薪は仕方なく説明する。まあ、これを説明しておけば後に楽だから良いのだが。

眞貌祇、とは眞貌祇の世界のこと。人間の世界が地球なら眞貌祇は眞貌。つまりは星の、生息地の名前ということ。

そして、薪が替装した理由は、『あらのまつ』が眞稀が出るために家に帰るのが早くなるということ。

帰宅中、やけにずっと穂琥が大人しいので薪は横目で様子を窺つていたがどうにも落ち込んでいるように見えた。

「痴臨……」

家について替装したときに穂琥がボソッといった。

「ん?」

「戻つたね……」

「……ああ、そうだな」

さらに落ち込む穂琥。落ち込んだ理由がはつきりした薪は穂琥の頭をそっと撫でる。

「本当に地球が好きだな」

その言葉で穂琥が赤面する。わがままを言つてることを自覚しているのだろう。恥じるよつと小さく頷く穂琥を見て薪は少し表情を暗くした。

「残念だけど、いやいいのかな?いや、よくないな・・・」

薪にしては随分まとまりの悪い言葉に穂琥は薪の顔を覗く。

「こ」の痺臨。本物じゃない

「・・・・・・え?」

薪の握る美しく輝く球。それが本物ではないと?

「おかしいとは思つたんだ。痺臨の爆発を抑えるのにあの程度の苦しみで済んだのが」

今、こつして痺臨を手にしてわかるが、これは間違いなく、本物ではない。

「ひとまず李湖南のいる場所へ行くぞ」

大きく頷いた穂琥は白眼を開いて李湖南を見つける。そしてその方向へと移動する。

たどり着いた場所は人気の少ない集落のような場所。薪はその中

へ入つていぐ。その奥にはげつそりとした李湖南がいた。無論、誓  
茄、圭、鼓斗も。

「！」の先は入れないよ

圭がすばやく立ち上がり薪の行く手を阻んだ。薪はそんな圭を見て小さく笑つた。その笑みに圭は機嫌を悪くしたようだが薪は気にせず奥にいる李湖南へ声を掛ける。

「なあ、李湖南よ。あんたの言つていた『シナリオ』って言つのは終演したのか？」

薪の質問に李湖南は悔しそうに顔を歪めた。

「オレは慧奇だ！好からぬ事を考へてやつを野放しておくれ訳には行かないんだよ」

強く言つたその口調には強い割りにまるで李湖南たちを責めるような勢いは無かつた。

「あなた方の滅亡、ですよ。慧奇。それを求め、いや、それだけを求めてここまで着ております。酷い有様なんでものではありませんよ、慧奇のしてきた所業は。そして根強く残つた憎悪と惡夢。それに伴つ復讐心。その病める心が消えることはおそらくこの先永劫、無い」と思つております」

李湖南の語る慧奇への憎しみの言葉。しかし先ほどの薪と同様にその言葉に憎しみを感じることが出来なかつた。李湖南はふつと眼を伏せた。

「しかし、まあ、もうここではと

李湖南の言葉。薪はまるでそれを通りのをわかつていていたように微笑んだ。

懸念が変わり少しずつでもこの世界は変わりつつある。この先の未来にもし、平穏と言つものがあるのだとすれば、この激しく燃える憎しみの炎も、けたり狂う事はなくなるのだ。

「それに偽りはないな？」

「無論」

薪の最後の問いかけに答える李湖南。それを聞いて薪はここやかな顔をして李湖南に笑つ。誠心誠意を籠めて。

「オレに城に来い。こんな狭苦しい地球の中ではそれがしかし眞稀も窮屈だらう?」

「なー? そのような・・・」

「ふざけるな!」

ずっと黙っていた圭が大声を上げた。おそらく今の懸念ですら憎みのこもった眼で見てしまう哀れな女性。

「何が懸念だ! 知ったことを!」

「言いたい事はわかる。なら言い方を変える。オレの城に来てはもらえないか? 少しは変わったんだ。少なくとも・・・」

薪が言葉を切つたので圭は不信な表情を浮かべた。

「その・・・父上、のやつていた・・・その時とは随分変わっ

た。それをその眼で見て欲しいー今は違うーそしてこれからはもう  
と・・・！」

父のことを口にすることを躊躇つた薪。そしてアレほど今まで冷静に話していたのに急に声を荒げたので流石の圭も驚いて言葉を発せなかつた。

「悪い。取り乱した・・・・とにかく。見て欲しいんだ。オレはこれ以上、言わない。それでもオレの権力が見え見えする場所に行きたくないといつのならもう止めない。わあ、答えをお願いします」

薪はそういうなり押し黙つた。圭もすっかり黙つてしまつていた。

しばらくの沈黙の後、李湖南がしばらくはここに留まり、気持ちの整理をしてそれから決めると言えた。薪はその答えだけで十分嬉しかつたようで満足そうな顔をした。それから急に真面目な表情になつて李湖南に向つ。その空氣を悟つた李湖南も怪訝そうに顔をしかめた。

「二つちのほうがオレにとっては大事なんだ。二つ、隣臨は偽物だつたから本物は何処だ?つてことと隣は何処に消えた?」

薪がそれを聞くと、周囲の空気が変わつた。李湖南は苦そうな顔をしながら隣臨はそれが本物であるはずだという。その言葉に偽りがない以上、隣が何かしでかしたのかもしない。その隣については消息不明だと応える。その回答に肩を落とす薪。そしてその場の者に別れを告げて外に出る。

【奴の消息なら掴めたぞ】

綺麗の声に鋭く薪は反応した。

【えー？ 本当に？】

何のためらいもなく、綺麗との回線を繋げた薪に穂琥は少し落ち込む。穂琥はその回線のつなぎ方が全くわからなくて顕現させてばかりだったといつた。

【もへ、失せた。この世界には存在していない】

瞑、四顯とて、一度滅んだ身。そういうことこの世界に留まる事は不可能だったのだろう。神々の噂も多少耳にしたが、この世界から消え失せたのはどうやら事実のようだった。

【やうか・・・。癡臨のほうは？】

【あへ】

流石にそこまで情報が伝わっている訳ではないじへ綺麗の答えは質素だった。

【そりが。わざわざ連絡ありが・・・】

礼を述べようとして違和感に薪は言葉を切った。そして酷く驚いた声を上げた。

【ありがとう！？】

【黙れ、餓鬼が】

【あ・・・はい・・・。いや・・・その、ありがとう・・・】

【ふん】

綺邑との回線はそれきり切れてしまった。薪は驚いた顔のまま笑っている。

あの、綺邑が。わざわざその連絡のために話しかけてきたのだ。しかも薪に。それは驚くべきことだらう。穂琥としては邑穎は綺邑の父であり、死神だつた。だから多少なりとも気にしていたのではといづ。

薪はいまだに驚きを隠せないながらも、さつさと移動を開始した。

## 第四十二話 死者の誘い

ふうりとひとまづ息をつく。癡臨が偽物であつたにしろ、とりあえずひと段落だ。これからどうするべきか知らされていない穂琥はどうしたものか考えていたけれど薪は何かほつけた顔をしているのでどうしたら良いのか悩んだ。

「ね、これからどうするの？」

「さあ」

「え・・・」

薪の曖昧な返事に言葉を失う穂琥。あまりこいついた先の見えない回答はしない薪がこんな風にあやふやに返事をする事は酷く珍しい。

「曖昧な返事で悪いな。オレだけの判断では答えられないことでね」「薪の判断で出来ない！？もうそれ無理だよー誰でも出来ないよー」「いや、阿呆だろ、お前。オレはそんな全能じやねえって。オレより上なんて腐るほどいるって」「はあ！？」

薪はにやりと笑つて『死者を誘つ』と答えた。それをきいてはつとした。そうだ、まだ上がいるんだ。薪でも頭の上がらない『上』が。

「つむなわけだ」

薪のこの切り返しは何らかの形で穂琥に影響を及ぼす場合だ。穂琥はそれを重々知っているので身構える。

「お前が呼んで」

薪の予想外の言葉に穂琥は表意抜けしそれから納得した。薪があちら、つまり綺邑へのコンタクトを取ったところで反応してくれる可能性は低いという。そこで何故か急激に親しくなった穂琥に呼んでもらおうところのが魂胆だつたらしい。

「まあ、オレが用事あるつて言つて諭見を知つていて来てくれるかは怪しいけどなあ？」

薪はあまり責任を持つた言い方をしていないので半ば丸投げしているように思えた。穂琥はそんな薪を横田で見ながら呆れ顔で綺邑へ呼びかけようとしていたと止まる。

「声の掛け方わからない」

「いいよ、穂琥はそのままで。聞こえないわけじゃないから」

「え？… そりなの！？」

「そうだよ。そうでなければ神社や寺でどうやって人間が神々に乞うんだよ」

「あ・・・え、じゃあ、どうして？」

「その方が向こうもいつもコンタクトしやすいだけのこと。だからそれでいい」

「了解！」

穂琥はびしつと敬礼をしてから綺邑を呼びかけに移る。

非常に不機嫌であるのは変わりないがひとまず顕現してくれたことに全力で感謝する薪だった。それから意味ありげな眼で綺邑を凝視すると綺邑は諦めたように息をついた。

「もう支障ない。直ぐにでも帰そうとしていた所だ」

「お、そうか。それはよかつた」

薪は随分と満足そうな表情を浮かべてにこりと笑う。それから綺邑の指示を得て薪は右手を左から一気に右へ振った。するとまるでそこに空間の切れ目が出来たように縁の光を帶びて亀裂が入っている状態になった。その亀裂はみるみる大きく開いていき人が一人と折れそうな大きさへと割れていった。その亀裂の中にふつと綺邑が入つたと思ったら直ぐに出てきた。一つの影を引き連れて。

「ゆ・・・ー?」

穂琥はその影を見て目を見開いた。

## 第四十四話 舞い降りた一つの存在

眼を丸くした穂琥の瞳に移る優しそうな男性。その隣で幸せそうに微笑む女性の姿を眼にして穂琥は驚きと嬉しさがこみ上げた。

「幸奈さん……」

穂琥の言葉に幸奈は呼応してより一層美しく笑みを浮かべた。それから隣似る男性と目配せをしてから綺邑に向かい深く頭を下げる。それから薪にも。

「本来なら有り得ない事だが、特例として認めただけだ」

綺邑が少しだけ不機嫌そうにそつと言つた。薪はそれを笑つて聞いている。

「そういう優しい所がいいと思つぞ」

「貴様、堕として欲しいのなら素直にそつと言えば良いだろ?」

「すいません」

綺邑の殺氣に満ちた言葉に薪は萎縮して頭を下げる。

「わあ・・・・・幸奈さん・怪我治つたんですね?!

「ええ。そのお一方のおかげで」

「ああ、よかつた!」

幸奈の体は確かに普通。怪我などまるでしていなかつたように美しかつた。

「綺邑の力のおかげで一緒に田那も来ることができたんだよ」「だんな・・・え? ! ジやあこの人が翔時さん! ?」

「初めまして」

礼儀正しく頭を下げる男性は確かに幸奈に似合つて立派な男性に見えた。

「所で翔時さん?」

薪の言葉に翔時がそちらに意識を向ける。幸奈も穂琥も、薪の表情はどこか真剣さを帶びている。何かよからぬ雰囲気といつても過言ではないので穂琥は少し薪の話を阻害したい気持ちになつたが出来るわけもなく薪の切り出す話を待つしかなかつた。

「アンタ、何でこんなことになつた?」

薪のその質問に翔時と幸奈は険しい表情になつた。穂琥はそんな失礼なことを聞くものじゃないと叫んだが、結局のところ翔時はそれに答えることにした。こんなことまでしてもらつた相手に対するせめてもの礼儀だとして。

「わたしは・・・一つのグループに入つていきました」

そのグループはとてもなく危険なもので、今更になつて知つたことだが、そのリーダーは眞砲祇だつたらしい。

「何処の情報だ? あんたが何故それを知つている?」

「そこのお方にお教えいただきました」

「え? 綺邑が?」

「はい」

薪は一瞬、きょとんとしてそれから内心で深くへえーとなんとも言えない声を上げるのだった。

グループ内で機密にされているあること。翔時はつっかりそれを目撃してしまう。それまでは少し待遇のいいただの仕事だったはずなのに。まさかこんな悲惨なことを行っているなんてとショックを受けた。それと同時に怒りを覚え、警察に告発しようとしたがそのグループのものに捕まってしまう。

今思えば当然のことだが、何処へ逃げてもつかまってしまったのは相手が眞砲祇だったからなのだろう。

人を誘拐し、その身体を解剖。その仕組みを調べているようだつた。詳しいことまでは翔時にわかるわけもなく、捕まつた拳句、殺されたくなれば言うことを聞くのだと脅される。無論、それだけで翔時が頷くはずもなかつた。殺すのならすればいいと思つていてくらいたつた。しかし、幸奈の命まで駆け引きに持つてこられては頷くしかなかつた。幸奈の命は自分のものではない。勝手な駆け引きで使えるはずもないというのだ。

翔時は酷く苦しそうな顔をしていた。

「始めはこの人も、言つことを聞いていたのです」

幸奈が重い口でそう言った。

自分が連行してきた人間は皆そのグループのものに殺された。それが耐えられず苦しかつた。殺されるとわかつていて連れてくるのだからやつている事は殺人と同じこと。だから隙を見て何人も逃が

した。

それが露見して翔時は今の状態、つまり死に至る羽目になつた。そうして翔時は絶命し、悲しみにくれてゐる中に薪と穂琥が来たといひこと。

「時間だ」

短く綺邑はそう言つた。なにの時間が来てしまつたのか穂琥には理解できず首をかしげているがよくよく考えてみればわかること。翔時は幸奈と異なりすでにこの世にあるべき存在ではない。故にここに長いこと在り続けることは出来ないのだ。

「夫と少しでも話が出来て本当に良かつたです。感謝いたします」

幸奈はにこやかに笑いながら頭を下げる。「一度の夫との別れではあるけれど、心は晴れやかだった。本当にもう一度と会ひことは出でないけれど。それでも互いの心は繋がつている。

「 もう一度と、会ひとは出来ないんだね・・・」

穂琥が悲しい声を上げる。

「まああ？」

薪が妙に抜けた声を上げたのでこの場の雰囲気を見事に壊した。

「翔時さんは実際、綺邑がこの世界に戻しても良いと判断したからあ？綺邑に頼めばあ？ねえ？」

「貴様、もう少し素直に墮として欲しいと言えば良いのではないか

？」

「いや、ごめん・・・」

薪は綺麗に対してのみ学習能力を持たないことが不思議でしうがない。

翔時も幸奈も楽しく笑う。目の前の不思議な少年少女。摩訶不可思議な存在。それらがもたらした自分たちの心。

「ああ、本当に生きているといふことがあるな」

「ええ。本当に」

微笑む二人、いや一祇と一人は和やかな目を潤ませて胸の温かさを感じていた。

幸奈は家に、翔時はあるべき世界へ。帰す事として幸奈と翔時の姿は光の向こうへ消えていった。

彼女らと別れて薪は満足そうな笑みを浮かべて疲れたから寝るだけ言って自分の部屋に引っ込んでいった。

## 第四十五話 「口を制するもの

薪が睡眠に入つて五時間くらい経つた。まだだるい感じが残つていそうな雰囲気を醸し出しながら薪が寝室から降りてきた。そんな薪を見てふつと思つ。そういえば薪は修行といつてその場に座り込んで微動だにしなかつた。それが本当に修行になるのだろうか。

降りてきた薪に早速それを尋ねる。

「ねえ、薪。聞きたいことがあるん・・・」

「ヤダ」

穂琥が完全に聞き終わる前に薪の却下の言葉が下る。

「いや、雰囲氣で。面倒くさそつだつたから却下した」

「酷い！良いじやない！教えてよ！薪の修行つて何やるのー・？」

穂琥の質問にやつぱり面倒な質問だつたなあと顔をしかめる薪。

「はああ・・・」

「うつわー！深いため息ー？そんなに面倒ー！？」

「煩いわあー・・・」

「ひどー！？」

なんだか、修行のときとのギャップが激しすぎてそろそろ心が折れそう。びつして修行の時はあんなに優しかったのに。

薪は再びの深いため息のあと、仕方ないから教えてやるといつて椅子に腰を下ろした。

「オレへりこになるとどうしても対戦相手が必要になるんだよ。もつ得るものはないからね。いや、ないわけじゃないけど・・・」「

薪は少し曖昧な言葉で自分の言葉を否定したがどうやら今それを詳しく言つつもりはないらしくそれ以上は言わなかつた。

つまり、薪は穂琥と違つて新たに得るものは特になし。つまり穂琥のよう屹立ミーを生成してそれに向つて修行するような事は必要ない。必要なのは穂琥にも言つたとおり、実戦。とはいってもこの地球に薪と拮抗できる修行相手がいるわけもない。なりビツするか。相手を作るしかない。

とはいっても簡単に自分と拮抗できるモノを作ることができるわけもなく、薪は地べたに座り精神を集中させる。そうすることで薪の精神が仞泊と繋がることができ。簡単に言つていいが相当困難を要するもので修行のためにとわざわざするような行為ではない。

「え? ジやあ、向こうにいる眞胞祇と精神的な世界? で戦闘訓練していくたつて言つこと?」

「まあ、そういうことだな。正確には儒楠と」

「あ・・・なるほど・・・」

薪の言葉に何だか不服感を覚えた穂琥だった。薪だけ向こうと繋がっていたといふことが何だか不服。

「とはいってもやつぱり実際に身体を動かしているわけでもないしイメージトレーニングみたいなものだからそろそろこの方法では成長できなくなるな」

「え・・・これ以上強くなる必要があるの・・・?」

少し引いた感じで薪にそいつと珍しく薪は穂琥を馬鹿にするでもなく真剣な表情で穂琥を見据えた。それに胸の奥がどこかちくちくと痛んだ気がした穂琥だった。

「オレはまだ弱いよ。弱くなれば綺麗みたいな死神の力を借りることもないし、何より穂琥を傷つける羽目にはならなかつた」

薪のその言葉の重みは痛いほど穂琥もわかつた。何より穂琥自身がそれを願っているのだから。誰も傷つかないその世界を。しかしそれが薪の口から言われるどこか不思議な気もした。

「まあ、そういうこと。だからオレはまだまだ強くなりたいし、ならなくちゃいけないんだよ」

薪はそつと穂琥に微笑みかけた。

「自分でも、他の誰でもない、ただ純粹に穂琥のために」

薪はなんとも暖かな笑みを浮かべてそう言つた。そして薪は再び疲労回復のために睡眠を取るといつて寝室へ上がつていった。

## 第四十六話 怒りは静まる

突然の出来事。息が詰まるほどの中の苛烈な『氣配』が降り立つた。鈍感と薪に罵倒されている穂琥ですら息が出来なくなるかと思つほどの強大なモノ。苛烈で強大。しかしそれは決して負のオーラをまといではない。ただ純粹に大きすぎる『氣配』なのだ。

「何故・・・!?

今から数分前、薪がやつと起きてきた。その時間にはとっくに暗くなっていた。

「寝起きじやなくて一層のこと朝まで寝てなさいよ!」

寝ぼけている薪に一喝している穂琥。起きてくるのが遅かったことにどうやら憤慨している様子の穂琥。薪は今かなり不安定な状態にある。もし、今眠つて再び眼を覚まさなくなつてしまつたらどうしようかといつのが穂琥の本音。だからこんなに長いこと眠つていられるといづれとも不安になってしまいます。

そうしてボケツとしている薪にぎやあぎやあ喚いていふとそこには降り立つた苛烈な『氣配』があつた。胸の奥が詰まるような呼吸が苦しく息を数個とも吐くことも一瞬忘れさえ、下手したら心臓を動かすことさえも忘れてしまいそつだつた。この苛烈な氣配を『神氣』と呼ぶのだろう。その神氣の根源はいつまでもなかつた。

「れ、簾乃神様・・・!?

ふわっと軽やかに降り立つた簾堵乃槽耀の神。薪が酷く緊張した様

子で何様で参つたのか尋ねていた。

「何。心配事と礼を兼ねて」

簾乃神はその美声を部屋に木靈させた。神氣というものをこんな小さな地球で感じることになるとは正直薪も予想だにしていなかつたことなので緊張なんてものではないくらい固まつていた。無論、穂琥も。

「その小娘。無事で何より」

「・・・え？」

「戦闘前に随分とそこの小僧がぬしのことを気に留めていたからなあ」

「簾乃神様。如何に神といえど言ひていゝ事と悪いことがあるのでは・・・？」

薪の警戒しながらも多少の怒りの滲むその声に簾乃神は高らかに笑つて見せた。

「はつはつは。何をそんなに怒る。正直に言つたまでや」

簾乃神のその言葉に薪はぐつと押し黙る。それ以上の追求はやつてはならない。相手が神である以上、余計な事を言って機嫌を損ねてはいけない。とはいへ、この簾乃神がその程度のことで怒るかといつたらきつとそうではないだろうが、そこは『神』という存在に対する礼儀というものだ。

「さて、小娘よ。ぬしにはまだ正式に礼を述べていなかつたな」

簾乃神が穂琥にむく。その美しい瞳が穂琥を捉える。それに捕まつ

て穂琥はより一層呼吸を忘れた。その苛烈な神氣と美しさに何もかもを呑み込まれて。

「感謝している」

神の言葉。それは一つ一つに力を有している。神の発した言葉で簡単に人や眞匏祇は翻弄される。そんな力を有している神の言葉でこれを言わせるということがどれほど凄く、どれほど畏れることが、きっと穂琥にはわからない。それでもそのすこしだけはなんとなく伝わる。

「それで、神よ。用件はそれだけでしょうか？」

薪の言葉に神妙な表情をして向き直った。

「報告だ。京鏡の奴が他の神々の許しを得たとね」

「ほひ。神々とはそんなに安易に許しを得られるものでしたか？」

「ふふ。随分とでかい口を叩けるようになつたものだな。まあ良いが」

簾乃神は愉しそうに笑つた。

「時期、とだけ言つておひ」

意味ありげに笑うその姿もどつか妖麗で美しい。その雰囲気に呑まれてしまう人間も眞匏祇もきっと数多くいることだろう。呑まれたものたちがその後どうなつたかなど御伽噺でも読めばわかることがもしれない。

それはさておき、簾乃神の報告はこれまで。そろそろこの場から

消えようといつとぞ、ふつと簾乃神が思い出したように薪に呼びかけた。

「少し、引っ掛かるなあ。ぬしよ、運命を導く者として忠告しておいてやる。以前見たであろう『夢』を」

簾乃神がそう言つた直後、薪の眼が大きく見開かれた。

「引っ掛かるのだよ、それが。氣をつけひ  
「え、ちょっと待つ・・・つて、話を…」

薪の言葉など聞かぬようになら神氣一つ残さず消え去つてしまつた。後に残つたのは苛烈な気配に押しつぶされていた自身に残る怨せだけだつた。

以前、修行の疲労でソファにて眠つてしまつたことがあった。穂琥が治療をしてくれようとして眼が覚めたあの時だが。あの時薪が妙に飛び起きたは妙な『夢』を見たせ이다。その夢のことを今、簾乃神は引っ掛かる、氣をつけると言い残した。

またか、と薪は肩を落とす。決戦前に言われた穂琥の身を按する不安な言葉。そして今回も、似たようなものだ。まだこの不安から離れてはもらえないのだろうか。

## 第四十七話 訪問ついでの遊び

学校の帰り道。獅場と籐下が笑いながら帰宅していた。

「てかなんでだあ？何で薪と穂琥ちゃん、あんなに仲良い訳？最初全然会話すらしていなかつたのに」

獅場が口を尖らせながら文句を言っていた。おまけに穂琥だけではなくほかにもう一人いたわけで。

「あのキレーな人も結局は薪の知り合いなわけだろ？アレ、誰だし」「知るかよ。欲がないから寄つてくるんじゃないのぉ？」  
「え？」

籐下の言葉に獅場は文句たつぱりで言葉を返す。そうして歩いていると田の前を薪が通過していくのを発見。

「お、噂をすればなんとや。おーいー薪！」

獅場が田の前を歩く薪に激突する。

「うわ！」

その勢いで薪が前のめりになる。

「お？今日は一人か？珍しいなあ～」「は？」

獅場の言葉に薪はあやふやな言葉を返す。それが気になつた籠下は獅場と同じ様に尋ねる。

「穂琥ちやんは？いつも一緒にいるじやん？」

それに他の眞抱祇との接触を避ける意味も含めて穂琥は絶えず傍に置いておきたい様なことを言つていたような気がしたのは氣のせいが。

「あー・・・色々あつてねえ」

遠い眼をする薪に何か不信感を覚える籠下。穂琥に何かあつたのだろうか。そういう考へてゐるあだに獅場が何とか薪の家へ突入する方法を模索しているようで薪もそれに面倒くさそうに対応していた。しかしどこか歯切れが悪い。何か面倒に巻き込まれているのだろうか。

「あー？」

突然聞こえたその声に皆が振り向く。そこにはあからさま、やつてしまつた感のある穂琥が突つ立つていた。

「勝手に出歩くなつて」

薪が穂琥に言つ。その言葉に完全に萎れた穂琥は俯いてとぼとぼと薪の脇に收まる。それを見て籠下はどこか納得する。穂琥はどつやら勝手に家を抜け出してしまつてそれを薪が探してゐる状態だったのだろう。

「さて、じゃあ・・・まあ。帰ります・・・つとわつ？！」

薪が突然前に転び、地面に手を突く。その予想外の行為にみんなが眼を丸くした。

「いつて……まじかよ……。とび蹴りってなくね……？」

腰を抑えながら薪が立ち上がったが、むしろそれよりもその場にいるものは今現れて目の前の薪を蹴飛ばしたほうに気が取られている。

「お前な。勝手にくるのは構わないがここいら辺はオレのテリトリーだ。その状態で歩き回るな、面倒だ」

「す、すいません……。少し遊びが……」

「ほう？遊びとな？ふざけたことを言つのも大概にしろよ？」

「すす、すいません……！」

一人のやり取りを見て呆然とする籠下と獅場。だって目の前に薪が二人いるのだから。ただ、最初に会った薪はへらへらとしていて後から登場した薪は酷く憤慨の様子。むしろこっちが本物の薪だと言い切れるくらい表情が怖い。怒っている。

「え……あの……何で薪が……二人？」

獅場の混乱した声が後から来たほう、つまり怒りを見せていくほうにため息をつかせた。

「面倒なんだけど……」

「わるい……。本当にこじめんなさい……ほんと、ちょっとした出来心なんだ……」

完全に沈んだ薪と呆れている薪。一体この二人は……。

「え？ もしかして儒楠君！？」

穂琥の声に呼応するよしひに沈んでいた薪が手を上げる。

「はい、そうです。なんか久しぶりな気分・・・」

苦笑いして儒楠がそう答えた。穂琥は納得できたがさつと籠下と獅場は理解できていなはず。さて、どうするか。

「あ、そうだ」

「え？」

薪がさつと穂琥の前に移動すると穂琥の頭に手を振り下ろす。それの痛いこと、穂琥が思わずしゃがみこんだ。

「いっただ――！」

「勝手に外に出るなっていつてあつたはずだけじ？』

「じめんさんさい！」

明らか不貞腐れた子どもみたいなその謝罪の仕方にさすがに獅場も籠下も固まる。それを見て儒楠はへへっと笑う。

「帰るぞ。家に帰つたら覚悟してや」

「う・・・は、はい・・・」

薪の脅して屈して穂琥はとよとよと帰路に着く。

「じゃあ、オレら帰るわ。おら、儒楠。お前もだよ」

「はい・・・。オレもお叱つきひとつ一緒に受けようね・・・」

「当たり前だな」

「はい・・・・・」

落ち込んだ穂琥と儒楠を引き連れて薪はわつさと歩いていく。

そんな三人の背を見ながら一体どういったらあんなふうになるのか疑問の籬下と獅場だった。

「何、あれ・・・。そしてあの・・・じゅなん?つて誰・・・」

「さあ・・・。知らない・・・」

答えられるわけもなく。仕方なく獅場と籬下は帰る事にして別れる。

籬下はふつと足を止めて薪たちが消えていったほうに眼をやった。そしてやはり色々気になることがあるのでそちらに足を運んだ。

何度インターフォンを押しても反応がなく、相手が薪なので構わないかと思つて勝手に玄関のドアに手を伸ばす。鍵はかかっておらず中に入ることが出来た。そして中の状況を知つて絶句する。

二人、正座。その前にソファに腰を下ろすのが一人。酷く沈んだ空気が漂つていて今までに叱責終わりました感が漂つている。

「ん?ああ、籬下。どうした?」

「いや・・・。まずこっちが聞きたい・・・」

「勝手な行動を取つたことに対する叱責、とだけ言っておく

「うん・・・。そうだね。それだけしか聞かないよつとする・・・」

どう考へてもこの空氣は重い。

やつとのことでいつもの空気に戻つたところであざわら籬下が戻ってきた理由を薪が尋ねる。

「ああ、この間さ。穂琥ちゃんが凄く綺麗な人と一緒にいたんだよ」

「・・・外、に？」

「え・・・あ・・・うん・・・」

またもや勝手に外に出たということが露見されて危うい空気が流れたが穂琥が一生懸命護つてくれたから大丈夫だと豪語している中に儒楠の言葉で今度は薪が押し黙ることとなつた。

「え？薪が見張らなかつた時があつたのか？」

「ん・・・」

薪の反応を見て明らかに普通ではなかつたことが起つたといつこと悟つた儒楠は眼を細めた。

「で？誰だつけ・・・その綺麗な人・・・えっと、きゅうっだけ？」

「「はあ！？」」

これは薪と儒楠の声が重なつた、が。一人とも同じ様な声なので少し不思議に聞こえた。そして二人のその反応に籬下は驚いて身を引いた。

「お願いしたらきてくれたの！？」

穂琥の言葉に薪も儒楠も意外そうな表情で苦笑いを浮かべている。

「でさ。ほら、穂琥ちゃんって薪が護るんだろう？それにその人がやつていたから一体何者なのかなあ？って」

「どうか、アンタヤ。何で普通にそういう会話しているんだ？」

儒楠の質問に簾下は首をかしげた。薪がそれを理解して儒楠に説明をする。

「それ、簾下隼人」

「え？ ああ、これが？」

それ、これ、の扱いを受けて少しショックを受ける簾下だったが仕方ないと抑える。

「へえ。何、眞砲祇つて事まで教えてあるわけ・・・」

「おう。色々便利だから」

「便利つて・・・」

薪の言葉に儒楠が笑うよう言つ。

「ああ、別に悪い意味じゃねえよ？ 簾下」

「うん、いや、あの・・・うん。わかっている。薪が相手だから」

「それは何より」

にやりと笑う薪に簾下も笑う。そして話は綺麗の話へ戻る。

「流石にそればっかりはオレの判断じゃ何も出来ない。オレが勝手に言つたら大変なことになるわ」

「え？ 大変つて・・・お前、結構凄いやつなんだろう？ だつたら平気そうだけど・・・もし言つたらどうなるんだよ？」

「命とられちやう」

薪にしては随分と可愛らしい語尾だったがそれがその危険性を物語つてゐるような気がした籠下はそれ以上を突っ込める勇気を失った。

「いいじゃん、きいてみれば」

「おいおい、穂琥ちゃん?」

「はい!?

「オレが嫌われているの、知つていてそれをいつているのかなあ?」「申し訳ありません!..」

籠下はこの会話で正直驚いた。薪のような人格が他者から嫌われるようなことがあるのが正直意外だった。誰にでも好かれるような、誰にでも平等に接しているような、そんな薪をキライだと言うものがいるのか。いや、確かに綺邑は穂琥と共に歩いているときに薪を腐れ外道呼ばわりしていたことを思い出した籠下だった。

「そうだなあ・・・。オレらに近いより遠い存在だよ。あくまで人間ではないことは事実だ」

「・・・そつか。それでオレが聞きたかったのはそういうことじやなくてわ」

穂琥があの時、薪のことを語ろうとしたがしなかつた。いつもならちゃんと言うはずなのに。それに何より、綺邑という籠下にとつてはよくわからないその存在が薪の代行として穂琥を護つっていた。そんな事、普通では考えにくい。薪が穂琥の護衛を他者に任せることなど草々なことではない限りは有り得ない。

「そうだねえ。それはオレも気になる」

儒楠も参戦してきたので薪は最早逃げる事は出来ないと悟つて小さ

くため息をついた。

「いや・・・その・・・。黒眼を開眼しまして・・・。その後昏倒しました・・・」

「はあー?なにしてんのお前ー?」

「え・・?」「ぐ・・・ん?」

儒楠は薪に對して怒鳴を上げて見えた。

「私の・・・せいなの・・・」

「え?」

穂琥の小さな声に儒楠が反応する。しかしそれよりも早く薪は行動を取る。さつと穂琥の前に移動して穂琥の両頬を包むようにして穂琥の顔を固定して自分と眼を合わせる。

「だから言つただろ?。それは違うって。そのことでも悩むな  
「・・・」

薪のその優しさに穂琥は黙る。肩を落とした薪を儒楠が追求する。

「何をしたんだ?」

「李湖南、つて知つていいか?お前なら詳しいだろ?」

儒楠は少し思考に意識を集中させ始めた。

## 第四十八話 懇々たる責務

腕を組んで考へてゐる儒楠とその様子を上田で見ている薪。何処から見てもそつくりで。こひうのを瓜二つというのだろうが、どこかまだ薪に騙されているのではないかと不安になる籐下だった。薪に兄弟はいなかつたはずだから肉親ではないのだろうかと思考していた。

思い出したのか、儒楠は腕組みを解いて腰に手を当てた。

「李湖南、確かに正地の末裔、だつた気がする」

「なるほど・・・。そういうことか・・・」

「自信はねえよ? 記憶が定かでは・・・」

「いや、たぶん合つてゐるだらうな」

正地とは昔、強大な力を有してゐた眞甕祇たちが集つてゐた場所。それを懼れた当時懇々たる巧技がその一族を全て壊した。李湖南を除いて。おそらく李湖南は運よくその場から逃げられたかはたまたいなかつたか、どちらかだ。『スウェラ』と言つていたのは当時、巧技がその正地で使つてゐた名であつた。無論、他の場所でも使用してゐるために李湖南がその生まれだといふことに気づくのが遅れた原因もある。

「まあ、その李湖南と少し遭り合つてね。そつしたら意識不明状態に陥つて最終的には何故か知らないけれど綺邑に助けられた」

「え・・・? 綺邑が・・・! アイツ、お前のこと助けるの! -?」

「私がお願いしたらきいてくれたの! -」

「あ・・・そなんだ?」

穂琥に対する綺麗の感情は一体何なのだろうか。そんな事知らないけれど。ともかくそう言つたわけで穂琥から守護するのを一時外れただといふことを云ふと儒楠が呆れたように肩を落とした。

「大丈夫、なのか？」

「まあ、とりあえず今は元気」

心配する簾下に薪は笑つて答える。それに満足したのか用件はそれだけだからといって簾下は薪の家を後にした。

簾下がいなくなつて薪はやつと儒楠と話をする。

「何をしに来たんだ？」

「ん・・・・」

言葉に詰まつた儒楠に疑問の表情を送つたが儒楠はどこか渋りながらも仕方なく口を開く。しかし、これは別に儒楠が言つづらいのではなく、薪が回答しづらいのだと儒楠の言葉を聞いて思つた薪だった。

「次代、懸念の・・・話になつたんだよねえ〜? オレなんかじゃ決められないでしょ〜?」

「つたぐ・・・・・。っはあ〜・・・・」

薪が妙に困つたように頭を抱えたので穂琥がどうしたのか尋ねたところ、今度は儒楠だけではなく薪まで回答を渋つてしまつた。

「どうかそのへりの伝令なら称報でもいいじゃねえかよ  
「いや・・・・」

言葉を渋りながら儒楠は右手を前に出した。するとその手に僅かに光が集まり紙が現れた。そしてそれを薪に渡す。薪はそれを見てげつ、と声を漏らした。

「どーする?」このままじゃ懸念の血が途絶えちゃうよ~?って長崎が

「んなもん! そんな事知るかあ! !」

持っていた紙を引き裂いて木つ端微塵にして最終的には燃やして消滅させる。それを困ったような笑みを浮かべて見詰める儒楠。

「え? · · · あの、何?」

唯一、この場についてこられていない穂琥が薪と儒楠を交互に見ながら尋ねる。先ほどきいた新しい単語、称報についても。

「ああ、称報って言つのぼい? 地球と仮想を眞稀で繋いで会話する、電話? 見たいなものさ。ああ、先に言つておくが、穂琥みたなコントロールもまともに出来ないような『バカ』がやつても無意味だからわざわざ教えるような事はしなかつた」

無駄に説得力があるがかなり腹の立つ言葉に穂琥はどう反撃しようか悩んだ挙句、反撃など出来ないと諦めた。

「わい。どうやつて長崎を言つてゐるのか · · · 」

気を取り直したように薪が皿つ。儒楠は苦笑いしながら右手を出してふつと眞稀を集中させる。するとその手には紙が現れた。先ほど薪が燃焼させたもののように見えた。

「何だ、役奇の方は良いのか？」

「あつちはいまだにオレにビビッているから支障はない。いいことじやないけどね」

「確かに」

薪の言葉に今度は本当に可笑しそうに儒楠が相槌を打つ。

「ねえ？ その紙何？」

儒楠がヒラヒラとせせていく紙をもして、穂琥が尋ねると、一気に空気が重たくなった気がして、その空気を感じ取つて、穂琥は固まつた。  
あれ？ まずい」と聞いた？

「まあ、その・・・あれだ。見合いの写真だよ」

儒楠が呆れたような笑みを浮かべて、そう言つたので、穂琥はさりげに固まつた。

「・・・・え？ 結・・・・え・・・？」

「はは。地球育ちの穂琥には少し有り得ない話かな？ でも当然だよ。この年になつて許婚の一祇もいないなんて、慧奇としてあつちや駄目だろ？」

儒楠が簡単にそういうので、穂琥は固まつた首を、ぎこちなく動かして頷いた。

「薪は慧奇だからなあ～？ その血を絶やしちゃ駄目でしょ。前慧奇は結構早めに決まつていたらしいけどね？ 薪が決めないから役奇とか、特に長奇とかが困り氣味らしいよ」

「知るか」

儒楠の説明に薪が不貞腐れて答える。

「オレはそんな事考へている余裕はねえよ。今はとにかく孤独をよく改良していかなければならぬわけだし……」「だからそれを支える相手だう?」「いらん! オレは穂琥と儒楠がいればそれでいい」「お前、面倒だからそう答えたな……」「よくお分かりで」

はあ、とため息をつく儒楠。それを見ている穂琥はいまだに硬直が解けない。

今回はどうやって言いくるめるかを必死に悩んでいる様子を見るといどうやら今回が初めてではないようだつた。そして悩んでいる薪を見て穂琥はふつと頭に『妄想』が駆け巡る。それを考えていくうちに自然と口元がにやけていくことに気づかなかつた。

「なんか腹が立つ顔しているんだけど、やつていいか?」

「いや、抑えろって……」

「……え? ! あ……! 『ゴメン』私ったら……」

穂琥はぶんぶんと頭を振つてにやにやを吹き飛ばす。が、直ぐにニヤニヤが浮かんでくるらしくつには薪の怒りを買った。

「てめ、本当にヤルネ。コラ。あ?」「すす、すいません……!」「はいはい、お一方! 落ち着く~」

儒楠が仲裁に入る。ふんと鼻を鳴らして薪はそっぽを向いて長椅へ

の対策を練ることにしたようだつた。そんな薪の背中を見てまたも  
やニヤリと笑う穂琥。

「あのね・・・穂琥。そういう考え方・・・妄想?はやめなよ・・・  
「え・・・?」  
「まあ、あくまで想像だけどなんとなくわかるわ・・・。穂琥の考  
えていること・・・」  
「嘘! ?薪にもばれる! ?」  
「いや、薪はそういうの疎いから大丈夫だと思つけど・・・  
「ほつ・・・」

胸をなでおろした穂琥を見て深いため息をつく儒楠。穂琥の妄想は  
決してありえることではないことを儒楠も、無論それをしていた穂  
琥自身もわかりきつていることなのだった。

## 第四十九話 封鎖された道

薪が急にソファから立ち上がりてひらめいたような表情をしている。

「いや、全然閃いていないから……。それじゃ駄目だろ？……それに呆れたように儒楠が苦笑いをする。しかし薪はそれでいいと言いかける。

「よし。じゃあお前を送るから」

「？ なんだ、癪臨はまだ回収できていないのか？」

す

ん。

「え・・・・？」

なにやら重たい空気が薪と穂琥の頭の上に流れる。それに一瞬身を引く儒楠。

「まだ・・・・手に入れていない・・・・」

「え・・・・？ お前が？ まだ見つけられていないのか？」

「しくじつた・・・・」

「はあ！？ しくじ・・・・？ ！ 何してんの！？」

儒楠の大声に少し驚いた穂琥だったが、まあ、当然かと思つ穂琥だった。

基本、薪は「えられた仕事は完璧にこなす。高校に通つていたと

きだつて記憶が穂琥にはなくて薪を特別に意識することはなかつたけど試験は満点であつたし、その他の事だつて完璧に終える。無論、眞匏祇での仕事も完璧にこなしている。それなのにこの期間があつたにもかかわらずいまだに手に入れていないことを知り、儒楠は驚いたのだ。それに癪臨を回収するということをしつじるなど、本来ならやつてはならないミスだ。それを犯した。

「おいおい・・・勘弁しろよ・・・? 癖臨が相手だぞ? 地球にどれだけ有害かわからないわけじゃないだろ? 何ミスしているのさ・・・」

「悪い・・・。偽物をつかまされた」

「全く・・・」

薪の少し萎れたその様子に流石の儒楠もそれ以上を言つつもりはなかつたようだ。

「回復したら、ちゃんと探すつもりだつたから・・・」

「・・・その『回復』って言つのも気になるけどな。お前ほどの奴が一体何があつてそんなに酷い扱いを受けることになつたんだよ。慧夸だろ? しつかりしろよ」

儒楠の言葉は最もだ。慧夸は眞匏祇の中で頂点に達する存在。決して引け劣つてはならない。

「あ・・・それは私が・・・」

「お前は黙つていろ。オレのミスだ」

穂琥が言おうとした事はもうわかりきつている。だから薪はそれを言つ前に否定した。でも穂琥としてはそれも辛かつた。いくら、何度もそういうわれても。

「・・・なんとなく事情はわかつたけど・・・。でも、どうするかな」

「ま、いい。ひとまず帰れ」

薪の言葉に儒楠はどうとか納得がいかないなりに頷いた。

薪の家の地下。階段を1~4段下りたところに小さな部屋がある。といふかこの家の構造は穂瀬には全く想像ができない。普通の家ではないことは確かだと思つ。

そこにある仮泊へつながるゲート。

「さて。じゃあ、帰るわ。無理すんなよ」

「うむ」

儒楠が白く光の集まつた中心に立つ。そして帰る為に真稀を練る・・・。その瞬間、光が暴発したかのようにぱっと閃光を逸して儒楠が後ろに飛びぶ。それを素早く薪が受け止める。

「悪い・・・」

「いや」

体制を立て直した儒楠がゲートへと手を向ける。先ほどの白い光は消えている。

「あれ・・・?ちゃんとあけたか?」「・・・開けた・・・はずだが・・・」

儒楠の言葉に薪が自信なさげに答えた。

「何故だ・・・？李湖南が原因じゃなかつたのか・・・？」

てつきり、あの李湖南が原因だと思つていたこのゲートの封鎖。しかし今もなお、ゲートは閉じたまま。

「な、なんで・・・？オレは普通にこっちに来られたぞ？」

「・・・おそらく地球から仮想へ行くゲートが閉じられているんだろうな」

「そんな事出来る奴がいるのかー？」

薪は酷く苦い顔をしていた。それから仕方ないようため息をついて何とか長考と連絡を取るといった。

「先に部屋に戻つていろ。状況を解析させる」「わかった

薪の言葉を得て、儒楠は穂琥を連れて部屋を出て行く。薪は地面に手を突くと、ふっと眞稀を籠める。そして指先に集まつた眞稀を額に当てる。

ツツツツ・・・・

眞稀が仮想へ繋がる音がする。

『・・・薪様ですか？』

通常通りの声が聞こえる。薪はそれに是と答える。通信は、つまり称報は出来る。

『すまないな、問題が起きた』

『何でしょう?』

『ゲートが閉じられた』

薪の言葉に役夸は酷く驚いた声を上げていた。そちらのほうでそれの解析が出来るか尋ねたところ、仮想から地球への解析をしても何も異常が見つけられないと答える。

『・・・・・ そうか。わかった。まだしばらくそちらには戻る事が出来ない状況になってしまっているが、何とする。だからそっちでも少し調査を進めて欲しい。何かわかつたら直ぐに連絡を頼む』

『了承いたしました。くれぐれもお気をつけて』

薪は称報を切る。仮想からは此方の地球は普通。通常通り。ならおかしいのは一体何か。わからないものだ。薪は頭を抱えてしばらくその場で悩んでいた。

## 第五十話 それぞれの想い

薪が帰つてくるまでの間、穂琥はずっとつまらない考えをめぐらせていた。先ほど儒楠が『妄想』といった類のものだ。薪が見合いをする姿を想像して吹き出しそうになる。そしてさらには薪と誰かが付き合うこととなるとなればそれはさらに吹き出しそうになる。それが考えている穂琥とは裏腹に儒楠は静かに考え方を巡らせてている。しかし、儒楠としてはそんな想い、さっさと消し去ってしまったかった。そんな考えをしている間に薪が戻ってきた。

「おひ。どうだつた？」

「向ひうからだと通常通り、何の変化もないってさ」

「なんだ、それ・・・。本当にひうなつてしまつたんだが

原因がさっぱりわからない。

「ねえ、そういうひうじで神様に聞いたらわかるもの？」

穂琥の安易な発言に薪と儒楠は眼を丸くした。その表情のそつくりなこと。どちらかに鏡があいてあるのではないかと思うくらい同じ表情をしていた。きっと、心を持った生き物は心底驚くとみんな性格とか取つ払つて同じ表情をするのだろう。

「あのね・・・穂琥ちやんね・・・。その・・・。オレが言えた義理ではないことぐらい百も承知だがね・・・。『神』という存在はそんな軽く扱えるような存在じゃないのよ・・・？」

困つたように頭を抱えてそひう薪に首を傾げる穂琥。

本来、神といふものは我々が崇め奉るべき存在。そしてその神々の手の上でいきとしいけるものは転がり続けるのが定め。無論、その神とて万能であるわけではないのだけれども。

「そ、そつか……。ごめん……。でもどうして薪が言えた義理じゃないの？」

「オレだって軽々と神の力を使つているからなあ……。」「え？」

薪が曖昧な答えをよこす。それが理解できなくて首を傾げたが薪は頭を抱えるだけで答えてくれない。その代わりに襦楠が回答をくれた。

「神の末端に座するもの、つまり死神だよ。あれだって神の一部さ」「あ～、なるほど……。」

そしてその死神の力をただ単に寂しいからといつ理由で軽々使つた自分を恥じる穂琥だった。

そうして沈んだ空氣の中、ふつとその空氣を割る美声が鳴り渡る。その声を耳にした瞬間、薪と襦楠はぐつと背筋を伸ばして目を見張つた。穂琥はぐつと背中を丸めて身構える。苛烈な神気が田の前に降り立つ。

「くくく……。面白い。實に面白い」

現れた美しき神。紅蓮の衣を翻し強く煌く紺の瞳を携えて簾堵乃槽あか耀の神が顯現する。

「え……？！す、すとの……しうよう……の、か・み・。」

・！？

驚いたのは儒楠。まさか、この一生で神を眼にすることがあるとは想像もしていなかつたことだつた。薪のほうは背筋こそピンと伸びてゐるがかなり萎縮してゐる。果たしてこの神の降臨を一度も許したのは一体誰の力か。

「ほう？ 見慣れぬ顔だな。誰だ？」

簾乃神の言葉に儒楠は一瞬面を食らつた顔をした。理由は簡単だ。この生きてきた中で儒楠の顔を見て『懸夸だ』といわれなかつたことはない。薪と全く同じその顔に嫌味はなくとも苦労はしてきたのだから。

「オレの、朋です」  
「ほう？ なるほど」

簾乃神は不思議な眼で儒楠を見据えた。それから艶やかなその唇をそつと動かして笑う。

「ティア、の餓鬼かな？」  
「・・・そのとおりです・・・」

儒楠の回答に簾乃神はほう、と言葉を付いた。

「何が・・・仰りたいのでしあう？」

薪が簾乃神へ意を決したように尋ねる。すると簾乃神の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「ぬし、己だけ生き残つたことを悔いているのか？己だけを残したそこの懸念を恨んでいるのか？」

「何を・・・！？」

儒楠は酷く驚いた顔で簾乃神を見詰めた。簾乃神の眼は何もかもを見透かしてしまいそうなそれに儒楠は軽く尻込みをした。

「か、感謝している・・・。それを心から外した事は一度もない。それに恨みなど一切持ち合わせてはいません」

「そうか。ならその抱く禍々しい感情は何だ？」

簾乃神が言葉を発する。それが儒楠の心を揺さぶる。穂琥が簾乃神の横暴な質問に喰らい付こうとしたのを薪が止める。

田の前に腰を下ろしている神が発したその言葉の真意。それを儒楠は無論わかっている。先ほど自分の胸からかき消したかった想い。それを見透かされたのだから。

「まあよいわ」

簾乃神は切り上げるように言葉を発する。

「して、ぬしよ。力を貸してほしこと？」

薪はその言葉に息を詰ませる。耳の奥、腹のそこまで響き渡るその美しい声は何もかもを搔つ攫つてしまいそうな強さを持つている。儒楠のことも気になるが、それを今追及する事は出来ない。故に神の意のままに流されるしかない。

「道が・・・閉ざされてしまい・・・成す術もなく。さらには田

的である癪臨すら見つけることが出来ませぬ

薪の言葉に簾乃神はほうと、頷いた。それから薪、儒楠、穂琥と一緒に警してふつと瞳を伏せた。

「我の専門外だな。その類はわからん。故に適切な者をここへ呼ばう」

簾乃神が呼ぶといったのは当然『神』。そしてその神の名は

摂麻涼貴、摂貴神・・・。

## 第五十一話 神といつもの

鮮烈で刺々しい神気が降り立つ。深い緑のターバンを頭につけているために毛色はわからない。そのターバンのあまりが二つ、長くたなびいている。首から掛かる漆黒の輪が一つ。それがしゃらんと音を立てる。金色に光るその瞳は緋の簾乃神とは違った強さを放っている。そして耳に木靈するのは酷く低く重たい声。

「何だ。つまらねえ所に呼ぶんじゃねえよ。眞匏祇如きが」

不機嫌そうに降り立つた一体目の神。摂癡涼貴せつめいりょうき、摂貴神せきじんだった。薪はその摂貴神を眼にして酷くまずい物を眼にしているように固まっている。そんな薪を摂貴神が眼に移して妙にやりと笑つた。その笑いを無視して簾乃神が声を掛けた。

「得意分野だらう?」

「いいや、違うねえ。『未来』であつて『過去』じゃない」

薪から目を離して簾乃神へと目を向ける。簾乃神は余裕の如く笑みを浮かべている。未来が見える神、摂貴神。故に過去も見えるだろうと、簾乃神は笑う。

そんな余裕の神、一体を前に、眞匏祇組みは顔を真っ白にして苦笑いを浮かべるしかなかつた。ただでさえ強烈な神気をこんな小さな地球、まして何の加工もしてないこの部屋に一つも神氣を降臨させては息が出来ずに死んでしまいそうだった。

「話を聞いてやれぬか?」

「ふん~? その餓鬼の? ふん・・・」

薪を見て再び笑う摂貴神。その笑みに穂琥は何故か腹が立つた。それが何故なのか全くわからなかつたのでもやもやした。

「へえ。少しばらシな面構えになつたかあ？」

押し黙る薪を前に摂貴神は重たい声を浴びせる。穂琥が憤慨しそうなのを感じ取つたのか摂貴神の目が穂琥へ向く。

「その小娘が穂琥さ」

簾乃神の言葉に摂貴神は興味を持ったように声を漏らした。

「ふーん」

そんなにたいそうな娘には見えないと聞いたげなその表情に穂琥はどんどん怒りが沸いてくる。それが一体何故なのかわからないといふのに。

「で？そつちの餓鬼は？」

「ティアの小僧だ。慈夸と朋だと

「ほほー？」

この場にいるもの全ての存在を確認した摂貴神は薪へと眼を移した。

「己の一族が消し損ねた一族と寄りを戻そつてかあ？末裔とそうしていれば己に付いた泥が落ちるとでも思つてゐるのか？」

口元がにやりと笑つているといつに眼が一切笑つていない。それに僅かな恐怖を覚えつつもそのあまりの態度に穂琥は憤慨寸前まで

来ていた。

「泣き喚け。お前に似合いの格好だ」

摂貴神の発した言葉に薪は酷く動搖した。瞳を震わせただ黙つている。しかしそれを見て。そんな震えを眼にして。頭の中で何かが爆発した。

「ふざけないでよー！あなたが薪の何を知つているというの！？薪がどんな思いでここまで来ているか全くわからないくせに、変なこと言わないで！！」

神氣すらも震わす怒号が部屋中に響いた。それに硬直して固まる薪と儒楠。それを僅かに愉しそうに眺める簾乃神。そして。

「ほひ・・・？」

にせついた表情を消して無表情で見下ろす摂貴神。

「神と・・・神と崇められている存在で在りながらーそんな態度はどうなのよーいくら何でも言つていい事と悪いことがあるわよー！」

暴走する穂琥。それを見てやっと我に返った薪が必死で止めに入る。

「よ、止せつて！穂琥！神の御前だ！落ち着け・・・！」

「いやあーー薪のこと、なんにもわかつていなー！そんなひどいことを言つたなの何処が神なのよー！」

頭を振つて冷静さを完全に欠いてしまつてゐる穂琥をどう宥めるか必死で考える薪。摂貴神が言葉を発する前に摂貴神へ謝罪の言葉を

述べなければならぬ。

「も、申し訳御座いません・・・あ、後でしつかりといつて聞かせます・・・。故に・・・」

「どうしてよ！そんなひどいことをいつような神なんて！！」

「頼むから落ち着いてくれ！穂琥！」

薪の言葉を一切耳に入れない穂琥の姿を見て儒楠はひどく驚く。そんな穂琥の姿を見たことがない。よほど、摂貴神の言葉が頭に来たのだらう。

「落ち着け」

荒れた声と焦った声の響き渡る部屋の中に怖いくらい落ち着いた美しい声が鳴り渡り、一瞬で静かになる。

「ああ、落ち着いて。よつく場を考えろ」

簾乃神がそつと穂琥を包むように抱き込む。あまりの突然のその出来ごとに穂琥は頭の中が真っ白になつた。それを見ていた薪も白くなつた。

「わたくし。面白いものよの。なあ、摂貴」

「・・・だなあ。眞甕祇とはこいついうものなのかな？」

「いや、恐らくは『ニンゲン』だらうな」

「まつ？」

摂貴神が面白そうに声を上げた。

「いの娘、長じことニンゲンの世界で過いでしてきた。故に思考は一

ンゲンそのものだ

簾乃神のにやりと笑つた表情を摂貴神が眼に収める。神が互いに眼を見合させ笑い合つ。こんな光景を一体どうやってみていいれば良いものか。穂琥にいたつては簾乃神に抱かれまだ。しゃらんと摂貴神の首に掛かつている漆黒の輪が鳴る。

「落ち着けたか？」

簾乃神はふつと穂琥を胸から離す。落ち着きを戻した穂琥は必死で何度も頷く。簾乃神に抱かれたその感覚が穂琥はなんともいえないくらいほつとした。そして暖かかった。

「そつだなあ・・・・・。力の弱いお前に何が出来る?そこまで吠えるのなら何かしらあるのだろう?」

摂貴神の言葉に再び怒りが湧き起る。しかし、今度はそれが暴発することはない。なんたつて彼が言つた言葉は事実なのだから。弱くて何も出来ないことを知つてゐるから。そしてそれと同時に何もない自分がそこにいたから。何も反論できなかつた。

「摂貴神。お願ひ申し上げます。オレの事は好きなだけ言つていただいて結構です。しかし、妹を責めるのだけは御止しください」

薪の切実な言葉に摂貴神はにやりと笑う。そしてそれに伴い、簾乃神までもがにやりと笑みを浮かべた。

「良いだろう。その根性、気に入つた。面白いじゃないか」「ほう?確かに『眞砲祇如き』とか言つていなかつたか?」

摂貴神の言葉を聞いて簾乃神が面白そうに声をかぶせた。高いとも低いともいえない美しい美声が地を振るわせるように思える強く低い声を覆つっていく。

「ま。 そうだが。 いいさ。 面白いものが見られた。 十分だ」

摂貴神は薪に向かい孜々緒しじよおといつ場所にいる駕南火がなんひに会う様に伝えてその場から消えた。 神氣が一つ減つて少しだけ呼吸の余裕を得た薪たちだった。

## 第五十一話 新たな目的

神とは本当によくわからない存在だ。アレほどまでに貶し、嘲つていたといつのに簡単に望んでいることを伝えて消えてしまった。本当に神は氣分屋だ。

「見込みがありそうなのう？ぬし」

簾乃神は面白そうに穂琥を眺めている。

「え？」

「如何に相手が神でも畏れぬその度量、流石」

「え・・・・！？あ・・・・いや・・・・！」

確実に動搖する穂琥をのどを鳴らして笑う簾乃神は本当に美しい笑みを浮かべていた。普通なら簡単に虜にされてしまいそうなほどに。

「まさかあの撻責の奴に口答えする者がいよつとはなあ

「いや・・・・ただ単に世間知らずなだけです・・・・」

「確かに・・・・」

薪の言葉に儒楠がかぶせる。確実に一人とも狼狽している。

「ん・・・・？」

簾乃神が急に声を発したので皆びくつと驚く。しばらく何かを聞いているような様子だったのでそれを見守った。そして聞き終わったらしい簾乃神が目を煌かせる。

「伝言だ」

簾乃神が伝つたのは摂貴神からの伝言。

この先にある死の恐怖に勝てるかな？

それだけを伝えると簾乃神も姿を消した。それにより完全に身体が開放された薪と儒楠は地面に手を突き荒れた呼吸をする。圧迫されたような場所に長いこといたせいで身体の節々がみしみし言つていそうだった。

「つたく・・・。今回よかつたけど・・・。次は気をつけろよ・・・。摂貴神は未来を見通す神と言われているが『怒り』の神でもあるんだから・・・」

「え・・・！？ そなーの！？ 全然怒つてこりよつて見えなかつたけど！？」

「これだから単純バカは・・・」「なにを？！」

憤慨したように穂琥が薪へ掴みかかろうとしたが儒楠が薪の意見に同意してきたので流石に穂琥も急停止する。

「本当だよ、穂琥。あの時、簾乃神が止めてくださったからよかつたのかもしれないけれど・・・」

儒楠の困つたような顔を見て穂琥は俯いてしまつた。

「まあ、いいよ」

薪がそう言つて立ち上がつた。少しだけ休憩をしてから先ほど摂貴神が教えてくれた孜々緒という場所へ行くことにした。

「それあ・・・オレが地球に行つたときに世話?になつた場所だと思つんだけど?」

「あ? 本当か? そら楽・・・」

「いや、むしろきついぞ・・・・

「え?」

儒楠の苦い顔が少し不安を煽つた。

「あそこで眞稀、ほとんど使えないぞ?」

「・・・・・・は?」

「・・・・・・え?」

薪と穂琥の声が被さる。儒楠の表情は重い。

孜々緒という場所は随分とここから離れた乾燥地帯に存在する小さな町。そこには理解も出来ない摩訶不思議な『結界』が存在している。その中に入ると眞稀を練ることがひどく困難になる。出来ないわけではないが。以前、儒楠が地球へ迷い込んだときも、その結果いのせいで随分と苦労したらしい。

とにかく。その場へ行くことが今出来た目的。わかれば善は急げ。わざと行動を開始なくては。手遅れになる前に。

## 第五十二話 見抜いた眼と感覚

ひとまず。疲れたの一言を残して薪は自室へ行ってしまった。おそらく休息を取るのだろう。なら、儒楠はともかく穂琥のほうも英気を養わなければどっかりとソファに腰を下ろしたとき、インターフォンがなつた。

「げ……。じい、薪の家だから私でないほうがいいんだよなあ……」

「じゃあ、オレが出るよ。ビリセ顔は一緒だから」

「え……なんだかごめん……」

「いいって」

儒楠はこやかに笑つて玄関へ向つた。

「はい？」

玄関を開けると、見知らぬ少女がいる。いや、知らなくて当然なのだが。

「あー薪君ー?久しぶりだね!私、真央ー覚えている?」

「えーっと……まあー」

曖昧な返答したが真央と名乗った少女は別段気にしている様子はなかつた。真央は嬉しそうに微笑んでいる。こういった面倒な人間を薪はいつも相手にしているとすると同情というか、薪の力量が凄いといふのか。

「なんだか、薪君が帰ってきたって噂を聞いてね!会いに来たの!」

「いや、それは……どうも」

知らねえよ。儒楠は内心思いながらもとにかくこの少女を追いやるために考えていたところに違う声が耳に入る。

「あれ？ 真央？ 何でこんな所にいるんだよ。 あ、薪一おつす」

「おつ」

籬下隼人。その登場に真央は随分と不機嫌そうな顔をした。

「何やつてんの、お前」

「うつさいーーアンタには関係ないでしょ！？」

「何だよ。ここは新の家だぞ？ オレ、友達だもん。遊びに来ただけだし」

「うざい！」

「はあ？」

目の前で繰り広げられる言い争いに玄関を閉めても良いだろうかといつ感覚に陥る儒楠。そつこう考へていても籬下が何とか真央を言いくるめて帰宅をさせることに成功していた。

「苦労するなあ～？」

「まあね・・・」

真央が帰った後、腰に手を当てて籬下が言つてきたので儒楠も適当に答える。しかしその様子を籬下は凝視するよつに見ゆ。

「何？」

「・・・真央のこと、知らないだらうへ」

「は？ クラスマイトだろ」

「…………いや、知らないだろ？」「

籐下の言つてきた言葉の意味を理解できずに儒楠は眉間に力を入れる。籐下はふと小さく笑つて真央が帰つて言つたほうを見詰めた。

「お前さん、薪じやないよな？儒楠、だよな？」

「…………へえ？わかるんだ？」

「勘だけね」

儒楠の回答にこつと笑つて返す籐下。

「…………薪がアンタを認めた理由がわかつた気がする」

「やつ？」

やつこつ話をしていると奥から穂琥が出てきた。

「あれ？籐下君！遅いから何をしているのかと思つた

「バレた」

「え？！嘘……！？」

「ホント」

ここやかに笑う儒楠と籐下を見比べて驚いた表情のまま頷いた。穂琥ですら、フリをされたら区別が付かないといつのこその凄さに感嘆する。

「でも凄いな。眞砲祇でも気づかないのに」

「そうか？」

「儒楠君。そりつと私のこと言つた……？」

「被害妄想だな。役奪やら長奪やらだつて騙したことあるだ。そう言つて事は自覚してくるんだな

「…………いや、知らないだろ？」

「ひどい！ 儒楠君、なんだか薪に似てきたぞ…」

穂琥の不貞腐れた声に儒楠は乾いた笑い声を立てた。

「逆に薪も儒楠に似ているんじゃないかな？」

「え？」

「はい？」

簾下の言葉に穂琥と儒楠が声を重ねる。余り会つて話をしたわけではないからなんとも言いがたいところもあるけれど。薪も最初に会つたときに比べると随分と丸みを帯びてきている。それはきっと儒楠の影響があるのでないかと簾下は語つた。それを感覚だと笑う。

「すゞいなあ。私眞苞祇なのに駄目だし……」

「ん、否定できない事実だな」

「やつこいつこころが似てるって言つの……」

儒楠の言葉に穂琥が怒鳴る。それを笑つてみる簾下。笑わないの、と怒鳴つていると儒楠まで笑い出してぶーぶー文句を言つていると、頭上で窓が開く音がしたので見上げると薪が窓を開けていた。

「つめせえ……」

薪の怒気に穂琥、儒楠、簾下は静かに声をそろえて言つのだった。

「「」、「めんなさい……」

## 第五十四話 旅立ちの準備

それから一日。薪は部屋から出てこない。穂琥は李湖南との出来事を詳しく出来るだけ正確に儒楠へ伝えた。儒楠は低く唸るように納得していた。

やつと部屋から出てきた薪はまだ完全に覚醒している様子はなく、ぼつとしていて何を話しても「おー」の一言しかないため、しばらくそのままとしておくことにした。ぼつとしている時間、およそ三時間。やつと薪が覚醒した。

「いや～。ゆっくり休んだわあ～。リセットした感じだわ。何もかも忘れた気分」

「いや、忘れちゃ駄目だからねー。」

穂琥と儒楠が同じ事を同じタイミングで叫んだ。

「わかつてゐつて

薪が軽く答える。まあ、相手が薪であるから不安になる」とはないけれど。どこかこの抜けている感じは一体何なのだろう。

「それで? もう良いのか?」

「おう。後は準備だ」

「わかった」

薪はふつと替装する。その姿を見て穂琥は目を丸くした。髪型とか目つきとか。色々変わつてまるで別人のように変化した。

「これからいくところは儒楠が一度行った場所だからな。顔が似て  
いるような面倒な事はなくす」

薪はそう言ってふりふりと手を振つてゐる。

それから色々旅の準備。眞稀が使えない以上、色々と準備するも  
のが必要だつた。そうして準備が整つと、薪はふつと雰囲気を変え  
た。

「さて。行くぞ」

「あいぞー。」

「了解」

薪の掛け声に呼応する。そうして移動術で目的の場所へと移動する  
のだった。

降り立つた場所は果てしなく続く荒原。砂漠化した地面。地獄の  
よつに暑い乾燥地帯。そして何が最悪かといえば。

「結界？ そのせいで移動術が使えるのはここまで。てなわけでこ  
こからは・・・徒歩です」

間の抜けた薪の言葉にがっくりと肩を落とす穂琥。このクソ暑い中  
をひたすら徒步で進んでいくしかないといふのか。この先が思いや  
られる・・・。

## 第五十五話 荒れた地が奪つもの

腹が立つ。むかつく。穂琥はこの長い距離を歩いてきてやつ思つ。何が腹立つて。別にこの暑さにじやない。日の前を歩く影一つにだ。こんなにも苦しい思いをして歩いている穂琥を差し置いて薪も儒楠も平然と歩を進めていることが何よりムカつく。

口を開けばそれだけで水分が奪われる。ふらふらとする足取り。あまりこういつた暑さには慣れていない。ふつと力が抜けて前に倒れる。そのまま倒れて暑い地面に顔を押し付けて卵焼きみたいに焼けていくのだろうか。

「大丈夫か？」

地面に当たる前に薪が受け止める。曖昧な返事をした穂琥に対して小さくため息をついてから薪は問答無用で穂琥を抱え上げた。

「ぎゃあー！」

「つたぐ。おい儒楠。このあたりで木陰なり何なり探し  
「無茶言つなかー。眞稀使えないって言うのに」

文句を言いつつも既に儒楠は辺りを見回している。薪は持つてきているかばんの中から水筒を取り出して穂琥に飲ませる。

「あまり飲みすぎむなよ。もたなくなるぞ」  
「はーい・・・」

完全にだれた穂琥は薪の背中で水を少しだけ口に含む。回復の様子はあまり見られないけれど。

儒楠がやつとのことで洞窟を発見した。その奥は意外にひんやりとしていた気持ちがよかつた。そこで穂琥を寝かせる。ぐつたりとしてピクリとも動かない穂琥をため息交じりで見詰める薪と儒楠。仕方無しに互いに眼を見合わせて小さく笑う。

「少し周囲を見てくる」

「え、オレ行くよ？」

「いや、オレでいい。穂琥のこと頼む」

「お、おう・・・」

薪が洞窟を出て行く。いくらたくさん寝たからといって黒眼の開眼した反動が完全に抜けたとはとても思えない。だから極力薪には休んでゆっくりとしていて欲しいのだけれども。それでも薪は行くといつたからにはきっと曲げない。そういう強情なところが意外にも存在するのだ。

この暑い太陽の下、外を歩くことは危険。しかしあえてそれを行つた薪の気持ちはわからないというわけではないが納得が出来ない。おそらくこの地にも眞苞祇は存在する。眞稀が使えないからといって眞苞祇が弱体化するといったらそうではない（若干、死にそうな眞苞祇もいるがこれは眞稀以前の問題なので除外とする）。故にこの地にも他者からの追随を受ける可能性もある。それを薪は危惧しての行為だ。

## 第五十六話 僅か抱く憎悪

薪が帰ってきたのは予想よりも早かった。まだ穂琥は眠つて起きる様子を見せない。寝返りを打った穂琥が唸つたのでそつと儒楠が様子を見る。

「しん・・・？まだ、少し・・・ねてみたいの・・・」

穂琥はそう言つてもう一度寝返りを打つた。薪はその様子を見て頭を抱えた。親友だからこそ、言つてはならないことくらい分かる。

穂琥よ・・・今のは禁句だよ・・・

薪はふつとため息をついた。儒楠がすくつと無言で立ち上がる。どうしたと声を掛けても返事が無い。そのまま洞窟の外へと歩いていく。

「あまり無理はするなよ？」

一応声を掛けたがその声が耳に届いたかは定かではない。

どわっと。物が倒れるような音がしたのはそれからしばらくしてからだつた。振り向くと儒楠が洞窟の入り口のところで倒れたのを発見した。薪は慌てて儒楠の元に駆け寄つた。

「おい・・・？大丈夫か？」  
「ゴメン・・・」

儒楠は小さく謝つた。ただひたすら謝つていた。薪はどこかそれが

胸の奥で痛んだ。本当に些細なことなのに。どうしてこんなに苦しむ羽目になるのだろうか。

「謝るな・・・」

薪は儒楠を抱えて洞窟の奥へと連れて行く。穂琥からは少し離したところで儒楠を横たわらせる。薪はふつとため息をついて儒楠の額の汗を拭つた。

しばらくすると穂琥のほうが覚醒した。体調を確認してひとまず無事だと判断する。儒楠が倒れたことを知らせると穂琥は顔色を変えて儒楠に駆け寄つた。

「くれぐれも治そうとするなよ。眞稀は使えないんだから」「お見事です」

今までに、治そうとしたといふ。

「薪は？」  
「え？」

穂琥の唐突な質問に思わず声が漏れた。

「だつて薪も汗かいて結構辛しだから・・・・。私大分よくなつたから寝ていっていいよ?」  
「お前に気を遣われるとはオレも終わつたな」「何それ!」「いやいや。まあ、それは冗談として。ありがとう。素直に嬉しいが今は平氣だ」

薪のその言葉に尻込みした穂琥。薪がこんなに素直に嬉しいなんて言つた事・・・あつたか。とにかく。何だか不思議な気分だつた。

儒楠が眼を覚ましたのはそれからしばらくのこと。儒楠が眼を覚ましたのでさっさと出発することにする。薪は儒楠がどうしてこんなことになつてしまつたのかは聞かない。それをわかつていて儒楠もほつとしているのだから。

外に出るとあたりは大分薄暗くなつていた。

「もう直ぐ夜だね？火とかおこさないと死ぬ！？」  
「いや、ここには夜が一番活動しやすい場所なんだよ  
「え？」

普通の砂漠であるのなら夜は急激な冷え込みで氷点下まで達してしまつかもしれないけれど何があつてかここはやう言つたことはなく、昼間の暑さなど忘れこの夜にこそ適温と化す。故に、夜にとにかく歩を進める必要がある。

## 第五十七話 異なる角度の視線

薪と儒楠が眼の前を走つていぐ。それの速さに穂琥は嫌気がさしてきた。

「ちょっとー早すぎー待つてよー」

苦情の言葉を漏らすと振り向いた薪からの怒号がとんだ。

「ふざけるな！夜が明けたらまたあの猛暑だぞーお前、次倒れたらそのまま干物になれ！」

「ひどいー！」

ある程度まで走つていって急に薪が速度を落としたので穂琥は軽く薪にぶつかりそうになつた。

「なあ、儒楠。今どのくらいの速度だ？」

「え？ オレの？ まあまあかな？」

「なら、もつと上がるな？」

「ん？ まあ、上がるけど」

「よー」

薪は儒楠の何かを詮索し終えると穂琥の横に並んだ。そのまま穂琥の足元を掬い上げるよじにして抱きかかる。

「ふほつわー？」

「黙れ。お前遅いかからオレがこのまま連れて行く

「ええええー！ー？ー？」

「文句言つならもつとスピードを上げろ」

そういうながら薪と儒楠は一気にその速度を上げた。穂琥はそれを見て苦情を言うのを止めた。先ほどの速度の倍以上の速さになつたことを知つたから。どれだけこの一人が自分に合わせて走つてくれていたのかを知つたから。

随分と猛スピードで走り抜けている。この速さは一体なんだっていうんだ。さすが眞砲祇、としかいえない速さ。眞稀を使えないにしろ、基礎体力は人間とは比較できぬもの。一体これは時速何キロだ。

突然の急ブレーキの後、穂琥の尻は痛い音を立てて地面と激突した。

「いつたあい！下ろすなら普通に下ろしてよー！」  
「つむせえ、ぼさつといっているのが悪いんだろう！」

薪の背中から叩き落された穂琥は不貞腐れながら立ち上がる。到着した目的地。そこには小さな村があつた。しかしおかしい。人が全くいない。もぬけの殻だ。

「何だ？ 何かあつたのか・・・？」  
「わからない・・・。オレが以前来たときは随分と賑わっていたはずだけど・・・」

薪と儒楠の不安そうな声が空っぽになつたむらに木靈した。しかもこの村はただ空になつてゐるだけではなくあちこちが荒らされてゐる。まるで崩落した村。

そんな村で詮索を始めた折、地面を踏みしめる音に気がついてそ

ちりに田に向ける。

「誰かいるのか？」

村がこんな状態になつたのは今から数日前。突如現れた訳のわからない輩に襲われこの村は崩壊した。村人のほとんどはその輩に連れて行かれた。逃げることの出来たものだけ隠れ場に非難している。でも。それでも村に用事があつた。村に行かなればならない用事があつたから。探し物をしたくて怖いのを抑えてここまで来た。そうしたらまた訳のわからない輩が三人やつてきた。またみんな連れて行かれてしまう。恐怖がぐつとこみ上げる。

逃げなくては。逃げなくては。怖い。怖い。ゆっくりと下がる。建物の中に居たけど既に荒廃している建物の中では砂利もたくさんあつて下がった際にその砂利が音を立てた。その音を耳にして二人が鋭く此方を向いた。そして一番手前にいる奴が声を発した。しかし恐怖のあまりなんと言つたかまで聞き取ることが出来なかつた。そしてその声を発した奴はこちらに歩み寄つてくる。

もう駄目だ・・・。このまま連れて行かれてしまうんだ・・・

小さくなつて隠れている棚の後ろ。震えて涙が零れそうになる。直ぐ後ろで足音が聞こえた。そして隠れていた棚ががたつと動かされて見つかってしまった。

「ひつ！」

「そんな声を上げなくてもいいのに」

至つて怖いという印象は受けないその声に恐る恐る顔を上げた。

「何故隠れたんだ？」

その問いに腹が立つた。何もかもお前たちのせいだといふの。この村が、みんなが壊れてしまつたのはお前たちのせいだといふのに。

「ふざけるな！全部お前たちのせいだ！どうせおれも連れて行くんだろう！？勝手にしろよ！どうせ殺すんだり…」の人に殺し！恨んでやる！憎んでやる！死んでも絶対に…！」

勝手に口が動く。恐怖で震えているけれど。それでも最後まで罵声を浴びせる。そしてそつと懷に手を当てる。ここに入つて『お守り』を使う必要があるかもしれない。

「ん～・・・。何か勘違いをしているなあ・・・。オレは別にどうこうするつもりはないんだけどな。一体ここで何があつたのかを知りたいだけなんだけど？」

「お前らがこんなことこしたんだる！？お前らが一番よくわかつているだろ！」

近づいてきた男に對して懷に忍ばせていた『お守り』を突き立てる。鋭く光る短刀。それが見事に男に腹部に刺さつた。初めて感じた人の肉を刺した感覺。氣味が悪いけれどそれでも必死だったから何振りかまつて入られない。

「何しているの…？」

女の声が耳に響いた。その向こうにも誰かがいる。田の前の男は無言。懷に入り込んでいる自分を男はぐつと抱きしめた。その感覺に恐怖と呼べるもののが吹つ飛んだ気がした。そしてそのまましゃがみ

「んで男に包み込まれるような形になってしまった。

「怖かったんだな。何があったかはわからないけれど、でも大丈夫。オレらは何も悪いことはしないから。安心して・・・」

自分の腹部が刺されているにもかかわらずなんともいえぬ穏やかな声。そういえば刺された瞬間につめき声のひとつも上げていなかつた。

「大丈夫。オレが護つてあげるから」

その声がどうしてだろうか、心底安心できた。いや、しかしそれは駄目だ。安心してはいけない。顔を上げて男を睨みつけてやろうと思つた。しかしあげたその先にあつたのはなんともいえない優しい笑み。月明かりに照らされたその表情から悪意の欠片も感じない。

思わず後ずさる。男は一度短刀に手を添えてぐつと引き抜いた。そしてその短刀を脇においてこちらに向き直る。後ろでは口に手を当てて顔を青くしている女性が見える。その奥にもう一つ影があるけれどそれは暗がりで顔がわからない。

「大丈夫か？キミに怪我とかはないかな？」

自分の腹から血が出ている奴の言葉じゃない。後ろで女性が悲痛な声を上げているが目の前の男がそれを制している。

「オレなんてなんどでもなるけど、この子はそうもいかないだろ？」「それは・・・」

抵抗しようとした女性に対して奥の男がそれを止めた、と思う。何

せ田の前の男と声に差異を感じなかつたからよくわからなかつた。

「で、でもーもうこいでしょー? その人、もつぱりつもりもない  
じゃないー。ほうておこつよ・・・! それよりもアンタのその傷を・  
・・」

「おーおー。この子、小さい子どもだぞ? 暗いから見えていないだ  
るつ、お前」

「え・・・・? ナビも・・・?」

抜けたような女性の声に一瞬面食らつた。

「オレは普通に見えるけどなあ」

「え? ...」

「まあ・・・オレもうつすらと・・・」

おそらく三人の会話。どうにも男一人は同じ人間が喋つているよう  
にしか思えない。しかし、それにしてもこの三人の緊張感のなさは  
一体なんだ。

「あんたたち・・・何?」

「ああ、自己紹介がまだだつたね。オレの名前は薪。キミは?」

素直に自己紹介されてさらに混乱する。しかし何故かこの薪と名乗  
つた男に素直に名前を教える気になる。

「傀葵・・・」

「傀葵ね。わかつた。キミは一人かい? 他にもいるよね?」

そう尋ねられてどきりとする。果たして仲間の居場所を言つてい  
ものか。悩んでいる傀葵の思考を知つてか知らずか。薪はすつと立

ち上がり胸に手を当てて礼儀正しく頭を下げた。完全なる敬意の姿勢。

「御困りの様なので我らで出来うることがあるのならば何なつとお申し付けください」

わざとらしくも聞こえたその言葉だが表情が穏やかに微笑んでいる。

「孜々緒という場所はここだよね？オレらは実は駕南火という者に会いに来たのだけど知り合いかな？」

その名前を聞いて惣葵は眼を丸くした。

## 第五十八話 人間の潜む場所

腹部を刺されてから和みと安堵感を抱いた雰囲気を醸し出していたので刺されたことも悪くはなかつたと思っていた矢先に、駕南火の名前を出した直後また雰囲気をがらりと変えたのでまずかつたと思つた。

「な、な・・・や、やつぱりアイツの仲間なのか…」口に来るな!」

急に変貌して傀葵は頭を振つて拒否の姿勢をとる。

「仲間? 知るか、そんなもの。むしろおそらくオレ達の敵は『それだ』

「え・・・? 敵・・・?」

薪は深く頷く。詳しいことまでは話すことができないけれど、とにかく仍泊へ繋がるゲートが閉じ、行き来できない。そのことを簡潔に伝える。そして駕南火であるなら、その入り口を開けることが出来ると傀葵に伝える。

「じゃあ・・・おれたちの味方?」

「さあ? でも傷つけるような真似はしないよ。最も? そちらが敵意を向けてくれば別だけどね」

薪がにこやかに笑う。

傀葵としては先ほど確實に敵意を向けて腹部への攻撃をした。しかし、傷つけるような真似はしてこなかつた。

「どうして……？」

傀葵は震える声で薪に尋ねる。すると薪はにこやかに笑つて見せた。

「違うんだろ？ キミは……傀葵は別にオレに敵意を向けたわけじゃない。恐怖のあまり、やつたことだ。気にすることじやないよ」

薪は傀葵の頭を撫でる。傀葵は大人しく撫でられているところを見ると先ほどの警戒は少し下がってきたと見える。

「でも……。やつぱり……無理だよ。おれが言えた義理じゃないけどあなた達だって断然子どもじやん……。駕南火は大人だもん。戦えるような相手じやないし……」

「残念だけど、オレたちは年齢なんて関係ない。要は強いか弱いかだけだ。それにオレが今まで相手にしてきたのはみんな大人だったしね」

大人？ 子ども？ そんな事は関係ない。ぐだらないと吐き捨てるようなものであるなら大人であろうと制裁を下す。逆にどんなに子どもであろうが、認めた、敬意を払うべきだと思った相手にならいくらでも敬意を払い、それに順ずる。それが、自分の子であつても、親であつたとしても。それが薪の口口口。

傀葵は少し悩んだ後に、信じていいのかを尋ねる。もし、信じてもいいと言つのなら隠れ家まで案内すると。

「はん。言ってくれるね。そんな事、傀葵が自分で決める。相手に決めさせて後から文句を言われたんじやいい迷惑だよ」

「あ・・・」めん・・・

「別に、謝る」とじやないけどさ」

薪は再び偲葵の頭に手を当てる。偲葵は少しくすぐつたそうに笑つた。初めて見たその笑みは無垢な子どもそのものだった。

意を決したように偲葵はついてくるよとにという。薪の腕を引っ張つて隠れていた家からそつと出て隠れ家に向かおうとする。外に出ると美しく月明かりが煌いていた。そのとき、残りの二人の顔も目視できた。その後。偲葵ははつとしたよに声を発した。

「儒楠兄様！？」

予想外の名前が飛び出て驚く。しかしまあ、驚いたのは儒楠も含まっていたために薪はため息をついて儒楠を睨むと、何が何だかわからぬといつた風の笑顔で固まつっていた。

「いや・・・お写真でしか見たことありませんが・・・。村では有名です」

急に敬語を使い始めた偲葵の様子から察するに一体儒楠は以前ここに来たときに何をしたのやら。薪がそんな眼で見ると儒楠は困ったように笑つていた。

「では、このお二人は儒楠兄様のお連れですか？」

「えへつと・・・いや、違うなあ～」

「「え？」

何故か一人分の声。それに反応して頭をはいたのは薪。それによる反動で声が漏れたのは穂琥。

「いった・・・！ひどい！」

「お前はバカか！いや、バカだ！」

「ひどい！－！」

唐突に始まつた兄妹喧嘩に儒楠はほとほと呆れる。

「え・・・と。違つ、のですか？」

傀葵が不安そうな声で尋ねる。儒楠はにこやかに笑つて穂琥を指した。

「あの口、穂琥つて言つんけど。穂琥とオレが薪の連れ」

儒楠の説明に傀葵は眼を丸くした。それから薪を一度見てから儒楠に顔を戻してはつきりとした声で言い切る。

「では、あの人があの人が一番偉いんですね！？」

「おいおい。連れているからつて一番えらいつて言つわけじゃないぞ。現に実際今からだつてオレ達は傀葵に連れられるんだぞ？傀葵が一番偉いのか？」

「いや・・・」

薪の横槍に困つたように傀葵が俯いた。しかし、今回のこのチーム編成では実際にそつだよなどチャカスように儒楠が言つ。

「なんだよ。オレが一番偉いってびづびづ・・・」

「ほお？貴方様は御自分の御身分を最早お忘れになられた訳では御座いませんでしょうか？」

「う・・・」

儒楠のわざとらしに言葉に薪はぐつと詰まる。実際そつだ。薪は懶  
惰。ここにいるのは眞貌祇。ならば一番偉いのは懶惰である薪で間  
違いはない。

「じゃあ・・・薪、という方が・・・」

「かつたくるしい！」

「え？！」

突然薪が大きな声でそう言つたので傀葵は驚いて肩を震わせた。

「お前、子どもだろう。いや、確かに子ども扱いは良くないな・・・。  
でも、いや、それ関係なくとも、その重い、堅苦しい言い方は止  
めろ。オレたちは別に傀葵たちにとつてはそんなに偉い存在ではな  
いのだから」

薪の言つたことに傀葵は呆然と耳を傾けていた。それからはつとし  
て辺りを見回して怯えたような眼をした。

「しまつた！早く行かないと！『奴ら』に見つかったら大変なこと  
になつてしまつ！早くこつちへ！」

「うわ！？」

傀葵は薪の腕を掴むと勢いよく走り出した。予想外の傀葵の行動に  
薪は驚きはしたがどこかほつとした気もあつた。ずっと警戒をして  
いたこの子がどうやら自分たちを信用してくれたようだつたから。

一方の傀葵のほうは勢いで薪の腕を引っ張つてしまつていて  
もし、彼が怒氣を見せてしまつたらどうしようかと不安になつたが  
そんな様子、微塵もなかつたので安心していた。

傀葵に連れられている間に先ほど出来た傷を修復に掛かる。無論、傀葵にはばれないように治す必要があるのだが、なにぶんここは孜々緒。眞稀の扱いがひどく不安定でやりにくい。よつて穂琥に任せるのは不安がありすぎるため仕方なく薪は自分でその傷を癒す。人間如きが造った刃物では眞匏祇の身体を完全に痛めつけることは出来ない。故に薪の力でも案外簡単に治すことは出来る。

しばらく走つていくと岩場の続く坂道に出る。そして途中で傀葵が止まつた。数多くある岩場の中からひとつのかずを選択して傀葵はぐいと押しやる。するとそこが「ゴゴ」っと音を立てて地下へと繋がる階段をあらわした。その細工に薪はほう、と小さく感嘆の声を上げていた。

中に入ると意外に広い場所があり、いくつもの扉が存在していた。中の様子を観察している間も薪は少し気になることが。

無意識かな……？掴んでいる腕を離してくれないのだが……

ちらりと傀葵を見ても傀葵はそれに気づかず奥へと案内していく。まあ、支障があるわけではないからそのままにしておくかと薪は決める。

傀葵に連れられて奥の扉を潜る。その扉の奥にいた者はひどく驚いた顔をしてから新達の隣にいる傀葵を眼にしてその表情を元に戻した。

「傀葵！？」のかたがたは……？」

中に居た男が声を上げた。傀葵が自分を救つてくれた人だと説明をした。

「えっと、儒楠兄様と・・・穂琥、様？」

「やだあ！様なんていらないよお！」

穂琥はぶんぶん手を振つて偲葵に笑いかける。それに少し照れたようすに笑いながら偲葵は再び紹介をする。

「えと、穂琥・・・と。あ、あと・・・薪・・・！」

先ほどのかたつくるしいと言つた脅しが効いてか、偲葵は薪については迷いながらも呼び捨てで名を挙げた。それから嬉しそうな声で部屋にいた男に言つ。

「ねえ、父さん！儒楠兄様だよ！」

「あ、オレも呼び捨・・」

「やはりか！？儒楠様だったか！」

儒楠の修正の言葉を遮つて偲葵が父と呼んだ男は声を上げた。しかし、当の儒楠としては何故、こんな扱いを受けているのか不明の様で薪もその様子を見て本当にこの村に来たのか少しの疑問を感じざるを得なかつた。

静かに、と美声（穂琥としては綺邑や簾乃神といった至つて人間離れした美声を聞いているためにそこまでとは思わなかつたが）がなつた。

「お久しひりです、儒楠様」

その声の主が扉を開けて中に入つてくる。

「御覚えでしょうか？わたくし、りあん梨杏です」

「梨杏ー!？」

自己紹介をした女性に儒楠が驚いた声を上げた。以前、この村に来たときに世話になつた人らしい。

「ふーん・・・」

薪にしては随分と珍しい間延びした答え。その反応に違和感を覚えた儒楠と穂琥は互いに顔を見合させて一瞬だけにやりと笑つてからそれを全力で否定し合つ。

どう? 一眼ぼれでもした?

いや、薪に限つてそれは有り得ないだろ? ・・

そんなあほな考えを他所に梨杏が話を進める。

「儒楠様。この時期に来て頂けたこと、本当に感謝いたします。神の思し召しでしょ? うか・・・」

梨杏がさぞ嬉しそうにそう言つた。いや、確かに神の思し召し、について否定するつもりはあまりないけれども。

「梨杏様・・・」

偲葵が静かな声で梨杏へ呼びかける。梨杏はそれに答えて首を傾げる。偲葵は勝手にこここの場所を離れ、あの危険な村へと足を踏み入れたことを謝罪した。梨杏は深い愛情を持つた母のようなそんな表情で笑いかけてそのことに首を振つた。

「あなたが無事に帰つてこられただけで結構です。しかし、次はこ

のよつなこと、しないでくださいね？」「はい……」

もじもじとしてくる傀葵に薪はどうしたものか考えた後、仕方なく言ひついでにする。

「傀葵、申し訳ないが手を離してもうえると動きやすくていいのだけれど……」

「え？！あ、ごめんなさい！」

ずっと掴みっぱなしだった薪の腕をぱっと離して俯いた傀葵に穂琥はこやりと笑いながら腰を落として話しかける。

「あら？ 賴りになるお兄ちゃんが出来たと思ったの？ でも、駄目だよお～、薪は私の……」

「黙れ、ドあほ」

「いで！」

薪の鉄拳が落ち、穂琥は鎮圧される。その様子を眼を丸くしてみる三人。それを苦笑いで頬を引きつらせて儒楠は見るのがだった。

## 第五十九話 個々の話し合い

薪は駕南火について尋ねたところ、梨杏は首をかしげた。ただ、悪であるということだけでそれ以上の情報を得ることが出来なかつた。仕方なく、この場は終息させて、梨杏より部屋をもらつて今日はひとまず休むことにした。

が、問題は部屋の数の問題上、一部屋しか空いていないところだと。

「ま、常識的に考えてオレと儒楠、穂琥。それで異議ないな？」

「おつ」

「いやああー！こんな知らない土地で一人で寝るなんて絶対いやあ！そつちが一人で寝ているのに私だけ一人なんて絶対にいやあ！！」

一祇、と内心で突っ込みながら薪はため息をついた。では、儒楠と穂琥で各々、部屋を使えばいいと薪が提案する。

「え？薪は？」

「オレは別件で用事がある。駕南火の情報が少なすぎるからな。それを少し調べる」

「よせ」

薪の言葉に儒楠が鋭く反応した。言った儒楠自身も一体その根拠が何処にあるのかはわかつていないう�だつたがとにかく今夜は下手に動かないほうがいいと言つ。しかし薪はそれに返事をしなかつた。

「・・・ほつ。オレの忠告はガン無視で抜ける気だな。よおし、わ

かつた。穂琥、部屋割りを決めた

儒楠は薪を細い眼で睨んで穂琥へ言葉を投げかけた。しかし顔は相変わらず薪に向いたまま。

「オレと穂琥」

儒楠の言葉。それだけなら先ほど、薪の提案したのとほとんど変わりはない。ならば意味はない、と抗議しようとした薪の言葉を遮つて儒楠はズバツと言葉を切る。

「薪の監視。いいかな？」

「はーい、異議なーし！」

手を挙げて完全肯定宣言の穂琥に対して薪はひどく呆れたような顔をした。

「おい、マジかよ・・・」

そんな薪の漏らした言葉も無視して儒楠は梨杏の所へ部屋割りの報告、つまり部屋は一部屋で大丈夫だということを伝えにその場を離れていった。その儒楠の背を見て穂琥は薪をちらりと盗み見てからボソッと言つ。

「あの梨杏って人・・・私気に食わない・・・」

それに対しても薪の反応はなかつた。ただどこか一瞬だけ、ピリッとしたような気配を感じたような気がした。

「あ、悪口言つのまづかつた？」

「何で？」

「いや、別に……」

穂琥は少し言葉に詰まる。薪の心は一体どうなつていいのだろうか。もしかしたら本当にあの梨杏という女性に惚れてしまつたのだろうか。果たしてこの薪が一日ぼれなどといった類の感情を抱くのだろうか。

「薪は……惚れたの？」

そつと聞いた疑問に回答はない。疑問に思つて再び呼びかけるとはつとしたような表情で穂琥を見た。

「ん？なんか言つた？『メン、聞いていなかつた。もう一回言つて』……だあかあらあ。もう……。梨杏つて人、惚れたの？」  
「誰が？」

本当に、こういつたことに関すると鈍感な薪。話をするのが少し面倒にすら感じる。

「あんたが」

「オレが？そんなわけないだろ？バカジヤン？」

ひどくそれもかなり深く、馬鹿にしたような表情で言われたので穂琥はかなりむつとした。どうせ、一日ぼれでもしてそれを必死になつて誤魔化そうともしていいるのかと豪語する穂琥。そして今度面倒になつたのは薪のほう。余計な発言と余計な態度で穂琥を相手取るのがひどく億劫になつた。

「何を…どうせ梨杏のこと考えているんでしょ？…」

「そうだな」

「あれ、そこは否定しないのかー！」

薪がひびく面倒くそうな顔で穂琥を見る。穂琥は薪に噛み付く。

一方の儒楠のほうは梨杏に部屋が一つ余ったといふとの報告を済ませて部屋を出ようとした。そのとき、梨杏が儒楠を呼び止めた。

「あの、わたくし。実は・・・駕南火について知つてこることがあるのです」

「え？ じゃあ何故あの時言わなかつた？」

「この情報、とても機密性の高いもので。さう簡単にはお教えできないのです・・・」

なるほど、本当に信用の出来るものしか教えることが出来ないといつことだ。だから見ず知らずのものに問われたところで答えることなど出来るわけもない。それは理解した。梨杏は続ける。

「お教えしても構わないのです・・・。ただ、儒楠様。お願いがござります」

「願い？」

梨杏はそつと儒楠のほうに近づいた。

鬱陶しい。薪は先ほどから儒楠の帰りを切に願っていた。ひたすら田の前の妹がウザイ。

「吐け！ 吐けば楽になるぞー！」

「だから、そんなのじゃないって言つていいだろー！」

「いいじゃないか！ 吐け！ 今の私は『面倒』で折れないぞー！」

「よし！穂琥！トイレにでも行つてそのくだらない思考を吐いて来い！」

「私じゃないつてー吐くのアンタだつてー！」

薪はひどく面倒だが、この鬱陶しい穂琥を相手にするよりも今、抱いているものを説明するほうがはるかに面倒なことを知つている。故にこの状況を耐えているわけだが。さすがに耐えるに耐え難い状況になつてきたために仕方なく。薪は穂琥に言つ。

「よし。聞きなおしをしない」という前提であるのなら教えてやつても構わない」

「えー？ 本当？ 聞く聞く」

儒楠は梨杏から申しだされた『願い』を全力で否定していた。

「そんな事、絶対に出来ない」

「駕南火の情報は・・・よろしいのですか？」

「いらない。そんな事をしてまで得よつとは思わない。こつちには優秀な奴がそろつているからね。梨杏程度で得られた情報ならこつちも得られる」

儒楠のその言い切つた言葉に梨杏はひどく落ち込んだ表情を見せた。立ち去る儒楠を梨杏は呼び止めたが儒楠は無言のままその部屋を出て行つてしまつた。

もう一回、と叫ぶ穂琥。

「同じ言葉でいいからもう一回だけ言つて！」

「一度だけ、聞きなおしなしつて約束だろ？」

「むぐぐ・・・・」

先ほど、薪に言つてもらった言葉があまりにも難しそぎて全く理解できなかつたので苦情を述べたところ薪はつんとした表情でスルーする。要するに、説明するのが果てしなく面倒だと感じた薪はわざと穂琥には理解してもらつて言葉で言つた。

「何を騒いでいるのや」

やつと帰つてきた儒楠が呆れたように笑いながら部屋に入つてきた。

「遅いんだよ！ 一体連絡に何時間かける気だ？」

「・・・悪い」

「？」

儒楠の返答に違和感を覚えた薪だが、それを問う前に穂琥が儒楠へ言葉を投げかけたのでそれがうやむやになってしまった。

穂琥は先ほどの薪の暴君ぶりを儒楠へ訴える。不貞腐れている穂琥を見て儒楠が小さく笑つた。

「何・・・？」

「いや、落ち着くなあつて思つただけ」

心底幸せそうな笑みを浮かべた儒楠に今度こそ違和感を尋ねる薪。しかし儒楠はそれに答えようとしない。言いたくないなら仕方ないと薪はその質問をなかつたことにする。

## 第六十話 少年、少女

部屋には一つのベッド。話し合った結果、儒楠と穂琥がそのベッドを使うことになった。それもあって儒楠はすべてベッドにこもべつこんでしまった。

「あれ、穂琥が寝るときになつたらい起にして。薪の見張りするから全力だな！？」

「了解です！」

儒楠がそのまま眠りの世界へと落ちる。

それから直ぐに、部屋にノック音。穂琥が出ると儒楠がそこにいた。

「あ、あの・・・。こんな時間にすみません」

少し萎縮した様子で儒楠が俯いていた。穂琥は屈んで儒楠と同じ目線にして大丈夫だよと伝える。儒楠は少しおおどした様子で穂琥をちらりと見た。

「あの・・・。父さんに頼んで、もし・・・。許可をもらえたなら行つても良いって・・・。その・・・」

言葉を濁す儒楠の気持ちを汲んで穂琥はすつと立ち上がりて奥にいる薪へ儒楠と一緒に寝たいんだってと伝えると奥から是の答えが返つて來たので儒楠にそれを伝える。すると儒楠はきらりと眼を輝かせた。穂琥は首を傾げる。あんな意地悪な暴君の何処がいいのだろう。そんな変な考え方をしている穂琥を縫つて儒楠は薪の元に一目散

に走つていつた。

「うわ

後ろからこきなり飛びつかれて前につんのめつた薪が漏らした声。それを聞いて惣菜が慌てて謝罪した。

「いや、構わないよ。ただ、親のところにはこないのか？」  
「うん・・」  
「薪どいたいんだって」  
「へ～？」

入り口から戻ってきた穂琥は薪にそづぶれる。薪は首をかしげて曖昧な答えをする。

「ねえ、惣菜は薪の何処がいいの？」

穂琥の質問に惣菜は少しだけ驚いたような表情をした。それから少し悩んで俯く。

「なんとなく・・・・なんだかとても落ち着けるから。お姉ちゃん  
は？」

「おねー？」

今までに聞いたことのない単語に驚いた声を上げたので惣菜のほうも驚いて穂琥、といいなおした。

「いいのよあーーお姉ちゃんつて呼んでねえーー！」

くねくねと嬉しそうに動く穂琥に流石に惣菜も驚いたようだった。

「お姉ちゃんはどうして薪と一緒にいるの？」

「ん~、そうだな~・・・。ないわ。殴られるわ蹴られるわ叩かれるわ、いじめられるわ。いいことないな~」

「え? じゃあ、どうして一緒にいるの?」

偲葵のその質問に穂琥は少し悩んで薪を見た。それにふとため息をつくと、薪は偲葵に言う。

「偲葵。オレらは少し特殊でね。なんとなくわかるだろ?だからあまり人に関係を公言してはいけないんだよ。ただ、偲葵がもし、誰にも言わないといつのであれば教えて構わない」

薪のそう言った言葉に偲葵はひどく嬉しそうな顔をして頷いた。その言葉を得て薪は承諾の姿勢を見せる。

「わかった。オレと穂琥は兄妹だ。双子のね」

それを聞いて偲葵は驚いたような顔をした。確かに似ていない。見た目は無論、薪が容姿を今、変えてしまっているから似ていなくて当然だが、性格だつて全く違う。最も、育ってきた環境が違いますぎるので、血が繋がっているからといって性格が似るかといつたら別段、そういうわけではないのだから。むしろ、血など繋がっていない薪と儒楠のほうが断然似ているわけだ。

「それでも随分と信用してくれているね? いいの?」

「うん!」

偲葵は自信に満ちた声で答えた。薪はふと息をつく。この子にもし、そう言ったことに対する判別力が格段に高くついているのなら

問題はないが、少し優しくされただけでここまでなついてしまつようでは危険性もあるため薪はそれを危惧していた。

「でも少しは警戒しないと？子ども扱いはよくないだらうけどそれでもまだまだ小さいお嬢さんなんだから」

「「え！？」」

傀葵と穂琥の声が重なる。薪はそれになんだよ、と答える。穂琥が薪の口から発せられた妙な言葉に食いついた。

「え？お嬢さん……！」

「え……？お前、女だよな？」

あまりの穂琥の対応に薪は自信でもなくしたのか傀葵に尋ねた。傀葵はひどく驚いた表情をした後、俯いて小さく頷いた。

「お、女……です」

「え？！嘘！？だつて見た目だつて男の子だし、『おれ』つて言つてゐるし……？」

「つ、強くなりたくて……！」

傀葵は少し困つたようになつて言つた。今のこの村では確かに力が物を言ひそうではある。見ず知らずの奴らに村のものを連れて行かれて弱いがためにそれを見ていることしか出来なくて。

しかし。強さとは別に性別など関係ない。心で決まるものだ。薪はそう、傀葵に諭す。薪、儒楠、穂琥と並ぶと確かに女である穂琥が一番弱いかもしれない。しかしそれは確實に人選ミス、もとい眞貌祇選ミスであつて穂琥は並大抵の男なんかに比べればはるかに強い。

「本当に…じゃあ、おれも別に男の真似とかしなくてもいいの？」

「もちろん。むしろその時点で心が負けているよ。強く持て、心を  
やる」

薪にそう言われて惣菜は少し恥ずかしそうに俯いた。

女らしく、可愛らしく。そんなものとは全く無縁。それでも周りで色気づいている仲間を見るとどこか羨ましい気もした。美しい梨杏を見て羨ましい気もした。

「憧れに向かつて頑張ればいいんだよ」

「本当に…頑張つたら」褒美くれる？」

「そうだな、頑張れば」

「本当に…じゃあ、薪のお嫁さんにしてくれるー？」

「え…？」

少しそれはずれているようだ。

## 第六十一話 恋愛つて？

困ったように笑う薪に対しても惣菜はキレイな瞳を向ける。純粋とはきっとこのことだ。

しかしだ。薪は眞砲祇であるし、そりには惣菜だ。よって、人間との結婚は基本、認められない。強い力を有した者の生誕を望むのが眞砲祇、惣菜の行く末。よって力を下げるだけの人間とはほど力を落とさせない自信がない限りは無理な話。いくら薪といえどそこまでの自信を持つているわけでもないし、何より。

年下すがるんだろう・・・

薪はひとまずやんわりと断る。やうしてみると寝ていた儒楠が起きてきた。

「どーしたあ？ 騒がしいなあ？」

「あ、儒楠兄様」

「お、惣菜ジヤン。そしてそれ、止めよ。薪は薪、穂琥は穂琥・・・」

「違ひよ。お姉ちゃんって呼ばれてますーーー！」

儒楠の言葉に穂琥が嬉しく、楽しそうに答えた。儒楠は少しだけ驚いた顔をしたけど納得したように続けた。

「まあ、その。穂琥はお姉ちゃんなんだ。じゃ、何でオレだけってね。むしろこの中じや薪が一番上なんだぞっ？」

「つーむ・・・」「つーむ・・・」

儒楠の言葉に惣菜は唸り声を上げたが結局のところ、納得してくれたようだった。

「起いしたか?」

一応、儒楠に薪が尋ねる。それを儒楠は否定して先ほどまでの不可思議な空氣について尋ねた。

「ん~、惣菜に婚約を頼まれた

「・・・・・は?

素つ頓狂な声を上げたので薪は当然断つたよと伝えるとそれ以前に、と儒楠が尋ねる。

「女の子、だつたの?」

まさか儒楠までこんな反応とは。薪は頭を抱える。

「いやいや、そんなのわかるの、たぶんお前くらいだ

薪を見て儒楠が手を振る。

「本当に薪つてば、何考えているかわからないし、やんなつちゅうりやぢう!

「そういうなよ。仲のいい兄妹でしきつ

「仲良くないもん!一方的にいじめられているだけだもん!」

はは、と乾いた笑いを立てる薪に腹が立つて飛び掛るが簡単に回避される。それを見て惣菜は不思議そうな顔をしている。

「ひじおい！ 儒楠君！ 新つてばひじくない！？」

「あー、はいはい」

儒楠は至極樂しそうに穂琥のなきつさに答える。それを見て偲葵はさらに首をかしげた。

「どうした？」

それを悟った薪が偲葵に尋ねると穂琥に薪と同じ様に人との結婚は出来ないのかと尋ねる。それに対しても端な是と答える。穂琥はあくまで慾夸の妹であつて将来的に関係はあまりない。故にどんなものと一緒になるうが関係はないのだが、今の眞匏祇の世界で人間といふものは異物以外の何者でもない。それだというのに慾夸の妹君が人間と、などと話が広まれば何かと面倒なことになりかねない。

「ふうん。お姉ちゃんは儒楠が好きなの？」

穂琥が何かのダメージを受けて後ろに吹っ飛ぶ。それからしばらく何かに悶絶するかの」とく暴れていた。

「えと、偲葵？ 何でそういうことに至ったわけだい？」  
「だって楽しそうだから」

いかにも子どもらしい可愛らしい発想。それを聞いて復活した穂琥が薪と同じくらい、儒楠も好きだと伝えると偲葵はどこか嬉しそうに微笑んでいた。

「さて、偲葵。時間も遅い。そろそろ寝な  
「うん…」

傀葵を奥の寝室へと追いやると、穂琥に付き添つように指示する。穂琥はしばらく未練たらたらで文句を言つていたが一人にするのも可哀想だらうと薪が言つと納得したように奥へ入つてつた。

「さてと」

薪は何かその場の空気を切り替えるように声を張つた。そして儒楠を見る。儒楠はその眼に何か嫌なものを見えた。

「邪魔払いは出来た。単刀直入に聞く。梨杏と何があつた？」

「おう、随分と聞いてきたな」

儒楠は頭をかきながら答えた。何か引っ掛かることがあると薪が伝えると儒楠は少し曇つた表情をして何かを言おうとした。その刹並。

穂琥の叫び声が聞こえた。素早く薪が立ち上がり、その後について儒楠が立ち上がる。薪は素早く奥の部屋を開けると震える穂琥がそこにいる。傀葵が直ぐ近くにいたので傀葵に何があつたのかを尋ねると既に布団に入つてしまつていて何が何だかわからないと答えた。

眞苞祇が襲いに来たかと思つたがそれにしても眞稀が残つていない。穂琥がコワイを連呼しているので薪がそつと近寄つて大丈夫だと言い聞かせる。それでもその言葉はまるで穂琥に届いていないようだつた。

「穂琥？！」

儒楠が薪の肩越しに穂琥へ呼びかけるが反応がおかしい。

「無駄だな。これは術に落ちている」

「え！？どういうことだ！？」

薪の警戒した表情が儒楠を刺した。

## 第六十一話 善悪の見極め

薪が鋭く光る眼光を儒楠に放つ。それに一瞬尻込みした。

「お前も落ちたな」

「え？」

薪の予想外の言葉に驚く儒楠。薪はそつと穂琥を寝かせると立ち上がりて儒楠を鋭く睨む。

「オレのせいか？ それとも単に訛ったか？」

穂琥の状態は確実に術の中へ落ちている。こんな状態になるまで気づかなかつたので薪も言えた義理ではないが、見ればわかる。しかしそれがわからないという儒楠のほうは力が落ちたか。

「ひつ？！」

急に偲葵が引きつったような声を上げたので薪は慌てて偲葵を抱えた。偲葵が窓をさして震えているので窓の先を見る。しかし何もない。

「い、今……人が……」

偲葵のその言葉を得て、薪は儒楠に追つよう命じた。儒楠が躊躇をしたので薪は怒号を上げて追うように命じる。その怒気をはらんだ薪の声に儒楠は衝撃を受けて慌てて窓の外にいたであろう人影を追つた。

追う際に儒楠は先ほどの薪の圧力を考えて頭を振った。そして長いこと共にいすぎて曖昧になっていた事実を本気で再認識させられる。

ああ、あいつはやつぱり懶惰なんだな・・・

そのあまりの大きな力の前に儒楠は自らの弱さを恥じた。

薪は穂琥をそっと抱え上げて様子を確認した。この程度のものであるのならば今の眞稀を最大限に使えない状況であっても解くことができるだろう。後は傀葵を追い出すのだが。傀葵はこの部屋を出ることを嫌がつた。仕方なく、傀葵になると薪は他言しないという固い約束を結ばせ、眞稀を使用することを決めた。

眼を瞑つて。穂琥の額に手を当てる。そしてその掌からまばゆい光が放たれる。その色は今までに観たことのない不可思議な形容し難い色。それに傀葵は見とれていると急に場チンと音がして薪が痛そうに手を振つていた。

「いってえ～・・・ぐそ、なんだよ、コレ一綺麗一綺麗ーーーちよ  
つと来てーおーいつてばーーー」

薪の声に応答するものはない。それに軽い舌打ちをした。応答がないのは当たり前のことだ。今、目の前に傀葵がいる。いくら眞貌祇であることを見せたにしても死神である綺麗の姿まで晒すわけには行かない。そんな事すらわからなくなりかけている自分の不甲斐なさに苛立ち舌打ちをしたのだった。

少し沈んだ風で儒楠が帰ってきた。どうやら逃がしてしまつたらしい。儒楠は穂琥の様子を尋ねた。薪が挑戦したところ、無理だつ

たところだと、たえると儒楠は頭を抱えて座り込んだ。

「なんだ、それえーーもつ、無理だろー治せるやつこねえよーーー。」

薪が苦笑いを浮かべながら綺邑を呼ぼうとした事を儒楠に言ひと納得したように頷いた。

それを聞けば儒楠のすることは一つだ。

「偲葵。オレと一緒にこのあたりを散策しないか？さつきの奴を見つけることが出来るかもしれないから」

「うん。薪は？」

「ここに残る。穂琥がいるからね」

「わかった」

儒楠は偲葵を連れて部屋を出る。これで人払いは出来た。それを確認してから、綺邑がふつと姿を現した。

「らしくないな」

「調子が狂うな、ここは」

「・・・。結界のせいだと想うがな」

「結界？」

「貴様、知らずして入ったか」

「面白い・・・」

綺邑の睨むような眼に薪は少しだけひるんで見せた。結界について綺邑は詳しく語ろうとしたしなかった。いや、むしろいつものことだが。綺邑はふつと穂琥の上に立つ。上、といつても常に浮いていているために乗つかっているわけではない。そして一瞬だけ綺邑の力が迸った。綺邑はそれだけで十分だといって穂琥の上から退いた。消えそうに

なつた綺邑を呼び止める。

「そんな厳しい眼をするなよ・・・。なあ、梨杏つて知つていいるか?」

「わ」

短く返答する綺邑。薪はそうかと答えると穂琥が眼をあけた。綺邑がいることを確認して驚いて飛び起きた。そして薪に手助けを求められたことを話し、穂琥は薪を見て小さく謝った。

「穂琥は悪くないよ。この術、案外込んだものだつたからさ。オレも・・・ね。情けない話だ」

薪は悔しそうに笑つて頭をかく。

「貴様、これ以上余計な事をし過ぎて私の手を煩わせるなよ。潰すぞ」

「は、はい・・・すみません・・・」

謝罪して薪は頬を引きつらせた。綺邑は薪を睨みつけてその姿を消した。

綺邑の気配が消えたことに気づいたらしい儒楠が偲葵を連れて戻ってきた。偲葵が眠そうに眼を擦っていた。そんな偲葵を儒楠は寝かしつける。

薪が扉のほうを凝視したので一体どうしたのかと尋ねるとわかつたと歩いて扉を開けた。

「あ・・・」

その扉の向こうにいたのは梨杏。

「どうした？」

妙に優しげなその声に儒楠も穂琥も田玉が飛び出るかと思った。

「いえ・・・少し騒がしかったので。ここに隠れ家が誰かに見つかってしまってはと・・・」

「そうか。大丈夫だ。問題はないよ、安心して良い」

「ええ・・・そう、みたいで何より」

梨杏は部屋の中を窺つて頭を下げる去つていった。それを一呼吸置いて見詰めてから新は部屋の中に戻ってきた。

「ねえ～？梨杏さんのこと、本当にどう思つて居るの？実際であ、惚れているんじゃないの？」

「は？」

穂琥の質問に呆れたように薪は返す。

「何、薪。お前梨杏好きなのか？」

「お前まで言つたか・・・マジで切れるぞ！」

呆れたよつた声を出す薪に、穂琥と儒楠は良言じ寄る。

「違うの？」

「ち、が、い、ま、す」

強調するかのように薪は言つ。それでも引かない田の前のバカに薪

は仕方なくため息をつく。頭をかきながら葉を洗る。

「つたぐ。まだ自信がねえから言いたくないんだけどなあ・・・」

「告白の?..」

「冗談抜きで切れるぞ」

「すいません・・・」

穂琥の返しに結構マジになつて薪が答えたので流石に萎縮した穂琥  
だった。

## 第六十三話 信する心、疑う心

結局のところ、薪は何も語ってくれなかつた。あえて言つなら『自信がない』ということだけ。儒楠がごまかして終わりにするのかといったがそれすらもひらりとかわして薪はさつさと寝る支度に移つてしまつた。仕方なく、穂琥も儒楠も睡眠をとることにした。

翌日。大声を上げている者がいる。儒楠と穂琥と惣葵だ。

「つたく、あのヤロー、どこ行きやがつた！？」

「ん・・・儒楠君があれほど言つたから外には行つていないとは思うけど・・・」

梨杏であれば出入り口を見張つているものとのつながりがあるため、外に出たかどうかを確認できると惣葵からの情報で梨杏の部屋に行くこととなつた。そういうことで梨杏の部屋をノックして穂琥が中に入る。その後を儒楠が続こうとしたが、穂琥が立ち止まつてしまつたため、中に入ることが出来ない。早く中に入るよう促そうとして、部屋の中が見えて儒楠も固まつた。

会話から察せられると思いますが、朝眼が覚めた時点でかの偉大なる惣葵様がいらっしゃいません。それなりに早い時間に眼を覚ましたはずだというのに惣葵様が寝ておられた場所から温もりはなく既に冷え切つていた。儒楠の嫌な予感もあって外には出るなといつてあつたのにまさか出てしまつたのだろうか。そう思つて必死で探していたといふのに。

それが何だよ。梨杏の部屋に入るとそこにいるし。必死で探していたこつちの身にもなつてくれ。

「け、結構探したんですけど……」

「悪い。もう終わつたからいいよ」

立ち上がつた薪は梨杏に向き直つて笑みを送る。

「じゃあ、やつさの話、宜しくな。いい返事を待つてゐる」

薪はそれだけ言つと部屋をやつと出て行く。それに従つて儒楠たちも部屋を出る。

薪はそつと思考する。アホと子ども、ましてや人間であるならごまかしは簡単に出来る。が、ここには儒楠がいる。これを誤魔化しきるには相当骨が折れる。そういう思いもあって儒楠を見ているとそれに気づいた儒楠が少し不機嫌そうになんだと返す。なんでもないとそっぽを向いた薪だが足元から声が飛ぶ。

「薪、梨杏様と何を話していたの？」

純粹、無垢なその質問に果たしてどうしたものかと悩む薪。ひとまず簡単に言うことができないんだと僕葵に伝える。僕葵はふんと納得しないなりに引き下がつてくれた。このくらい聞き分けの良い奴らが揃つていればいいのだけれど。そんな事を考えていた薪の耳に儒楠のくすつと噴出すような笑いが聞こえて疑問の表情を向ける。

「いや、薪が女性と内緒話とは……つてね」

「あんな……」

「ごめん、わかつてゐるつて。ただなんか、可笑しくて……」

含み笑いをする儒楠を不思議そうに見詰める僕葵。

「さて」

何かを区切るように言つ薪の言葉。この後には必ず『実行』が待つてゐる。薪の眼も確実にその方向だ。儒楠はすっと身構える。

「そろそろ叩きに行きたいな」

やはりか、と儒楠は思つ。ここに来る原因となつた駕南火に会つたために。そしてここの人々を苦しめる羽目となつた根源を叩き割るために。ついに行動を開始するという。しかし、それにしては情報が少なすぎる。しかし薪は不敵の笑みを浮かべた。少しは情報を入手したという。

「行つてもいいかな？それともまだここにいる？」

薪の挑発するような言葉に儒楠はため息をつく。いつもならもう既に準備は整つている。これ以上はここにいるだけ無駄だということを指す。儒楠は肩の力をふつと抜いて胸の前に手を当てて薪へそつと頭を下げる。

「貴方様の仰せのままに」

「はん。わざとらしこことしゃがつて。腹立つな」

「お互い様さ」

互いに不敵な笑みを浮かべて笑い合つ。それに全くついていけない穂琥と惣葵だった。

出発することを伝えるべく、梨杏のところに行つて来て欲しいと薪が儒楠に言うと儒楠はその答えをひどく渋つた。

「なんだよ、駄目か？」

「ん――・・・・」

わが子たゞオレが行くでくる」

儒楠の中を察して薪は呆れたように手を振つて梨杏の部屋に向かつていった。

「儒楠君？」

ん・・・。 オレ、あいつ二がテだわ・・・・。

本当に苦そうな表情で儒楠がそう言つたので本当に苦手なんだなと悟る穂琥だった。一度はなしが区切れたところで申し訳無さそうに傀葵が尋ねてきた。

一緒に行こちやん・・・・・駄目だよね・・・・・

傀儡自身もわかつてゐる。駄目なことくらい。それがひしひしと伝わつてくる。伝わつてくるからこそ、穂琥はどこか胸が苦しくなつた。

「これから危ないことがあるかもしね。そんな時、偲葵を絶対に護ることができるかわからんのだよ。そんな危ないとこへは連れて行けないよ」

…でも、薪なら…強いんでしう？」

「いいや。アイツも、結局はオレ達と何も変わらない。万能じやないんだよ。この世で生きとし生けるもの、万能なものなんて有りはないんだよ」

儒楠の諭すようなその言葉が穂琥の胸を寄り深く痛めた。

「あいつは誰よりも大切なモノを失ってきた。それで惣菜まで失う羽田になつたら薪は壊れてしまつよ。」

子どもにそんな酷な事を悟らせるのはよくないかもしない。それでもどこか薪も受け入れているこの惣菜であるのならば、理解をしてくれるはず。もう信じてこむ。

「うん。待つている

その『信じ』を裏切らずに惣菜は小さくそう答えた。

## 第六十四話 間諜の手

出発しますか、との薪の号令で隠れ家を出た。そして田の前を歩く薪についていけば何の問題もなく敵の本拠地へいける……と思っていたのに。

「どうして……」

「ハリなるのよ……」

儒楠と穂琥が眼を半開きにして今ある状況に小さな声で突っ込みを入れる。

「ん？ この方が探す手間が省けるだろ？」「

「いや、抜ける手間はどうするんだよ……」

「何とかなるわ。 オレは

「最後の言葉要らない！」

最後は儒楠と穂琥がそう突っ込み。

「まあ、まあ、抜け出さないといけない状況ならオレが介錯してもうつて」「

「あそ・・・」

「だったら・・・」

「今抜けたい――」

さらに儒楠と穂琥が言葉を合わせる。

つまり今ある状況。隠れ家から離れて崩落した村まで行った。そ

ここで敵のアジトの場所へ繋がるのかと思いきやそうでもないらしく仕方なくアジトが何処にあるのかを尋ねると「知らん」の一言が返ってきた。しかも即答。どうするんだと憤慨する儒楠と穂琥だったが、突然の薪の行動に耳を塞ぐ羽目となつた。

勢いよく息を吸つた薪が何をするのかと思つてはいるが、突如、大声を上げた。

「標的の居場所もわからねえのかああー！」のかああー！のかああー！」

見事な木靈。耳がびりつとするほどの大聲。普段柄大声を発するタイプではないのでまさかこんなでかい声が出せるとは正直思つていなかつた穂琥と儒楠だつた。その声を聞きつけて集まつてきたのはどうやら駕南火の手下らしきものたち。

「え・・・・・、ちょ・・・・・？」

「ま、まさか・・・あの、慧夸様・・・？」

「おう。抵抗するなよ。したらオレがしばくぞ」

お咎めのほうが怖かつた穂琥と儒楠は抵抗の一切を封じられて結局集まつてきた者たちに簡単に捕まつてしまつた。

と、言つわけで今に至る。只今、連行中～、連行中～。

着いたのは寂れた門を潜つた何もない場所。奥で人影見えた。いや、人がどうかは、定かではないけれど。その影が声を発するが、薪の顔がみるみる不機嫌になつていつた。

「オレはお前に用はない。駕南火を引っ張つてきて欲しいんだけど」

影はふつと揺らぐ。

「我がそうちだ、言つても？」

「お前、その程度の変装で誤魔化せると思つてゐるのか？」

薪の挑発するよつた言葉に影は返してこない。その代わり別の声が聞こえた。

「くくく。わかるのか、無名のアンタに。少し当てが外れてしまつたかな」

「そうやつ、アンタに用があつたんだ」

現れた男。この暑い乾燥地帯の割りにマフラーを首に巻き、余つた部分はまるで地面につきそうなほど長かつた。その青いマフラーを際立たせているのは黒に限りなく近い紺の衣服。右は長く着流しように袖が広い。それに反して左は肩まで露出するノースリーブ状態。寒いのか暑いのかよくわからない。相手が眞兜祇であるのであればそれは珍しい毛色の黒。それも真つ黒の。眼はほのかに水色。眼の色からして人間ではないかもしねれない。いや、外国人といつこともあるけれど。

これが駕南火。思つたより若く、線の細い男だった。名前からしてもう少しじついのを想像していた穂琥はどこか拍子抜けしたような逆に気持ちが入つたよつた、複雑な心境だった。

「当てが外れた・・・？」

穂琥が疑問の声を上げる。すると駕南火はその重たそうな瞼でほとんど開いていない眼をより細めてにやりと笑つた。

「懸念が……いると思つたからね」

駕南火のその発言で一瞬だけ空気が凍つた。そして薪はその発言を聞いて利用してやうと判断した。儒楠には本当に申し訳ないけれど。

確実に駕南火は儒楠を見て懸念だといった。つまり、顔を知つていて懸念だと判断した。ただ、薪としてはこの男と会つた記憶はない。ということははるか昔にまだ、前懸念が生きていたくらい前。そのときに眼にしていたか、あるいはまつたく別で調べていた結果か。どちらによく、その情報を利用してやらない手はない。

悪いな、儒楠……

薪は静かに心の中でそつ思つ。

「それで? キミはなんて名前なの?」

駕南火が尋ねる。薪は答えを渉る。渉るといつても別に言つことが出来ないといった風には決してしない。あくまで名乗る必要がないとこつことを醸し出す。

「言つ必要があるのかい?」

「おやおや。此方のことは随分勝手に調べていたくせに」

「なりそちらだつて調べれば良い話だらう?」

「ふーん。それもそうだね。随分口が達者だね

「どうも」

薪の余裕の答えに駕南火は無表情で迎える。

「さて。見当違いをしたようだけど結局、強い奴はいるようだ。さてと。何用でここへ来た?『下』の人間たちと手を組んだのかな」「は?何を言つていいんだ?ねえ、していませんでしょ?」

突然薪に振られて儒楠は少し驚いた顔をする。しかし何かを諦めたように頷く。しかしその反応をみた駕南火が不自然に眼を細めた。

「慧奇、ともあらうものが随分と拍子抜けさせてくれるね」「悪かつたな」

駕南火の言葉に儒楠が応戦する。今のやり取りで薪が何をしたいかまでは理解できなくとも、慧奇『役』を押し付けてきたことだけは事実。なら慧奇様のご命令とあらばそれに従うのみ。いや、そもそもそんな概念は最早ないけれど。皮肉を込めてそう思うだけ。本来なら朋が求めたから、それが理由で十分。

人間と手を組んだわけではないと駕南火の言葉を否定する。ただ単に力を少しばかり貸しただけだといつ。

「それを組んだというのではないのか?」

「はあ? 地球に住んでいるなら少しは言葉を覚えたらどうなんだ? 組むと貸すとじゃ隨分と違うだろ? さあ~」

薪のどこか抜けたような答えに駕南火は表情をしかめた。それと同時に穗琥と儒楠もしかめる。これはおかしい。おかしいのだ。敵を前にした薪の態度ではない。緊張感が若干足りていないうにすら思える。

「よく言つな。キミはどのくらいこの地球にいるのさ」

「言つ義理はないな？人間とつるんでいるような奴にはね～？」

「つるんでなど。ただ利用していただけだよ」

駕南火の言葉に薪がふつと笑った。それを悪く思つたらしい駕南火が何が言いたいと睨むと薪は笑つた表情のまま駕南火へ己の失言を指摘する。

「ほうほう。人間とのかかわりがあるんだねえ？しかも話の流れからすれば『下』にいるもの達と・・・ということはアレだよね？あの『女』が」

薪の勝ち誇つたような表情を見て駕南火は表情を無にして言葉を選んでいるようだった。

薪の様子が若干おかしかつたのは今のように駕南火の墓穴を掘らせることだったのかと納得する儒楠だった。

薪の放つた言葉に駕南火が返さなかつたが諦めたようにそれを肯定した。そしてそれを受けた薪はその女をどうやつて丸め込んだかを訪ねた。駕南火は冷たく笑つた。

「何でも願いをかなえてやる、とだけ伝えたよ。人間にとつて眞匏祇とはまさに神に見紛うものでしょ？そう思うだろう？眞匏祇としての力を見せてあげるだけで簡単に騙せる。人間とは間抜けな生き物だよ」

駕南火が人間を否定する。穂琥はそれにカチンと来て反撃しようと薪にそれを阻止された。

「駕南火。一つ、訂正をしよう」

薪がそう言つたので穂琥も仕方なく引き下がつた。薪の訂正が入れば穂琥がどうこう言つよりも容易い。

「何か間違いでもあつたかな？力を見せ付けただけで騙される人間は間抜けではないといいたいのかい？」

「いいや。それに関しては否定しない。だが、眞匏祇の中にもそういう間抜けは居るんだな。だから別に人間だけじゃないってこと」

「は・・・・？」

「そろそろ、眞匏祇にもちょっと力を見せただけで驚いて……つてそれ私のことか！」

「おう。それ以外にいないだろ？」「はあ！？」

まさかの敵前で兄妹喧嘩勃発。

「あ、訂正終わりだから。今ので」

「い、今の・・・・？」

駕南火は目の前で起きていることにひどく動搖した。感覚がどうにも鈍ってしまう。これも戦略なのだろうか。それにしても『嘘』の気配がしなさすぎた。ひどく呆れてしまつほど。

駕南火の表情からして確実に呆れをもたらしている。敵にそう言った感情を抱かせるヒーローがいてもいいのだろうか。そんな事を思う儒楠だった。

## 第六十五話 敵対する者の心境

なにやら今日の薪は『ハイ』らしい。『トトロ』のよう。先ほどまでの間の抜けた口調は敵を欺くための戦略かと思つていた。それならまだ格好良かつたのに。

「でさあ。まあ、訂正も終了したし。次の話しに行こう。仮面ヘルメットが閉じてしまったわけだ。お前、知らん？」

敵が口を滑らせた後からもその雰囲気は変わることがない。そして駕南火自身もひどくそれには戸惑つていて。そして何より戸惑うのはともにいる仲間すらもその態度に驚いていること。普段からこういった感じではないことが窺える。

「ボクが閉じたよ。特殊方法で地球から出られないようにね」「ほつ？ ならシャトルは外に出られるわけだな？」「そうなるね」  
「へえ！ 心底の悪つてわけじやあ無さそうだねえ？」  
「「「何・・・・・！」」」

穂琥、儒楠、駕南火の言葉が異口同音で重なる。それを聞いた薪が呆れたように穂琥と儒楠にむく。

「おいおい。仮にも敵と意気投合するなよ」「無理無理無理！ 今のはどう考へても『何…？』しか言えないから…」「本当だよ…、お前どうした？」「なんでもないけど？」

首を振る薪。その様子を駕南火は確認する。おかしい。おかしそぎる。これが慾夸たちの一団な訳がない。あの無情にして非情の慾夸。命の重みも顧みない極悪非道の慾夸なのだろうか。この一団が・・・。

「あ？・！」

突然薪が怒りの声を上げたので儒楠はびくつと肩を震わせた。

「おい、駕南火！今どう考えてもオレと父上を比べたよな！？雰囲気で結構わかるんだからな！あまり比べるな！オレはあの方とは違・・・」

「あの～。暴露していいんですか～？」

「あ・・・・・・」

まさかの珍プレー。薪にしてはありえないミス。薪は雰囲気に負けたと頭をかく。

「いや・・・・あの・・・・」

「キミが・・・・慾夸？」

「え～っと・・・・・はい。実はそうです。訳あってこんな格好しているますがそうです・・・・。思わず口を滑らせたわ。あ、丁度いいや。わつきアンタの口を滑らせたのはこれでチャラな？」

薪は笑顔で駕南火に手を挙げてそう言った。一体どう反応していいのか困っているのは何も駕南火だけではない。

「シン＝フォア＝エンド。それがオレの名前。聞き覚えあるだろう？ちなみにこっちは儒楠。ジュナン＝ロウ＝ティア」  
「・・・そう」

現慧奇だということを駕南火へ伝える。しかし薪の緊張の紐は緩みつぱなしだ。それがあまりに気になつた穂琥は思わず突っ込みを入れる。

「あ、あの・・・イイデスカ、社長!」

「はい、何ですか部長」

「え・・・!? あ、あのですね!」

自分から言つておいてなんだが、まさか薪が穂琥のふざけた言葉に乗つてくるとは思つていなかつたので修正利かずそのまま尋ねる羽目になる。

「ええつと。どうしてこんな大事な会議中に社長はいつも緊張感がないのでありますか!？」

「はい、たまにはいい質問をしますね、部長。それはですね。オレの神経がどうにも警戒心を発してくれないので段々気分がおかしくなつてきているからであります。おわかり?」

「は、はい。わかりました社長・・・！」

ボケがうやむやになりかけていまいち場の空気を保てていない状況に儒楠は身震いをする。薪が怖い。いや別に何がつてわけではなく。ただなんとなく・・・怖い・・・。儒楠は頬を引きつらせて笑いながらそう思つていた。しかし、それを聞いて驚くのは駕南火のほうだ。

「慧奇よ、今なんと・・・」

「薪! オレは薪だ! 慧奇じゃねえ! あ、いや、慧奇だけど・・・。

名前は薪だ!」

「あ・・・し、失礼・・・」

「おひ、わかればいい」

「どう考えてもこの薪はおかしい。完全に壊れているとしか思えない。

「で～、あれか。オレのやる気のなさか？簡単なことだよ。駕南火。アンタから悪い感じがしねえんだ。だからどうしてこんなことになつてしまっているのかが分からない」

「――は？！」

「だから敵と意氣投合するなつて」

同じ様に声をあげた穂琥と儒楠に指摘を入れる。驚いている一人を無視して薪は深い深呼吸をした。

「さて。オレも落ち着くか

接続詞に「も」が入っていた理由がいまいちわからないがひとまず薪は落ち着いたようだった。

「さてと。お前に対して全くと言つていいほど警戒心を感じないのはお前から心底敵意を感じないからだ。何故ゲートを閉じた？それの理由が知りたい」

放つている気配もいつも通りの薪。それを確認して儒楠はほつとため息をついた。しかし逆に駕南火のほうは怒り浸透したらしい。

「ふざけるな・・・。キミらに向が出来るのさ。殺戮しかしてこなかつた慧奇どもが！」

直感。これはあくまで穂琥が感じたことで確かなものではないけれど確実に言えるもの。薪の言葉に駕南火は怒りを覚えたかもしれない

い。それで今の一言を発したのかもしれない。しかし、それはまた、薪を怒りへ導くこととなる。だから、今、薪が大声で怒鳴ることが穂琥には直感的にわかつていた。だから先に萎縮して薪の怒りに触れないようとした。儒楠のほうも同じ様な体制をとったことからそれがさらに事実へと感じさせ、結局のところ、薪のほうからその回答の罵声が飛ぶ。

「ふざけるな、このクソヤロウ！」

薪の怒号。それは声だけではない確かに威嚇。マキを載せたその怒号に駕南火は身を引いた。

確かに前慾夸、巧伎の時代はひどかった。無意味にたくさんの命を奪い、いくつもの種族を滅ぼしてきた。けれど、今は、今は違うと薪は誇張したい。

「地球のことを詳しく知っているわけでもない、干渉できる立場でもないからここにいる眞匏祇たちのことを把握できていなければ、事は痛いほど理解している！それと同じ様にお前とて！今までずっと人間の世界に浸っていたお前に！仮想の何がわかる！今の世界の・・・オレらの苦しみの何が・・・何がわかるというんだ！？」

薪のその怒号に駕南火はひどく揺れていた。薪の言っていることがあながち嘘ではないということを駕南火自身が悟り始めてしまっていることが原因だろう。

揺れた理由は簡単だ。慾夸などと大それた名を有している者が、まだまだ自分よりも年下でそれでもしつかりと前を見て生き過去を背負つて立っている。そしてそれに付き添うものたち。その者たちの目が決して恐怖による支配でその場にいるのではない、心底目の

前のリーダーに敬意を払つた上でそこにあることがよくわかる。故に揺れ動く。懶惰が。あの極悪非道と畏れられた懶惰が。ここまで感情的に己の意思を主張する。そんな懶惰が頂点に立つた偽狹の様子を想像することさえできない自分の浅はかさに駕籠火はひどく心をかき乱されていた。

## 第六十六話 内なる心の惑い

怒りを抑えて薪は再び駕南火に問う。何を目的としてこんなことをしているのかと。それを問われた駕南火はそれでも口を開こうとはしなかった。

「どうか。なら最後の質問だ。捕まえた人間たちはどうした？」

「・・・あれらはボクの目標を達成するために使っている道具だ」

この手の発言に一倍反応するのが後ろにいる。薪はため息をついてそっと振り返る。そうすれば単純な阿呆はふつふつと煮える怒りを沸きあがらせているのが見て取れた。その隣でもその様子を見ている幼馴染がいる。それと眼があつて互いに肩を竦めた。

「冗談じゃないよ！ 同じ生き物だよ？ そりや、人は眞砲祇なんかと比べたら力もないし弱いかもしけないけれど・・・それでも同じ生き物だよ・・・？ それを道具だなんて・・・」

穂琥の言葉に駕南火は冷たく言い放つ。人間など、使い捨ての道具だと。それを聞いた穂琥の答え。それがさらにひどく駕南火を搖らすこととなる。

「あなた・・・お父・・・。懃々を・・・恨んでいるんでしょう？ あなたは、その嫌いな・・・恨んだものと同じことをしてもいいの？」

自分以外を道具と吐き捨て不要になつたうこの世から消し去る。無意味に無闇に。たくさんものものの命が捨てられた。それと全く同じことを駕南火はしてしまつていて。人間であるという違いだけ。

「私は人間として過ごした期間がひどく長いから人間の心がたぶん近い。でも、そんな人間として育った私と、眞匏祇として一生懸命尽くしてきた薪と、それに沿い友達のためにと誠意を尽くしてきた儒楠君と……。さして変わりなんてなかつた！では、何がここまで人と眞匏祇をたがえてしまつているの？それは『力』による支配」

恐れと憎しみの入り混じる混沌の世界。それが作り出したのは一つの心。争う心と護る心。穂琥も、薪も、儒楠も。護る心を以つて眞匏祇としてあつた。前代慧奇、巧伎の有していたものは争う心。

「そして駕南火。あなたも、その争う心になつてゐる。争いでは良いものなんて何も生まれない。でもそれを行つてゐるあなたは結局、前慧奇と何も違つてはいない」

穂琥の言葉に圧倒された駕南火が返す言葉がないのは当然のことだらう。

「目的は何だ？何故ゲートを閉じる。しかも、地球へ来ることが出来ても戻る事が出来ないという不可思議な閉じ方。何故そんな事をした？」

穂琥の言葉で動搖する駕南火に薪が追い討ちをかけるように尋ねる。駕南火は悔しそうにその口を開く。

「仞泊を……破壊するため」

「何……？」

仞泊に存在する眞匏祇の数を少しでも減らし抵抗をなくす。そうし

て弱った星を打ち落とす。それが駕南火の求めていること。

しかし。そんな事をして何になる。それこそ、罪も何もないものを滅ぼすこととなつてしまつ。それでは巧伎のしていたことよりも悲惨な末路を歩むこととなつてしまつ。

「全てが滅び無に帰すれば最早争いもない！」

「・・・言つても、無駄だというのか・・・」

「何を今更・・・・。ボクが心変わりするとでも思つてゐるの？」

駕南火の言葉に薪は否定を入れた。むしろ変わることを拒否した。それに一番驚いたのは駕南火かもしれない。

「お前、本当はやりたくないんだろう？本当はしたくない。しかしせざるを得ない何かがある。そんな状況に・・・」

「黙れ！これはボクの意思だ！」

「何をそんなにムキになる？迷いがあるから、いや、そもそも迷い以前にそつだから・・・」

もうよいわ

滞つた空気を一気にかち割るよつとずつしりと響いた女性の声。駕南火のことを不要だといい、消えるように命じた。駕南火はそれを聞いてひどくショックを受けた表情をしていた。現れた紅蓮の髪の女性。藤色の衣を羽織りしなやかな肢体を包んでいる。その腰には紅色の帯を巻き、前で白く光る輪が煌いでいる。

一瞬だけ少女に見えるがその放つ雰囲気がそうではないと悟らせる。駕南火はひどく怯えている。そんな駕南火を見る紫色の瞳が何処までも深く心を揺さぶっているようだつた。そしてその眼がき

らりと光つたのを新は見逃さなかつた。性と駕南火の間に割つて入つた。

素早く地面を蹴り、その女

甲高い金属音が空に木靈した。

## 第六十七話 裏の真実

「ん？」

女性が声を上げる。彼女が何の躊躇いもなしに駕籠火へ刀を振り下ろしたのを薪が無理に受け止めた。その尋常ではない力に流石の薪も刀を持つ手が震えた。この細い肢体の何処からこんな力が生み出されたのか疑問に思つほどだつた。

「お前、それは無いじゃないか？」

「ほう・・・? お前、見所があるな。どうだ? わしと手を組まんか?」

思つた以上の重低音。女性にしては低いその声に薪は嫌な予感を覚える。薪は女性の持ちかけた言葉を即座に却下する。女性は低く笑う。

「さうか。わしの元にくればお前の望み、叶えてやろうたのに」「・・・オレの望みはアンタなんかには叶えられるものではない。いや、全てのものが叶えられるものではない」

悠長な会話をしているように聞こえている間にも拮抗する薪と女性の力はすぐ手元の刀がぎちぎちと音を立てて表現している。しかし尚も彼女は薪を欲する。薪は軽い舌打ちをしてその刀を振り上げる。軽々と宙を舞つて彼女は悠々と地面に着地する。薪は刀を構えなおすして田の前の敵へと言葉を投げる。

「オレの望みは一つ。一つは護ること。一つは蘇ること」

簡潔に、省略して言ったその言葉に彼女は不思議そうな表情をした。無論、薪が背中を向けている駕南火も同じ。しかしそれに対し、穂琥と儒楠のほうはひどく揺れた表情をする。

護る。それは懶惰として民を護る義務がある。しかし、きっとこの『望み』としていつた護るは民の事ではない。この場にいる最愛の妹、穂琥を一生をかけて護り抜くこと。

そしてもう一つ。蘇ること。これが穂琥や儒楠にとつては重過ぎる。それを言葉に出して説明することすらおこがましいほどだ。

「護る、は聞かずともわかる。では蘇るとは、誰かでも失ったか」

低い声が薪へ疑問を投げかける。薪は一瞬だけ迷った様子を見せたがはつきりとした目で女性を見んだ。

「オレは過去にたくさん仲間を殺してしまった。だから、その『全て』を蘇らせたい。過去を消したい。だが、起きてしまったことを今更どうにも出来ないだろう？」

「ふむ・・・・・。そうさなあ。さすがにわしもそれは無理だ。他にはないのか？」

「・・・・・。そうだな。今すぐにお前を潰してゲートを開いて仍泊に帰ることかな」

「ふつ。嫌な性格」

「それほどでも」

口とは別に彼女は嬉しそうに微笑んでいた。

「そういうのは嫌いじゃない。そつか。組む気がないならその魂石だけ置いて消え去れ」

「オレの魂石、特注でね。一般は使えないよ。最も。慧奇の血筋ではないと、といつ意味だけ?」

薪の発言に彼女は不思議そうな表情をした。しかしそれすらも氣にしないように魂石を奪うことを主張する。無論、そんな事出来るわけもないと拒否をする。すると彼女はにやりと笑う。

「まあ、よいわ。ゲート、だつけか?ならばわしとの勝負に勝つってみよ」

「勝負・・・?」

怪訝な表情をして薪が臨む。彼女は悠々とした表情で笑みを浮かべ続ける。

彼女がふっと手を前に出す。薪は一瞬身構えたが何も起こる事はなかった。その変動のなさに薪は額に力を入れる。彼女が何もしないのにこんな不可解なそして無意味な動きをするような者には見えない。

どや。何かが倒れる音が聞こえた。それを聞いて薪は彼女の動作の全てを悟った。ぞわっとした背筋を無視して一度目の前の女性を睨みつけてから急いで音のしたほうを振り返り駆け出す。

「穂琥!」

## 第六十八話 異質の世界

ただの暗闇。目の前が何も見えない。今自分が本当に眼を開けているのかわからなくなるくらい。確認のため手で触つてみると大丈夫、目は開いている。

「あれ？ここは何処だらう・・・？薪？儒楠君？」

穂琥は声を出して叫ぶ。しかし音が全く反響する気配もなく闇の向こうに声が吸い込まれていてるようだつた。

がこん。

何かが外れるような音が聞こえた。穂琥は音のしたほうへ首を向ける。しかしやはりそこはただの暗闇。真っ暗くらの黒。穂琥はそつとそちらのほうへ足を進めようとした直後、脱兎の如く穂琥はその向かおひとした方向とは逆の方向へ駆け出した。

何かが外れた音だつたのだ。きっとそうだ。ストッパーがあつて。それが外れた音。だから今穂琥は走る羽田になつているのかもしれない。

後ろから追いかけてくる軍勢。それは人の形にあらず。眞貌祇の形にもあらず。そこあるのは腐敗した恐怖の存在。肉が腐り黄ばんだ骨さえも見える。中には肩が外れてだらりと下がつたものもあるし田玉が支えきれずに零れ出しているものもいる。要は穂琥の後ろには。

「ゾンビーー！」

ただ穂琥は走り続ける。

追いかけるはゾンビ。この世のものではない唯一の生命体。ま、生命体と呼んでいいのか疑問だが。でも確かに過去に綺邑がそんな事を言っていた気がした穂琥だつた。魂があの世へ逝くことが出来ず、肉体に宿つたままになつてしまつた哀れな存在。一度死に、肉体より魂が離脱する。しかしその魂が何らかの理由を経て肉体に舞い戻つてしまつたもの。しかし魂が戻つたからといってよいわけではなく、体は既に死んでいるので再生するわけも治癒するわけもない。ただひたすら体は腐敗していくだけ。そして身体に無理やりねじ込み入つた魂が正常なわけもなく、理性の欠片もない、ただひたすら魂を欲する化け物へと成り下がる。

大方近年ではゾンビの存在は減つてゐるらしい。なにぶん、火葬が多い。故に戻るにせよ、肉体がない。

以上、綺邑からの知識。穂琥はひたすら思い出す。ではそんな存在になつてしまつたゾンビたちは一体どうしたらよいのか。基本、感覚という全てが遮断されている彼らに身体への攻撃は無。むしろ碎かれた体はそれだけも動くために下手に手を出すと余計にいたい思いをするのはこちらだ。粉碎できればそれでいいのかもしけないけれど今、眞稀を練るひとつとしても言つことを聞かずうまく練ることが出来ないでいる。

「あつ、そういえばこの土地？つて眞稀がうまく使えないんだつた・

・・・・・」

息を切らし始める穂琥はただひたすら逃げる。捕まれば殺されるのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5247y/>

---

眞苞祇<sup>たんのづ</sup>、

2012年1月8日22時46分発行